

ハイカラさんが通る【完結】

代理投稿者サクマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「なあ、わたしはいらなんだ！　こんなもんはさあ！」

半ば泣き叫びながらどたと窓を開けて、そのまま風呂敷ごと、正邪はトマトを外にほうつた。………

……「どうか千の非を絶やすな」より。

等身大の彼女たちの、美しくもない、大して感動的でもない、けれどもどうにも忘れられない日常的な物語。心を掻き乱されたくなつたときに、どうぞ手に取ってみてください。

※本作品群は1章完結です。好きな章からお読みいただけます。

※本作品群はこだい氏（<http://coolier.dip.jp/sosowa/ssw1/author/%E3%81%93%E3%81%A0%E3%81%84>）の作品であり、投稿主は同氏に許可を頂いた上で本作を公開させて頂いております。

※本作品群は氏の「誰もがそれをやめられない！」（<https://syosetu.org/novel/179802/>）とも世界観を共有しております。興味がお有りでしたら是非、こちらもお楽しみ下さい。

※一部の章にはオリ主（村人）が登場します。ご了承ください。

2020/3/21、完結です。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

目次

鈴懸の風薫る（1話完結 主演：霧雨魔理沙、博麗霊夢）

鈴懸の風薫る 1 / 1

どうか千の非を絶やすな（全3話 主演：少名針妙丸、鬼人正邪）

どうか千の非を絶やすな 1

どうか千の非を絶やすな 2

どうか千の非を絶やすな 3（了）

鶴似、有、塩味。（全13話 主演：村紗水蜜 他：封獣ぬえ、など）

鶴似、有、塩味。 1

鶴似、有、塩味。 2

鶴似、有、塩味。 3

鶴似、有、塩味。 4

鶴似、有、塩味。 5

鶴似、有、塩味。 6

鶴似、有、塩味。 7

鶴似、有、塩味。 8

鶴似、有、塩味。 9

鶴似、有、塩味。 10 / 13

鶴似、有、塩味。 11 / 13

鶴似、有、塩味。 12 / 13

鶴似、有、塩味。 13（了）

まつりにひとり（1話完結 主演：河城にとり）

まつりにひとり 1 / 1

葛巻くところ（全3話 主演：小野塚小町）

葛巻くところ 1

84

80

74

69

66

63

59

55

52

46

40

35

30

25

19

15

12

8

1

蔦巻くところ 2 | 87

蔦巻くところ 3 (了) | 90

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 (全11話 主演：水橋パルスィ、
明地こいし)

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 1 | 93

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 2 | 100

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 3 | 104

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 4 | 111

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 5 | 114

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 6 | 123

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 7 | 126

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 8 | 132

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 9 | 137

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 10 | 140

緑の瞳に映る恋々青春パンク編 11 (了) | 142

灰色の季節 (全4話 主演：少年、及び小野塚小町)

灰色の季節 1 | 144

灰色の季節 2 | 148

灰色の季節 3 | 152

灰色の季節 4 (了) | 154

人面樹 (全5話 主演：東風谷早苗、多々良小傘)

人面樹 1 | 158

人面樹 2 | 165

人面樹 3 | 169

人面樹 4 | 172

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。(全13話 主演：赤蛮奇)

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 1

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 2

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 3

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 4

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 5

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 6

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 7

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 8

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 9

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 10

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 11

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 12

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 13 (了)

テーマ (1話完結 主演：古明地こいし 古明地さとり)

テーマ 1 / 1

山の怪事件 (全4話 主演：犬走椛)

山の怪事件 1

山の怪事件 2

山の怪事件 3

山の怪事件 4 (了)

†神意† (閑話集 全9話 オールキャラ)

†神意† 1 曇りのち雨

†神意† 2 鈴仙が来ない

†神意† 3 ひとつめの宴会 | 261

†神意† 4 教師として | 264

†神意† 5 鈴仙が来ない | 268

†神意† 6 ユカリノシキのラン | 272

†神意† 7 赤蛮奇が来た！ | 276

†神意† 8 鈴仙は来なかった | 280

†神意† 9 (了) 神意の雨 | 283

すみれのなつ (全5話 主演：宇佐見薫子、東風谷早苗)

すみれのなつ 1 | 286

すみれのなつ 2 | 291

すみれのなつ 3 | 294

すみれのなつ 4 | 296

すみれのなつ 5 (了) | 305

機械 (全2話 主演：小野塚小町)

機械 1 | 308

機械 2 (了) | 312

ア) 日々は槻を濁すよに (全11話 主演：リグル・ナイトバグ、ルーミ)

日々は槻を濁すよに 1 | 317

日々は槻を濁すよに 2 | 322

日々は槻を濁すよに 3 | 326

日々は槻を濁すよに 4 | 329

日々は槻を濁すよに 5 | 334

日々は槻を濁すよに 6 | 338

日々は槻を濁すよに 7 | 343

†破滅†	5 (了)	405
†破滅†	4	397
†破滅†	3	395
†破滅†	2	393
†破滅†	1	388
†破滅† (全5話 主演：鬼人正邪、少名針妙丸)		
革命前夜	5 (了)	382
革命前夜	4	379
革命前夜	3	373
革命前夜	2	370
革命前夜	1	366
革命前夜 (全5話 主演：鬼人正邪、少名針妙丸)		
日々は槻を濁すよに	8	346
日々は槻を濁すよに	9	352
日々は槻を濁すよに	10	356
日々は槻を濁すよに	11 (了)	363

鈴懸の風薫る（1話完結） 主演：霧雨魔理沙、博麗霊夢

鈴懸の風薫る 1 / 1

「ああ魔理沙。困るな、授業中に急に飛び込んできて、あんなこと言われたら。里で起きた人死に、あれは妖怪の仕業で間違いないだろう。殺され方にしたって、殺された男の経歴にしたって、それ以外に考えられないだろう。ヤキが回ったのさ、あの男はどうも、分別なく妖怪を殺して回っていたらしいから。……あ。もしかしてお前、私を疑ってるのか。勘弁してくれ、私じゃないぞ。たしかにあの男のやっていた自警団との折り合いは悪かったけれど、なにも殺そうとなんて思わないよ。それに、その日は寺子屋で、親の都合で家に帰れない子供達の面倒を見ていたんだ。疑おうっていうなら子供たちやその親達に確認してみるといい。……ああ、やっぱりやめてくれ。子どもたちにこういう事件のことを話すのは、巻き込むのは、なんというか、よくない。あんまりよくないからさ、教育上。うん、よくない。親たちに聞き込むのはいいが、子どもたちにはよしてくれ。え？ もう遅いつて！ 魔理沙、まったくお前ってやつは……」

……。

博麗霊夢が人を殺した。詳しい事情はわからないが、どうやらそういうことらしい。

二日前に人里で起きた人死には、里ではもっぱら妖怪の仕業と噂されていた。無論、私もそう考えていた。

というのも、私は男が殺された翌日、殺された男の家の前に出来た野次馬集り、その中にいた。その場には霊夢もいた。

その日の明けはなんだか人里が騒がしかったから、なにか事件があったのだらうと思い、私は一目散に霊夢を叩き起こしたというわけだ。

野次馬共はバラバラに引きちぎられた男の死体を前に、これは妖怪の仕業に違いない、自警団なぞやってるから妖怪の恨みを買ったんだ、などとガヤガヤしていた。男が自警団の団長であることを知ったのはそのときだった。

私はそのとき、霊夢に自警団の存在を知っていたのかどうかを尋ねた。もちろん、博麗の巫女である霊夢が男の活動を知らなかったはずはない。だから、なぜ私がそんなことを霊夢に問いかけたかと言えば、それは彼女を茶化すような気持ちだった。つまり「聞いたか、自警団だって。お前、信用されてないみたいだな」と、彼女を茶化したというわけだ。

すると霊夢は特にこれといった反応を示すこともなく「人死になんて珍しくもない。こんなことでわざわざ起こしに来ないでよね」なんて言って、手をひらひらさせて野次馬の集りから離れていった。彼女を追いかける際の、夜中の雨で泥濘んだ地面をよく覚えている。

霊夢がそういった物言いをするのは珍しくなかった。しかし私と言えば、人死にという非日常に対する霊夢の淡白な反応がつまらなかつた。その結果が、里での聞き込みなどといううちよつとした「探偵ごっこ」に繋がるわけだ。

里で誰彼構わずに不審なことはなかつたか、なんて聞き込みをしていると、一つ或ることが判った。

どうやら近頃、寺子屋の帰り道で子どもたちが不審な男に声をかけられる事件が多発していたらしい。何人かの子供に話を聞きまわっていたら、気になることを語る子供がいた。その子が言っていたのは、不審な男に声をかけられ、家に連れ込まれたところを、巫女に助けてもらったという話だ。この話のどこが気になるかといえれば、それはその子の容姿に在った。

その子の瞳は妖しく紅く、頭には獣の耳が在った。その子の容姿は誰がどうみても人以外と判るほどに、妖怪特有の特徴に満ちていた。

好き好んで妖怪に声をかけるものがあるとすれば、破滅願望の有る者か、妖怪に対して害意の有る者のどちらからだ。そのとき私の頭に浮かんだのは、やはり殺された自警団の男の顔だった。白髪の混ざった

壮年の男の顔は、四肢を引き千切られ目玉をひん剥いた肉の状態で、私の脳裏に浮かび上がった。

寺子屋に通う幼い妖怪特有の、知能の低さもとい純粹さを伺わせる話し方や態度からして、その子が嘘をついているとは考え難かった。だから私は、一縷の望みを持って上白沢慧音を詰問したわけなのだ。どうやらアテが外れてしまった。あの男を殺したのは、間違いなく博麗霊夢他ならなかった。

里の往来を漂いながら適当な甘味などを啄んでいると、以前霊夢と交わしたやり取りが頭の中で再生される。

「ねえ魔理沙、どういうことだと思っ？ 人殺しって」

霊夢はよく、こういういった質問を唐突に繰り出した。それは年相応の少女らしい感触と、彼女特有の超然とした印象の入り混じった質問で、私はそのたびに回答に困ってしまい、からかわれた。

「はい時間切れ。魔理沙はこういう質問されるといつともうろたえるんだから、楽しくってやめられないわ」

そう語る彼女の口調はとても愉しそうで、私はどうも、わざと口を噤んでいるふしがあったのかもしれない。

「じゃあ私の思うところを話すわね。人殺しっていうのは、すなわち人の時間を奪うことなの。でもそれって、人間なら誰しもがやってしまふことよね」

霊夢の話はいつも妙だったし、同時に不思議な説得力もあった。その妙さと思議さは霊夢のどんな話にも介在していて、たかが夏に削氷の売れる理由についての話にだって、霊夢らしさはあるてまわつた。

とにかく、私はこのときまた不思議な納得の感を覚え、香霖堂の長話にどれだけ時間を奪われたか知れない、といった返答をしたのを覚えてる。

「そうでしょ？ 魔理沙がどれほどの時間を奪われたかはわからないけど、そうね。仮に五年ぐらい奪われた、と仮定しましょうか。わかってるって、仮によ、仮に」

「じゃあ、もうひとつ。仮にね、老い先短いおばあちゃんの寿命が、五

年としまししょう。魔理沙はそのおばあちゃんを殺しちゃうの。あはは！ 仮につて言ってるでしょ、怒ることないじゃない。わかったわよ、じゃあ私が、私がおばあちゃんを殺したとするわね。そして、私がおばあちゃんから奪った時間は何年？ そ、五年ね。当然私は人殺しになる。でも、魔理沙が霖之助さんに奪われた時間も五年。あはは！ そう！ 霖之助さんも人殺ししてわけよ！ 霖之助さんは長話を凶器に、人を殺してるってわけ。ふふ……もう、ほんとよ。どうかしてるわ、あの人の長話」

それは霊夢と私の、いつもどおりの取り留めのない会話だった。楽しいだけのやり取りだった。今思い返すと、なにかイヤに辛辣に感じられるのは無論、彼女が人を殺したから。

里の白昼は白白と青く、私の中でせめぎ合う霊夢に対するイメージを苛んだ。

霊夢が人を殺したからといって、私の中の霊夢に対するイメージに然程影響は無かった。私の中で思い出される彼女のイメージは、いつもどこか超然とした、巫女としての彼女だったからだ。

しかしそんな彼女にもときたま少女らしい一面があつて、私はそんな彼女の一面を垣間見るたびに、どこかちぐはぐな気持ちになったのを覚えている。

道の脇で毛並みの悪い犬が一つ吠えると、たちまち霊夢との「年相応の少女らしい」やり取りの数々が目の悪い星のように明滅を始める。それは恋の話だった。恋というには幼すぎる、恋の話。

里で縁日や何かが催されて、一通り遊び疲れると、私達は決まって変な気分になった。祭りの熱気を冷たい夜風に撫でられると、私達は妙に感傷的な、安くロマンチックな気分になった。それは霊夢と私に共通した現象だったから、私達はいつもひんやりとした川沿いを歩き、好みの異性の類型について語り合った。

こういった話を思い返すとどこかちぐはぐとした、照れくさいような気持ちになる。私はおそらく、彼女の少女らしさに対して恋に近い気持ちを抱いていた。だから、彼女とそういった話をするときには私は決まってわざとらしく振る舞ったし、霖之助に対する幼い恋慕なぞ

おくびにもださなかった。

「私はねー……」

霊夢は少し照れながら、自分の好みの異性について話した。彼女は年上の異性を好んだ。少し意外ではあったものの、前々から霊夢のどこか少女らしい一面を知っていたから、らしいといえばらしいな、なんて、そんなことを考えていた。

むなしく空はただ青い。寺子屋からの帰途を辿る少女らの群れは無垢に姦しく、少年たちは木の棒を振り回している。大人たちはどこか駆け足になって、何かに追われるように生きている。道の脇の犬が、一つ大きなあくびをした。

ああ。私は今日だって霊夢に会った。霊夢はおばあちゃんに洋菓子を買いにいくの、なんて言って笑っていたから、私は気になって、どういうことだ、なんて尋ねたりした。

腰の悪いおばあちゃんの家事を手伝いに行くと笑う霊夢の表情は、いつもの霊夢そのものだったのに。浮かぶ彼女の笑顔には、少女らしさが見えなくなった。

ぼつり、ぼつりと。私の肩が二つ濡れる。見上げれば、それは降り注ぐ無数の雨だった。遠くのどこかで雷鳴が響いて、空は急激に色を変える。青は紺に変わって、そのままどこかしこに、不規則な雑音と化して降り注ぐ。

気付けば通りに人はなくなっていた。犬すらどこかへ消えていた。紺の曇天をひた歩けば、目抜き通りは私だけの道に思えた。

「あ、魔理沙ー！」

急に声がして振り向くと、そこには霊夢が立っていた。霊夢はたくさん洋菓子を、雨からそれを守るように抱えている。

「もう、急に降り始めるんだもん。それにこんな大雨！ せつかく人助けしたのにお礼が台無しなんて、たまったもんじゃないわよ」

霊夢はいじましく息巻いて、私に数個の洋菓子を投げ渡す。

「ほら、あんたにも少し分けてあげるから、神社に持って帰るの手伝っ

てよ。ほら急いで。あ！あんまり濡らさないように！」

霊夢が笑いながら駆けていくものだから、私もつられて笑ってしまった。同じようにして冷たい雨の中を走れば、さながら喜劇映画のダンスのような悲痛さだった。それは、悲痛なまでに、悲痛さのない、愉快なだけの、時間だった。

その夜は神社で霊夢と酒を呑んで騒いだ。やれ里の甘味処の品揃えが悪いとか、やれかわいい洋服店が少ないとか。その中にはやはり好みの異性についての話もあった。今まで霊夢は一度として、私の霖之助に対する見え透いた恋慕に触れることはなかったが、今日だけは違った。しかし話し始めるとその大凡の割合を占めたのは霖之助の「至らなさ」が殆どで、具体的なこれからの行動指針等を交わすことはなかった。それはきつと、私も彼女も、これが最後だとわかっていながらだと考える。

私達はそんな具合に、一つのピリオドを引き伸ばすように騒ぎ続けたけれど、それは酔いの眠気に勝るものではなく。

夜半、続く土砂降りの音がやおら静まり始めた頃に、私達は、眠ってしまった。

朝、目が覚めて縁側から世界を覗けば、そこにはらしく冴え渡る五月の空が在った。どこかで朝の鳥がなくて、境内は薄く白んでいる。

少し肌寒い朝の空気の中に、霊夢の姿を見つけた。霊夢は縁側に座り、静かにお茶を啜っている。そんな彼女の背中が、私になにか感傷的な心象を与えた。しかし宿酔と伴う頭痛やなんやが、私にそれを受け入れることを拒ませた。

霊夢の隣に腰を掛け、縁側に両手をつけて空を見つめる。どれくらいそうしていたかはわからないが、いつしか霊夢はおもむろに、しかし確かな意思をもって、口を開いた。

「ねえ魔理沙。なんだと思う？ 人殺しって」

五月の風が、緩く吹き抜ける。

「おまえだよ」

そうね、と霊夢は微笑んだ。私もつられて微笑むと、霊夢はまた、可笑しそうに笑みを溢す。私もなんだか可笑しくて、次第に、私達の笑い声は境内に、五月の空に大きく響いた。

そうして私は、風で揺れる木々の音に、鮮やかな朝の気配を感じたのだった。

博麗霊夢が人を殺した。詳しい事情はわからないが、どうやらそういうことらしい。

霊夢はそれから巫女になった。以前からずっと巫女だったけれど、それを堺に彼女から少女らしさを感じることはなくなった。

あー、私もそろそろ、決めなきやさあ。

どうか千の非を絶やすな（全3話 主演・少名針妙丸、
鬼人正邪）

どうか千の非を絶やすな 1

正邪と暮らし始めてから、また数年が経っていた。今じやすっかり落ち着いて、最近では買い出しなんかにも行ってくれる。でも怪訝なのは、私が眠ったあと、こいつがどこかへ消えていることだ。夜中に目を覚ますと、隣の布団は平たくなっていて、けれど、私もいちいち探しに行かない。牛乳やなんかを飲んで眠れば、明け方、布団はまた膨らんでいた。

こいつと一緒に暮らすのは初めてじゃない。今となっては懐かしい口車に乗った日々がはじめて、二回目はそのあと、三、四、五、六回目あたりはいろいろあって、たぶん、今回で七回目になる。でも六回目まではおよそ一、二年間の出来事だったし、それから随分間が開いての七回目だから、厳密には七回目じゃないかもしれない。その上に、今回暮らし始めてからも数年が経ってるわけだから、私自身、過去のことはもう、いろいろあったとしか形容できなくなっている。本当に。

だから、寝息に合わせて嘘っぽく上下する布団をこうして眺めるのは、そう珍しいことじゃない。眠れない夜などというのは久しいけれど、なんとなく、布団の中で夜更かしをしてしまうような冬にはぴったりだった。

「いらないって言ってるじゃん」

そう言って、こいつはいつも、私に卵の黄身を寄越す。いくら両面焼いてあるからって、生焼けの黄身だけを箸でつまんで私の皿に移すとは、随分器用なものである。私にはできない。

「嫌いなんだって」

どうして食べないのかを聞けばいつだって、なんでもなさそうにこいつは言う。これだけ長く一緒に居ればもうすこし具体的な理由を

知るのは簡単なことで、どうやら、やつは熟れたトマトが嫌いらしい。それから、こいつが卵の黄身を嫌う理由を知ったときに、もうひとつ分かったことがある。それは、こいつにそれ以上の具体性を求めるのは難しいってことと、時間は苛々とする些細な興味だって、やさしく押し流していくってこと。

とにかくこいつの嗜好だのなんだのに具体性を求めるのは無駄で、こいつの行動はいつも突発的だった。すぐに思い出せるものでひとつ。あれはいつかの冬の初めで、冬のわりに雪の降らない、普通の冬のことだった。遅れて起きてきたこいつに「なにたべたい」を尋ねれば、こいつはいつもどおりに「なんでもいい」を発音した。けれど冬先のことだったから、私の問いかけに、こいつは白菜とか豆腐とか、そのあたりの食い物で返答したかもしれない。とにかく白菜なんて高いからダメだったし、「豆腐なんてのは、こいつじゃすぐに足りなくなるから論外だった。そもそも、あればあるだけなんでも食べるわけだから、正直聞くだけ無駄だった。冷蔵庫や引き出しに鍵をつけることを、いまだって検討している。

その頃にはもう魚釣りなんてやめていたから、食べるのはだいたい安い麺類とか、生姜に味噌を塗ったのとか、極々質素なものだった。それでも私とこいつの腹を満たすには十分だったし、夜になればぐっすりと眠れた。もっともこいつがぐっすりと眠ることは少なかったけれど、それはたまの気まぐれに贅沢をした夜でも同じことで、要望通りに鍋やなんかをつついた夜にさえ、こいつは何度も、寝苦しそうに寝返りをうってみせた。

しかしどうだっただろう。思えば、はじめの頃ならこいつは夜、比較的おとなしく眠っていた気がする。とすると、こいつの寝相が悪くなったのはちようどその冬のことだったかもしれない。

その冬に初めて、やつとちらちらと雪が待った夜のことだった。何事もなく眠っていた私の布団は不意に剥がれて、理不尽な寒さに憤って飛び起きれば、電気まで点いているのだからすこし驚いた。溜息を吐いて眠い目を擦っている間、正邪はなにやら喚いていて、ともするとそれは涙の混じった声色だった。そんなことは初めてというか、

久々というか、まあ、ほとんど初めてのことだったから、怪訝に感じて、私は寒さに眠気を苛められながら、惚けた視界にやつ姿を探した。当然狭い部屋だから、大した苦勞もなく、すぐに畳の上を犬みたいにぐるぐるとするあいつを見つけられた。

「いらなんだ、こんなもの、いらない、いらねえ」

なにかそんなことを焦った口調でぶつぶつとやっていて、背中には懐かしい風呂敷を背負っていた。それは正邪が窃盗の際に好んで使う唐草で、見ればどうにも、トマトを盗んできたらしかった。唐草模様から赤黒く覗く鮮やかさは、蛍光灯の明るい夜には陰鬱だった。

「盗ってきたんだよー」

私がすっかり起きたと分かれれば、聞くまでもなく正邪は叫んだ。そのまま続く言葉はたしか、「でもな」それか、「だけどな」で、どちらにせよ、寝起きにはどうでもいいような文句だった。

「なあ、わたしはいらなんだ！　こんなもんはさあ！」

半ば泣き叫びながらどたと窓を開けて、そのまま風呂敷ごと、正邪はトマトを外にほうつた。一つのトマトだったら、ぐしゃ、とか、そんな軽い音が響いただけで済んだのかもしれないが、風呂敷には結構な量が包まっていた上に、向かいの安い長屋の壁にぶち当たったもんだから、随分な音が夜に響いた。

その後いつしよになって知らんふりを決め込んだのも、牛乳やスパゲッティを腹いっぱいやらせてやったのも、久々の窃盗を犯したあいつに対する処遇としては、ちよつと甘かったかもしれない。

そうしてその日はおとなしく眠ったけれど、そうだ。こいつの寝付きが悪くなったのは、きつとその日からだったに違いない。

私の寝相が悪くなったのもその頃だ。河童の企業努力の賜物によってテレビ・ラジオ類の普及した今となつては怪訝な、ともすれば面妖で危機感を煽るだけ煽るニュースはときたま神妙に放映された。内容といえは事実模糊とした、或いはオカルティックなもので、どうやらこの幻想郷に長い、あまりにも長すぎる紐が発生したらしい。第一発見者などはどうでもいいが、発見された場所は延々と続く田園地帯のあぜ道だから、おそらく暇を持て余した妖精が発見者で違いな

い。談によれば件の紐の“先端”はあぜ道の道すがらになおざりにされているようで、けれど、その紐の“先端”は時たま“短く”なっているらしい。噂、憶測が飛び交って、どうやら巷ではその紐に“導火線”という銘が打たれた。短くなった先端はいつだつて焦げ跡がついて、週になんべん、或いは月になんべんかその長さを失つていった。

されどもその導火線がどこに繋がっているのか、知る者はこの狭い世界に一人としていやしない。導火線はまるで、排水パイプのように、至るところで散見された。人里にも、路地にも、稗田低付近の横丁にも、普段買い出しに行く目抜き通りでだつて、いつも私の目についていた。しかし、導火線は複数存在するわけではない。アレはあくまで一本の、途轍も長い紐であり、紐は延々と続くあぜ道から誰も知らないどこかへと繋がっている。ここから先はすべて私の憶測にはなるけれど、あの紐は、なにか、そう。世界の滅亡へと繋がっている気がしてならない。薄い、ティッシュのような根拠を述べるのならば、管理者の奴隷のマスメディアがあぜ道の、時たま短くなつていく紐に虎柄のロープを張ったことぐらいだ。とどのつまり、あの紐が導火線だとして、それが短くなるとどうしようもなく困る者がいるから、そういった措置を取るのである。私は間違っているのだろうか。

そう。あぜ道といえば田園だ。田園といえば作物だ。この時期ならばトマト泥棒にとつては絶好の稼ぎ処に違いない。あぜ道、トマト、紐——導火線。そこに、あの天邪鬼との相関を見いだせないことなんて、私に可能なのだろうか？ そんなことは自明だ。あいつは夜な夜なトマトを盗んで、ようわからん心持ちで導火線に火をつけて、そしてまた、日和つてそれを踏みにじつて帰途を辿る。そうして生まれるのが、隣家の外壁に染み付いて腐敗するトマトの果汁だ。

あー、わかつてる。あいつは今でもまだ天邪鬼を捨てきれずに、どうしようもなく迷つてる。まったくもって、どうしようもないとしか形容することができないね。実際。

どうか千の非を絶やすな 2

似たような日常がしばらく続いた。似たような、とはいえ、おなじ日常なんて言葉は存在しない。賽、連続して出た一の目は同一ではない。とどのつまり、虎柄のロープなどは無視されて、あぜ道の紐は日に日に、少しずつ、少しずつ短くなっていた。伴って厳戒態勢が敷かれたが、無意味だった。紐はもはやあぜ道からは消え失せて、いよいよもって人里の入り口にまで差し迫ってきている。ブン屋がなにか憶測を飛ばすかと思いきやそうでもないらしい。ともすれば、あの紐はこの世界にとって、この世界の存続にとってよほど重要なものなのかもしれない。世界は大きな地雷だと昔誰かに教えられたことがある気がする。或いは、自身で作り出したかつこつけの言葉かもしれないが、ともかくとして。あの紐は紛れもなく導火線で、果てしなく長い導火線の先にはきつと、超弩級爆弾が鎮座しているに違いない。

夜半だ。私は眠っていた。例のごとくやつが寢室をぐるぐると、犬のように徘徊するから目が覚めた。

「また盗ってきたのか。なあ、返してこいよ。いらないんだろ、そんなもの」

「あー。ああ……」

曖昧に返事をすると、やつは例の唐草の風呂敷からトマトをばらまいて、床に落ちたそれを自身の口内に嫌というほど押し込んだ。口元は赤にも紅にも及ばない中途半端なトマトの果汁で汚れて、トマトはやつの嫌いな食べ物であるからして、やつは嘔吐きながらもそれを嚙下した。

「おう、美味いかよ」

「……嫌いだ。嫌いなんだよ、こんなもん」

その翌朝には、目玉焼きを振る舞ってやった。

さて、あいつが革命に失敗してからの経歴を語る必要はあるのだから

うか？ 端的に済ませれば、やつはいろいろな職業訓練をやらされた。寺子屋での補佐。哨戒天狗たちへの迎合。とりわけて続いたのは寺子屋での業務で、案外、上白沢慧音とは上手くやっていたようだ。三人で呑みに行ったこともあるが、しかしまあ、結局なにもかも上手くはゆかず、地味な内職をこなす日々に辿り着いた。内職はもちろん、すべて私の仕事になっている。やつといえは、無心をするのではないが、まあ、いわば私のヒモのような状態になっている。自覚の有無に問わず私とあいつはソリが合わないから、あいつが家に居る時間は少ない。日中はどこぞをぶらついて、夜になれば帰ってきて、私の用意した夕飯に億面もなくありつく。しかし帰ってこない日のほうが多いかもしれない。ともかくとして、件の紐に火をつけてはビビって短縮されていく導火線を踏みつけ鎮火しているのは、あいつに間違いないだろう。

「つて話なんだけどき。ねえ、私の憶測は見当違いだと思う？」
「え、ええと、そのう」

とんで甘味処。買い出しに伴って翻る旗に拐かされるがまま、私は団子を啄みながら白狼天狗と話している。うっすらきよとんと眉をひそめて腕を組む白狼天狗は犬走権という、哨戒部隊長だ。かつて哨戒部隊に仮編入させられた際、やつはこの白狼天狗に随分と世話になっていたようだった。部隊の連中は概ね鬼人正邪という不穏分子を実に不穏分子らしく扱ったが、犬走権は違った。もつとも、それはこの部隊長の有する日和見主義とも云える穏和さに由来する事なこれの習性による事象だったのかもしれない。ともかくとして、往來を眺めながら啜る濃い抹茶と団子は平和という語句そのもので、視界の端に映る例の紐の不穏さなど取るに足らないものに思えた。

「なあ、見えるだろう？ ああ長い紐が。日に日に短くなってる。紐の警備は報道の通り山の仕事だろう？ 実際のところ、どうなんだよ、あの紐はさ」

「えつと、ですね。……なんというか、率直に言えば、そのう。……見えないんですね。針妙丸さんの仰るその紐というのが、私には」

不可解だった。私の視界には確かに、排水パイプが如くそこかしこに紐が見えていた。急におかしな気分になった。団子の味も、抹茶の味も、なんだかよくわからなくなった。

「でも現に、連日、ニュースでやってるじゃないか。なにかようわからんが、あの紐が短くなると困るから、山は厳戒態勢を敷いてあの紐の短縮を抑えようとしている。そうだろう？」

犬走権はやおら眉を潜めた。組んだ腕の片方を口元にあてて、まさしく怪訝そうに考え込んだ。往来、有象無象の一人が紐を、導火線を踏みつけて歩いてゆく。不可解なイメージだ。やつの、かつての鬼人正邪の煌々とした、野心を称える目つきに乗っ取られたような心持ちになった。

「……そんなニュース、わたしは見たことも、聞いたこともないですよ」

なら私の見ているあの紐は、一体全体、どこに繋がっているのだろう。

どうか千の非を絶やすな 3 (了)

冬だから、それなりに寒い。買い出しを終えて長屋に帰るまでの道中、脳の表面を這い回るのは自身に対する疑念だった。それは蛭に似ていた。ときに吹雪いた。長屋の階段はよく滑って、202号の扉を開けるための鉄製のドアノブは手のひらがくっついてしまうのではないかというほど冷たかった。

クツシヨンフロアのキッチンを数歩踏みつけて買ってきた食材やなにやらを黄ばんだ冷蔵庫に仕舞った。それからリビングへの敷居をまたぐと、相変わらずやつは居なかったが、その代わりに黒い猫が居た。猫は階段箆筒の二段目をカリカリと爪で引っ掻いていて、黒猫の求めるのは木箱在中の乾物の類だとすぐにわかった。そいつは馴染みの猫だった。誰の嫌がらせかは知らないが、家を出るまでにきっちりと閉めたはずのリビングの窓は、いつだって開け放たれていた。

夕飯をこしらえたタイミングでやつは当然のような顔をして帰ってきた。長ネギとようわからん畜肉を炒めた料理を、私達二人にはどうにも不釣り合いな、ダイニングテーブルで啄んでいた。その間やつといえば終始無言だった。食事を摂る際には無言が一番で、即した話題が二番。それ以外には無いことを自覚しないでもなかったが、私はどうしたって不可解だった。

「おいせーじゃ。お前、例の紐を知ってるだろ。しらばっくしてくれるなよ、わかってるんだぞ。私には」

「……紐？」

「そうさ、紐。導火線だよ。もともとはあぜ道にあった。トマト畑のあぜ道にさ。それが今では短くなって、先端は里の入り口にまで差し迫ってる。今日買い出しに行ったときにはもつとだ。目抜き通りにまで差し迫ってた。当然先端には焦げ跡があった。誰かが踏みにじったような焦げ跡だよ。……それからあのあぜ道から紐が消えて、ちやうどそのあたりからお前はトマトを盗ってこなくなつただろう？　なあ、お前は知ってるんじゃないか。あの紐、あの導火線はどこ

に繋がってるんだよ」

リビングを照らす蛍光灯は白い。だから正邪の当惑は際立って視界に映えた。

「な、何の話だよ。紐？ 紐ってなんだよ。と、トマトを盗らないのは針妙丸、おまえがやめろって言うから、だからわたしは……」

その夜。食事を摂り終えてから、なんだか妙に気を使われてしまった。やつは私の布団を敷いたし、食器の片付けだってこなしてみせた。なにか、なにかがおかしい。やつは私の隣に布団を敷いて、どうにも心配そうな眼差しで私をみつめている。せーじや、鬼人正邪が私をこんな目で見つめるなんて、どうしたって異常なことに思える。

「おいせーじや。なんだよ、その目は。どういう腹積もりだ？」

「どうもこうも……おまえこそ、なんだよ。なんだか変だぜ。どうも妙だよ」

私の布団は小さい。いつだったか自分用に誂えたものだけけど、どうにも今日は足が冷える。正邪の布団のなかは不可解なまでに温かった。

「な、なんだよ急に。自分の布団で寝ろよ。わたしは寝相が悪いからって、おまえは布団が取られるのが嫌だって、言ってたじゃないかよ」

寝室、つけっぱなしの電気を消して、また正邪の布団に潜り込んだ。私は何を考えているのか、自分でわからなかった。妙に静かな夜だった。穏やかな夜だった。冬だつてのに、鈴虫なんか鳴いているような気すら起きた。正邪の赤い前髪が目についた。正邪は気まずそうに目をそらした。ほどなくして私の額に当たったのは正邪の薄い胸板だったかもしれない。心音が聞こえた。なんだか、この静かな夜と同じ調子で脈をうっていた。眠たく、眠たくなつた。微睡みの中で口から溢れる言葉の真偽を問えるものは居ない。事実それを口にした記憶すら曖昧だ。なにもかも朧げな夜だった。でもたしか、おそろくきつと、私の口からは何かがこぼれた。

——おい、トマトを盗ってこいよ。それで、それからさあ……。

またしばらくが経った。雪が溶けた。しかし春というにはまだ遠い。少し肌寒い窓辺から、遠く桜木の蕾がちらほらと見えた。目抜き通りからほど近い長屋は202号室。ここは二階であるからして、往來を縫うように伸びる一本の長い紐も見えた。やはり先端が焼け焦げていたから、紐は導火線に違いない。

正邪と云えばあの日の夜以降なんだか情緒が乱れたような、むしろ安定したような状態に陥ったようで、なにをトチ狂ったか私を食事に誘った。

——なあ、最近美味しい定食屋を見つけたんだ。よかつたら一緒に……。

なんて、誘われるのかと思いきや、後に続いた語句は「ちくしょう！」というわけのわからないもので、それを吐き捨ててはそれからきっかり長屋に戻らなくなった。しかしやつの居ない生活など慣れたものである。むしろそれが平常というものだ。食費も一人分で済めば、食器の片付けも一人分で済む。買い出しの際に重たいビニルによって齎される負担も軽減する。

そう。今日はそんな普段どおりの白昼、私は内職で得た二人分の生活費でもって一人分の食材を買い出すべく目抜き通りを歩いている。往來にしたって普段どおりに往來を縫ってる。抹茶を啜って団子を啄んでるのも居る。私にしたってそんな通りを縫っている。そうして馴染みの八百屋に差し掛かったときだ。私はやつ、鬼人正邪の背中を、遠巻きから見つけた。やつはどうやら白日の下堂々と八百屋にて狼藉、窃盗を働いたらしく、店主とこつぴどく口論をしていた。やつは唐草から今しがた盗んだであろうトマトを四方八方に投げつけては、往來の有象無象に悪辣な言葉を吐き捨てまさしく逃げるように駆け出した。

そのとき私の視界に映っていたのはやつが投げた潰れたトマトの果汁と、逃げゆくやつその後ろ姿と、地面に一直線に伸びた例の紐だった。地面に徐々に広がっていくトマトの果汁は、焼け焦げた導火線の先端を湿らせた。しかしどういうわけか、その果汁によって導火線に

火が点いた。パチパチと音を立てて、導火線は短縮されていく。どこに繋がっているかはわからない。しかし、導火線は逃げゆくやつを追いかけるように、パチパチと音を鳴らして短くなっていく。

「あー、店主さん。悪いね、あいつの盗ったもんのお代は私が払うよ」店主は不服そうに私から幾許かの小銭を受け取って、これまた不服そうに鼻で大きく息をした。そんななか、私は横目で、逃げてゆく正邪の背中を追っていた。厳密には、やつに追従する導火線の非に一瞥をくれていた。

世界は大きな地雷かもしれない。あの導火線がどこに繋がっているか、私にはわからない。それでも私は、なんだろうね。やつにはどうか……なんだかな。あー。

追いかけて、導火線の火を踏みにじってやろうとも考えた。でも、私はそれをしない。できなかつた。だから、とどのつまり……はは。

私は、あいつの共犯者だ。

鶴似、有、塩味。(全13話 主演：村紗水蜜 他：封
獣ぬえ、など)

鶴似、有、塩味。 1

地底の空気は重い。閉塞感で満ちてる。岩肌に生えた苔も気色悪い。影が落ちて、どこもかしこも紺色だ。でも、この空気がなんとなく落ち着くのは、元来の私ってやつに、起因してるんだろうね。

旧都へと向かう裏道は、片側の端にロープが張られてるだけの断崖で、どうも、不安になる。落ちて死んだやつも少なくないはず。岩肌も、こんなに湿ってるわけだし。当然、裸足で歩けばひたひたって音が鳴るわけだけど、その音を鳴らしてるのは私じゃない。隣を歩く、釣瓶落しだ。

思えば、こうして自由に出歩くってのも新鮮だ。閉じ込められてる間はこうはいかなかった。目の裏側、だだっ広い牢屋と一緒に浮かぶのは一輪と雲山と船。あー、思い出すだけで、胃がムカムカしてくる。だけど、吹き出した間欠泉に乗って地上に出たときの爽快感を思い出せば、忌々しい記憶もそれほど悪くないような気がしてくるから不思議なものだ。あのときの一輪の顔ったら見ものだったな。聖のころへ行こうなんて、悪い夢から覚めたと思えば、また次の夢を見始めた。寝ても覚めても仏々仏々。どうにも、乗り気になれないね。あんな船は、壊れたまんま、直らなけりゃいいんだ。

「ねえ水蜜。わたし最近、考えてるんだけどさ」
キスメの声はいつ聞いても無作為だ。どーせなんも考えちゃいな
いから、その点、耳にやさしい。

「人間が人間を食べていいのってさ、どんなときだと思う？」
決まってる。善良だったって邪悪だったって関係ない。殺したけりゃ殺せばいい。そうでなきゃ、わざわざ地底に戻ってきたりしない。
い。

「うーん、どうだろう。難しいな」

しかし心とは難しいもので、どういうわけか、口が動く。恥ずかしいやつだね、私もさ。

「やっぱり、あれじゃないかな。皿の上のそれを、人肉だと知らなかったとき」

我ながら腹が立つ。地底に降りてからずっと、こんな調子だ。一輪のせいだ。あいつが、仏々仏々、うわ言みたいに繰り返すから。

「えーと、じゃあアレ？ 水蜜は人が人を食べるのは、通常許されないことって思ってるわけ？」

「いや、そういうわけでもないよ。ただ、それを話すとちよつと難しい話になるんだけど」

あー、なんだかな。

「難しい話？ じゃあ、いいや」

なんか、やなかんじ。

キスメが無作為で助かった。無作為なんてのも上品な言葉かな。単純とか、バカとかのほうが、それっぽい気もする。ときたま眉間に皺作って、なにか睨んでるように見えるけど、その実なんも見ぢゃいない。込み入った話になったら面倒がつて話をやめる。だからかな。キスメが友達多いのって。なんていうか、一緒にいると安心するから。

「わたしはご飯食べてくるけど、水蜜はどうするの？」

気づけば旧都の目抜き通りだ。相変わらずに汚い。入口付近は特に。ザ・貧困層のメツカって感じ。老いも若いも正体不明の惣菜を求めて、うようよとしている。

「あー、私はちよつと」

しかしすでに慣れ親しんだ汚さだ。何がどうあっても、あんな牢獄より酷い場所はない。でも、目的地はここじゃない。

「わかった！ 水蜜ってば、またあの男のここに行くんでしょ！ もう、どこがいいのさ、あんなのの！」

「いやあ、ははは。みんな言ってるじゃん。いいやつだつて」

「えー。たしかに、みんないい人だつて言ってるけどさー。でも、ヒトだよ？　せつかく地底に落ちてきた人間は殺していいことになってるのにさ。水蜜さえいいつて言ってくれば、わたし、いますぐにでも頭かちわりに行くのに」

地底に落とされるような人間がいいやつなわけがない。折り目正しい好青年？　姿勢も正しく顔も良いとくれば、色情狂に違いないね。即席の恋をするにはぴったりだ。抱かれて抱いて暴いて殺す。想像するだけで溺れ死にそうになる。キスメになんか渡してたまるか。

「悪い癖だな、誰彼構わず殺そうとするの」

「水蜜だつていちおー妖怪でしょー？　ないの？　誰でもいいから殺したい、つて思うこと」

「ないわけじゃないけどさ」

「もう！　いいよわかった。じゃあ殺してもいいよつて思ったら、すぐに言つてよね」

約束だよ、なんて付け加えて、キスメはひたひた走つていった。友達多いし、待ち合わせでもあったのだろう。さて、私はどうしたものか。

旧都の路地は黴臭い。お逃え向きに湿ってる。道を縁取る旧びた木板も、ところどころに水の張った地面も、ぬらぬらと照っている。男の住居はそんな入り組んだ路地にあつた。

「左くん、いる？」

ノックをして呼びかければ応答があり、二、三分経つて慌ただしく戸が開く。とすれば紋切り型の、醜悪な美辞麗句だ。お次に私のおててに手をかける。気持ちが悪いので気付かないふりでやんわりと拒んで、路地を抜ける。そうすればまた、目抜き通りだ。

「焼き魚がいいな」

男の質問に答えながら通りを歩く。飯代はそれ目的と思われないよう、奢らせたり、奢らせなかつたりだ。もつとも私は金なんて持つ

ちやいないから、よくキスメに借りる羽目になる。あいつも、どこからせしめたか、幾分金を持っていた。金といえば怪訝なのは男だ。人間のくせに、随分と持ってやがる。どうせ遊郭あたりのバカな女からせしめた金なんだろうけど、それにしたって随分だ。思えば、家にしたってそうだな。人間があんな立派な家に住めるのだろうか。ああ、それも、バカな女の家かもしれない。家に誘われるときと、誘われなるときがあるから、なるほどそういうわけだったか。

そういや、誘われないときは手すら繋ごうとしない。逆に繋いだ日は絶対誘われた。ああ、なんて露骨なんだろう。同意のサインってわけだ。道理で、手を繋いだ日に家に行けばやけに積極的だった。でもダメだな。焦れて襲ってくるぐらいじゃないと。そうして初めて本性を暴けるんだ。そのときに下手くそ、とか、馬鹿な顔、とかなんとか言つて、そのあと優しく抱いて、溺れさせる。なにもわからなさそうに脈打つて、死んでいくってわけ。自分で言うのもなんだけど、こんなに美しい殺し方ってのもなかなかない。娯楽の頂点みたいなたのしみだと思う。いやあ、やつぱり、楽しみだなあ！

水を差すように男が口を開く。入る店を見つけたらしい。曰く、こは美味しいんだよ。どうして男つてのは見栄を張ろうとするのか。男はきつと、入ったこともない店を美味しいと宣った。間抜けだよ、ここは以前、キスメと入ったんだ。腰が抜けるほど不味かった。なんだか米が妙に不味い。おかずはそれなりにいけるんだけど。それにしても、ああ、見ものだな。食ったらこいつ、どんな顔するのかな。

あれおかしいな。意外と美味そうにしてやがる。焼き魚定食は最低だ、食べれば必ず顔にでる不味さだ。なのに、パクパクパク、随分と流暢に食べる。私の口から、ほとんど初めて、興味本位の質問が飛び出せば、即座に後悔した。曰く、母親の味に似てるとかなんとか。口元を綻ばせたりなんかして、嘘をついてる様子はない。聞かなきゃよかつた、そう思う。今にも、自分のこさえたまだるっこしい手順を飛ばして、こいつを殺してやりたくなつた。

あー。私は人が飯を食べてるところを見るのが嫌いだ。パクパク

パクパク、不味い飯頬張りやがって。なんていうんだろう、人が生きようとする醜い意志、三大欲求？ 結局は、性交渉と変わらない。こいつは性欲を解消するのとおんなじに飯を食らってる。人間なんて米と汁、少しの野菜で露命を繋ぐように生きてりやいい。それ以上は欲深い。ましてや大盛りなんて！ あーやつぱり、私はいますぐにも、こいつを殺してやりたいのだ。

半ば強引に殺意を回復させているうちに皿は空いて、会計の段となった。苛立ちの募るやり取りを交わし折半で店を出れば、通りを行き交う往来がぐちゃぐちゃとする。

ふと、考える。こんなにくさん人がいるなら、一人ぐらい居なくなつたつてバレやしないだろう。考えてるうちに、行き交う往来に、こちらを見つめる視線に気づいた。一つは笑顔で手を振るキスメのものに違いないが、もう一つある。知らないやつだった。妖怪だ。奇妙な羽を持っている。キスメと違って、そいつの笑顔は笑顔というより薄ら笑み、含意つて額縁にぴつたりとはまる薄ら笑みだ。妙に、不愉快だった。

誰だろ、あいつ。

不快な視線の主に睨み返していると、男が口を開く。よかつたら家に来ない？ 行くわけがない。即座に拒否し、半ば追い返すように男と別れた。キスメたちはどうやら歩きだしてしまったらしい。でも、まだ遠くには言っていないはず。奇妙な羽、気色の悪い笑みが気になって、気づけば早足で往来を縫った。

通りの人混みをかき分けて進めば、背中はずぐに見えてきた。二人の話し声が聞こえてくる。

「そうだ、ぬえ。わたし最近、考えてることがあつてさ」

「へー。考え事なんて、珍しいじゃん」

「えー。そんなことないよ。まあ、それでね。人間が人間を食べていいのって、どんなときかなー、って」

ぬえ、つてのか。何か腥い口調だ。褒め言葉に変換すれば軽妙つて

ところかな。でもやっぱり、いかがわしさが濃い。

「そりゃ、やっぱりアレでしょ。皿の上に載せられたそれを、人肉だと知らなかったとき」

「え、うそー！……じゃあさ、じゃあさ。ぬえは人が人を食べることは、通常許されないことだ、って思ってるんだ？」

ぬえ、ぬえ、鶴。知ってるぞ。

頭は猿似、欲妊み。誰でも襲える便利な手足、虎に似て。中途半端に化ける胴、おまけ程度に尾を蛇似。結局あんたは何組か。正体不明の化物也。其れ即ち、鶴つちゆう妖怪。

なるほどね。やつはなかなかどうして、鶴そのものだ。

「いや、そういうわけじゃないけど。ただその話をすると、ちよつと難しく——」

「あはは！ すごい！ ぬえってば、水蜜と一緒にこと言ってる！」

「え？ ああ。じゃあそいつはきつと」

「あ、水蜜！」

ああちくししよう。キスメめ、いいところで気が付きやがった。

「今ちようどね、水蜜のはなしをしてたんだよ。ね、ぬえ」

「あー……あんたさっきの……」

怪訝そうな面持ちは一寸と持続しない。やつはすぐに合点がいった様子で目を細める。口元も緩んで目も細めば、全身舐め回されてるような心持ちになる。口内、正体不明の化け物味がした。

「水蜜っていったよね？ ぬえ、水蜜。あたしたち、なかなか気が合いそうじゃん」

うう、きもちわる。なんだろ。

「そうかな」

あー、わかった。こいつ、敵。

鵓似、有、塩味。 2

洞窟の外で猫が恋人を取り合っている。吹き込む風は生暖かく、私の足元を舐めていく。

「ダウト」

キスメの住居だ。岩壁には白いロープが張り巡らされて棚代わりの桶が括られている。何から何まで桶だ。テーブルだけは普通かと思いきや、よく見りや桶だ。キング桶って感じ。いや、桶キング？

対面睨めば鵓が腰を下ろしてやがる。視線を逃がしやあでましたキスメ。鵓の一声でテーブルの上、疎らに重ねられたトランプが、すべて私のものとなる。アホか。なにからなにまでキスメの提案だ。せっかくだし三人で遊んでみようよ、だとか、トランプぐらいしかないけど、だとか。なんにせよこれは三人でやるゲームじゃない。互いの手札が判然とする時点でおかしいんだ。私も私で、どうして参加しちやっただら。ばか！

「A。それで、水蜜。さつき一緒に居たあの男だけど。あれ、どうするつもり？」

私のKを暴いた鵓は相変わらず、ニヤニヤ、ニヤニヤと、実に不愉快だ。愉しそうにしゃがって。

「2。水蜜はね、あの男と仲良くしてるんだよ。いいやつだからってさ！ 変だよ、人間なのに！」

キスメは無作為だ。こういうときに好き勝手喋られるとヒヤヒヤする。こんなつまらない遊びに、私がどうして参加したと思ってるんだ。拒否しないために参加したんだぞ、私は。

「3。それよりこのゲームさ、全然、終わる心配がしないんだけど。ほんとに三人でやる用のゲームなわけ？ ほかに、もつとこう、ないもんかな」

「4。まあまあ、おしゃべりの手慰みにはちようどいいじゃん。なんかさ、トモダチ、って、感じがしてさあ……で、どうなの、あの男のことは」

なんてわざとらしい口調なんだろう。どうやったらこんないかが

わしい喋り方に至ってしまうのか。詐欺師の子なのか？ かわいい
そーなやつ。

「5。まあ、でも。わたし、水蜜のことちよつとわかるかも。なんか
さ、まわりの子たちがいいやつって言っていると、いいやつなんだ！
って思つてさ、仲良くしたく、なるよねー。なるなる」

あまりにもな薄っぺらさにキスメの顔を思わず見やれば、キスメの
おめめは手札のカードに釘付けとなっていた。ゲームに集中してく
れるのは結構だけど、ほんとにアガれると思つてんのか？ かわい
そーなやつ。

「6。キスメは適当だなあ。だけど、概ねそんなところだよ。あの人
間と付き合うのはさ」

えー。つて言葉、この声で聞くのはもう何度目だろうか。キスメの
そういうバカっぽい発音を考えるだけで心が風ぐ。船に乗せりや航
路も風ぐかも。さて、概ねなんてのは便利な言葉だが、鶴のやつはど
うでるかな。

「7。概ね、なんてまた上手にはぐらかすね。なんだろ、後ろめたいこ
とがあるのかな。だからそんなに、隠したがるって、そういうこと？」
やっぱりやなやつ。他人に自分を決めつけられるってのはどうも
不愉快だ。人間に恋する純真なやつなんて思われたくないし、人殺し
をやめられない純粋なやつとも思われたくない。特にこのニヤケツ
ラには、私のこと、なんもわかつてほしくない。気持ち悪いもん。

「8。後ろめたいこと？ なにそれ、ちよー聞きたい！」
キスメのおめめは手札にくつついたまんまだ。

「あつ！ そういえばさあ！ そういう鶴はなんで地底にいるのさ！
だって、鶴ってあれでしょ？ 大妖怪ってやつでしょ？ なんて、
そんな大妖怪ともあろう鶴様がさ、地底なんかで私達とトランプなん
かしてるわけ？ そっちのほうが気になるよ！ なあ、キスメ！
……ああ、9。ごめんごめん」

地底にいる以上なんかあるのはお互い様でしょ。キスメともそん
なに深い仲つていうふうにも見えないし、降りてきたのは最近なんだ
ろうけどさ、私よりよつぽど不可解だよな。なあ、キスメ！

「いやあ、あたしはほら。気まぐれってやつ？ 10。ほらキスメ、あたしもうすぐアガっちゃうよ」

えー、うそくさ。そんなんでいいのかな。私にはあんだけしつこく詮索しといてさ。なんだろ、こっちの反応を伺ってるんだろうな。納得した顔しといてやるか、ふむふむ、って具合に、頷いたりなんかして。キスメはどうでるかな、追求してくれたら面白いんだけど、そうはいかないかな。

「ふふーん、ぬえはあと二枚でしょ？ J！ 残念でしたー！ わたし、あと一枚だもんねー！」

楽しそうでなによりだ。どうしようかな。ちよつと露骨な気もするけど、いいや。確認の一手といこう。

「Q。気まぐれねえ。じゃあ普段は地上なんかにも出るんだ？ 私さ、こないだ一瞬地上にでてみたんだけど、すごいね。あの、湖のそばの、青い館はさ。あんなに目立つ建物、はじめてみたよ」

あーちよつと。露骨すぎたな、やっぱり。目立つ建物、の部分が殊にまじかった。含意ありありって感じで、失敗したな、どうも。でも、これに対する返答で、鶴がどんなやつか、つてのが、だいたい掴めるはずだ。やっぱ、鶴だから、尻尾は蛇なのかな。ひー、おそろし。

「あー……。あれはたしかに、目立つな、目立つ。……K」

あれ、意外。適当に誤魔化しやいいものを、こんな素直に応えるなんて。とりあえず二つだ。一つ、鶴は地上にあんまり出ない。一つ、他人に、地上に出てると思わせたい。やっぱ、尻尾は蛇だね。結論、正体不明を気取りたいだけの、なにかもが中途半端な妖怪。決まり。

「A！あがりー！」

鶴の舌打ちが忌々しげで、心が踊る。タイミングを見計らおう。あー、今だ。

「ダウト」

「……ダウト」

ばつちり決まった。私の手元にAが三枚、もう一枚は鶴が持っている。キスメのAは必然アウト。ゲームはさておき、なかなか愉快だ。

「ふあいなるあんさー？」

あら地底住まいの桶妖怪にしては難しい言葉知っておりますな。感心しちゃうね、ふっふーんなんて指振っちゃって。カード捲れば恥かくぞ、ほらいまに。

「あ？」

「あれっ」

鶴と声が重なっちゃった。はずかし。いやでも、どうということだろ。

「残念でしたー！ わたしは嘘なんかつかないよーだ！」

テーブルの上、捲られたカードはAだ。

「ダウトはね、こっからが楽しいんだよ！ 二人になると全然終わんなくてさ、ザ・泥仕合って感じで！」

おかしい。ほんと、どういうこと？ まず、私がAを四枚持つてて、一回全部鶴に渡って、それから三枚戻ってきたから、私に三、鶴に一、で合計四枚。キスメのAに対してダウトを発音したってことは、鶴の手元には確実に一枚あるはずだ。私が間違っただけのことでは？ いや、ある。三枚ある。じゃあ、キスメのAが間違っているのでは？ うーん、何度見てもAだ、そりゃ、見間違えるはずがない。とすれば、私の目がおかしいのかな。でも、鶴も驚いてるから、やっぱりAで、間違いない。

「ちえっ、もういいよ。二人でやったってしよーもないじゃん」

鶴が顔の横でパツと手を広げた。はらはら、はらはら、手札が落ちる。

「あーっ！ ぬえ、カードバラまかないでよー！」

キスメがせつせとカードを拾う。鶴がばらまいた二枚のカード、中には間違いなくAの姿があった。とするとやっぱり、キスメのAはありえない。えー、不思議。不可思議。不可解だなあ！

「ぬえっってば大人気ないんだから！ まったく！ 水蜜も見えてないで、なんか言っちゃよー！」

「あ、ああ、ごめんごめん。こら！ ダメだぞ！」

鶴は無視をする。頬杖をついて、なにやら、考え込んでいる。

「……あれえ？ なに、水蜜。ニヤニヤしちやつて。わたしに負けて、そんなにうれしい？」

「……いや、そういうわけじゃあ」

「……」

「じゃあなにが楽しくて笑ってるのさ！」

「別に、笑ってないったら」

「……」

「笑ってるじゃん笑ってるー！」

「うるさいな、はやくカード拾わないと、汚れちゃうぞ」

「……」

鶴を除いて、私とキスメはえらく騒がしかった。キスメが喚けば喚くほど、鶴の沈黙は際立った。なに、考えてんだろ。鶴の表情は真剣そのものだ。なんだろ、拗ねてるようにも見えなくない。なんにせよ、まあ。いいだろう。今日のところは、こんなもんだ。

鶴似、有、塩味。 3

旧都を離れ地底の深部へ下ると、道幅は広がり、天井も高くなる。その代わりに地底の何もなさが見え立って、閉塞感はことさらに増している。しばらく歩けば寝床がある。

キスメとやつとの憂いの夕食を終えたらもう、寝床に戻って眠るだけ。本当はほかに行きたい場所があったのだが、そこにいけばまた変なやつと会ってしまいそうで、やめた。

広い空洞に響く私の足音は、私に孤独を与え続ける。となれば必然、脳裏に浮かぶのは連中のことだ。

閉じ込められている間も、一輪は聖への帰依を止めなかった。何年も、何年も、聖を解放するとか、そんなことを謔言のように呟き続けていた。ああ、叫んでいたかもしれない。居ない神に祈る囚人ほど哀れな者はない。私は、一輪が喚けば喚くほど、聖の復活が現実から遠のいていくのを感じた。何年続いたかな。覚えてすらいないが、とにかく間欠泉が噴き出した。

地上に出て、一輪に連れられて星のそこに向かった。寺は荒れ果ててたし、星だつてくれたびれてた。鼠にしたってそうだったな。でも、一輪のやつ、そこでも喚いた。連中にはそれがどうにも効いたらしい。みんな、瞳を輝かせて聖の解放を謳い始めた。鼠は恐らく主人の回復を喜んでいただけだろうが、ともかく。私が地底に戻ると言ったときの、あいつの冷ややかな視線。あれはどうにも、辛辣だったな。実際。

ああ、それにしても。

鶴だ。あの、いけ好かない鶴。夕食を食べに洞穴を出れば態度は一変。胡散臭さの消えた口調はやたらに胡散臭かった。急に、友達みたいな話を振ってきたり、ああも不快なことはそうそうないね。しかも結局、話は遠回しになったばかりで、それまでとさして変わりもない。やつの話す内容の殆ど詮索、情報収集に終始した。あー、適当に打った相槌のいくつかが不安になってきた。

ああいうやつに、右往左往なんて言葉が似合う。正体不明なんかよ

りずつと、そつちのほうがそれらしい。あの場にキスメが居なかつたら、刃傷沙汰になったんじゃないか。

「おつとつと」

地面に生えた細い蔦に足を取られて、一寸、立ち止まり、耳を澄ました。

おかしい。足を止めたはずなのに、足音が依然響いている。気がついた途端、足音が止まる。奇妙さを感じ振り返れど、そこには何も無い空洞が延々と広がっているのみだった。

ああ、もしや。

嫌な予感が胸中に渦を巻くのを感じる。向き直ると、あまり見たくないものがそこにあった。

「ばあー」

私の眼前でおどけるそれは、一寸の沈黙の後やおら照れ臭そうに後頭部を搔いて、私と数歩距離を取る。

「……おねえちゃんは、あんまり驚いてくれないね」

せつかく、こいつと会わないよう直帰したのに、結局会うんじゃない意味がない。

「おねえちゃん、今日は血の池地獄、行かないの？ ……あ、待つてよおねえちゃん！ 無視しないでよー」

「ねえ、今日ずつとおねえちゃんをつけてたんだけど」

ああ、始まった。

「おねえちゃん、なんであの男の人と、仲良くするの？」

「みんないいやつだつて言つてる」

「あなたはどう思つてるの？」

「うるさい」

「なんでそんなに冷たくするの」

「きらいなんだ」

「友達になりたいだけなのに」

「なりたくない」

「あの、ぬえつてひともきらいなの？」

「そうだよ」

「あのひと、おねえちゃんになにかひどいことしたの？」

「……」

「あのひと、おねえちゃんと友達になりたいんだよ」

「なりたくない」

「キスメちゃんとは友達なの？」

「関係ないだろ。それにキスメは……」

「……キスメちゃんは、なに？」

ああもう。

「うるさいな、あつちいけよ」

「あつちつてどつち？ ……あー！ 待ってってばー！」

そいつを無視して歩けば崩れた岩壁があり、無造作に転がる岩どもの前に虎柄のロープが張られている。私はそれを潜り、崩れた岩壁の隙間を進む。

「あつ、おねえちゃんダメだよ。そつちは怖い妖怪がいるって、昔、お姉ちゃんが言ってたの」

「私がその、怖い妖怪だよ」

言いながら隙間を進んで、空間に出る。振り向くと、隙間の向こうにやつはおらず、どうやらやつと、諦めてくれたようだ。

ともかくとして、この空間、私の寢床。広い空洞のすみに、編んだ藁が二、三枚。重ねて、敷かれている。藁を編んだのは、たしか私だ。そう、閉じ込められて間もない頃、子ネズミどもが藁を一本一本運んできたんだ。あー、そのころの一輪といえば酷いものだった。錯乱というか、なんというか。膝を抱えて腕に顔半分を埋め、壁やら床を睨むばかりだった。だから、私が仕方なく、子ネズミどもが一本ずつ運んでくる焦れたい藁を編み、寢床を作った。そういや、子ネズミどもはときたま、それと一緒に果物やなんかを運んできたな。一輪はそれに頓着することもなく岩を睨み続けてた。私、食事を摂ろうなんて気分にはなれなかった。けど、何もしない一輪の代わりに藁を編む対価として、不味い果実に噛り付いた。あー、子ネズミどもが来なくなったのは、いつ頃だったか。長い間来ていた気もするけど、来なくなつてからの時間のほうが、よっぽど長かった気もする。

会った時に確認すればよかったな。概ね、それらは星の指示だったんだろうし。まあでも、久々の対面で見たあの、呪いめいた疲弊の表情を鑑みるに、差し入れのストップは道理だな。けれど、それにしたつてあの鼠。あいつはどうも、好きになれない。

とにかく、一輪らが去ったおかげで、やつらの寝床は私のものとなった。薄っぺらな藁を何枚重ねたところであまり変わりはないが、まあ、以前より寝心地はいい。虚ろに仏々と唱えるやつもいないし。快眠には程遠いけど、随分マシになったかな。

身を横たえようと藁に寄ると、その上に、なにやら手紙が置いてあった。手に取るまでもなく、その手紙は子ネズミどもが運んできたものだど理解する。

手紙を拾い上げ折り目を開くと、そこにはただ一言、

『近々会いに行く』

とだけ綴られており、胸中、樟脳味の倦怠が湧き上がった。

手紙の主は言うまでもなく鼠で、その用事はおそらく船が直るとか、そこらへんの話だろう。ああ、果たして誰が会いにくるといのか。一輪はいやだ。あいつのことは嫌いじゃないが、あいつの、聖に対する恋慕に似た戯言を聞かされるのには、もう飽き飽きしてる。かといつて星。あいつに来られても、困る。あいつは、なんとというか、馬鹿みたいに真っ直ぐだ。しかし最悪なのはあの鼠だ。あいつのことは、どうも読めない。聖に対する尊敬も感じられなければ、毘沙門天に対してもしや変わらない。単純に星のことを好いてるのかと考えたこともあったが、あの鼠がそこまで純とも考えられない。

でもきつと、なんとなく。鼠が来るに、違いない。

私はため息を吐いて藁の上に身を横たえて、目を瞑った。

十中八九、船の修理ないしは今後の計画の話になる。その際、私はどうしよう。私は人を殺したくてたまらないんだ。じゃないと、連中と別れて、地底に降ったりしない。しかし、船はきつともうじき直つてしまう。

あー、あの男を殺そう。そうすれば、もういらんことを考える必要もなくなる。妖怪は、人だけ殺してりやいい。しかしそうになると、怪

訝なのは鶴だ。去り際、あいつはやたら左のことを知りたがった。あいつのことだ。きつとなにかしてくるに違いない。邪魔立てするつてんなら、殺してやろうかな。

あー、それがいいや。男も、鶴も、見つけ次第殺してしまおう。

でも、もし鶴を殺したとして、それがキスメにバレたらどうなるかな。キスメ、あいつはきつと怒るに違いない。なんで友達を殺したの、なんて。キスメ、あいつは卑怯だ。馬鹿だから、卑怯だ。私は、人殺しを悪いとも思わないあいつが、大嫌いだ。

鵓似、有、塩味。 4

カレー。ない方がマシ味の飯を出すこの店には、カレーという食べ物があるらしい。珍しいものの好きの有象無象は、寄つてたかつてそれを食べたがる。私は違う。しかしキスメは私を叩き起こして、この店まで連れてきた。無理やり。

「ねえほら、とっぴんぐだつて。水蜜どうする?」

「私は、いいよ。何もなしで」

品書きと言う名のボロ切れに釘付けとなつて、キスメは私に問いかける。

「えび、ふらい。エビフライだつて、わたしはこれをつけるよ」

「いいんじゃないか」

特にこれといつて添え物に惹かれることもなく、椅子に座つて、じつと、カレーを待つ。そもそもキスメの金でものを食べるわけだから、添え物を望むのは傲慢というものだ。

「わ、もうきた。なにこれ! おいしそーじゃん!」

「こんなのがおいしいのかねえ」

そもそも、人間以外の我々が普通の飯を食らう時点で傲慢だ。我々は飯を食わずとも慎ましく、人さえ殺していれば生きていける。それをカレーライス? トッピング? 馬鹿げてる。

「どれさつそく、いただきまーす! ……水蜜、どうしたの?」

しかし、添え物の有る無しでこうも見栄えが変わるものか。キスメの皿に盛られたカレーは、私の皿のそれよりも、なんだかとても豪勢に思えた。あー、欲深きは罪。欲深きは罪なのだ。私はキスメのそういった、浅ましい、無作為な、強欲さが、大嫌いだ。なにが、エビフライだ。なにがエビフライだ!

「……あのさ」

「だめ! あげないよ。そんなに物欲しそうな目するくらいなら、はじめから頼んでおけばよかつたじゃん!」

ああ、ちくしょう!

どうしたって美味しいカレーライスの余韻を憎みながら店を出れば、通りは相変わらず塵芥どもで溢れかえっている。そんな中、キスメはどこへ行くともなく歩いて行くから、私は仕方なくキスメに追従した。

大衆と苔と黴臭さに慣れるというのではなく、眉間あたりに力を込めて歩きながら、私はキスメと別れるための口実を練っていた。そりやそうだ。やることがないにしたって、私はキスメの本当の友達なんかじゃない。キスメがどう思ってるかなんて知らないが、私は、こいつを友達だなんて思っちゃいけないのだから。

ちようどいい口実の浮かんた頃に釣瓶落としての歩く背中へ声をかけると、口実を切り出す前に、キスメは私に嘯いた。曰く、腹ごなしに少し歩こう、なんて。それから尚、私がキスメに追従する理由といえば、ずばりそれが、私にとつて有益だからだ。キスメの、「少し歩こう」は、いつも私の知らない場所を教えてくれる。この地底とは、キスメと違って、長い付き合いになる。知らないことは少ない方がいいに決まってる。

だから、人混みの中、私はキスメの背中を追った。

しばらく通りを歩いていると、私はどうにも、キスメの機嫌をとつてやらなくてはいけないような気がしてきた。それは、利用するのなからある程度の信頼関係を築くべきであるという、打算的な腹積もりから出た軽薄な言葉だった。

「なあキスメ。ええと、最近ほ、どうよ」

「どうって。そりや、バリバリだよ」

通りには露店を張ってる商人が数多にのさばっている。露店にはどこもぼつぼつと客らしきダニどもが群がっていたが、視界の遠く奥の方、その中でもいっとう景気の良さそうな露店があった。なにを売ってるかは知らないが、キスメはおそらく、そこに向かつてるのだろう。

「はは。バリバリってなにさ」

「バリバリっていったら、そりやもうあれだよ。ぱつかーん！ 頭蓋骨陥没！ バリバリってどうか、パカパカ？ なんて！ あはは！

……水蜜？」

聞かなきやよかつたな。

例の露店に近付くと、露店は思うよりずっと賑わって、長蛇の列が出来ていた。唇を結んだ私を尻目に、キスメは、「ここだよ、ここ」なんて言って最後尾に並ぶから、仕方なく、私もキスメの背後についた。「私はいらないよ。お面なんて」

「え！ 水蜜、まさか知らないの！」

露店の正体はお面屋だった。ブルーシートの上にはさまざまな面が平積みになっており、水垢どもはそれらを買求めるために群れをなしている。なんだってんだ。

「食い物か？」

「え、どういう意味？ ……いや、水蜜の謔言は置いていき。地底にはね、毎年、お面の日っていうのがあるんだよ。その日はみんなお面をつけるの。その日がね、近々来るってわけ」

謔言で。あー、選ぶほどの言葉すら持つてないってわけだ。つくづく嫌になる。……でも、もしそうじゃなかったとしたらどうしよう。いや、別に、それはそれで、構わないけど。

「なるほどね。祭りやなんかだ。だとしたって、私はいらないよ。お面は」

「ダメだよ！ お面つけてないと、殺されちゃうよ！ まったく、鬼みたくないこと言わないでよね。水蜜なんてひよろっちいんだから、お面つけなかったら狙われて、すぐに殺戮のカモにされちゃうんだから」
殺戮で。

キスメの話によれば、その物騒な『お面の日』という祭りは、年に一度、地底に住む人外どものガス抜きのために敢行される催しらしい。他にも地上から降りてきた人間の数の調整だとか、参加しなければ死ぬ祭りに参加しないほどの横着者——言い換えればアホ——を炙り出すという名目もあるのかなんとか。まあ結局、地底で隠居を決め込んだとしても空腹には抗えない人外達のための徳政令だ。

基本的には、面をつけてないやつは無条件に殺してもいい、それだけが『お面の日』のルールだそうだが、対象がもし人間なら、そいつが面をつけてたとしても暴力を行使してもいいらしい。相手を間違うとえらい目に遭うとかなんとか言ってたが、まあ、旧っても地獄つてわけだ。

「ほんとに買わなくてよかったの？」

「いいんだよ」

側頭に面をつけたキスメはようわからん困り顔で私に尋ねる。

結局、お面は買わなかった。祭りなんてものには端から興味はないし、参加する気もない。要は外に出なければいいんだ。

「……ふうん。すごいね、水蜜。狙われたって大丈夫な自信があるってことでしょ。ひきかえ、わたしはこそこそお面をつけて、こそこそ人間を探して、こそこそ不意をついて殺すわけじゃん。なんだか自分が、恥ずかしくなってきたな」

そんなことで卑屈になられたって、困る。適当な言葉を探すに当たって、通りを離れた私の視界には水気を帯びた岩しか映らない。

「わたし、正直言うとき。水蜜って、人を殺せない臆病者なのかもって、疑ってたんだ。でも、なんか見直しちゃった。見直したっていうか、尊敬するっていうか。すごいよね、鬼みたい。だって、お面をつけないってことは、襲ってくるやつ全員殺すってことでしょ？　すごいよ、ほんと」

キスメは珍しく、どこか思い詰めたような表情で訥々と語る。口を開けば、誰々を殺したとか、こうやって殺したとか、そんなことばかりを楽しそうに語るやつが、友人の蛮勇一つでこうもしょんぼりするものだろうか。もしかするとキスメは、普段嘘をついていて、本当は、誰一人殺しちやいないのではなからうか。だから、こんなにしょぼれられて。

馬鹿馬鹿しい。仮にそうだったとしても、それがなんだってんだ。キスメとトモダチになろうってのか？　馬鹿げてる。化け物に友達なんていらぬ。化け物は化け物らしく、人を殺すことだけ考えてりゃいいんだ。

「よおキスメ。そんなに褒めてくれるなよ。どうだ、ここはひとつ。お面の日は私と二人で歩いてき、人間どもの頭をバカバカかち割つてやろうじゃないか。お前が怖がるなら、そのときは私もお面をつけるよ。それにさ、こここそ不意をついて殺すのは、正面切つてやるよりも、よつぽど愉快じゃないか。何も知らないまま死んでいく人間ほど愉快なものはないよ。お前のやり方はなんも間違っちゃいないよ。なあ、キスメ」

「そ、そうかな。えへへ」

ああ、そうだよ。

「とりあえず、なんか甘いもんでも食べようよ。お面はさ、後で勝手に買っておくからさ」

「いいね、行こっか。オススメのところがあんだ！」

まあ、お前の金で食うんだけどな。いつか返すよ、いつか。

鶴似、有、塩味。 5

地底には一つ公園があるらしい。その公園は、なんでも四方がフェンス囲まれていて、どこから入ればいいか知るものはいないという、風変わりな公園だ。加えて、フェンスには『夜間進入禁止』の看板が括り付けられていると来た。ちよい待てや、まずどう入ればいいかもわからないのに、夜間進入禁止で。それに、地底じゃ昼も夜も判然としないじゃありませんか、私の問いかけにキスメは首を傾げて答えた。

——それも、そうなんだけどね。でももっと不思議なのはさ、夜間進入禁止、なんて言うわりに、一日中、絶えることなく照明がついてるんだよ。

あーもーなんにもわかりません。嫌がらせ？

私が無様なまでに混乱しているうちに、キスメの言う『オススメのどこ』に辿り着いた。その店は旧都の閑散とした路地に在った。ちなみに件の公園もこの近くにあるのかなとか。そのせいで、店に着くまでの道中の話題が意味不明な公園に染め上げられ、私は無様に混乱を晒してしまったというわけだ。あつ！ 思い出すだけで混乱しちゃう！ 忘れろ、忘れろ！

店は地上やなんかでいうところの甘味処で、店頭には様々な甘味の名が貼り連ねられていた。しかし、この店にしたって風変わりな箇所がある。というのも、客席が路上にあるのだ。人通りの少ない広めの路上には、いくつもの丸い卓が設置され、それぞれの卓は二、三の椅子に囲まれていた。どうやら、店頭で甘味を注文し、路上に設置されたいずれかの卓でそれを待つらしい。

「飲み物はどうする？ っって言っても、ソーダしかないんだけどね！

しかも、みんな同じ味！」

「ええ？ じゃあこの、『赤』とか、『青』とか、『緑』とかったのは、一体なんなんだよ」

「それは色だよ。ソーダ水の色。みんな同じだから、好きな色を選ぶといいよ。あつ、でも、赤はやめといった方がいいね。みんな同じはず

なんだけど、赤だけは妙にまずいんだ」

甘いもんでも食べに行こう、なんて言ったのはどいつだ？ おまえが余計なこと言ったせいで、それから私は、妙にあべこべな世界に迷い込んでしまったんだ。許さんぞ。

しかし、色ねえ。なんだっていいけど、赤がまずいって話だ。最近どうも、まずいものを出す店に縁がある。そのせいか、まずいまずいと言われると、どんなもんか、気になってしまうようになった。

「じゃあ、赤にしようかな」

「げー！ 水蜜がゲテモノ食いになっちゃった。 蛮勇〜」

『蛮勇〜』？

注文を終え席に着く。キスメは何故か、私の正面ではなく、隣に座った。何の気なしに周りを見渡せど、路上に設置されたいくつもの卓が、そこそこの客に埋められているのがわかるのみだ。

「なんで隣に座るんだよ」

「水蜜、向かい合ってお喋りするの、苦手なんじゃないかと思つて」
そうこうしているうちに、店のやつが甘味とソーダを運んできた。

注文通り、ソーダは赤い。キスメのは緑だ。

「おい、こんなもんほんとに食べられるのか」

「大丈夫だよ、お菓子だもん。おいしいよ」

キスメの言う通り、運ばれてきたのはお菓子だった。しかしその『お菓子』をお菓子たらしめる要素は品書きに書かれた『お菓子』という名前のみに思える。奇天烈なお菓子を前にして、思わず、赤いソーダに口をつけた。

ソーダの味は至極普通だ。普通すぎて、特に何も言うことがない。すると、先程のキスメの発言が非常に気掛かりとなってきた。

——げー！ 水蜜がゲテモノ食いになっちゃった！

こんな普通のソーダ水をゲテモノ呼ばわりするキスメの味蕾を、私は果たして信用してもよいのだろうか。疑念は、キスメのソーダ水と同じ、緑色をしている。

「よっしゃ、食べよ食べよ。おいしいんだよ、これ！ いただきまーす

！」

「……いただきます」

さて、そろそろ皿の上の未確認物体を直視しなければならぬらしい。まず、形状についてだが、率直に言って、それはオムレツそのものだった。いささか平べったいレモンと言ってもいいだろう。問題は色と目玉だ。私の視覚に異常がないのなら、その色はピンクで、ピンクの中には二つ、丸い目玉が埋め込まれていた。よくよく見れば口のような切れ込みも入っているから、ますます自分の視覚に自信がなくなる。

皿の横にはスプーンとフォークと箸とナイフが置かれており、私がそれらを睨みつけていると、キスメは、「どうしたの？」なんて口を開く。どうしたの？ じゃないよお。こわいよお。

ビビっていても仕方ない。キスメは箸でそれを摘んでいる。私はフォークとナイフを選ぶ。

う、動きやしないだろうな。

恐る恐るに不思議な感触の物体を切り、切れ端をフォークで口に運んだ。

「どう？ おいしいでしょ！ なんかさ、プリンみたいな、ケーキみたいな味がするでしょ？」

「……まあ、悪くないかな」

悪くなかった。悪くはなかったが、私はキスメのいう、プリンというのも、ケーキというのもよく分からなかった。なんだろう、私の味蕾に言わせれば、それはやけに塩味の効いたメロンのような、或いは、バナナのような……。

しばらく、正体不明のお菓子に舌鼓を打っていると、不意に、キスメがあつと声をあげた。それは中々にでかい声量で、ともすれば、私は小さく悲鳴を上げてしまったかもしれない。続けざまに、キスメは他所の席を指差して大きく、「ほら見て！」なんて声をあげるから、キスメに指をさされた人物もこちらに気付き、席を立ち、ニヤニヤと歩み寄ってきた。

「おお、奇遇だね水蜜！ それにキスメも。……あ？ なんだ、この変なお菓子。一口ちようだいよ。……なんだこれ、バナナのような、メロンのような。それにしても、やけにしょっぱいな」

そいつは、近くなり私の皿の上の正体不明をつまみでは、今度は元々座つてた席に振り向いて、「おおい、こつちこつち」なんて手招きをする。

おずおず、といった具合に遅れてやってきた間抜けは例の男で、後頭部を搔く男の腕に抱き着くアホは鶴だった。

「えー！ ぬえまでその男の人と遊んでんの！ なんだろ、わたしが、ズレてるってやつなのかな。妖怪ってふつー、人間なんかと……」

当の人間を前にゴニョゴニョと続けるキスメをよそに、私はいやらしく細む鶴の瞳から目を逸らしては、不の快感と対峙した。

それから数分経って、鶴と左はどこかへ消えた。数分間に交わされた会話といえば、奇妙なもので、おどろおどろしく白々しい、友人同士の会話だった。

それは鶴の提案だった。簡単な話だ。

——今度、三人で遊ぼうよ。キスメはイヤでしょ？ だからさ、あたしと、このヒトと、水蜜の、三人でさあ。

そう言つて、ヤツはその場凌ぎの相槌を打つ私を眺め、満足そうに去つていった。集合場所はアホの、男の家に決まった。

会話において拒絶は常に明確な感情として顕現する。だから私はヤツの誘いを拒むことはできなかつた。しかし、重要なのはそこじゃない。あいつが、どの程度私を把握しているか、それだけが重要だった。

けれど、よくよく考えればヤツの提案は万能だ。私がかもし、人間に焦がれる純真な人外であつたとしても、人殺しをやめられない純粋な人外であつたとしても、ヤツの行動はどちらにせよ、実に不愉快だった。恐らく男は指定した日時、指定した場所で、鶴の手により肉か裸になつているだろう。その現場を見てしまった私の表情を眺めては、鶴は私を決めつけて、嘲笑おうと、そう考えているに違いない。

「——どしたの？ 水蜜。今日はやけにぼーっとするね。ほら、お菓子はまだ残ってるよ」

拒絶は常に明確な感情だ。私は約束を守らなきゃいけない。

「残り、おまえにやるよ」

「ほんと！ やったー！ ……あれー？ やっぱり全然、プリンじゃない。ケーキじゃん」

キスメはソーダの緑に口をつける。底には妙に緑が凝って、私の脳裏で化け物の瞳が点滅する。不愉快なのはいつも目玉だ。管に繋がった醜悪な目玉、鵜の腥い目玉、ピンクに埋まった奇妙な目玉！

「それとき、キスメ。あいつ、もう殺していいよ」
「え」

キスメの、キョトンとした目玉。

「あ、あいつって、さっきの、あの人間？ え、いいの？ で、でもさ。殺していいってことは、あの人間ともう仲良くしないって、きらいになっちゃったってことでしょ？ そしたらさ、ふつー、自分で殺しちゃおうって思うんじゃないの？ほんとに、ほんとにわたしが殺していいの？」

「いいんだよ」

「でも、なんで？ どうして自分で殺しちゃおうって、ならないのさ！」

バカだなキスメは。私が殺しちゃ意味ないだろ。鵜は私を船幽霊だって、知ってんだから。

「それはさ、あれだよ。……恋ってやつだよ」

「こ、恋……」

恋だってさ。アホらし。

数日経って、鵜との約束の日が来た。私は物陰から鵜が男の家へと入っていくのを確認して、その後、鵜に続いた。玄関をあげ放ち呆然とした鵜の表情は一寸と持続せず、次の瞬間には得心のいった笑みを浮かべるから、とても不愉快だった。

玄関の奥の、変わり果てた男を見るのは私もこのときが初めてだっ

た。男は頭頂の綺麗に陥没した髑髏となつて、廊下の上に鎮座していた。廊下に首が「すわつてる」つてのは、どうもシユールに思えた。

キスメの仕事に間違いはないのだろうが、どことなくシユールな髑髏に、私は大胆にも泣き継りついた。それはもはや鶴に対する当てつけ他ならず、私は内心で、鶴は顔で、とにかく、笑いあつた。不思議なこと、雨が降っていた気がする。鶴がそれをキスメの仕業だと分かつていようがいまいが、もうこうなつたら関係がなくなつた。私の泣き声と鶴の笑い声は、明確な感情の発露だった。

どう思うよ、聖。

鵓似、有、塩味。 6

夢の内容は世界平和で、起き抜けにはいつも通りの薫の匂い。私は懐かしい声に覚醒した。

しかしだからといって目を開けるのも、上体を起こして伸びをするのも億劫だった。だから、私は丸めた体のまま一つ深く呼吸をして、そのまま眠ろうと考えた。

「やあやあ、起きなよ。せつかく久々の再会じゃないか。それにしても君、この枕元のこれはパップラドンカルメじゃないか。こういうの、地べたに置いとくもんじゃないよ。不衛生だし、なにより逃げられ……あれ。お面だね、これ。パップラドンカルメのお面だ。はは」
機嫌良さそうだな。こいつのこういう、耳に直接すつと入ってくる声は、嫌いじゃない。喋り方も、なんとなく聞いてて心地いい。しかし喋る内容がすべてを台無しにする。

「パツ、え？ なに？ ……知ってんの。これ」

寝入りをやめるかやめまいか、目を瞑ったまま、判然としない頭のままに問いかける。パ、え、なに、なんだっけ？

「うん。アンアイデンティファイド・スイート・オブジェクト。君こそ、なんでこんな面持つてるのさ。あはは、ぴったりだね」

あんあいで、すいーと？ なんだこいつ。あーもう。

「お、やっと起きたね。ほら、私に地底を案内してくれよ。美味しい店とか、この、お面を買った店とかさ」

上体を起こして両掌底で目を擦れども、そいつとの久々の対面は叶わなかった。そいつはその顔を件の面で覆っていたからだ。まあ、面を付けたそいつと相對する私という構図は、対面のその言葉以外にしつくりくるものは見当たらない。ただ言えるのは、面の上から飛び出た人間以外を強調するわざとらしい齧齒類の耳は、何よりも雄弁にそいつの正体を語っている。

「知らないよ。それ、貰い物なんだ」

「へえ、もうそんなお友達が。意外とやるじゃないか」
うるさいな。

私と話す時のナズーリンはいつもこんな感じの、上機嫌というか、諧謔的というか、どこかとぼけた調子だった。というよりも、私はこいつが星以外と話しているところをほとんど見たことがない。ナズーリンはいつも、私が一人になったときを見計らって声をかけた。多人数でお喋り、なんてのが似合うタイプには見えないから、きつと、一輪や聖なんかとも、どつかでそんな風に話していることだろう。ともかくとして、私の抱くこいつのイメージは、〃星か、それ以外か〃というものだった。それはもちろん良い印象ではない。

旧都の目抜き通りへ出るに至っても、案内をしてやろうなんて気は起きなかったが仕方がない。この憂いの散歩道の終点へ辿り着くまで、鼠は本題を切り出すつもりがないらしい。

隣を歩くやつの表情は読めない。それも当然だ。なにを考えてるのか、未だその顔を未確認お菓子物体の面で覆っている。案内してくれ、なんて言葉といい、付けっ放しの面といい、些か、はしやぎすぎではなからうか。聞こえないのか？ 往来の嘲笑が。私の幻聴なのか？ 立派な耳は飾り物か？ 私の聴覚過敏なのか？

「おい、いつまでそんな面つけてるんだよ。外せよ」

「お。こことかいいいんじゃないか。ほら、カレーだつてさ。君、好きだろ、カレー」

適当言いやがって。こないだが初めてだぞ、食べたの。私が言葉を組み立てているうちに、ナズーリンは直角に進路を変え店の暖簾へと進む。仕方なく追従する私にしても私だが、最近、昼食は毎日ここのだ。解釈によつては晩飯まで。

一つため息を吐いて、カレーの匂いと鼠を追った。

「なんだい君のそれは。美味しいのかい？」

カレーを指して鼠が言う。エビフライを米ごと切断するスプーンの動きを止めたのは当惑に付随した苛立ちだった。

「君はあれだね。私が焼き魚定食を注文したことを疑問に思ってるんだらう。鼠はね、焼き魚が好きなんだよ。なぜチーズじゃないのか、

今度はそんな顔をしているよ。説明してあげよう。ほんとをいえば、鼠は、チーズも焼き魚も好きじゃない。チーズと焼き魚には、どちらにもコニインというアルカロイドが含まれているんだ。鼠はね、そのコニインが好きなのさ。同種の物質が含まれているから、鼠はチーズと焼き魚を食べる。はは、わかったかい？ そうそう、同種の物質とえば、ジョンとヨーコは同一人物なんだ。同じ映像に映ってるじゃないかって？ 影武者だよ、どっちもね」

店内の有象無象が鼠の妙な話に目を丸くしてこちらを見ている。中でもとりわけてアホな顔をした男は、口を唾然のアの字にして、まじまじとこちらを見つめていた。私に言わせりゃアホのアの字だ。見てんじやねえぞ！

ナズーリンは未だ面をつけている。オムレツのような、レモンのような形、ピンク色の、目玉の丸い、諧謔的な笑みを浮かべた、面をつけている。私はそいつを前に目を瞑り、溜息を吐いた。顔を上げれば、一瞬前まで焼き魚や米などで満たされていたやつのはらは忽然と空になっていくからタチが悪い。アの字の男はますます目を丸くした。「いやあ、ここのご飯は美味しいね。米がいいよ、いい感じに不味くてさ。なんていうのかな、ほら。故郷の味ってやつ？ 母さんの味ってやつだよ。はは。ああ、懐かしいね」

不思議と、嫌な気がしなかった。
「いいから、さっさと本題に入れよ」

やつは面に隠れた顎に手を当て、とぼけた様子で店の店主に「おかわり」を唱えた。

「本題ねえ、はて。本題っていうのはあれかい？ 君が、聖を好きで、連中も、聖が好きでって、そういう話かい？ それともあれかい？ 身に纏う程度の帰属意識すら持てない君の、内省的でよねねっとした、水垢みたいな話がしたいのかい？ いやだな、飲食店だよ、ここはさあ。ああ、平気さ平気だよ。君は君が思うほど望まれちゃいない。みんな、君のことなんて居て当然だと思ってるんだからさ。雲のおっさんだけは君のこと、蛇蝎の如く嫌ってるみたいだけどね」

「ここまでふざけられても怒りが湧いてこないのはどういうわけだ

ろう。私はこいつを好いているということもない。むしろ苦手だと思ってるぐらいなのに。それにしても雲山のやつ、私のこと嫌いなのか。なんか、シヨックだな、ちよつとだけ。

「船の話だよ。連れ戻しに来たんだろ？ 私が出来ないと、あんたのご主人が悲しむから」

「な、な、な。なんでそこで、ご主人が出て来るんだよう。か、関係ないよう。どうだっていいよう、ご、ご主人なんてさあ」

迅速に届けられた「おかわり」を面の下に運びながら、鼠はわざとらしく言葉を紡ぐ。どやって食ってんだ、どうやって喋ってんだ。どうなってるんだよ、おまえはよ！

「で、船は？ もう直ったのか」

「え、船かい？ ああ、あれはね。……あれは、もうダメだよ。動かないね、もう二度と。それに動いたとしても、君はもう舵取りにはなれないよ。だって君、人を殺した」

言葉に思わず目を逸らした。けれど、すぐに向き直って口を開く。「まあね」

非常に軽い声色だった。そしてすぐに、目を逸らしたことを後悔する。奴の皿はまたしても、空になっていた。

「よし、もう出ようか。甘いものが食べたいね。案内してくれよ。……あれ？ まだ半分も残ってるじゃないか。君、食べるの遅いね。意外とき」

なんだこいつ。

地底道中膝栗毛、言い換えればそれは悪夢のような時間だった。悪夢を悪夢たらしめる要因は鼠の食欲がその全てを担っていた。流石は毘沙門天の犬、金を持っていた。瞬きと同時に消える奴の食い物は私を都度打ちのめしてくれた。

何時間経っただろうか、丸一日遊び通していた気がする。寢床に戻ったいまなお、ナズーリンの片手にはソーダ水と「お菓子」——ソフトクリーム版。ソフトクリーム版ってなんだ？ 私が悪いのか？

——が握り込まれている。

「おい、そろそろ面を外せよ。一日中付けっ放しで、風呂入った後の指みたいなになってるんじゃないか？ おまえの顔」

「いやだよ。私はね、人にものを食べてるところを見られたくないんだ。これを食べ終われば、外してやらんこともない」

面の下にそれを運びながらナズーリンは言う。もの口に入れながらどうやって喋ってるのかな。もの口に入れて喋んなって教わってこなかったのかな。なによりその面、私のだぞ。

あんまり見ないでくれよ、十回目のを聞き終わった頃、私は観念してやつの手元から視線を外した。直後、今度は別種の後悔が私を襲う。面を乱雑に被せられた私の視界は遮られ、一瞬、何も見えなくなる。私はすぐに面の内側から目玉の部分を見つけることができた。面についた目玉、黒目は半透明となっており、そこから覗く地底の岩群は輪をかけて暗かった。

「やめろよ。つばくさいよ、これ」

「はは、狸の獣臭ってやつさ。……でもちよつと、恥ずかしいな。そういうこと、わざわざ言わないでくれよ。カツコつけようって思ってるんだからさ」

何年振りかは覚えていない。久々に見るやつの顔は、口調って額縁にぴったりとはまる。瞳は相変わらずに凜いでいた。

「お前は鼠だろ」

「そう変わりはないよ。生き物つてのは基本的に卑近なのさ。狸も鼠も、猿に虎、それに蛇だって。ヒトなんかもそうだね。ヒトのことを言うとき主人は怒るんだけど、はは。我々は動物であつて動物でなし、なんて理念はどんな生き物にだって根差してる。だから多種族を食らうのさ。でもね、共食いをしない生き物の方が珍しいって、知ってたかい？ つまり、生き物はみんな嘘をつく。と、そういう話だよ。……分かるかい？ 私はいま本当のことを話してる」

調音白けたやつの声で、今日の出来事の全てが嘘になる。あー、なんか、やなかんじ。

「直ったのか」

「ああ、直った。計画の実行は二週間後。船は夜明けと共に月を追う。

舵取りは君だよ。村紗水蜜」

「私は連中ほど、君らほどお人好しじゃない。だからほんとは、君のことなんてどうだっていいんだ。君の好きにしたらいいと思う。ただ、連中はね。みんな、君を買い出しに行つたくらいなものだと思つててさ、それで、君があんまりに帰らないから、そろそろソワソワし始めてるよ。雲山は半身を失くしたみたいに関心してる。さあ、何でもいから聞かせておくれよ。私は連中にそれを伝えなきゃいけない。ほら、何でもいい。嘘でもいいから、なにか言え」

面の中で、私の声はくぐもった。

「わかった。じゃ、みんなにはそう伝えておくよ。それじゃあね」

未確認お菓子物体。たしか、アンアイデンティファイド、すいとなんちやら。ピンクの、オムレツの、レモンの、正体不明の面。そんな、間抜けな面越しの暗さに取り残された私の視界は、ぬらぬらと、湿った地底の岩肌を映す。天を仰げど岩ばかり。滴り落ちる水滴に気付いたのはこのときだった。音が急に気になりだして、一向に眠れない夜が来た。やつの置き忘れたソーダ水は赤い。

さて、このとき私はなんと言つたでしょう！　なんてな。

答え合わせは、永久に来ない。

鵝似、有、塩味。 7

お面の日がやってきた！

通りには屋台と人が踊って、私の脳では、月の笑う夜空の下、橙に照らされた祭りの喧騒ばかりが点滅する！ あれ、船幽霊に脳とかあるのかな。頭かち割って確認してみたい。

「キスメ、私、もの食ってるどころ見られるの、嫌いなんだよ。ちよつとそつち向いてろよ」

「なにさ、急に。別に水蜜のことなんて見てないじゃん！ もう、わかったよ。……こう？」

私は手に持ったクレープを面の下に運ぶ。この日のために練習したんだ。あの手品はもう鼠の専売特許なんかじゃない。

「おいキスメ、ちよつと、こつち見てみるよ」

「なにさー、見るなって言ったり見ろって言ったり、今日の水蜜、なんかへ……え！ クレープ、どこやつちやったの！」

わたしもやりたいわたしにも教えて、なんて言って、キスメは自分のクレープを私に渡して——駄洒落！——例の手品の再現を要求する。教えて、と言うだけでなく見て盗もうというキスメの心意気は実に愉快だ。あはは、励めよ。そして体得するんだ。

「おいおいキスメ、言っただろ？ 私はもの食ってるどころ人に見られんの、嫌いなんだよ。あんまり、こつちを見ないでくれ」

「水蜜のいじわる！ もういいよ。クレープ返して」

一度人にあげたものを、後になって、「やっぱり返して」なんて、些か我儘が過ぎるのではなからうか。それは不誠実というものだ。キスメは今回のクレープを文字通り、取り返しがつくもの、と考えて私に譲渡し、そして、やっぱり返して、を発音したのかもしれない。けれど、それは大間違いである。なぜなら、人に何かを託すというのは、本来目に見えないところでのやり取りなのだから。一方が一方を信頼し、託す。一方も一方を信頼し、受け取る。物のやり取りは常に、目には見えない信頼のやり取りなのである。心のやり取りなのである。

それをこの釣瓶落としては……はて。船幽霊の心とは一体どこにあるのだろう。なんにせよ、一度頭をかち割ってみる必要がある。

そんなことを考えているうちに、クレープはこの手から掠め取られていつてしまった。キスメには覆水盆に返らずの意味を教えてやらなくちやいけないらしい。

「よしキスメ、次はしよっぱいものが食べたいよ。案内してくれ」

「別に、いいけどさ。たこ焼きとかでいい？」

地底でタコなんか獲れるのか。私のそれでいいに、キスメは面倒そうにお返事したのち、小声でぶつくさとした。曰く、全然人殺さないじゃん、とかなんとか。

お面の日。地底は私の予想より何倍も平和だった。目抜き通りから路地、旧都の外れに至るまで何らかの露店や屋台に埋め尽くされて、店の数だけ人だかりがあった。普段遊郭で働いてそうな若い女衆はいい匂いのする浴衣を着込んで、男は、まあ、普段とあまり変わらない。ただみんな、様々に面を被っている。面を被ったものの中には当然人間も紛れているのだろう。現に、あからさまに人間らしきやつらとはチラホラすれ違っている。ただ、誰もそんなことは気にも留めずに、屋台で団子やなんかを買い込んで、酒を飲んで、歩いている。もしかすると、みな、友人との交遊の最中に不思議なほど鎌首をもたげる性欲を隠すみたいに、すれ違う人間達に内心で舌舐めずりしているのかもしれないが、少なくとも。私の、黒目の面越しの、薄暗い視界に映る橙の喧騒は、平和に思えた。

「まあ待てよ。人を殺すならまず腹ごしらえ、常識じゃないか」

「聞いたことないよ、そんな常識。まるつきり逆じゃん。人を殺すのは、お腹が減るのとおんなじだもん」

この華やかな橙の裏に、死に至らしめる暴力が跋扈しているとは思えなかった。また、私の脳でイメージが蠢く。イメージはヒル状となって、脳の表面を這いずり回る。洗うにしたって、やはり頭をかち割らなきゃいけない。洗うための水は桶で汲もう。

「なあキスメ。いい加減さ、嘘つくのやめろよ。前に、私のことを、人なんか殺せない臆病者だなんて言ってたけど。それはさ、お前の方だ

ろ」

「え？ な、なにさ、急に。なんで、急にそんなこと言うのさ！ やっぱり変だよ。今日の水蜜、なんか変！」

「誤魔化すなよ。だつてさ、お前、ひよろつちいもん。この日に備えて真つ先にお面買いに行くような臆病者が何言つたつてさ、信じらんないね。 実際」

「そ、それはさあ！ たしかに、そうだけど、妖怪らしくないかもしれないけど！ 水蜜とこうやって屋台まわったりできるかも、つて思ったら、楽しみだつたから……水蜜だつて、さつきまで楽しそうにしてたじゃん！ アイス食べてさ、クレープ食べてさ！ 仲良くやってたじゃん！ なのに、なんで急に、そんなこと言うのさー！」

「おいおい、いまそんな話してたか？ してないだろ。お前はいつつもそうだよ、キスメ。自分の話したくないことになるそうやって話をずらすか、『難しい話？ じゃあいいや』なんて言つて逃げる。私がいま話してるのはさ、お前のそういう、卑怯で浅ましくて臆病なところだよ」

「……ひどいよ。わけわかんない、ひどいよ水蜜！ ひどい！」

キスメは走つてどっかに行った。去り際、私に投げつけるために外された面の裏つ側、もしかすると泣いていたかもしれない。私が思うのは、人殺しなんて、もはやそんな大層なものでもないということ。それは、すこし汚れた自分を演出するための、煙草やなんかとさして変わらないもので、それはただの娯楽なんだと、なんとはなしにわかつていた。矜持とか、誇りとか、そういうのとはちよつと無縁で、だから、キスメは泣いた。けれど、私はそうじゃない。そんなことでは泣けないし、殊勝に生きたら消えてしまう。

もし聖に逢えたなら、問いただすことができるだろうか。生きようとすれば消えてしまう悪霊を、何故生かしておいたのか。ふと、屋台のひとつを軽蔑する。長方形の淀みのなか、誰にも掬われることのない、醜く肥大した、金魚が泳いだ。

鵺似、有、塩味。 8

キスメの話していた公園は、本当にフェンスに囲まれていて、どこにも入口が見当たらない。夜間侵入禁止の看板も、切れる気配のない照明もあつた。私はキスメの話を嘘だと思つていたが、どうやら本当らしい。しかしまだ、キスメの話を疑う余地はある。入口が無いはずの公園には、何故か、人がいた。一人、妙な女だ。髪の色も、尖つた耳も、人間のそれじゃない。女はベンチに座つてなにやらつまらなさそうな冊子を眺めている。女のもっとも妙な箇所は、顔。面をつけていなかった。無表情に雑誌を眺める女の顔、絵画とすれば、我関せず、なんて縁縁がはまる。けれども、重要なのは女じゃない。女が、どこから公園に入ったかだ。まさか、よじ登つたということはないだろう。だつて、スカートだし？ 妖怪と言えども、女の子だし？

しかし、外周を何度か回つてみても、入口らしきところは見当たらなかつた。じゃあ、キスメの話がほんとしてこと？ 入口なんかなくて、ベンチの女は、よじ登つたつてこと？ スカートで？ ひゃー！ どうも、この公園を考えると、調子が狂う。フェンスに囲まれた赤土と生垣は、不自然なほどに、自然に思える。まるでこの地底の喧騒やいやらしさから切り離されて、別の空間のように凜いでいる。女の我関せずといった表情に日が差しているようにもみえる。あり得ないことではあるが、公園には、空があつて、昼陽夕景星月が、普通に流れているように思えた。

あー私も、あの女みたく、面なぞつけず、我関せずでいればよかつた。好きでもないやつらと無意味に馴れ合わずに、ねぐらでじつとしていけばよかつたんだ。後悔先に立たずつてのは嫌な言葉だ。一番鬱陶しいタイミングに現れやがる。キスメの話は本当だつた。公園に入口は無い。どうしたつて見つからない。だけど男は生きていた！ 遊郭で、女と歩いていやがつた！ キスメの話は嘘だ。キスメは無作為なんかじゃない。キスメは、人も殺せない臆病さを隠して、他人に無作為なやつと思われするように振る舞う、本当の臆病者だつた！ なら、あの骸はなんだ。鵺と見つけたあの骸、廊下に「すわる」

シユールな骸。誰の骸だ、誰が殺した。綺麗に頭が凹んでいた。決まってる、キスメが殺したんだ！ キスメは無作為なんかじゃない、臆病でもない。あいつは人を殺すのが下手で、それを恥ずかしがるよ。うな、妖怪らしい妖怪じゃないか！ あー、それが私と、なんの関係があるってんだ！

「ねえねえ、おねえちゃん！」

ああ、鬱陶しいなあ！

「ひどいよ、おねえちゃん。なんでキスメちゃんにあんなこと言ったのさ」

旧地獄百景まで歩けば、血の池はたしかに封鎖されていた。封鎖されていた血の池のみならず、見渡す限りすべての地獄に虎柄のロープが張られている。怪訝なのは新歓楽街建設予定地なんて看板と、ロープの前、面をつけてつんのめった有象無象だ。

「こいし、おねえちゃんのこと、ほんとにわかんない！ キスメちゃんと仲良くしたと思ったら傷つけるようなこと言ったり、ぬえって人のこと、嫌いなのかと思ったら普通にお喋りしてたり、私のこと、急に無視し始めたりしてさー！」

有象無象はなにやら思い思いにヤジを飛ばす。それは、掲示板で読んだ通りの泣き言だ。我々の地獄を奪うな、だとか、景観を乱すな、だとか、言葉は違えど、言ってることはおんなじだ。結局のところは弱者の泣き言。ロープの前で堂々と胡座を組む一角の鬼にや響かない。まず鬼は面なぞつけちゃいない。キスメの言う通りだ、自信満々を通り越して、有象無象を呆れるような目つきで舐めている。

「あー。お前ら、ネオンって知ってるか」

不意に、鬼が口を開いた。瞬間、有象無象は聴衆に変わる。どいつもこいつも面の内側で、ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃと、なにやら不服そうに発音する。鬼は聴衆の誰一人にも頓着せずに、口を動かす。「ネオンだよ。ネオンライト。あたしはね、こないだ古明地のところで観させてもらったんだけど。いや、ありやあ発明だね。提灯なんか

とは大違いだよ」

鬼が喋る。聴衆が野次を飛ばす。

「わかるかい？ あたしが作ったようなもんだから、あたしが言うのもなんだけどね、あんな、時化した遊郭なんざ、もう時代遅れなのさ。この歓楽街はよつぽど賑やかになるよ、煌びやかになるよ。店も、宿も、たくさん出来る。ネオンが光って、常世の国さ。あんたらだつて働き口が見つかるし、持ち家つてわけにやいかないが、宿もある。毎日毎日血の池に落ちてさ、望んだ通りの悪夢を見て、路上で眠るような暮らしとはおさらばできるんだよ。働いて、金をもらつて、浴びるように酒を飲んで、宿で眠る。世のため人のためつてやつだな。いいじゃないか、いいところへゆけるよ」

鬼が喋る。聴衆が野次を飛ばす。

「もうね。冥福の前借りなんざ時代遅れなのさ。そのお面にしたつてそうさ。今日日人死になんて聞きやしない。え、そうだろう。現に面を外したあたしにとっかかってくるやつも、いやしないじゃないか。時代は変わるんだよ。地底も地底で、前に進もうとしてる。それを、なんだいい揃いも揃つて……ええ？ 血の池だけでもつて、そりや無理だよ。ここは一番はじめに埋めるんだ。建設が終わるまでの間、事務所が立つんだから。となりに簡易宿泊所も建つし、ほんと。どうしてそう、後ろ向きなものに対してだけ前向きなんだろうねえ。死してなおここに居座ろうつてわけかい？ なんだかなあ、それだけ気概があるなら、普通に前に進みやいいじゃないか。まあとにかく、文句があるならいくらでも相手してやるよ。そのために、あたしはここに座つてんだから」

鬼は喋る。

聴衆は、調音白けつつ、なんとか喚いた。欲しいものの手に入らないことを知つて、なお諦めのつかない子供のような声だった。

「ねえ、血の池地獄がなくなるの、そんなにいやなの？」

何を言つても、面の内側からじゃ嘘になりそうな気がした。だから黙つて、最初からそこにいなかった気になって、私は、血の池地獄をあとにした。

「ねえ！　なんで無視するの！　いい加減、聞いてくれてもいいと思うんですけど！」

今日は珍しく寝床まで付いて来やがった。会った時から一貫して、「謝りたいことがある」とかなんとか。だったら態度を改めるとか、いろいろ、あると思うんだけど、化け物にそこまで要求するのは酷なのかも知れない。それに、謝られる筋合いだってない。もし、普段の態度を謝りたいって話なら、謝らせてなんかやるものか。許す許さない以前に、関わり合いになりたくないんだ。こっちは。

「謝りたいってんなら、無駄なことごちゃごちゃ言ってるうちにさ、謝りやいいじゃないか。ほんとに悪いと思ってるのか？　なんだか知らないけどさ」

聞くや否や目玉の化け物はしゅんとして、纏った布切れ、腹のあたりをきゅつと握る。あーあー、少女らしく振舞っちゃって、こいつもどうも、胡散臭くてしかたない。たまにいるんだ。一瞬で、なんとなくわかっちゃうやつが。わかってるくせして、なんも知らないふりで、嫌な質問ばかりしてくるやつ。わからないんです興味があるんです他意はありません。そういう手合いは一番タチが悪い。手に負えない。

「それは、その。そうだったかも。……でもそれは、おねえちゃんがお面つけてくれたりして、嬉しくて、無視したりして、寂しくて……」
「面を返してくれて話か？　おう返すよ。返すからいますぐ出てけ。寝床までずかずか上がり込んできやがって。色情狂でももうちよつとマシだよ」

「ごめんなさい。面も受け取らず、うなだれて、そのまま出て行った。」

鶴似、有、塩味。 9

カレー。無い方がマシ味の料理を出すこの店も、これでもう食い納めだ。エビフライを三尾つけた。鼠と飯を食ったあの日以降、隣の席の、アホ面の男によく気がつくようになった。アホ面はまた目を丸くして、私のカレーを覗き込む。羨ましいか。あげないぞ。

不味い飯というのも、食べ続ければなんとはなしに愛着が湧いてくる。はじめの頃はわざわざ高い金を払っていい米なんかを食べたものだが、いまとなってはこの米が、妙にしっくり来るようになった。そして、なによりエビフライ。カレーはやはり――。

「お。髪切った？ なに、失恋？ そういうことなら、聞いてあげるよあたしがさあ。じゃあ、向かいに失礼するよ」

――とりわけてご機嫌な連想を不愉快な声が遮った。そいつは対面、大盛りのカレーをわざとらしく音を立て置き、ゆっくりと向かいの席についた。そいつのカレーには三尾、エビフライが乗っかっていて。何から何まで腹の立つやつ。顔も見たくない、声だけでわかる。鶴だ。

「失恋？ 私が？ なんて。どっからそういう、貧困な発想が湧いてくるわけ？ 大妖怪の脳ってみんな、そういうふうにできてんのかな」

やつが一笑洩らして、カレーを運ぶ。食う前に手を合わせるとか、そういうこと教えられてこなかったのかな。大妖怪なのに。

「なんでって、だって、髪切ってるからさ。まあいいや。……ねえ。答え合わせをしようよ」

この、なんていうのかな。隣の席の他人とき、見えない友情が芽生え始めてるわけ。こっちは。お、こいつは今日もエビフライなのか。しかも三尾だ。なんかいいことあったのかな。なんて考えてるわけ、あのアホ面は。対して私も、うわ、こいつ今日も焼き魚定かよ。しかもご飯大盛り。なんだろう、味云々の前にセンスがないよね。もう四日連続じゃん。なんてことをさ、考えてるわけじゃん。それをこの鶴は空気も読まずにぶち壊す気満々で、なんちゆう話を切り出しやが

る。隣の席のアホ面に、よく知りもしないこの他人に、嫌われちまつたらどうするんだよ。

「答え合わせ？ ああ、あれね。キスメだよ、犯人は。私が頼んだんだ、あの男を殺してくれって」

鶴がまた笑う。口元に寄せたスプーンを離して笑った。何がそんなに面白いのか知らないが、笑顔は意外とかわいい。なんとはなしに爽やかな笑みで、非常に不愉快だ。隣のアホ面はやはり目を丸くして、こちらを見ている。見てんじゃねえぞ！

「そんなことじゃないよ。もつと、こうさ。内省的で、よねよねつとした……そう。あんたの話だよ、ムラサ」

うわ、きもちわる。なんで知ってた。

「ねえ、普通さあ。名前隠すにしたって、下の方を隠すもんじゃないの？ なんで、ムラサ、じゃなくて、ミナミツ、って名乗ってるのさ。ねえ、なんで？ 教えてよ、ムラサ」

せつかく三尾つけたんだ。冷めたらもったいない。少し、カレーを食べることに専念しないといけない。スプーンで、エビフライを米ごと刻む感触は妙に小気味良い。直線に切り分けられた米の断面も、規則的に、角を削るように失われていく嵩もおんなじだ。飯を食うときってのは、無言が一番で、適した話題が二番。それ以外は存在しない。

「知ってるんだろ？ 回りくどいのはよせよ。話したいことがあるなら勝手に喋ってる。あんま、口を大きく開けるなよ。皿はでかいんだ」

問題は、こいつがどこまで知ってるかだ。だけど、それはあくまで問題であって、今となっちゃ重要じゃない。どこまで知ってようが知ってまいが、カレーを食って、店を出る。それだけだ。

「ああ。ごめんね、聞いたんだよ。ムラサ、あんた尼なんだって？ いやあ驚いたよ。なんでも聖白蓮とか云うブチギレに帰依したとか何とか。あのさあ、純粋に興味があるんだけど、ムラサって読経とかどうしてたの？ だって消えちゃうじゃん。あれ、無関係のあたしでさえも耳障りに思うのに、船幽霊が読経なんて。いや、度胸があるよ

ねえ。あ、ダジャレ言っちゃった。違うんだよ、悪気はないんだ。ごめんよムラサ」

身振り手振りやなんかで、やつが一瞬右を向いた瞬間に、例の手品を見舞ってやった。気持ちよく話しているところ、不意に対面の皿が空けば多少の狼狽も道理だ。まごまごして、水を飲んではカレーを運び、また水を飲んで見せる。あー、いい気味だ。隣の男がさらに目を丸くしていた。よかったな、タネがわかって。

「あれ、水蜜、カレー、いつの間に……ま、まあいいや。それでさ、ムラサ。あたし、やつとあんたのことがわかったんだよ。いままでずっと、決めあぐねてただけだね。その話を聞いてわかったんだ。ムラサあんたは、正体不明を気取りたいだけの、なにもかもが中途半端な悪霊だ。な、そうだろう！」

隣の男が首を傾げつつ何もわからなさそうに二、三頷く。なんだろう。今まで他人だったやつと急に距離が縮まるってのは、なんだかとても面映い。でも、残念だな。私のこと知ってくれたのは嬉しいけど、もうこの店に来ることはない。おまえのアホ面ももう見納めだ。鵜が居なきや告白したりしたかもしれない。だけど、鵜が居なきや、距離が縮まることもなかった。感謝と侮蔑、どっちを取るつもりもない。

「なあ又エ。その、ブチギレなんだけどもね。近々復活するんだよ。だから私も、近々出てく」

キョトンとしやがる。それはキスメの顔だぞ、お前がしている顔じゃない。

「え、いつっ」

「なんで教えてもらえるとってんのさ。どうしても知りたきやキスメに聞きなよ」

「え、キスメ、知ってるの」
「そりやそうだろう。キスメはトモダチなんだから。それじゃあね」

しよっぱいものを食べると、甘いものが食べたくなる。人並みの欲の容器だ。しかしそれは、際限なく続くからタチが悪い。一つのもの

で満足できないから、人間ままならない。妖怪はその点、人間の何倍も欲深い。妖怪だからと、割り切っている。

私は例の甘味処へ行こうと考えたが、定食屋の付近をしぼし歩いて、結局ねぐらに戻った。清算なんてのは、明日をまっとうに生きようとする者だけに絡みつく生理だ。ねぐらには面がある。貰い物と、そうじゃないやつで、合計二つ。一度返すと言ったからには、それを守らなきゃいけない気もするが、そんな気はもうさらさらない。人を溺れさせられない船幽霊も、船に乗らない船幽霊も、どちらにしたって、もはやただの悪霊だ。私は連中のところには戻らないと、そう決めた。

うん。いまね、水蜜と仲直りしたところ。でも、ぬえが言ってた通りに、水蜜、出て行っちゃうんだって。そりゃ、寂しいけどさ。でも、プレゼントあげられたし、二度と会えないなんて、言ってたなかったし、そこまで寂しくないよ。だってなにより、友達だもん。

え？　なんで喧嘩してたの、って。それは、その。あれは、喧嘩とかじゃなくて、なんというか。水蜜がね、わたしのこと、卑怯だって、臆病者だって言ったの。急にそんなこと言われてさ。わたし、驚いちゃって、シヨックできあ。

でも、水蜜の言うこと、間違ってたから、恥ずかしくて、悔しくて、えへへ。ねえ、こいし。わたしさ、人を殺すの、下手なんだ。ほんとだよ。いままで、たくさん殺してきた、みたいなこと言ってきたけど、あれね、嘘なの。だってさ、恥ずかしいじゃん。妖怪のくせに、人殺しが下手だなんて。水蜜に頼まれた殺しも、結局失敗しちゃってさ。代わりに、昔一回だけ上手に出来た骸骨を置いて、誤魔化したんだよ。笑えるでしょー。

でもね、わたし、もっと上手になろうって決めたんだ。嘘を嘘じゃなくすればいいんだって、気づいたの。だからね、いつか水蜜にも教えてあげられるくらい、上手になろう、って、決めたんだ。あ。ここだけの話なんだけどね、その。……水蜜って、人殺せないんだって。なんか、尼？　なんだってさ。な、内緒だからね。誰かに言っちゃダメだよ。

え、知ってたの？　なんで？

え、しかもぬえに喋っちゃったって。えー。なにさ、せつかく、わたしのだけの水蜜の秘密だったのに。ちえ、つまんないの。

へえ、それで、謝りたいんだ。なるほどね！　そういうことなら、まだ間に合うんじゃないかな。水蜜、いったんねぐらに戻って、身支度やなんかをして、それから出て行くらしいから。急げばきつと間に合うよ。

大丈夫だって。きっと、許してもらえるよ。だって水蜜、優しいも

ん。誰かに冷たくしたりなんて、しないよ、絶対。なにより、わたしのはじめての、上の名前がない仲間だしね！

そうだ。こいしも、なにかプレゼントを持ってってあげなよ。水蜜、泣いて喜んでくれたんだから。え、もうあげたの？ ふうん、そっか。

あ、わたし？ わたしはねえ。コツコツ頑張って集めたトランプを、すべてみんなぜんぶ、水蜜に、あげちゃいましたー。えへへ。

あ、それからね。水蜜にお願いされたことがあってさ。こいしには関係ないかもしれないけど、いちおう、言っておくね。なんか、水蜜が仲良くしてた男の人、いるじゃん？ そう、わたしが殺し損ねたやつ！ なんでもね、あの人、やっぱり殺さないでくれ、だつてさ。他の人はいくらでも殺していいけど、あいつだけは見かけても放つておいてやってくれ、なんてさ。変だよ。殺してくれって言つたのに、やっぱり殺さないでくれ、なんてさ。だからね、わたし聞いたんだ。なんで？ つて。そしたらさ、またでたよ。

それは、その。恋つてやつだよ。

なんて言つてさー！ くー！ かっこいいーよねー！ クールだよ
ね、飄々としてるよね、オトナだよねー！

いやあ、わたしもさ、なんだかよくわかんないけど、してみようかな、なんて思つてさ！ 恋！

あ。それからね。そのあとにあの、お菓子屋さんに行つたんだ。うん、お菓子食べたの。途中で取り替えっこして食べたんだけど、やっぱり、水蜜の言うバナナ？ つていうのはわかんなかったんだ。あれは絶対プリン味だよ。水蜜はさ、いいやつなんだけど、味蕾だけは信用できないね。やっぱり。

でもね、話はここからなんだよ。お菓子が三分の一くらいに減つたころ、水蜜がさ、例の手品のタネを教えてくれたんだ。しかも、実演で！ でもね、ひどいんだよそれが！ わたし、思わず怒つちやつたもん！ ああ、でも、そのあと急に、なんか寂しくなつちやつて。

ちよつとだけ、泣いちやつて……。

ああ、水蜜出て行つちやうんだよね。思い出したら、また泣けてくるよ。およよ。

あ、ごめんごめん！ 急いでるんだよね！ もう、わたしなんて無視してさっさと行つちやえばよかったのに！ ……つて、あれ？ もういないじゃん。いつの間になくなっちゃったんだろ。てゆうか、誰と話してたんだっけ。えー。わたしひとりで喋ってたってこと？

うわあ、はずかしー。
えへへ。

あー、落ちる。背中に衝撃。腐葉土、水気を帯びて弾ければ、あたしはきつと泥まみれ。不快な冷たさに背中が濡れて、仰向けの視界、縁を囲むように木の枝と葉、中心に、夜空。星々がさんざめく。頭上から、声をかけられた。

「おうどうしたよ。大妖怪ともあろうぬえ様が、腰掛けから手を滑らせて落ちるなんて」

「……うるさいな」

後頭部を柔い地面にねじ込ませて見上げることもない。それは水蜜、村紗水蜜の声だ。

「なあ、答えあわせをしようよ」

「いいよ。いまさら。あんたに友達がいなくてことは、よくわかったから。キスメ、なんにも知らないじゃないか」

頭頂、視界の外で水蜜が笑う。なんだよ、たのしそうにしゃがって。こっちは全然、そんな気分じゃないんだ。

「ハハ、そんなんじゃないよ。前に、キスメとトランプをやったろ？ほら、ダウトってゲームさ。覚えてないかな」

「やったっけ。……ああ、キスメがイカサマしたやつか。それが、なんだっての。いまさらさあ」

水蜜はまた笑って、あたしの腹の上に何かを放った。軽い衝撃のあと、それは腹の上でバラバラと散らばりそうになるから、焦ってまとめる。その感触でわかったことは、腹の上に放ったそれが、束になったカード。トランプだったこと。

「それがさ、キスメ、イカサマしたわけじゃないんだよ。私たち、はなから騙されてたんだ」

まとめたトランプを眼前で広げれば、薄暗闇の中、微かな月明かりに、トランプ特有の、さまざまな柄が判った。

「あ？ なんだこれ、あはは！ ひどいよ、これ。あー、なるほどね、イカサマはしてないけど、いやでも、これはひどいよ。ひどすぎる、はは！」

「だろ？　しかも、これをくれるときのキスマのセリフときたらさあ。わたしが集めた五十二枚を、水蜜にあげちゃう。だつてさ！　いや、買えよ！　って。私、おもわず笑っちゃいそうになって、堪えながら受け取ったんだよ」

五十二枚のトランプ、内訳はめちやくちやだ。Jは六枚、5は三枚、Kに至っては七枚ある。あれだけ悩まされたAも、数ある混沌の中の一つだったというわけだ。

あー、それにしたつて、虚しくなる。

「……はい。返すよ、これ」

「いいよ。それ、おまえにやるよ」

トランプごと後方に差し出した腕が辛くなつてきても、水蜜はトランプを受け取らない。面倒になつてそのまま脱力すれば、腕は泥濘に沈み込む。トランプだつて、泥にまみれる。あーあ、もつたいない。でも、いらぬね。こんな、バラバラのトランプなんて。

「じゃあ、私は行くよ。明日人を迎えにいく用事があつてね、それが、朝早いんだよ。ああ船で行くんだけどもね。でかい船さ。その船がまた遠くてさあ、一つ向こうの森の中だ。そこに戻つていつかい寝ることを考えると、相当急がなきゃいけない。だから、もう行く」

「……あつそ」

水蜜の足音はあたしを置いて、そのまま遠ざかつていく。音が聞こえなくなるまでの間、ずっと夜空を見ていた。星がさんざめく黒い空、イメージではその中に、劇色の円盤のいくつもが見える。円盤は不規則に揺らめいて、静粛な夜空をかき乱す。これがイメージではなく現実だったら、どれだけ素晴らしいだろう。足音が消えて立ち上がれば、泥まみれの背中が冷えた。

月を探せば未だ、月は山の端にあつた。半月となつて、山へ隠れようとしている。不意に風が吹いた。木の葉が不快にざわめいて、否応無しに心が凧いだ。体を舐める風は泥のそれより暖かく、春の気配がした。放っておけば、朝が来てしまいそうだったから、あたしは思わず、駆け出していた。

ストップ。

一仕事する前に、腹ごしらえしとこーかな。
そうしよ。

なに、食べようかな。

どうしよ。

いやいや、決まってる。

エビフライにはやはり――。

「あー、たぶん。もうしばらくすれば、地上に寺ができるよ。でっかいやつがね。そしたらさ、覚えてたらでいいよ。その、寺に来てくれ。私はそこにいるからさ、面を取りに来てよ。そうしたら、友達になるう。私もね、冷たくしすぎたから。謝りたいんだ、いろいろね」
「えー。いまじゃだめ？ もう謝ってるみたいなものじゃん！ それに、お面はおねえちゃんにあげたんだもん。返さなくて、いいよ」
「いいよ、取りに来て。こんなもん持ってたら、いつまでも鼠にかかわれるんだから」

そんな、話し声で目が覚めた。それは紛れもなく村紗の声だったから、私はすこし驚く。てつきりもう帰ってこないものだと考えていたが、どうやら杞憂で済んだらしい。しかし、怪訝なのはもうひとつの方の話し声だ。村紗の周辺は常にネズミたちに報告をさせていたから、殆ど漏らさず把握している。しかし、いままでの情報から推察しようにも、村紗と話している声の正体がわからない。とすれば間違いない、こいつがAだ。

ネズミから報告を受けていた人物は四人。キスメにぬえ、それとあの男。そして、もう一人がA。明瞭なはずのネズミの報告が不明瞭になるのは、いつもAのときだった。不穏さを感じていないでもなかったが、まあ。今の話聞く限り、とりわけ注意することもないだろう。なにより、村紗は戻ってきた。なんにせよ、戻ってきたなら、それでいい。

ああ。安心した。これでやつと、計画を実行できる。

あーあー。夜空なんか眺めて。星に地底のお友達でも探してるのかい。いい気なもんだ。忙しかったんだぞ、こっちは。聖がいなければ、ただでさえ生活能力の低いやつらなんだ。ご主人なんて、殊にさあ。要の雲山だつて、君のせいではほとんどカタワになっていたんだから。私がどれだけ気苦労したか。

ああ、ダメだ。夜明けは近いというのに、どうしても眠たい。

おお、そうだそうだ……君も、少しでも眠るといい。ほら、眠ってしまえ。なにをうろうろしてるんだ。布団はごちゃごちゃしてるけど、そこにそれらしい空席があるだろう。ほら、そこに、身を横たえてしまえ……そうだ、それでいい。

ああ、よかった。なんにせよ。

安心したよ、村紗水蜜。

「まったく、心配したんだから。行けたら行く、なんて、子供みたいなこと言って！ それで、結局今の今までまで帰らなくて、もうどれだけ心配したことやら。わかってんでしようね、村紗！ 眠いだのなんだの言って、手を抜いたりしたら読むからね、経を、即座に！」

経を、即座に！ か、いい言葉だけれども、もうすこしいい目覚め方をしたかった。あれから一寸も経っていないはずなのに、舷窓には東の空の混沌が映っている。紺に橙と緑が爆ぜて、出来の悪いヘアカラーの様相だ。そんな空にはなにやらキラキラとした粒が舞う。遠くて確認は難しいが、心当たりならある。

「大丈夫だって。わかってるよ、夜明けとともに月を追う、だろ？ 空だって凧いであるし、船も機関室以外問題ない。それに、今日の私はバリバリなんだから」

「はは、バリバリってなによ。……え、機関室以外？」

バリバリねえ。なんだかな、そういう言葉は一輪の方が似合いそう。バタバタドタドタ、機関室まで駆けていく。うるさくて仕方ない。諦めて、私も起きるとしよう。

「……おお。村紗じゃないか。久しぶりだね、計画は覚えてるかい？ ああ、覚えてるならいいよ。船は夜明けとともに船を追う。はは、シンプルで、かつこいいだろう。私が考えたんだぞ。そうだ、向こうで誰かに計画を話してはいないだろうね。外部の妨害は二、三視野に入れてるけども、妨害があったとして、それで手一杯だからね。困るよ、話されちゃ」

ああ懐かしの、じとつとした目つきだ。どうも誤魔化せないらし

い。

「ようやく起きてきて、他に話すことないのかよ。なにが『連中にはそう伝えておくよ』だ。宣いやがって。なにが行けたら行く、だ。人を約束を守れないガキみたいにするな」

「人て。悪霊じゃないですか」

「悪霊て。村紗水蜜やぞ」

「やっぱり、悪くないな。この感じ。あつ！ ご主人にみられてんじゃない！ は、はずかしー！」

「——ちよつと村紗！ なに、あれ！ 飛倉が、ば、ば、ば、バラバラになって……ま、まさか知ってたんじゃないでしょうね！ あー、絶対知ってた！ 知ってました、みたいな顔してるもの！」

「あーあー、相変わらず、ひどいやつだよ。村紗水蜜。一輪が可愛そうじゃないか。どれ、一芝居打ってやろう。知らなかったふりというのは、とりわけて、如何なる状況でも自分へと有利に働く。」

「村紗、君、喋ったな！ ああ、誰だ。決まってる、よりにもよって、あの妖怪……ああ！」

「ほら、こうすると、超速理解した感じがでて、すごくかつこいい。ああ、ご主人から視線を感じる。尊敬の念というやつだね。いやはや。……いいさ、そこらに散らばってるのはあれ、飛倉の破片だろう？」

「現に船は飛んでるし、バラバラだって問題ないなら、いい。私があれば集めてくるよ」

「そして冷静さを取り戻し、あまりある知性をアピールだ。ああ！ あまりにも頼もしすぎるよお、私。それにしても、なんだ。ご主人は。やけにこつちをみているな。さすがにちよつと、気になってきたぞ。『計画に変更なしだ。このまま入り口まで向かって、そしたらご主人の出番さ、宝塔を使い……なんだご主人！ さつきからじろじろ見て！ まったく、人が気持ちよく喋ってる場所に水を差すもんじゃあ……あつ！』」

「終わった！ ご主人のどこにも、宝塔が見当たらない！ ああ、なるほどその視線。その怯えた表情……ああ、いやだ！ そんな表情で近づいて来るな、こつちに来るな。耳打ちなんてしないでくれ！」

き、聞きたくない！

「な、ナズ、どうしましょう……。な、なくして、なくして！　しまいました……。」

ああ！　このバカ！　バーカ！

「お、ナズーリンキックだ。縁起いいなあ」

うるさいぞ村紗！　ああ、みんなおまえのせいだ。ど、どうしよう。とりあえず、私が探しに行かなきゃいけないのか？　あ、焦りが露呈するのはいやだ。どうにか自然に出ていける方法はないものか！

「な、なによ。どういうこと？　星も、雲山まで、青ざめちゃって。そ、そうよ村紗！　あんたでしょ！　あんたが喋ったとかなんとかって……。だ、誰になにを喋ったわけ！　ますますぐくわしく聞かせなさい！　この怪しい雲行きの原因を、いまずぐ吐け！」

ああ、いい感じに騒がしくなってきたぞ。今のうちにスルツと外に出てしまおう。

「一輪、あ、あとよろしく。私、破片集めてくるから、じゃ、じゃあね……。」

ああ、ご主人！　裾を掴むな！　離せ、このバカ！

「ちよつとナズーリン！　待ちなさいよ、どういふことなのこれ！　なんか、わたしだけわかってないみたいな――」

村紗、何か言え！　君が悪いんだから、どうにか、私を助ける！

「――計画実行の時が来た！　船は夜明けとともに月を追う。面舵いっぱい、全速前進！　安心しろよ一輪。船に後光が差す頃にや、聖輦船は字の如く、その役割を果たしていることだろうよ」

そうして、私は一輪の白黒する目を盗んで外に出た。恐ろしそうな表情で裾を掴むご主人を思いだせば腹が立つ。あれほど宝塔を持つて外に出るなど言ったのに、どうして言いつけを守らないのか。ああ、けれど、肌身離さず持つておけと言った覚えもある。かといって、それが私の過失かといえば、そうは思えない。

まあ、しかし。散らばった飛倉に関しては、村紗に任せてもいいだろう。計画に鶴を担ぎ込んだとはいえ、船には一輪もご主人も、それ

に雲山だっているんだ。三人の眼前で破片を見過ごすことなんてできやしない。なにより、実行の口火を切る村紗の顔に、嘘は見えなかった。成功させたいのか、失敗させたいのか、右往左往してまるでわからないヤツの行動も、夜明けの空を見れば納得できた。

東の空は爆せている。紺に橙と緑が混ざって、出来の悪いヘアカラーの様相だ。振り向けば西の空は紺一色、暗闇が溶けかけの月を守るように満ちている。しかし空は凧いでいた。ぜんぶをひつくるめて、春一番の風に凧ぐ。半球状のパノラマすべてを視界に収めることなんて、常に叶わない願いだから、右往左往してまるで読めない村紗の心だつて、そういうのも、アリだと思えた。

ああ、それにしてもあの台詞。村紗の言つた後光のくだり。私はあれが言いたくてこの計画を練つたのに！ どうも、連中に関われば損ばかりする、気苦労ばかりする。不意に浮かぶのは村紗の嘘、曰く、恋とかなんとか。

あー、行けたら行く、なんて誤魔化してなんかやらずに、村紗の言つた本当を、みんなに伝えりやよかつた。なにが恋だ！ 聖が復活すれば、私はやっぱり損をする。宝塔なんて見つからなければいい、鶴がすべてをめちやくちやにすればいい。なんて、思うけれど。

空に散らばって輝く破片は、まるで、航路を指し示しているようであるで、この航海を祝福しているように思えて。なんだかどうも。すべてがきつとうまくいく、そんなふうに、思えてしまう。

宝塔をみつけて戻ったら、もう一発ぐらい蹴つてやろうと。

鶴似、有、塩味。 13 (了)

お寺の中、リビングは意外とフロアリング。テーブルだって背が高いし、椅子もそれと丁度いい感じの高さになってる。

「さあ、状況をまとめようか。この寺にはどうやら、ひらがなも読めないやつがいるらしい。それじゃあ、まずはご主人、頼んだよ」

ネズミのひとが声を上げると、トラのひとがおずおずと前が出る。こいし、ちよつと大変なことしちやつたかも。

「はい……。私、ちゃんと書いておいたんです。パッケージに、とらまるって。楽しみにしてました……。お勤めが終わったら食べようと思つて……」

「そこまでだ。ありがとうご主人。下がっていいぞ。……このように、ご主人はパッケージに自分の名前を記しておいたことを、たしかに記憶している。問題は次だ。ご主人が勤めから戻ると、それは冷蔵庫から忽然と姿を消していた。となればもちろん、その時間に寺にいた君たちの中の誰か。犯人はこの中にいる」

椅子に座ったみんな、思い思いにざわざわとする。そしたらまた、ネズミのひとが声を開いた。たのもしー。

「一斉に喋るんじゃない。学級裁判をやつてるんじゃないんだぞ。聖が勤めから戻る前に決着をつけようと私を呼んだんだろう？ なら、私のいうことを聞いてもらおうぞ。……挙手制だ。この場は挙手制を採用する。挙手した者から私が選び、選ばれた者だけが発言する。異議は認めないぞ。いいな」

これで、みんないうこと聞くから不思議だよね。しーんとしちやつて、でも、みんなして手をあげてるから、なんか可笑しい。

「村紗」

「はい。……私はぬえが怪しいと思います。理由はバカだからです」
「なにをー」

えー？ そういうの、アリ？ うちのペットたちでも、もうすこしまシだなあ。

「ぬえ、黙れ。挙手してれば当ててやる。順番だ、順番。……じゃあ、

一輪」

「はい。……私はむしろ、そういうふう我真つ先に誰かを指す村紗が怪しいと思います。ちなみに私は食べてません、雲山と一緒に読経してたし」

「真つ先に保身に走って、よく言うよ。ふたりでこつそり食べたんじゃないの、共犯でさあ」

うう、おねえちゃんはなんでこう、怪しまれるようなことばかり言うんだろ。食べてないなら、黙ってればいいのに。

「村紗、黙れ。次喋ったら問答無用で犯人だからな。……じゃあ、ご主人」

「はい。……私はもちろん犯人じゃないです！ 被害者ですから！

なんか、ぬえがさつきからじろじろみてくるんです、自分で食べたの忘れてんじゃないの？ って感じの目で……。だから、どっちかって言うとおねえが怪しいと思うんです、私は！」

だから、って言うのも、なんだかなあ。お寺のひとってみんなこーなの？ 基準がすこしズレてると思うんですけど！

「よし、じゃあぬえ。被害者から直接の疑いがかかったぞ、どうなんだ」

「はい。……寅丸の言うことはお門違いだと思います。まず私怨でも言うのはどうかと思うし、何よりあたしは、そんな、プリン容器なんて見たことないもん。なんかさー、雲山あたりが間違って食べちゃったんじゃないの？ さつきからずっと黙ってて、いちばん怪しいよぬえ」

「ちよつと！ 雲山は私と一緒にいたって言うてるでしょ！」

「どうだか」

「な、なによー！」

うわあ。ネズミのひとが言う学級裁判っていうのが、なんとなくわかったかも。それってきつと、子供の喧嘩を指す言葉なんだろうね。たのしくなってきたかも！

「ふたりとも、黙れ。困ったな、堂々巡りじゃないか。ん？ ああ、村紗。いいよ、そんなに必死に手をあげなくても。じゃあ村紗。喋って

いいぞ」

「はい。……なんだろう、さつきはぬえのこと怪しいとか言っちゃったけど、ここまでみんな否定するとなると、なんかさ。犯人、この中にはいないんじゃないかって思うんだよね」

さすがおねえちゃん！　するどい！　でも、ひどくない？　食べていって言ったの、おねえちゃんなのに……でも、あれ？　ほんとにそうだったっけ？　なんか、違う気がしてきた。もつといえ、わたし、食べてないかも！

「なるほど、この場にはいない者の仕業ということか。となると、あの狸か。……ぬえ、あれと親しい君の意見を聞こう。どう思う。やったか、あの狸は」

「はい。……うーん、違うんじゃないかな。だって、エビフライですら見慣れてなくて、怖がって食べないんだよ、あの人。プリンなんて、どうしても食べないと思うけど」

えー、意外。あのひと、新しいモノ好きだと思ってたのに。なんとなく。

「なるほど。となると、残るのは本当の部外者の線だな。そうだな、そいつを仮にAとしよう。だが、あり得るだろうか。そうすると、Aは一輪と雲山が読経をするお堂の前を見つからずに通って寺に侵入し、その後、村紗とぬえ、それにご主人の誰にも見つからずにプリンを奪った。そういうことになる。だって、誰もみていないんだろう？

しかしAにそれが可能なら、プリンだけじゃなく、もつといろんなものをわんさか盗られてるはずじゃないか。来るときに宝物庫を覗いてみたが、減ってるものはなにもない。やっぱりすこし無理筋だな、部外者説は」

そうだよそうだよ。わたし、わざわざ入り込んで、プリンだけ食べるなんて、そんな不毛なことしないもん！　あれ、でも、じゃあわたしは何しに来たんだっけ？　思い出せないけど、いいや！　犯人がわからなきゃ、もう帰れないもんね！

「じゃあやつぱり最初に言った通り、ぬえが怪しいよ」

「だから、あたしはさつき言ったじゃん！　プリンの容器なんてみな

かった、つて！」

「またはじまった！ はやくしないと、えらいひと帰ってきちゃうよー。」

「黙れ！ ふたりとも。……まったく。ぬえ、君、プリンの容器をほんとはみなかつたんだろうな。ああ、わかつてるさ。疑ってるわけじゃない。ただ念のため、容器の特徴を確認しておこうと思ってね」

それ、意味あるのかな。このネズミのひとも、大概へん！

「……ご主人。確認だが、プリンの容器というのは、こう。丸くて、プラスチックで、底に、プッチンするための突起のあるやつか？」

「はい、そうです。間違いありません。その容器に、たしかに私の名前があつたはずなんです。とらまる、つて……」

あれじゃない？ ひらがなとかかわいいから、かわいいプリンの容器との親和性が上がって、製品の名前だと勘違いされて、それで、食べられちゃったという。そういうあれ。こいし、イイ線いっちゃってるかも。でも結局、誰が食べたわけさ！

「ありがとうございます主人。……さて、容器について確認したことで、一つ、或ることが明らかとなった。……わからないかい？ わからないだろうね。じゃあ、君たちに教えてあげよう。あのプリンを食べたのはね、私だよ。言われて思い出した。昨日食べたんだ、あれ。私が。美味しそうで、つい」

一同驚愕！ 一生のうち一回は使ってみたい言葉番付首位の言葉を、こんなところで使えるなんて！

……

…

明朝。寝床の襖を開ければ、縁側から東の空がみえる。天気が悪

い。紺色く、意味もなく湿って、意味もなく曇っている。縁側にはヤツが居た。座って、足をぶらぶらとさせて、庭を見ている。

「おはよ、はやいね。あ、そうだ。あんたさ、人のもん勝手に食べたらダメだよ。よくまあ、そんな行儀悪いことができるよな、よくないよ」

「うるさいな。あんたの仕業でしょ。……まあ、なんでもいいけど。プリンなんてまた買えばいいだけじゃないか、よくまあ、あそこまで騒げるもんだよね」

朝の鳥が群れになって、空を横切る。相変わらず、口の減らないやつ。

「どうせ朝の読経もサボるくせに、こんな早起きしてどうすんのさ」

「あんただって、どうせサボるんでしょ？ 耳に毒だのなんだの言つて」

庭の蓮池に、蛙が鳴いた。すこし、雨の匂いがする。いまにも降ってきてそうだ。

「ねえ、あんた。いつまでここに居るのさ」

「あんたこそ」

蓮池の向こう、生垣に、紫陽花が咲き乱れている。青いのも、赤いのも、両方あるけど、中間は無い。

「あのさ。……実はね、恥ずかしいこと言うようだけでも。あんたが居なくなるなら、一緒に付いて行こうかな、なんて、思ってたんだよ」
「居なくなるなら、って、なにそれ。居なくならないよ、そうそうは」

あー。

降ってきてやがった。

「続くかな」

「さあね」

「……えー。蓮池を、囲む地面はさみだれて、草履の裏は、泥まみれ。

……どう？」

「はは、全然ダメだよ。しよっぱいね」

『鵠似有、塩味。』完。

まつりにひとり (1話完結 主演：河城にとり)
まつりにひとり 1 / 1

私は川を流れていた。

夏の日差しは強く、水の冷たさが心地いい。

私はそのまま、流され続けた。

「おい、はやくしないと。食べ物みんな売れちゃうぜ」

「そんなに急がなくても。食べ物みんな売れちゃうなんて、あるかい、そんなこと」

「いいから、はやくはやく」

夕暮れ、人里近くの橋の下まで流れた頃、そんな会話が耳に飛び込んで来た。

人間の親子の会話だった。

どうやら、里で縁日かなにかやるらしい。

いつもなら、こんなかき入れ時に店を出さないなんてあり得ないのだが、今年はなんとなく、気が乗らなかつたので出店するのはやめにしたのだ。

自分に実入りのない縁日なんて、大して興味もなかつたが、私はなんとなく、人里へ向かつたのだった。

人里に着く頃には、空はとっぷり暮れていた。藍色に乗つかられた橙が、今にも押し潰されそうな、そんな空の色だった。

人里では、予想通り縁日が開かれていた。

通りを行き交う人々は、まるで増水した川のように、今にも溢れそうだった。

またしても、私は川を流れていた。

川の流れに従いながら、気づけば私の両手には、綿菓子やらりんご飴、それらがしっかりと握り込まれているのだった。

甘味を舌で遊ばせて、私は川を流れていった。

……。

「珍しいな、河童がいるぜ。河童の、河城にとりがあるぜ。まさか、縁日で客のお前が見られるとはな」

「それにしても、右手に綿菓子、左手にりんご飴。腕に袋までかけてると来た。袋の中身が気になるところだが、生憎、私は向こうから来たんでな」

……。

人の川に押し流されながら、その中で白黒の人間の声を聞いた気がしたが、川の流れは私をそのまま押し流すのだった。

ガヤガヤと、音を立てて流れてゆく人の川。どこか遠くで、祭囃子の笛の音が響く。

ぴーひやらら　　ぴーひやらら

……。

「あやや？河童の河城にとりさんじゃないですか。あなたがお客さんだなんて、珍しいこともあるんですねえ」

「ところで、椀をみかけませんでしたか？一緒に来ていたはずなんですけどねえ」

……。

ドーン、ドーン、と、太鼓の音が遠くで響く。川の流れのピークは迎えていた。

大量の足音と、太鼓の音と、喧騒が、ただなんとなく歩いているだけの私の心を震わせる。なんだか妙に、顔が熱い。

……。

「わ、にとりさん！びっくりしました？私です、椀ですよ。一人で歩いてるから驚かしてしまいました、ふふふ」

「そうだ、文さんを見ませんでしたか？今日は文さんと来ていたんですけど、ふいに見失ってしまいましたね。迷ったら演し物の場所に集合するよう決めたんです」

「にとりさんは、演し物みないんですか？」

……。

ドーン、ドーン、ドーン。

太鼓の音が、徐々に鳴り止む。

段々と、人通りが疎らになってきた。

あんなに溢れそうなほどの人々が、一体どこへ消えてしまうと言うのだろうか。

団子の串や割り箸が、地面のあちこちに散らかっている。

……。

「おや、にとりじゃないか。まさか一人で来ていたとは。いや、少し前に魔理沙と会ってね。君が楽しそうに歩いているのをみたぜ、なんて言っていたものだから、てつきり誰かときているのかと思ひ込んでいたのさ」

「ところで、頼んでいた修理は終わったかい？ いや、急ぎじゃないんだ。ただ、あれを店に置くのが楽しみでね」

……。

「え？ 魔理沙かい？ 魔理沙なら演し物を見終わってすぐ、満足気に帰っていったよ。一人でまわる縁日も乙なもんだな、なんて、言っていたけな」

……。

ジリジリ、ジリジリ。

蝉の鳴き声が夜に響く。

人の川は、もうすっかりどこかへきえてしまった。

夏特有のじんわりとした寂しい涼しさが、体に纏わり付いた祭りの熱気を攫っていく。

出店の主人たちが店じまいをする音。

川に取り残された僅かな人々の、かすかな話し声。

ジリジリ、ジリジリと、夜に響く、蝉の声。

そろそろ帰ってしまおうか。

私は人里近くの川辺にやって来た。

川辺が私の帰路だった。

道中、手持ちの花火を囲む四人組を見つけた。

線香花火を真剣な面持ちで握りしめるもの。

火花が噴出するような手持ち花火で、空に軌道を描くもの。ただ眺めているだけのもの。

そんな風景をカメラで撮っているもの。

一瞬、見知った奴らかと思っただが、全員、全くの別人だった。

紺色の空の下、木々に囲まれた砂利道を、さーっと風が吹き抜ける。

川辺のひんやりとした気温は、祭りの後の寂しさに浸った私の心とよく似ていた。

それは、子供の頃に好きだった、絵本のような寂しさ。悲しみのない、きれいなだけの寂しさ。

そんな寂しさを抱えて歩く私の心の中には、ひとつ、淡い光が灯っていた。

それは暗闇の中、儂く光る火花のような光だった。私はその光を思うと、なんだか胸が締め付けられるような気がして、一人で照れ笑いを浮かべていた。

一人、川辺を歩きながらニヤついている自分を俯瞰すると、私はさらに決まりの悪い気分になった。

途端に、さつきまで感じていた寂しさも、今感じている面映ゆきも、全てがちやちに思えてくる。

あーあ。と、私は小石を蹴りつけ、少し笑う。

すると私は、不意に、どこか遠くの方で、祭囃子の笛の音が響くのを聞くのだった。

蔦巻くところ (全3話 主演：小野塚小町)
蔦巻くところ 1

私は是非曲直庁の指令で賽の河原に来ていた。

川の両脇は藪に囲まれており、川辺に敷かれた大小歪な石ころの間からは妙な草花が蔦を伸ばしている。

私は大きく息を吸い込んだ。すると、むせ返るほどの自然の臭気が肺一杯に広がる。それを短く吐き出し、空を見上げた。

空、とはいえ、賽の河原の空には雲すらなければ太陽も無い。なんにも無い深い灰色が広がっているのみである。

本来なら賽の河原での業務は木っ端の鬼たちの仕事なのだが、墮落した鬼の無断欠勤により穴が空いた。その埋め合わせが私に回ってきたというわけだ。

是非曲直庁所属の鬼たちは墮落している。

是非曲直庁はその昔、地獄を管理下に置くため、地獄の制圧を始めた。その際、地獄の主な戦力は鬼だったらしい、が、鬼たちは元来の楽観的、或いは刹那的な気質から統率を乱し、是非曲直庁の制圧をやすやすと許した。

しかし反発する鬼も居た。或者は地獄から逃れ、或者は是非曲直庁の制圧に抗い敗れ、或者は何処かへ身を隠した。

ともかく、大多数の鬼は殺されるくらいならば、と、是非曲直庁へ寝返った。

そういつた経緯や鬼元来の気質から、直丁への勤務、業務を全うにこなす鬼は少なかった。

そんな鬼たちはこの「河原に赴き積んである石を小突く」業務すら面倒らしい。

とはいえ、かくいう私も賽の河原での業務が苦手だった。

遠方に視界を遣り目を凝らせど、灰色がどこまでも延々と続いていて。蔦を巻く草花や灰色の空は、私を陰鬱な気分に至らせるのに十分だった。

されど、業務は業務と、私は歩み続けた。

草履を履いた私のつま先に当たる川辺の石ころ達が私の陰鬱な気分を拍車をかける。

しかし、私はこの気分が特に嫌いというわけではなかった。

死神などという種族に生まれ、是非曲直に所属し、こんな業務にあたる暮らしが続いていると、こういった「陰鬱さ」が、感情の基盤と化してくる。それを長く続けると、この陰鬱さにどことない安心感を覚えるようになる。

それを人里の酒場等で人に話すと、それはいわゆる異常な「鬱」の状態なのではないかと問われることがある。

しかし、これは人間でいうところの「鬱」の状態とは少し違う。私はこの世の諸行無常を楽観的な視点を以て享受している。私にとって正常な状態というのは、世の無常を程よく楽しみ、程よく憂うことを差す。

私にとって陰鬱さというのはただそれだけのことだった。人より少し、元来の気質的に楽観主義が過ぎるだけなのかもしれないが、ともかくとして、私にとって陰鬱な気分というものを否定的に捉えてはいなかった。

しばらく歩くと、少し遠くの方に濃い灰色の靄を見つけた。

灰色い靄は人間の子供の体を曖昧に縁取っている。靄は屈んで、石を積み上げているようだ。すでに高く積みまれた石は新たな石を積み上げるたびポロポロと崩れる。しかしそれでも、靄は石を拾い集めては積む。それをやめることはなかった。

私は深く息を吸い込み、短く吐き出して、靄に近づいた。

近づくと、靄は私に気がついたようで、ちょうど「頭」の部分をごちらにに向けてくる。

頭の部分には黒い発疹のような斑点が無数に浮かんでおり、そのうちの一つが歪に形を変えた。靄は斑点の一つはどうかやらの形に変えたようで、口を模した斑点で私に声をかけてきた。

「おねえちゃん。みて。わたし、こんなに石を高く積めたんだ！」

その声は甲高い少女の声だった。

私はその声を見無視し、足元に積み上げられた石を大鎌の柄で小突き、崩した。

すると、霧は無数の黒い斑点をきよとん、と、させて私を見つめるのだった。

きよとん、とした視線も無視して、私は踵を返し賽の河原の出口へと向かった。

しばらく歩き、出口付近まで来た。ふと、背後から視線を感じ振り向くと、そこには霧が立っていた。先程と全く同じ、きよとん、とした視線を、私に向けている。

付いてきたのか。全く。

霧の足元には、私が先程崩したまんまの石がこれ見よがしに散らばっている。

私は一つ息を吐き、少女を曖昧に縁取る霧に向けて言葉を発した。

「付いてきちゃあいけないよ。そのくらいのことはわかってるんだろう」

すると、霧は口を模した斑点を三日月のように広げて、また石を積み始めるのだった。

そうして、私は賽の河原を後にした。

蔦巻くところ 2

三途の川にて、私は、私と老人を載せた小舟をゆつくりと漕いでいた。

中有の道を抜け、この川に至るまで、老人は一言も言葉を発するとはなかった。

おかげさまで、私は何も考えずに、ぼーっとしたまま業務をこなせていた。

今回、川の幅はそれほどなく、私の業務はとりわけ楽な部類に入らう。

それでも、私は胸中に湧き上がる陰鬱な気分をどうにか手放すまいと努めていた。具体的に云えば、賽の河原のこと等を頭に浮かべていた。死者を悼む気持ちを自身の日常の中に埋没させないためである。それは、世の無常を程よく楽しみ、程よく悲しむ、そのためには欠かせないことだった。

私は半ば機械的に、賽の河原の景観やそこに在る“もの”を想像しては、眉を顰めた。

すると、唐突に老人が口を開いた。

「いやあ、私はね、それほど自分の人生をしっかりと考えて生きてきたわけじゃあないですよ」

「どうやら老人は身の上話を始めたいらしい。これも、まあ珍しいことではない。」

三途の川には小さな風すら吹くことはない。無風の川を、小舟がゆつくりと進んでいく。

「いやそのう、棺桶の前で泣いていた婦人がいたでしょう」

「ああ、あんたが何か声をかけにいった婦人かい？」

「ああ、実はあれは私の女房なんですよ」

「へえ、そうかい」

もちろん私はそれを知っていたが、あえて素っ気なく応えた。それも、業務の規則、その一つだ。

私は元來話し好きの氣質がある。しかし、規則は規則だ。自分にそう言い聞かせ、老人に悟られぬ程度に深く息をため、短く吐いた。

「女房と私は割合若い内に結婚しましてね。いやあ、当時は何も考えずに結婚しましたよ。多分女房も同じだったんじゃないですかねえ。二人して、幸せになろう、なんてことを曖昧に考えていましたよ」

へえ、そうかい。と、私は揺れる三途の川面をぼんやりと見つめながら相槌を打つ。

「それでも、私達夫婦の生活は、なかなか幸せというものからはかけ離れていました。いえ、仲が悪かったとか、特別貧しかったとか、そういうわけではないのですが」

「女房は、子供を欲しがっていたんですよ。そりゃあもちろん、私も子供が欲しかった。まあ、よくある話で、子宝に恵まれない夫婦、というやつですよ」

私とって老人の話は現在に至るまで、徹頭徹尾よくある話他ならなかった。

「それでも四十手前の頃、我々夫婦も子供を授かりましてね」

「へえ、よかったじゃないか」

私は老人の葬儀の様子を思い出しながら、相槌を打った。

「ええ、ええ。夫婦揃って、大喜びでしたよ。ああ、ようやく幸せになった、なんてねえ。報われたような気持ちでしたよ。女房も私も、生まれてきた娘を一所懸命可愛がりました」

私は話を聞きながら、やはり老人の葬儀を思い出していたが、どうしても記憶の中に老人の娘らしき人物を見つけられなかった。

ああ、そういう話か。老人は、私に何か、懺悔でもしようという腹積もりなのだ。

それもまあ、よくある話で。

「なかなかやんちゃな娘でしてね、お人形遊びなんかより、外で遊ぶのが好きな子でしたよ。……娘は体が弱くてね、医者先生からも外で遊ぶのを止められるほどだったんですよ。外に出られず、そんな娘に、女房はたくさんの人形を買い与えました。退屈そうに人形で遊ん

でる娘が不憫でねえ。それでも、娘は時たま、私や女房に内緒で外に出ようとするんです。しかし私は仕事の都合上、いつも家にいるものでね、娘が内緒で外に出ようとするところを発見してしまったんですよ。それ以来私は、女房やお医者さんには内緒で、娘を外に連れ出して、遊んでやりました」

小舟はそろそろ岸に到着しようとしていた。

「……私が娘を連れ出すようになってから間もなく、娘は死んでしまいました。それからというもの、私は自分を責めない日はありませんでした」

「……私はやはり、地獄へ送られるのでしょうか」

私は老人の話を聞く最中、老人に対して同情の念が浮かぶのを感じたが、老人の最後の一言を聞いた瞬間、私の頭の中には「不徳」の二文字が浮かぶのだった。

「さあ、わたしにはわからないなあ」

先の葬儀、棺桶の中の老人が縊死体であることを、私は知っていた。そうして小舟は、岸へとたどり着くのだった。

蔦巻くところ 3 (了)

またしても鬼の無断欠勤により勤務体制に穴が空いた。やはり埋め合わせは私に回ってきて、私はまたしても賽の河原に来ていた。

川辺は藪に囲まれており、敷き詰められた石の隙間からは草花が疎らに蔦を伸ばしている。

空を見やれど、そこにはやはり何も無い。太陽もなければ雲すら浮かばぬ空を見て、私はまた、深く息を溜める。

肺いっぱいむせ返るほどの草花の臭気が広がり、それを短く吐き出した。

草履を履いた私のつま先にコツコツと当たる石を多少不快に感じつつ歩みを進めると、そのうちに濃い灰色の靄が少し先の方に見えてきた。

靄は曖昧に人間の子供の形を縁取っている。

靄の「頭」の部分には発疹のような黒い斑点が無数に浮かんでおり、私が近づくと、靄はその無数の黒い斑点で私の方を見据えるのだった。

「おねえちゃん。まっけたよ。みて！こんなに石を高くつめたの」

靄は斑点の一部を口の形に変化させ、甲高い少女の声で私に話しかけてくる。

私はそれを無視して、足元に積まれた石を大鎌の柄でこっつん、と小突き、崩した。

すると、靄は無数の黒い斑点をきよとん、とさせて、私にその視線を向けてきた。

私はその視線を無視して、踵を返し、賽の河原の出口へと向かった。

出口へと向かう最中、靄はやはり私に付いてきているようで、敷き詰められた石を踏みしめて歩く私に、しきりに声をかけてくる。

「ねえ。みて」

「おねえちゃん。みて」

「ねえ。聞こえてるんでしょ」

「ねえほら。石。みて」

「みてっば」

その声はやはり甲高い少女の声だったが、靄が言葉を発するにつれ、それはだんだんと無機質な、男とも女ともとれぬ声へと変わっていった。

「おねえちゃん。みて」

「みて。石」

「おい」

「石。みて」

ああ、まったく、いやになるよ。

「無視してんじゃねえよ」

私は振り向いて、靄に鎌を振り下ろした。

その後、私は謹慎を受けた。

賽の河原では積まれた石を崩す以外の干渉は禁じられている。それを破ったことが謹慎の理由だった。

しかしながら、思いもよらぬ久々の休暇を手に入れた私は、人里に在る行きつけの飲み屋に来ていた。

「なあ聞いてくれるかい。ひどいんだよ、うちの上司はさあ」

昼も半ばにして、私は酒を飲み、管を巻いているというわけである。こんなに有意義な休日の使い方はない。私は上機嫌で話し続けた。

「だいたいさ、空いた穴を埋めるために慣れない仕事をしてさあ、それをちよつとばかりミスったからって、謹慎だなんて、おかしい話だろう？人使いが荒いとか、もはやそういう問題じゃあなくなってきたよ、なあ、そうは思わないかい」

「ああ、そうだねえ」

そう答えるのはこの飲み屋の看板娘だった。というのも、それは、初めて会った頃の話で、かつての看板娘も、今では専ら婆さんだ。

「しかし、婆さんもしばらく見ないうちにまた老け込んじゃったねえ」

「ふふふ。小町ちゃんは変わらないわねえ」

「えー？」

「小町ちゃん、店に来る度におんなじこと言ってるんだもの」

「ははは、そうだったかな。そいつは悪いね。それよりさけを追加だよ。今日は飲むぞお」

「昼間っから顔を赤くして、景気のいいこと」

「休日が少なくてねえ、金ばっかり溜まっていけないよ。全く。婆さん、今日はとことん話を聞いてもらうからね、覚悟しておくれよ」

「はいはい。いくらでも聞きますよ」

そうして私は、酒をかつくらい、普段の鬱憤を晴らすように管を巻き続けた。

婆さんの顔には死相が浮かんでいたが、私はそれを見なかったことにした。

緑の瞳に映る恋く青春。パンク編（全11話） 主演：水橋パルスイ、古明地こいし）

緑の瞳に映る恋く青春。パンク編 1

「あたしが思うに、やっぱりさ、優しいとか顔が良いとかよりさ、誠実なのが一番だよ」

「ああー、そこね、そこ大事だね」

薄暗い洞穴の中、地面には椅子替わりの桶がいくつか置かれていて、壁には数多に組み込まれて太くなつた蜘蛛の糸が張り巡らされておいて、その蜘蛛の糸には所々に棚の役割を果たす桶がぶら下がっていた。三、四つの椅子に囲まれたテーブルは桶ではなかったが、らしく御誂え向きに古びていた。

私はそんな椅子のうちの一つに腰をかけ、友人である土蜘蛛と釣瓶落としての「いつもの」話を黙って聞いていた。二人の話題といたらいつものこれで、初めはとりとめのない近状などを交わしていても、気がつけばいつもこうなる。

「パルスイは？恋人に求めるもの」

「……別に。私は特に無いかな」

私はこういった話が苦手なわけでは無いが、だからといって好んでもいかなかった。

天気の話の方がまだ楽しめる。それぐらいだ。

「さすが、パルスイは大人だよねー」

「大人というか、冷めてるといふか。まあ、人それぞれだからね」

土蜘蛛、黒谷ヤマメは私が先程のような返答をすると、いつも決まって「人それぞれ」と発する。私はその言葉がどこか憐憫を含んでるような気がして、いつも得も言われぬ理不尽さを感じるのだった。人それぞれならば、人それぞれを強調する必要はないのではないか。結局、大人やら冷めてるやら言いながら、ヤマメやキスメのような経験豊富な者から見れば私はただの生娘に映るのかもしれない。

確かに、私はまともに恋というものをしたことがない。しかしだか

らといって、それを知らないわけでもない。私は知った上で、それを取るに足りないものと考えていた。

「でもさでもさ、誠実さとか、心も大事だけどさ。結局はあれだよね」
「間違いないね。あはは」

二人の話が形状やら面積やら角度やらの、所謂肉体的接触についての話に移行するのもいつものことだった。こうなるともう私は蚊帳の外で、いつ消えても二人は気がつかない。

しかし、二人の知らぬ間に私が消えると、後日二人は私に対してあんまりに申し訳なさそうにするので、しばらくは黙って聞いていた。されど二人の経験談を交えて語られる赤裸々な、一糸纏わぬ汚れなき会話は延々と続き、私はいよいよ辟易として、そつと席を立つのだった。

洞穴を出て、旧都の方角へと歩く。なぜあんな話を大声で話せるのか。私はふと、以前キスメに言われた一言を思い出した。

——もしかしてパルスィ、こういう話好きじゃなかったり、する？
好きではなかった。しかし嫌いというほど、私はそういつた話に対して潔癖じゃないし、綺麗で清潔なものでもない。なので、その場では嫌いではない、とそんな具合に返答をした。なにより、私が私自身を「綺麗で清潔なもの」と考えていると、二人にそんなふうに思われるのが嫌だったのだ。

だったら、私も話に混ざればいいのだけれど。

気付けば目の前まで来ていた橋の手すりに肘をついた。

「ああ、妬ましい」

そうして、私の口からは、半ば口癖と化したいつものそれが意味もなく溢れていた。

橋の上から眺める川は、今日も汚濁に淀んでいる。ガラクタやら骨やら肉やらが大量に流れていくその川は、もはや川と形容するには汚れすぎていた。私はそんな川を眺めながら、薄っすら生臭さのある空気を肺いっぱい吸い込んで、吐き出した。

頭上に開いた地底で唯一の大きな風穴から覗く遠い空は、淀んだ灰色をしている。私は特に何を考えるわけでもなく、しばらくの間橋の

欄干に肘をついて、ぼんやりとしていた。

いつまでそうしていたかは分からないが、気がつくとは私は旧都の目抜き通りを歩いていた。通りの入り口付近は情けない妖怪や鬼の為に、また似たような鬼や妖怪たちが八百屋総菜屋等それらに類する店を営み連ねていた。その連なりの中に青果店も在ったが、その青果店はとりわけ高級な部類の店で、あまり客は入らない。老いさらばえた人外達、持ち合わせの無さそうな若いのが安いコロツケや安い野菜に群がる中に、人の寄らぬ青果店がぽつん、とあるわけだ。その青果店は「古明地の」を始めとして地霊殿の連中が鼻屑にしているらしいが、私はその青果店にも総菜屋にも用はなかった。

目抜き通りを進むと、立ち並ぶ店の面構えがどんどんあやしくなってくる。妙に安い衣類や、用途の分からないガラクタなどが剥き出しになって店先に陳列され始めるのだ。その中にあるタイトルの貼られていないビデオ——VHSというらしい。私はこれを再生する機械を持っている。——を見かけるたびに私は少し興味を惹かれるが、やはりタイトルの分からないものを買う気にはなれなかった。というのも、私はたまに映画を観る。本当にごく稀にだが、殊興味を惹かれたものをこの旧都で探し回って購入する。現在こうしてここを歩いているのも、それに付随する理由が在ったからだ。付随というよりも、本来はそちらが主たる「趣味」だった。

私はあやしく立ち並ぶ店の一つに入ってしまった。店内には楽器を演奏する人間の描かれたポスターやらよくわからん楽譜やらが乱雑にごった返している。しけた木製の棚にはレコードや、これまたよくわからない円盤の入った薄い箱——CD-ROMというらしいが、私はこれを再生する機械を見たことがない。——が並べられている。

私はそれらには目もくれず、狭い店内の端の方の狭いスペースに向かい、新たに入荷されていた「それ」の二冊を手に取り、店主に小銭を数枚投げて店を出た。

それから私は通りの外れにある公園へ向かった。その公園はどの公衆の為にどの機関が設けた広場かはわからないけれど、少なからず

地霊殿の管理する所ではないという。

公園はフェンスによつて真四角に囲まれていて、入り口の傍のフェンスには『夜間進入禁止』の看板が貼り付けられていたが、昼も夜もないこの地底でこんな看板は意味を成していない。挙句、公園に設置された照明も一日中休むことなく照らされているので、私はその看板を見るたびにちぐはぐな印象を感じずにはいられなかった。公園はそこそこの広さを有している。地面は赤茶の土だったが、生意気にもフェンスの内側を沿うように草木が茂っていた。公園の中心から東西南北の四方にベンチが設置されていて、私はそのうちの一つに腰を下ろした。

公園の入り口に自転車が置かれていたのが気になったが、理由はすぐにわかった。私の座った向かいのベンチに若い男女が仲睦まじく座り、談笑をしていたのだ。この地底で地上でもまだ珍しい自転車を見るなんて、と思っていたけど、若い男女なら納得できる。おおよそ、地上の男女が自転車に二人乗りをする姿に憧れたのだろう。地底に住むやつにははなかなか健全で、うん。なかなかよろしい。

私はそんなことを考えながら道中買ったソーダ水に口をつけた。ソーダ水は薄く赤く、そして甘かった。おそらく赤くて甘い何かを割ったものなのだろう。品書きにはソーダ水としか書かれておらず、未だに何が入っているのかわからないままだった。未だに、というのも私は存外これが気に入っていて、この公園に来るときはいつもこれを買って来るのだった。

私はソーダ水を口から離して、脇に置いた。いよいよという気分です店で買った二冊のそれを眼前に持つてくる。

「おおー」

二冊の『洋画のパンフレット』を交互にみやり、私の口からは思わぬそんな声が漏れ出していた。しかし、私はそれほど感動しているわけでもなかった。これは半ば無理やり趣味を探した結果、気づけば習慣と化した趣味であり、同時にこの感嘆も習慣の一部なのだ。パンフレットは薄いビニールで梱包されていて、ビニールが照明の光を反射してテカテカとしている。よく見るとパンフレットには小さく折り

目がついてしまっていた。袋にも入れず手で持つてきてしまったせいでだろう。私は何度か同じ過ちを繰り返しては、家に帰りパンフレットにアイロンをかけながら、やっぱり袋をもらっておけばよかったかなど、反省するのだった。

パンフレットは白いくたびれたシャツをきた白人の少女が石のブロックに座っているものと、これまた白人の金髪の青年がイヤフォンを付けてなにやら踊っているような場面を切り取った絵が描かれているものの二冊だった。奇遇にも二冊のパンフレットに書かれたタイトルはピンク色で、“F”から始まるものだったが、あとはごちゃつとしていて読み取れなかった。実を言えば私は英語が読めないのだ。それでも、パンフレットを開いて映画の内容を想像するのは楽しかったし、表紙の一枚絵を眺めるのも面白かった。早速ビニールの梱包を開いて中を見てしまおう、私がそう考えたときだった。

私の視界の端に、不思議なものが映ったのである。

視界の端の“不思議なもの”に視線を移し注視すると、それは奇妙な光景だった。先の向かいのベンチに座る若い男女が“A”をしているのではないか。私にとって、それはとても奇妙な光景だった。果たして私が向かいのベンチに座っていることに気がついていないのだろうか。しかしよくよく考えてみれば、あの二人は盲目のアベックなのかもしれない。私は自分の浅慮を恥じた。そういうことなら、仕方ない。むしろ悪いのは私の方だ。

私が盲目の二人に対し申し訳なく思いつつ席を立ったそのとき。

“A”をしている男と“目があった”。瞬間、私は猛烈に腹が立つて、彼奴等の停めていたママチャリを出来るだけ大きい音が鳴るように蹴飛ばし持ち主達が恐れ慄き公園から立ち退く様を妄想、しつつ公園を後にした。実際にそんなことはしない。

公園を出て、私は家路を辿る。目抜き通りへ抜けて、通りを出れば、橋を渡る。そうした帰路の最中、私は所謂恋愛について考えていた。

かつて恋愛は、私の空想の世界において赤いイメージを保っていたが、いつのまにかその色はくすんでいた。時としてそれは、限りなく黒に近い緑色の汚濁に塗れて見えることさえあった。連想の流れの

中で、恋愛なんて綺麗なものじゃない、なんて、そのような「よく聞く言葉」が私の脳裏を何度も過ぎった。

しかし、趣味でパンフレットを集める最中に私が気付いたのは、恋愛映画の多さだった。私はパンフレットのみを集めるだけで、それ自体はあまり観たことはなかったけれど、恋愛映画の多さの理由は分かった。単純に、それを観る人間が多いからだろう。パンフレットに描かれる男女や、切り抜かれたシーンはどれも綺麗で、なんとはないロマンを感じた。だから、それを観る大勢の人間が期待しているのは「綺麗な恋」なのだと思う。それがどうして、実際色恋に絡まった人物は口を揃えて「きれいなもんじゃない」なんて言っていて、意味ありげな微笑を浮かべるのだろうか？ 私には、その理由はなんとなく、色恋の色にあるように思えた。

そも恋愛の付属品のように扱われている肉体的接触は、果たして必要があるのだろうか。別に、それ自体を否定するわけでもない。経験はないが、それ自体は汚いものではないのだろう。きつと、恋人同士で抱き合って眠るのは、恐らく幸せなことに違いない。では一体、何が恋愛を綺麗さから遠ざけるのだろうか。

ああ、もしかすると、あの目かもしれない。先程公園で目が合った、男のあの視線。あの視線が、私を辟易とさせるのみならず、色恋沙汰の行間に曖昧に突き刺さる、魚の骨なのかもしれない。

こんなことを考えていると、自分の自画像がコウノトリやキャベツ畑で彩られていく気がして、とても馬鹿馬鹿しい気分になった。しかしそれでも、「綺麗なものではない」と分かっているのなら、せめてそれを出来る限り綺麗にしようとは思えないのだろうか？ これほど多くの人や妖怪がいたのなら、綺麗なだけの恋が一つくらいあってもいいじゃないかと、私の思考はそのように、遊泳を続けたのだった。

我があばら家に着く頃に、私が導き出したのは「私に恋愛は解せない」という結論だった。も、どーでもいいーや。そもそもどーでもいい。そんな投げやりな心で弾みをつけて、私は自宅の戸を開けた。

家について木板を踏みつけ、部屋への敷居をまたぐ。褪せた畳は日

頃清掃をしても、どこか汚れた印象があった。部屋の隅の方に置きっ放しのアイロン台にて、慎重にパンフレットについてしまった折り目を伸ばした。無事折り目の伸びたパンフレットはどこかパリツとした感触を帯びて、私にそれを開くのを躊躇させた。このまま仕舞ってしまおうか。悩んでいるうちにお腹が空いたことに気がついたので、ご飯を食べてから決めることにした。

なんだかんだで、私はベッドの上にて二冊のパンフレットを開き、それを交互に眺めている。英語は読めないが、何とはない異国の情緒に想いを馳せるのは楽しかった。

「こっちの映画と、こっちの映画は、同じ国が舞台なのかな」

それすらわからなかったけど、どちらのパンフレットの映画も観たことがない私にとって表紙に描かれた青年と少女はどこかお似合いな気がして、でっちあげたキャラクターや関係を二人に当てはめては空想に耽った。そのうちに眠気がやってきたので、私はパンフレットを閉じて、専用の棚に仕舞って眠ることにした。

棚の中には今まで集めたパンフレットが色ごとに分けられていて、赤っぽい、緑っぽい、白っぽい、黒っぽい等々、それぞれが割合整然と並べられている。灰色などの中間色にはいつも悩まされるのだが、今回買ったパンフレットの二冊はどちらも明確に白か黒で区分できた。くたびれたシャツを着た少女の描かれた白いパンフレットは白っぽいところに重ねて積んで、踊る青年の描かれた黒いパンフレットは同じように黒っぽいところに重ねた。そうしてその日、私はようやくすつきりした気持ちになって、眠りについたのだった。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 2

「トランプぐらいしかないけど」

「ダウトやろうよ、ダウト」

数日経って、私はまた洞穴の中の桶に腰を下ろしていた。それぞれの席には互いが軽く向かい合うようにヤマメとキスメが座っている。

「三人でやったって仕方ないでしょ」

「わたしは意外と、楽しいと思うけどなー」

ダウト、と呼ばれるゲームのルールを知らなかった私は黙って二人の会話を聞いていた。別に、ヤマメやキスメと遊ぶのが面白くないわけではない。この前勝手に帰ってしまったことも別段問題にならないかったことを、私は安心しているくらいだ。ただ、私にとつて最近の二人はどこか違和感があった。なにかイヤに上機嫌なのだ。今日なんて、二人は上機嫌に手を繋いで私の家の前までやってきたほどである。そんな上機嫌な二人に対して「ルールを知らない」などと言おうものなら、面倒なことになる気がして、私は極力余計な口を挟まないように努めているわけだ。

「ポーカーは？」

「いいね。なに賭ける？」

「命」

「物騒だよー」

ポーカーは知っていた。映画で見たことがある。なんなら一度、やってみたくてたまらなかつたくらいだ。あの映画は、何回か見返したっけ。まあそれでも、パンフレットを眺めてた時が一番楽しかったけれど。

「わたしは桶を賭けるよ」

「じゃあ、あたしは糸を賭けよう。パルスイは？」

二人してずるかった。キスメはまだいいとして、ヤマメに関してはノーリスクじゃないか。そりゃ、何かしら負荷はあるのかもしれないけど。

私は仕方なく現金を賭けることにした。悲しいかなわたしにはそ

れ以外の持ち合わせがなかったのだ。

「さつすが、パルスィは大人だなあ」

「クールだね、飄々としてるね」

二人して私の金をもう手にしたような笑みを浮かべている。私はポーカーの経験こそないが、しかし何がどうして自信はあった。見てろ、桶と糸を全て掠め取ってやる。いらないけど。

「お、パルスィが何だか自信ありげな感じだ」

「わたしは負ける気がしないよ」

キスメの自信たっぷりな発言で多少怖気付いた私は或ることに気づいた。私は、三人でやるポーカーを知らなかった。特に信心の持たない私だったが、この時ばかりは心の中で祈ってしまった。ああ猿田彦よ。どうか私の財布を……。

「ぐえー。もう糸でないよう」

「わたしの桶がすつからかんだよう。まあ、元々何も入ってないけど」
勝負は私の圧勝だった。桶と糸が、私の傍に積み重なっている。三人のルールは案外すぐに解ったし、入る手によってコロコロ変わる二人の表情はもはや私を呆れさせた。神に祈るまでもなかったかな。私は先程猿田彦の膝下に置いてきた信心が何となく惜しくなって、心の中でそれをさつと取り返しては懐に収める様をイメージしてみたりした。

「うう、パルスィはこういうの強いんだなあ」

「ほんと。私たちの手、全部読まれてるみたいだったね」

勝負の最中、二人をよく観察——今となっては、「よく観察」するまでもなかったな、と思う。——して気付いたことがある。二人の席が、やたら、近い。最初は、なにか二人で談合して私の現金を奪う策略かと考えたのだが、一寸経つと、どうやらそうではないと分かった。そうしてすぐに、二人の席の近きこそが、最近の二人に対して私が抱く違和感の正体なのではないか、と、そう思い至った。

「ポーカーはもうだめだな、他のゲームをやろう」

「わたしはポーカー以外なら、誰にも負ける気がしないよ」

キスめの自信をポーカー同様に砕いてやることにも興味のあった私だが、一先ずは気になる二人の席の近さについて、遠回しに尋ねてみることにした。

すると二人は「あれ？」といった顔を互いに向き合わせたのち、私に向き直って「あれ？」と言葉を紡ぎ始めた。

「言つてなかつた？ あたしたち、付き合つてみることにしたんだ」「うん。話してるうちに『ふいーりんぐ』が合うんじゃないかってね？」

「ねー」

二人があんまりさらつと述べるものだから、私の中のあらゆる思考に先立って「なんとなく、ずるいな」という感慨だけが湧き上がった。

その後出来る限りの平静を繕つて、いつも通りに二人と別れた私は一人、旧都へと歩き始めた。二人と別れて旧都へ向かうのも、半ば習慣のようなもので、旧都へ向かう最中、あれこれと考え事をするのも、いつもの癖と云つても過言ではないだろう。

ヤマメとキスメが付き合い始めたからといって、二人にしてみれば、私はひとりの友達であることに変わりはないのだろう。私にとつてもそれは同じで、二人は私の友人であることに変わりはない。でも、或いはだから、私からすれば、二人はなんとなくずるかった。もちろん、どちらか一方が羨ましいとか、妬ましいとか、そんな気持ちはない。もともと『いつもの三人組』というわけでもなかったけど、こんな風に急に、明確に、二人と一人となつてしまったのが、私にとつて寂しかったし、面倒だった。

しかし実際、それほど寂しかったわけでもなければ、面倒だったわけでもない。……とは言つてみたものの、本当のところは私にも分かっていなかった。私は何にしたつて、いつもこうだった。

例えば昔、なにかの記念日に——私の誕生日だった記憶があるが、私は自身の誕生日を覚えていない。——ヤマメとキスメが盛大にサプライズパーティーを開いてくれたことがあった。クラツカーを鳴らされたとき、飛び上がるほど嬉しかったけど、飛び上がるのはなに

かが違う気がして、私はそこまで驚いていないフリをした。実際、そこまで驚いてなかったのかもしれない。

そうして始まったサプライズパーティーの中には、二人のサプライズが幾つも潜んでいた。洞穴の装飾だとか、プレゼントだとか。それは嬉しかったし、私自身ちゃんと思べていたと思う。しかしパーティーの最後、二人がひた隠しにしてきた「サプライズケーキ」がいよいよもって飛び出してきた瞬間だ。私はそのとき嬉しさの反面で、やっぱりな、なんて感慨を抱いていた。二人に礼を言う最中、頭の中に「まあ正直、あるだろうなーとは思ってたよ」なんて言葉が浮かんで、その言葉が喉元までせり上げてきたのを、私は必死に堪えた。私は自分が信じられなかった。私のためにそこまでしてくれた二人に対して、こうもひどい言葉が浮かぶものかと、自分を責めずにはいられなかった。しかしまた、自分を責める私の思考の隣に、それを冷笑する自分がいたことも確かだったのである。私はいつもそうだった。

旧都へと向かう私の脳内はぐちゃぐちゃしていて、終いには「経験豊富」と自称する二人の「色々」を想像し始めていた。ときに、昔、世話になった年長者の妖怪から結婚報告の葉書が届いたことがある。その人から意中の相手がいるという話を何度か聞いていた私は素直に祝福したものだ。しかしそれからちよつとも経たないうちに、今度は子供が出来たという報告の葉書を貰った。本来、それだって祝福すべきことではあるのだけれど、私はどうしても、侮蔑に似た邪な感情を抑えきれなかったのを覚えている。私は今まさに、ヤマメとキスメに対しその時と同じ感情を抱いている。

そうして次第に、私の空想の中に在る恋というものの色は、くすんだ赤から限りなく黒に近い緑に塗れていくのだった。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 3

ときに、集中力がそれほど持続しないのは、人間も妖怪も同じらしい。私は疲れた頭をふらふらさせながら旧都の目抜き通りにやってきた。いつもの店に向かうべく通りを歩いて、例のお高い青果店に差し掛かったときだ。私の視界に、子供の妖怪が映った。それは二人組で、少年と少女というにはまだ幼い、男の子と女の子だ。男の子と女の子は青果店の前に立ち、二人で財布の中身をひっくり返して、小さな掌の上で小銭の枚数を確認し合っていた。ああ青果店に用があるに違いない。私は咄嗟に自身の財布に手をかけたが、瞬間自分の取ろうとしている行動に劇しい偽善の臭気を感じて、すぐに財布にかけた手を引っ込めた。

そうこうしているうちに、男の子と女の子は不安そうな面持ちで青果店へと入っていく。この青果店は春夏秋冬の影響を受けないこの地底で、年がら年中品揃えの変わらない店で有名だった。いつでも多様な果物が旬の姿で売られているらしく、その果物はどれも信じられないほどの高値だという。そんな店が旧都の貧困層のメツカである目抜き通り、その中心部に紛れ込んでいるのだから、不審がる者は多かつた。地底の木っ端達は、この青果店は外の世界と何かしらの方法で繋がっているのではないかと噂をしている。ちなみに地底の若い奴ら曰く、旧都七不思議の一つらしい。

私はそんな青果店の敷居を勇敢に跨いだあの子達は何だか微笑ましく感じて、しばし成り行きを見守ることにした。半分は、心配だったのもある。こうしているうちに、今にもあの子達が泣きだしてしまいうような顔で店から出てくるのではないかと、ひやひやしなからことを待った。

程なくして、男の子と女の子は嬉しそうに笑い合いながら堂々と店から出てきた。立派な果物のおまけ付きだった。ああよかった。気付けば、私はその子達に声をかけてしまっていた。

「や。立派なメロンだね。そっちはイチゴかい？うん、どっちも色がいいな。美味しそうだ」

急に声をかけられて驚いたのか、女の子はいかにも気の弱そうに男の子の背後に隠れてしまった。男の子は警戒したのか手に持ったメロンを大事そうに隠すように抱えて口を開いた。

「あげないよ」

その声は男の子の不安そうな表情に反して力強い声をしていた。男の子が私へと向ける懐疑的な眼差しに、慌てて弁明を始めた。

「ああいや、取ろうだなんて……」

……。

しどろもどろになった弁明に、男の子は「ふうん」と答えるのみだったが、多少警戒は解けた様子だ。しかし、私はここでようやく自身の不審者らしさに気がついた。また自身に抱かれているであろう印象を取り繕うべく言葉を紡いだ。

「えっと。二人は兄弟かな、仲が良さそうだけど」

私の思いつく限りの当たり障りのない質問に、男の子は一瞬ギクリ、という表情をした。すると瞬間、それまで男の子の背に隠れていた女の子がひよっこり顔を出しては、澆刺として口を開いた。

「付き合ってるの！」

嬉しそうに言っただけのける女の子を尻目に、男の子は何だかバツの悪そうにはにかんでいる。

「果物買おうって、二人でお小遣い貯めてね、今日は折半なの」

「へえ、折半なの」

「うん。イチゴとメロンをね、二人でひとりじめにするんだ」

女の子は嬉しそうに語った。男の子は終始照れたようにそつぽを向いていた。私にとってそんな小さな恋人達は、とても微笑ましかつた。やっぱり、あの時、自身の財布を取り出さなくてよかったな、と思う。私は二人に当たり障りなく別れを告げて、また歩き始めた。

いつもの店に新たなパンフレットは入荷されていなかった。なんだかんだで三日に一回は訪問するのだが、新しいものが入荷されるのは一ヶ月に一度が関の山だった。それほど落胆することもなく、私は公園に向かった。道中赤いソーダ水を買って、公園に入った。入り口に駐輪されていた自転車は不穏だったけど、私は気にせず、そのまま

自分の定位置のベンチへ歩いた。そうして、私は例のアベックの“A”を眺めているというわけだ。

しかし、私の心は凩いでいた。地底に流れる風はいつも通り重く澱んでいたけれど、私の心には清々しい風がそよいでいたのである。それというのも、あの子達のお陰だった。あの子達はきつと今頃、綺麗などだけの恋の渦中にて、メロンとイチゴを二人で独り占めに行っているに違いない。そんな二人を思うと、向こうのベンチに座り“A”を営むアベックも、かつてあの子達のように純粹だったのだろうかと思えた。そしてAを続ける二人は、その純粹さと地続きの地平にいるのだろう。それを思えば、以前あのアベックに感じた嫌悪感が、その行為よりもよっぽど汚れたものに思えたのだ。

私はソーダ水に口をつけて、二人のAを穏やかな気持ちで眺めていた。時々、男と目が合うのが気になるけれど、二人の行為はきつと、とても綺麗な感情の上に成り立っているのだ。

おや。少し様子が変わってきたぞ。男が女の体をゆっくりとさすっている。女の方は怪我でもしているのだろうか。

おや。男の手が女の懐へと入っていつてしまった。なんだろう。男の手が、女の胸元を、まさぐっている。

ああ！Bだ！

私は途端に猛烈な不愉快さを感じて、思わず彼奴等の停めていたマチャリを出来るだけ大きい音が鳴るように蹴飛ばして持ち主達が恐れ慄く様を無視するように公園を後にした。公園を出る際、胸中で二度と来るなど二人に向けて叫んだが、実際に公園を出て行くのは私だったので、なんだかチグハグな気持ちになった。

公園を出て旧都の路地を歩いていると、私はすぐに後悔した。何が何でもやりすぎたのではないか。そもそも、今回はあちらが先客だったわけだし、それを察知していたのにも関わらず、ずかずかと二人の空間に侵入した私に非があるのではないか。そんな心の反面で、私は自分の中にムカムカとした感情も覚えていた。あの子達に対しての得も言われぬ怒りもあったが、なによりも、あの子達の行為に、行為の最中私に向けられた男の視線に絡みついた欲望に、私の心は荒らさ

れていた。

空想の中の恋のイメージは、もはやくすんだ赤や黒に近い緑なんて通り越して、ドブに塗れていた。その色は、橋の上から見下ろす川に酷似していて、川の水は今にも溢れそうなほど嵩を増して、私は胸が詰まるのを感じた。右手に握るソーダ水の入った容器はイヤにぬるかった。私は気の抜けた、ただ甘いだけの赤い何かで割られた水を飲み干して、或る場所へ向かった。

そこには沢山の人があった。とはいえ、その場に集まるのはどこか訳あり顔のやつばかりで、真に真つ当な者は誰一人いないような気がした。橙や薄紅の提灯が照らす通りに立ち並ぶ店の店先には、美しくもあやしい着物を着た少女らが艶かしく座り込んでいる。店と店に挟まれた通りはごちゃごちゃとしていて、道行く者はみな互いに肩をぶつけながら歩いて行く。しかし、肩がぶつかったところで謝罪する者はいなかった、それどころか、誰もそれを気に留めていないのである。ここに集まる者は一樣に、緩い共犯意識めいた線で繋がれて、この通りを歩いていた。

ここは遊郭だった。私はそんな共犯意識を他人で割ったような人混みに紛れて、通りをうろついていた。ここには何もなかった。恋もなければ、凡ゆる諍いもない。口論、盗難、恋、暴力。ここでそれが行われようと、誰一人それらを気に留めない。誰一人、それらを認めない。綺麗ではないけど、汚くもない。ここは究極的に、何も無い場所だった。響く喧騒はどこか虚しく、空虚だった。

そんな喧騒の中を曖昧に泳いでいると心地がよかった。あつてもなくてもいいような場所に、いてもいなくてもいいような人々の流れに紛れ込むのは、とても落ち着いた。

店先の少女達の中には妖怪もいたし、人間もいたし、両方のなりそこないもいた。酔いさらばえた老人や、かろうじて青年を保っている男が、少女達に声をかけては店の中へと消えて行く。店の中で行われるであろう行為はもはや公然に判明していて、それは恋愛の上に行われるそれよりも、ずっと清潔なものに思えた。

しかし、私はそれをするわけでもなく、ただ彷徨い続けた。そんな最中に、ここでは少し珍しいものを見かけた。人混みの中で腕を組んで歩く男女の番이었다。それは恐らく恋だった。ここでは誰も気に留めないそれが、今日の私にはそこはかとなく目について、思わず立ち止まって眺めてしまう。腕を組んだ番いはこちらへ向かって歩いてくる。男の方はどこか公園のBの青年と似ていたけれど、それよりもずっと端正な顔立ちをしていた。男よりも、私の目を引いたのは女の方だった。女というには幼い体つきで、その線の細さは心許なさがあり、女というよりは少女と言った方が正鵠に近いだろう。なによる少女は人間らしかった。少女には妖怪的な身体的特徴は見受けられず、どこを見ても、その体は人間であることを示していた。

この地底において人間の少女というのは珍しく、とりわけこの遊郭で稀に見かける程度なもので、皆一様に高かった。そんな人間の少女が、この場所で男と腕を組んで歩いている。私はやはり、その光景に恋の気配を感じずにはいられなかったのである。気がつく、番いは私の殆ど眼前に迫って来ていた。私はじつと立ち止まってそれを眺めていたものだから、慌てて視線を逸らして擦れ違おうと身体を動かした。その瞬間、番いの男の方が信じられないものを見てしまったような慌てぶりで、そそくさと踵を返す。組んだ腕は解き放たれ、少女も青い着物を揺らしながら、慌てて男の後を追った。何が起こったのだろう。私が不思議に感じて首を傾げると、不意に背後から声がした。

「困るんだよなあ、ああいうの」

振り返ると、星熊勇儀がそこに居た。ああ、やっぱり会ってしまった。

「別にいいじゃないあのくらい。見逃してあげたらいいのに」

「地底にルールはないけど秩序はあるんだよ。特にこの場所では、それを守ってもらわないと困る」

この遊郭は星熊勇儀の管轄だった。というより、勇儀本人がこの場所を創ったのだ。

「いや、別に私だって駆け落ちしてどっかに消えちまおうってやつら

を止めやしないよ、邪魔だつてしない。ただ、あの男はなあ」

勇儀はそこで言葉を止めたけど、勇儀の言わんとすることは何となく解ったので、私は特に追及はしなかった。そんなことよりも、私はこの星熊勇儀とまとも出会ってしまったことを悔やんでいた。

「そんなことより。お前はまたこんな場所に来て。また『悩み事』か？」

私は勇儀に『悩み事』を打ち明けたことは一度としてなかった。しかし、私がここに来るたびに、勇儀は私の胸中を見透かしたように声をかけて来た。

「別に」

「別につてな。お前、そんな顔して別にはないだろう。なんで来た？」

そもそも、お前はこういうところは嫌いなんだろう？　こういう、色恋に溢れた場所は」

「そんな沙汰、ここにはないでしょ」

私が言葉を返すと、勇儀は笑って、わざとらしい口調で答えた。

「何を言うか。こんなに恋に溢れている場所はないぞ。偶然同じ空間に居合わせた男女が、偶然恋に落ちて、一夜の果てに恋が散る。そんな奇跡的な光景が当たり前のように溢れているのがこの場所なんだから」

「それは外の世界の言葉遊びでしょ。それも、オヤジくさいやつ」

「ははは。そんなオヤジくさい場所を、お前はまた冷やかにきてると」

「はあ」

私はなんだか馬鹿らしくなつてきて、ここを出ようと考えた。

「まあ、すぐに出て行けとは言わないが。そんな可愛い顔して歩いてたら、色々間違われても文句言えないんだからな。ほどほどにしておくといいで」

私は勇儀に返事をしてから、しばらくは通りに居残った。勇儀の言う通りにした、なんて思われるのが、ちよつと癪だったからだ。尤も、そんなことを思うやつは、ここにはいるはずもなかったけれど。

気付けば私はまた公園にいた。いつものベンチに座つて、赤茶色の

土を踏み締める自分の靴をぼんやりと眺めていた。入り口の自転車は消えていて、同じく、Bのアベックも見当たらなかった。靴をぼんやりと眺めていると、私はなんだか、やっと落ち着いた気がして、大きく息を吐いた。

暫しぼーつとしてしていると、私の脳裏には何故か遊郭で見た人間の少女が浮かんでいた。綺麗な青い着物のあの少女。線の細い華奢な体つき、心許なさのあるあの幼い顔立ちは、誰かと似ている気がしたのだ。例えばそう、目と鼻の先の、古明地こいしなんかとよく似て……うわあ！

いつのまにか、私の目の前に顔があつて。

「あはは。びつくりした？ どーも、お久しぶりです。古明地こいしです」

古明地こいしは笑いながら、屈んだ姿勢をやおら伸ばして、そこに立っていた。地底の風に靡いた彼女の髪は、翡翠の色とも、浅葱の色ともとれぬ色をして、揺れた。公園は、なんとなく、夕暮れの色をしているような、そんな気がした。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 4

「実は今日、こいしはずっとあなたの後をつけていたのです」

古明地こいしと初めに会ったのは、確か、まだこの公園にブランコがあつた頃だつた。

「あなたは今日、友達が気付いたら付き合っていて、果物を買う可愛い恋人達と出会って、公園で自転車を蹴飛ばして、あやしい場所のあやしいカップルを眺めました」

古明地こいしはそのブランコに座って、一人でゆらゆら揺れていて。

「そうしてあなたはまた、この公園に戻って来ました。そのときにはもう、自転車はなくなっていて、公園にはあなた一人だけが取り残されました」

その時も、昼も夜もないこの地底の、照明に照らされただけの公園が、何故か夕暮れめいて見えたのを覚えている。

「あなたは一人、赤土を踏み締める自分の靴をぼんやり眺めていました」

その際に、私はこいしと何か話したっけ。声をかけた気もするけれど、何もなかったような気もする。

「果たして靴を眺めて何を考えていたのでしょうか。……もしかして」

それから、こいしはよく私の前に現れるようになった。ヤマメやキヌメと遊んでいるときなんかにも現れて、子供みたいにはしゃいでは帰っていった。でも、こいしはたまに、よくわからないことを言うこともあつて。だから、私にとって古明地こいしは「よくわからない子供のようなやつ」或いは「古明地の」妹という、やはりよくわからない存在だつた。

「もしかして……羨ましくてたまらない！私も恋人欲しいなー！みたいなこと、考えてたんでしょう？　ね、そうでしょ？」

「ちがう。そうじゃない」

私は極めて冷静に答えた。だって、違うんだから。

「えー！ そんなこといってさー、ほんとは考えてたんじやないのー？ あまーい運命に受動態でいたいフリしてさー、狙ってたんじやないのー？ 狙って、公園とかあやしい場所を練り歩いてたんじやないのー？」

こいしは無邪気に、可笑しそうに私に問いかける。たまにこういう日があった。こういう日のこいしはしつこいし、面倒だ。も、帰りたいな、私。

「ええ。そう、その通りよ。それじゃあね」

「待ったあー！」

ああ、上機嫌だ、ハイテンションだ、面倒くさいなあ。

「じゃあさ、じゃあさ」

「なによ」

「こいし、今日からあなたの恋人になってあげる」

「あ？」

「それじゃ、先にお家で待ってるから、早く帰ってきてね」

ああ急がなきゃ間に合わないよう。そう言って、こいしはその場を走り去った。家を教えたことはなかったけれど、私は心の中で神に祈った。ああどうか、彼女の言う「お家」が私の家じゃありませんように。

「あら？」

公園を出ると、今最も会いたくないやつがいた。そいつは果物のたぐさん入ったバスケットを下げていて、買い物帰り風の出で立ちでそこに立っていた。ちなみに、バナナがやけに多かった。たぐさんの黄色いそれは、妙に私の不安を煽る。

「……みてたの？」

私が言うと、そいつはきよとん、とした顔をした。私はしまった、と思った。

「……いま、視ました。こいしがご迷惑をお掛けしたようで、私から謝

罪します。うちのこいしが、ごめんなさい」

今最も会いたくないやつランキング1位、古明地さとりは、そう言つて、ゆつくりと頭を下げた。私は今にも逃げ出したかった。普段さとりに覗かれる分には気にしない。でも、今日だけは視られたくないものが、たくさんありすぎた。さとりは頭をゆつくりと上げて、徐に口を開いた。

「まあ、そんな。あなたが気にすることないじゃないですか。悪いのは、こいしなんですから」

ああ、もう。

「だけど、私はこいしが心配で……。水橋さん、あなたなら安心してあなたの子を預けられます。良ければ、こいしが飽きるまで、どうか付き合つてやつてはもらえないでしょうか」

さつきまでご迷惑をお掛けして、なんて言つておいて、今度はそんなことを言うなんて、ああ、変な姉妹だなあ。帰りたくないなあ。

「ええ、ええ。もし、あなたのお家にこいしが居たら、でいいんです。居なかつたら、それはもう、思う存分放つておいてあげてください」
居なかつたら、無論そうするつもりだったけれど、いざ帰つてこいしが居たら。そのことについては恐ろしくて考えていなかったのに、古明地さとりは有難くも私にそれを想像する余地をくれた。

「それじゃあ、私はこれで失礼します。ああ、橋姫の子のあなたなら、私も安心です。しばらくの間、こいしはあなたの傍にいます。こいしの所在が掴んでいるだけで、ふらふらされるよりはずっと、安心できます。水橋さん、本当にありがとうございます。それでは」

今まで私は、彼女のことを周りが言うほど嫌つてはいなかった。彼女が嫌われ者と呼ばれることの理由自体、いまひとつピンとこなかったほどだ。しかし、今回で古明地さとりに対する評価は変わった。やはり、嫌われる者にはそれなりに、嫌われる理由があるのだと、私は思った。

緑の瞳に映る恋く青春。パンク編 5

路地から目抜き通りへ、通りを抜けて橋を渡って、暫し歩き。とうとう私は我があばら家の前まで辿り着いてしまった。帰り道、古明地の姉妹について考えた。私は古明地の姉を、やはりそこまで嫌いにならないこと、古明地の妹は、ちよつと嫌いになりそうなこと。楽しい思索の旅ではなかったが、家路への足取りを鈍らせるには十分だった。部屋の中の時計を見ればきつと、いつもならもう晩を食べ終わった時間だろう。時計を見るまでもなく、私の胃袋がその時刻を告げている。

ああ、なぜ自宅に帰るのにここまで怯えなきゃいけないのだろう。私は恐る恐る、我が家の戸をノックした。物音を聞き逃さないように、耳を澄ます。

……。

何も、聞こえない。

私は心の中でガッツポーズをして、今までの恐れをかき消すように勢いよく戸を開けて、勇み足で上り口への敷居を跨いだ。狭い廊下の先に目をやれど、そこにはどこか安心する、いつもの薄暗い闇が在った。よかった、部屋の電気も付いていない。やはり、古明地こいしの云う「お家」とは、彼女の自宅、地霊殿を指していたのだろう。私は地霊殿で私を待ち続けるこいしを想像して、少し胸が痛んだが、それを上回る安心感が胸のうちに湧き上がった。

ほつ、として、靴を脱ぐ。少し屈んで、下方へ視線を落とす。私の履いている靴の右方に、見慣れない靴があった。私の履くそれよりもサイズの小さなその靴は、私に翡翠の色とも浅葱の色ともつかぬ衝撃を与えた。

「おかえりなさい」

「うわあー」

突然背後から聞こえた声に、私は情けない悲鳴をあげる他為すすべがなかった。幻聴を祈って振り向くと、悲しいかな、やはり古明地こいしが立っていた。それはもう、ニコニコしていた。

「遅かったね。はやく帰ってきてねって言ったでしょー？ もう。帰ってこないんじゃないかって、心配だったんだから」

「ご、ごめん。や、ちがう、ごめんじゃない。えっと、なに？ 待ってたって、何処で」

「ここぞ」

私はもう若干混乱して、状況のわりには当たり障りのないことを問いかけてしまった。その当たり障りのない問いかけに、古明地こいしはざらりと三文字で答えるものだから、私はそのまま、流されるように会話を続けてしまう。

「だって、家に居なかつたじゃない。電気だって、消えてたし」

「ノックの音が聞こえたから、驚かせようと思ってこっそり外に出たの。えへへ」

「だって、上り口は……」

「裏口があるでしょ。……自分の家だよねー？」

「あ、ああ……」

「あのね、ご飯を作って待ってたの。まだあつたかいと思うから、はやく食べちゃおうよ」

客観的な視点から言えば、私は可哀想なほどに混乱していた。古明地こいしの、私を驚かせようという企みは悔しいけれど大成功だった。古明地こいしはそんな、哀れなほどに狼狽する私の手を引いて、はやくはやく、と急かすように部屋へと導いた。殆ど腰砕けの様相で、かろうじて二本の足でのたのたと這う私に対して、古明地こいしは朗らかに言葉を投げてきた。

「あはは。思ったより驚いてくれたみたいで嬉しいな。なんかもう、電気つけただけで驚いちゃいそうな感じ」

「あ、あるか。そんな、小動物みたいなこと。それより」

「じゃあ、電気つけるねー」

古明地こいしは私の言葉を遮って、カチツ、と紐を引っ張った。一寸の間をおいて、チカ、チカ、と光が点滅して、三回目あたりで点滅は途切れた。

明るい光が部屋を照らして、私は絶句した。

「あ！ やっぱり驚いてる。ね、ね、どう？ カラージャービル？
ピーターラビット？ ジュウシマツ？」

「私の……私の部屋……」

家具の配置が、全て変えられていた。唯一そのままだったのはベッドのみで、テーブルも、アイロン台も、衣装タンスも、身鏡も、全てが未知の座標に鎮座していた。私はハツとして、パンフレットを入れた棚の姿を焦って探した。そのとき私は頭の片隅で、小さい頃に火遊びをして家を燃やしそうになったときのことを思い出していた。頭の片隅から炎は燃え広がった。それは紛れもなく焦燥で、私は灼熱の焦燥感に焼かれながら目をキョロキョロさせて棚を探す。左、ない。右、ない。後方、は廊下だ！ 正面、ない！ いや、あった！ よかった……。

正面に置かれたベッドの脇に、棚はあった。瞬間、燃え広がった焦燥の炎に冷水が注がれて、私は全身の力がへなへたと抜けていくのを感じた。

部屋に電気がついてから五秒も経っていないはずだったが、体感ではその何十倍の時間が経ったように思えた。脱力する私を尻目に、古明地こいしはあっけらかんと口を開いた。

「家具は使いやすいように動かしておきました！ それより、ご飯も用意したんだから、冷めないうちに」
「あ、ありがと……」

棚が無事だった安心感のあまり錯覚を起こした私の口からは、あるうことか感謝の言葉が零れていた。そのまま流されるように食卓を挟んで、こいしと向かい合うように座り込んだ。すでにテーブルに並べられていた古明地こいしお手製の料理は彼女のイメージからは想像ができないほどの純和風なラインナップをしていて、それはそれで驚きだった。

「いただきます」

「いただきます……」

棚を無事でいさせてくれた上に、ご飯まで用意してくれるなんて。錯覚に支配されたままに、私は箸を動かした。味は感じられなかった

けれど、多分、美味しかったのだと思う。

「ごちそうさま」

「お粗末様でした！ ……あ、お皿洗うね」

「いいよ、後で」

「でも」

「いいから座って」

「すぐ洗わないと、落ちにくいんだよ」

「私が洗うから、いいってば。それよりほら、座って」

「ご飯を食べている最中に冷静さを取り戻した私は、彼女と色々話さなくてはならないと考えた。しかし、なにかから話せばいいのかは、未だまとまらないままでいる。彼女、古明地こいしに部屋を綺麗に荒らされたこと、古明地こいしが私の恋人をやるということ、人の家の食材を無断で使用したこと、私の頭は滅茶苦茶に荒らされていた。

「えつと、まず。そうね」

「なんですかー」

「ええと」

「なんですかー」

どこか間の抜けた口調で問い詰めてくる彼女に少量の苛立ちを覚えつつも、私は必死に言葉を紡いだ。

「まず、そうだ。人ん家の食べ物、勝手に使うのはよくないわね」

「美味しかった？」

「味がしなかったわ」

「え、ほんとに？ もしかしてこいし、舌がおかしいのかな」

「いや、まあ」

おかしいのは舌ではなく別の箇所ではないか。そんな気持ちを押しさえ込んで、私は言葉を続ける。

「とにかく、それはよくないし。これもよくない」

私は言いながら、部屋を見回した。

「えー、だって。ベッドの傍にいろいろあった方が便利でしょ？ それに、棚のパンフレットは、よく取り出すみたいだし」

私はまたハツとして、立ち上がるが早いかパンフレットの棚に駆け寄って、開けた。

「ああー！」

私はまた、古明地こいし驚かされた。棚の中で色ごとに整頓されているはずのパンフレットが、ぐちゃぐちゃな色の順序で積まれていたのだ。

「パンフレットはアルファベット順に並べ替えておきました。えへへ」

「あんた、あんたね……」

悪びれもせず笑う彼女を見ると、なんだか怒るに怒れずに、私は正体不明のため息を吐いた。ため息の原因、その心当たりが無数にあつて、どれが私にため息をつかせたのだろう。そんなことを考えながら、私はまた彼女と向かい合うようにテーブルの前に座った。

「人の家の冷蔵庫、棚。開けちゃダメでしょ」

「なんで？ 勇者はみんなやってるよ」

「あんた勇者？」

「ううん。こいしはこいし」

そういやこいつ、以前は自分のことを名前で呼んでいただろうか。思えば普通に「わたし」と呼称していたような気がするけど。円滑に進まない会話の中で、私の思考は唐突に、そっぽを向いたのだった。それは多分、彼女との会話を早々に投げ出してしまいたい心の表れだったかもしれない。されど私は気を取り直して、私は彼女に向き直る。

「そもそも、人の家に勝手に入ったらダメなの。そういうの、泥棒っていうのよ」

「ここ地底だし、何もとってないし。そもそも恋人なんだもん」

「地底にはルールはないけれど秩序はあるのよ。……恋人じゃないし」

どこかで聞いた台詞が私の口から飛び出して、私は赤面した。こいしは今日、私の後をつけていたという。そんなこいしがもしその台詞が勇儀のものだと気付いていたなら、ああ。私はなんて恥ずかしいや

つなんだろう。

「それ、誰の言葉なの」

来た！ ああ、恥ずかしい。恥ずかしいなあ！

「さっきからアレがダメとかこれはダメとか言ってるけど、あなた自身はどう思ってるの？ 常識ではダメなことかもしれないけど、ほんとはそれくらいのこと、あなた自身は許せたりして」

「恥ずかしさに悶えていて、あんまり聞いてなかったけどどうやらバレてないらしい。よかった。」

「よくわかんないけど、私自身あんたが勝手に家に入ったからって、あんたをどうしようしよう、とまでは思わないわよ。知り合いの妹だしね」

「こーいーびーとー」

「恋人じゃない」

「ほんきでいってるなら、こいしは実家に帰ろうと思うんですけど」

「帰ればいいわ。ただし、明日ね。今日はもう遅いし、仕方ないから泊めてあげる」

「ほんと？ やった」

そうして私は皿洗いなどの雑事を終わらせて、あとは寝るだけの状態に至った。こいしにはお風呂も貸してやったし、予備の歯ブラシもくれてやった。こいしはその時、お泊まりセット——私はこの「お泊まりセット」という言葉が嫌いだ。——持ってきてるから、歯ブラシもタオルもいらさないよ、なんて言っていたけれど、面倒だから歯ブラシもタオルもくれてやった。

「それじゃあ私は寝るから」

あんたは向こうの部屋で寝なさいよ。と、付け加えて、私はベッドに潜る。向こうの部屋というのも、私の家は小さいながらに二部屋あった。一つは私が暮らすこの部屋、もう一つは私がかつて夜の闇を恐れるほどに幼かった頃、寝室としていた部屋だ。その部屋はそれから何年も使っていなかったし、もう入ろうとも思わなかった。理由はほんやりと浮かんでいるが、深く考えたことはない。私はそんな部屋を、招かれざる客の寝室に当てがおうというのだ。押入れの布団や床

は多少埃をかぶっているかもしれないけれど、そこは我慢してもらわないと困る。確証はないが私はきつと、一人じゃないと眠れないタイプの橋姫なのだから。

「えー、やだ。あの部屋埃っぽいんだもん」

ベッドに入って早々に視覚を遮断した私の聴覚に聞くと疲れる声が響く。耳にも瞼があればいいのに。

「入ったの？」

「うん。あの部屋ずっと使ってないんでしょー？ 埃が絨毯みたいになつてたよ」

「……じゃあ布団だけ持ってきて。この部屋で寝ていいから」

少し忍びなくなつたので、私は仕方なく妥協することにした。しかし、そんな忍びなさや諦めの感慨は取るに足らないもので、私の心を真に占めた感情は、彼女に対する得も言われぬ怒りだった。というのも、私にとってあの部屋は何年も使っていない、それこそ取るに足らない、あつてもなくてもいいような部屋だ。本来なら誰が勝手に入ろうが気にならないはずの部屋。それがどういうわけか、彼女が無断であの部屋の戸を開いた事実が、彼女が今日起こしたどんな行動よりもずっと、私の心をかき乱したのだ。

「嫌だよー。部屋は少し掃除したけど、押入れは開けなかつたんだもん。布団も埃被つてるに決まつてるもん」

「……掃除まで」

腹の中で、怒りがむくむくと嘶くのを感じた。

「……わかった。ちよつと見てくるから、大人しく待つてて」

「はい」

けれど、それを彼女にぶつけるのは、何か違う気がした。何故なら、恐らくこの怒りの原因は、彼女の行動ではなく、私が何年もあの部屋の戸を開けなかつた、その理由にあるような気がしてならなかつたらだ。

狭い廊下を歩いてすぐに角を折れる。数歩進むと裏口がある。この裏口こそ、彼女が今日私を驚かせるべく利用した扉だ。そんな裏口の手前に、かつての寝室、その戸が待ち構えていた。ああ、ここに入

るのは何年振りになるだろう。そんなことをぼんやり考えながら、開き戸に手をかけた。

戸は意外なほどに軽く、さー、と音を立てて、開いた。

そこにはかつての寝室が、かつての姿を保ったままだった。照明から垂れる紐に括られた小さなぬいぐるみ。眠る前に本を読むために設置された花柄のついた小さなライト。そして、匂いまでもが、昔のまままで其処にあった。彼女、古明地こいしは「少し」と言っていたが、本当は「かなり」掃除してくれたらしい。だって本来はもっと、埃をかぶって、黴が生えて、見る影もなくなってるはずだったのだから。

胸中に湧いた感情を横目に、私は白々と押入れの中を確認して、部屋に戻った。

……。

「ね、結構綺麗だったでしょ？ こいし結構、頑張りました」

「ええそうね。お礼にあんた、今日はベッドを使っていいわよ」

「ほんとに！ じゃあ添い寝だね、恋人みたいだね」

はしゃぐこいしを無視して、私は食卓前の座布団を枕にして寝転がった。私はもう、なんだか疲れてしまって、なんでもいいから眠ってしまいたい気分になっていた。

「え、床に寝るのー？ ……わかった、あなたがどうしても添い寝したくないなら、今日はこいしが床で寝ます」

「そう」

招かれざる客とはいえ、あくまでお客の彼女を床に寝かせるのは如何なものか。私はそんな葛藤すらも、もうどうでもよくて、やおらベッドの布団に潜り込んで目を閉じた。

それからしばらく、私はベッドの横に彼女の気配を感じ続けた。きつと、何か言いたいことがあるに違いないけど。ああ、めんどくさいなあ。

「……なに」

目を瞑ったまま問いかけると、一寸間をおいて、こいしが徐に口を開いた。

「……今日はこいし、あなたに悪いことしちゃったかも。ごめんなさい」

「もう、いいわ」

たしかに私の疲れている原因は、彼女が作ったものかもしれない。でも、もうよかった。無論、どうでも。

「うん。……おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

「……とみせかけて」

えい！ とこいしが私の布団に潜り込んできた。けど、今日はもういい。何も言わない。面倒だから。彼女は、

「えへへ」

なんて笑いながら私の腕にしがみついてくるけど、それもどうでもいい。今日はもう、疲れすぎていた。

「……あんだ、明日は帰りなさいよ」

「はーい」

そうして私は眠りに落ちた。

その日私は、赤青黄色、黒白緑、翡翠に浅葱と、それらをぐちゃぐちゃに混ぜたような、酷くカラフルな夢を見た。言うまでもなく、悪夢だった。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 6

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまで」

あれから、食事は私が作っている。どこか間の抜けた印象を保有する彼女の作る食事が意外にも美味しいのが癪だったのもあるけれど、一番の理由は他にあった。今でこそ慣れてしまったけど、冷蔵庫を漁られるのが我慢ならなかったのである。

「胡瓜のお漬物、そろそろしょっぱすぎると思うんですけど」

「お漬物の味が濃ければ他のおかずが少なくて済むでしょ」

「ほんとはしょっぱいのが好きなんだけなんじゃないの？ なんでも濃いもん、味」

「さあどうでしょうね。あんたに帰って欲しくて、味付けを濃くしていいのかもよ」

「帰りませーん」

「帰ってよ」

……なんて言ったものの、私の適応力は心とは裏腹に、彼女いる生活に適応し始めていた。もちろん、隙あらば帰って欲しいと願っているのも事実だ。

「恋人が恋人の家に居るのがそんなにおかしいことでしょうか」

「まず恋人じゃないけど。恋人だったとしてもおかしいわ。恋人が帰って欲しいと願っていたなら、その気持ちを受け入れるのも恋人として大事なことじゃないかしら」

「それは誰が言ってるの」

「私でしょ」

「ほんとにー?」

「ほんともなにも、私の口から出た言葉は全部私のものよ。当然じゃない」

「えー」

こんなふうに、彼女は相変わらずに妙な問いかけをしてくるが多々あった。しかし私はそれにも慣れて、深く考えずに返答すること

も出来るようになったから驚いた。始めのうちは、それは誰の言葉なのさ、などと問いかけられようものなら、その度に私は混乱していた。私の口から出た言葉が私の物でないのなら、果たして誰の所有する言葉になるのだろうか。なんてちんぷんかんぷんな思索の旅を繰り広げては疲労したものだ。

「そうだおねえちゃん、わたし、そろそろ退屈で死んじやいそうなんだけど」

「退屈で死ぬるくらいなら地底の奴らはこんなに長生きしてないわよ。ほんと、暇なら帰つたらいいじゃない」

古明地こいしは気づけば私を「おねえちゃん」と呼び始めていた。しかしこれも紆余曲折があったのだ。無論、彼女の中で。私にはない。

始めは「あなた」だった。次に「パルスィ」、その次に「水橋さん」「ここまではまあよかった。しかし彼女の中でなにが起こったのか」「貴殿」、「水橋殿」と迷走を始めた。それから「パル公」「ぽつつあん」「八」と推移し、ある日唐突に「おねえちゃん」に落ち着いたというわけだ。というわけとは、どういうわけなのか。考えたらキリがない、というより霧だらけなので、私はそれから彼女の口から発せられる言葉については深く考えないことにしたのである。

ちなみに彼女自身の呼称も「こいし」から「わたし」に変わり落ち着いた。中間に「あたい」「あーし」「拙者」等があったが、もう思い返すのはやめにする。——ただ「拙者」からは少々似合いの雰囲気を感じたのだが、残念なことに聞けたのは一度きりだった。――

「だいたいおねえちゃんさ、私が居るのに全然構ってくれないで、いつも通りに公園行ったり、いつも通りにパンフレット見に行ったり、いつも通りに過ごすんだもん。しかも、それにすら連れて行ってくれないじゃん。一緒に寝るときだって、触るなー、なんて言ってる。しよーじきわたし、ほんとに恋人だって思われてるのか、不安で仕方ないんですけど」

「知らないわ、そんなの」

こいしを連れて行ってやってもよかったのだが、そんなことをすればこいつは“恋人として”調子付くに違いない。私は一つの線引きとして、彼女の同行を拒み続けていた。それに、一緒に歩いて居るところを知り合いにでも見られたら、きつと面倒なことが起こるに違いない。特にあの二人、ヤマメとキスメに見られるのは、なんとなく嫌だった。

一方で、私にとって古明地こいしが手のかかる妹味を帯びてきたのも事実だった。それは彼女が私を“おねえちゃん”なんて呼ぶせいもあつたのだろうけど、とにかく私は、彼女に対してそんな印象を抱き始めていたのだ。

もつとも、そんな感慨を白々と俯瞰する自分も在った。こんなに面倒見の悪い姉があつてはならない。私は自分が彼女に対して“手のかかる妹”なんて印象を抱き始めていることを、どこか滑稽に感じずにはいられなかった。血すら繋がっていないのに、一方通行の無意味な師弟関係を主張する、寒気のあるキャラ付けじみた幼稚な気色。

すると途端に、彼女とんでもない会話を交わすことすら滑稽に思えて、都度私は辟易として一人出かけに行くのだった。

「私、また出かけてくるから」

「えー、また急に行っちゃうんだ。……ね、今日について行って、いい？」

「だめ」

「もー！ わたし、グレちゃうんだからねー！」

内容の割には楽しそうに喚く彼女の声を背に、私は家を出る。このように、私は彼女、古明地こいしとの日々をやり過ごしていた。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 7

そんなある日のことだった。

目が覚めて朝食を取り終わると、彼女が出し抜けに言い放つ。

「おねえちゃんが全然デートに連れて行ってくれないので、今日はわたしがおねえちゃんをデートに連れて行こうと思います」

私は瞬時に樟脳味の倦怠を感じて、はあ、それで？ などと相槌を打ったが、実際のところ返答に興味もなかったし、そもそもどんな返答が返ってきたところでそれに行こうという気はなかった。

こいしは過剰に勿体つけた後にようやつと口を開いた。

「秘湯巡りを、敢行しようと思います」

「秘湯巡り」

彼女の口から放たれた言葉はデート、という単語とはかけ離れ、鄙びた浅櫃子色の響きを纏っていた。悲しいかな私にとってその鄙びた色、率直に言えば枯れたおっさんの陽気さと似たその色は、多少なりとも魅力的な色をしていた。

「浴衣も用意したのです」

「ゆ、浴衣」

おねえちゃんのはこつちね。と差し出された浴衣を、私はおぼずおぼと広げてしまった。それは卵の花の様な色をした着物で、朱色の小さな水玉で、朝顔の柄が可愛らしく結ばれている。帯は鮮やかな血液色をしていた。私は自分がこれを着た姿を想像しては、すぐにそれをかき消した。されど霧散したイメージはまた直ぐに集まって肖像を成す。私がそれをまたかき消していると、今度は頭の片隅で着合わせる為の靴を記憶の中に探し始めていた。

「ね。行こうよ。いいでしょ?」

「い、いや、えつと」

「お願いお願い」

「う、うーん」

「一生に一回のお願い! 五生(?) だから」

……。

「ま、まあ、温泉ぐらいなら。行つてやらん、ことも、ないけど」

「やったー！　じゃ、早速準備するね！」

「お、おうよ」

一生に一回のお願いであれば仕方ない。私は彼女の提案を魅力的に感じてしまった悔しさを遠くへ追いやるように、そんなことを考えながら、そそくさと出発の準備をした。ああ、滑稽だ。

「ね、ね。手を繋ごうよ」

「イヤ」

彼女の案内に連れられて、私は地底の深部まで来ていた。広い空洞になつている地底の深部、その空気はジメジメとした水気を孕み、地面は湿気でぬらぬらとした光沢を帯びていた。一応、程度に慣らされた岩とも土ともつかぬ地面は硬く、ぬかるんでいるということも無い。お陰で足元が泥に汚れることもなく、比較的軽い足取りで歩くことができた。しかし、地面はどこどころ蔓が這つていて、気をぬくと足を取られそうになる。それで転びなどすれば、着物は汚れてしまうし彼女の前で醜態を晒すことになる。結局私は、そこそこの注意を払いながら地底の深部を歩いていった。

「ねえ、あんた。これどこまで歩くのよ」

「えつとねー。うん、多分もう少しかな」

ここに降りてから暫く歩いたけれど、今のところそれらしい秘湯は見当たらなかつた。私は彼女のアバウトな言葉に、多少不安を感じながらも彼女の後を追う。しかしながら、いつも殆ど決まった場所しか歩かない私の瞳に、見慣れぬ空洞の風景は新鮮さをもつて映えていた。

水気の多い空気はやはり重たい気もしたけれど、しかし人の入らない場所だからだろうか、いつも居る地底の空気と比べると、そこには幾許かの清涼さが在った。広い空洞のお陰で、そこまでの暑さも感じない。どこかひんやりとした空気を、私は彼女に気付かれぬ程度に深く吸つて、吐いた。すると、多少の心地よさが私の体を吹き抜けていった。

それから、少し遅れて彼女も大きく深呼吸をし、口を開いた。

「うーん、ここまで来ると空気もさすがに綺麗だね。でも、なんでなんだろう」

「さあ」

「さあ、って！ 会話が全然続かないよー」

「いいじゃない、別に黙って歩けば」

「つまらないじゃん」

そんなこともないわ、なんて言葉が浮かんだけれど、それは言わないことにした。私は秘湯を探して広い空洞を歩くのが、不思議と楽しくなってきたのである。もつとも、これで彼女さえいなければ、もつと穏やかに楽しめるに違いないけど。

「イソカジカ」

「カガミダイ」

「イノコ」

「コイ」

「イカナゴ」

「ゴンズイ」

「なにそれー！」

「魚よ。髭のある、ナマズみたいな」

「えー。い、い……イノシシ！」

「魚じゃないじゃない」

「魚だもん！」

「イノシシは魚じゃないわ」

「イノシシって魚がいるのー！」

「どうだか」

彼女からしりとりをしようと思っただけで、私はもちろん断つた。しかし、すると彼女は一人しりとりを始めた。あんまりしつこく続けているものだから、私は鬱陶しくなって、仕方なく一緒にやってやることにしたのだ。それにしても、イノシシなんて魚がいるはずもない。水槽が空っぽになったからって、山から使者を差し向けて来る

とはとんだ卑怯者だ。——後日調べたらイノシシという魚は、いた。

「いるのいるの！ おねえちゃんが知らないだけでしょー」

「はいはい。わかったわ。じゃあ、シマダイ」

「またッイッだ！ うーん、うーん」

「イルカは哺乳類よ」

「知ってますー！ うーん、うーん」

「勝負あったわね。時間制限を設けなかったのが悔やまれるわ。精々悩みなさい」

「く、くやしいー。絶対思い出してやる」

古明地こいしはイから始まる魚をぶつぶつと呟きながら思索をしているようだ。しかし残念ながら、イトマキフグやインヒシヤ、イノミイダイ等のメジャーどころは既に私が潰していた。彼女はもう、詰んでいるのだ。

それにしても、肝心の秘湯はあれから未だに見つかっていない。秘湯巡り、なんていうものだから、もつとわんさか湧いているものだと考えていたのだが、こいしはいつまで経っても、もう少しだよ、多分、と答えるのみだった。こいつ、秘湯巡りだなんて言っておいて、本当は何も考えずにここに来ただけなのではないか。古明地こいしならばあり得そうな可能性を嗅ぎつけてしまった私の心は、隣で魚の名前を呟き続ける彼女を恨み始めた。

「あー！」

「ひっ」

唐突に叫ぶ彼女に驚いて、私は情けない声を上げてしまった。一体なんだというのだろう。

「アネモネ。アネモネだよ！」

「アネモネはたしか花でしょ。まさか今度は花を魚だなんて言い出すんじゃないでしょうね」

まったく彼女にも困ったものだ。ヤマメやキスメも卑怯だったけど、ババ抜きに麻雀を持ち込んだりはしなかった。山の使者が通ったからって、今度は野草を摘んでくるとは。——後日調べたら、クラウ

ン・アネモネフィッシュユというのがいるらしいが、だったら始めは、クッじゃなければいけない。私の勝ちだ。――。

そういえば最近、あの二人に会ってない。私は二人のことを考えて、少し寂しくなった。

「違うよ、見て！　なんでこんなところに咲いてるんだろう」
「あら……」

こいしの指差す先を見やると、そこには彼女の言う通り、一輪のアネモネがひっそりと咲いていた。それは白く、小さな花だったけれど、まるで作り物のような強さを持って、しつかりと花卉を広げている。

「こんなところに咲くなんて。おねえちゃん、ほら見て」

「み、見てるったら」

こいしは私の袖を引っ張って、私の体を花の近くへと引き寄せる。同時に、彼女の体と私の体の、距離も縮まった。

「でも、季節外れだよ。まあ地底じゃ季節なんて関係ないけど。あ、地底だから余計不可解だよ。なんで咲いたんだろう。しかも一輪だけ」

こいしは繁々とアネモネを見つめては、なんでかな、どうしてかな、と呟いてる。あまり花に詳しくない私にとっても、地底の深くに一輪咲いたそれは不可解だった。しかし、私がそれを見て感じたのはそんな不可解さよりも、その花の綺麗さだった。どこかのつぺりとした深い白の花卉に囲まれた花冠は鮮やかに黒く。白い花卉と黒の花冠は素晴らしいモノトーン味の美しさを織り成していた。

「綺麗だね。綺麗すぎてなんか、作り物みたい。あはは」

彼女はそう笑って、

「行くっか」

と歩きだした。

私も一寸の間を置いて、彼女の後を追うように歩き始めた。しかし、私はなんだか、あの白いアネモネに後ろ髪を引かれるような気持ちで、見えなくなるまでに何度も、振り返ってしまったのだった。

その後、結局秘湯は見つからず、自宅に戻った私は彼女を連れて、旧都の大衆浴場へ赴くはめになった。

大衆浴場に向かうまで、こいしは何度も、手を繋ごう、と口を開いたが、私はもちろん、その一切を聞き入れることはしなかった。

それからまたしばらく経って、私は古明地こいしと一緒に外を出歩けるほどには、彼女の居る生活を受け入れ始めていた。旧都を歩いている際にも、彼女は相変わらず手を繋ごうとしてくる。おねえちゃん、おねえちゃん、と呼びかけながら私の手を強引に掴もうとする彼女の姿は、私により「手のかかる妹」のような印象を与えた。無論、掴まれた手は振り払ったが。しかしそんな中で、彼女の押しに負けて、一度だけ、彼女と手を繋いだことがあった。言うまでもなく、私は白々しい気分になった。そもそも恋人ですらないし、もし本当に恋人であったとしても、周囲に恋人である事を知らしめるように手を繋いで歩くのは、やはり何か違うような気がした。その後、私はまた考え込んだ。その日特に私を悩ませたのは、古明地こいしは一体どういうつもりなのか、というものだった。彼女は自身を私の恋人と言っている間かないけれど、本当に私に好意を抱いているとは考えられない。もちろん根拠はないけれど、好意を持たれるきっかけのようなものも見当たらなかった。果たして、古明地こいしは何を考えているのだろうか。されどそんな疑問は、彼女の居る騒がしい日々には、すぐさま押し流されていってしまった。

古明地こいしが私の家に居着いてから一ヶ月ほど経ったが、例の店に、新たなパンフレットが入荷されることはなかったし、部屋の家具の配置もこいし流に荒らされたままでいる。ついさつき、私はこいしと始めて口論らしい口論をした。それは、家具の配置と、棚の中に、アルファベット順に並べられたパンフレットから始まった口論だった。例の店から帰ってきた私は、なんととはなしにパンフレットの棚を開いて、アルファベット順に並べられたそれを見やった。やはり色がぐちゃぐちゃで、私は溜息を吐く。何度か色ごとに仕分け直したこともあったのだが、私が少し目を離すと、パンフレットはアルファベット順に並べ替えられているのだ。それ自体は、もう慣れたし、若干の諦めも感じていたから、問題ではなかった。こいしはパンフレットに折り目をつけたことも無かったし、読む時だって、私にちゃんと許可を

取ってから読んだ。だから、私は彼女のパンフレットの扱いについては、一種信頼めいた安心感を抱いていた。もちろん、あまり触ってほしくないことに、違いはなかったけれど。

私はそこで、彼女がまたしてもパンフレットの配置を弄ったことを、家具の配置の件も交えて非難した。それはもはや、いつものことがいつもの流れだった。しかし、彼女は今日、珍しく、つつかかってきたのだ。今にして思えば、それは彼女のいつも通りのおふざけだったのかもしれない。彼女はパンフレットの並びについて、別にいいじゃん、そのくらい、的なことを彼女特有のセンスを用いて私に放った記憶があるが、詳細はあまりよく思い出せない。たしか、私のこだわりが強い、とか、イドとかスーパーエゴだとか、私の解せない言葉で、私の性格についての言及を織り交ぜながら、彼女はそれを語った。

その何が私の神経を逆撫でたのかは分からないが、とにかく私は腹が立って、彼女をしつこく叱責してしまった。そこまで怒る必要があったのだろうか。私は自身のとった行動に疑問を感じている。ああ、私はどうしてこうも自分がわからないのだろうか。とにかく、彼女は、こいしはその時出て行ったきり、帰ってこない。

そのまま、時間は流れて夜になった。昼も夜もない地底だが、部屋に時計くらいはある。私は秒針を眺めながらぼんやりと、私と、それから彼女のことについて考えていたが、思考はまとまらず、結局何一つ思考という思考は出来ていなかったように思える。ただ、そこに在ったのは感傷のみだった。私はそんな感傷に突き動かされるままに、かつての寝室の戸を開けた。疎ましく感じていた彼女を心配して感傷に苛まれ、かつての寝室の戸を開ける私の姿は、なんだか安っぽい映画のワンシーンに思えて。私はやはり、そんな自分を滑稽に感じずにはいらなかった。

かつての寝室は、古明地こいしの掃除の為に、やはり昔のままの姿で、其処に在った。照明から垂れる紐に括られた小さなぬいぐるみ。眠る前に本を読むために設置された花柄のついた小さなライト。そ

して、匂いまでもが、昔のままだった。

私は白々と押入れを開けて、重たくなつた布団を取り出し、敷いた。掛け布団の上、腕を枕にうつ伏せに横たわる。布団は湿気って、埃っぽくて、少し黴くさいような、埃くさいような。その匂いが妙に懐かしくて、そのとき私の目からは無感動に涙が溢れていた。埃のせいに違いなかつたけれど、私はそんな自分を俯瞰すると、ますます自身から視点が離れていくのを感じた。遠くの方から、私を眺めている感覚。私はそんな感覚の中、何も感じないまま、気がつけば眠りに落ちていた。

それは短い眠りだったけど、私はとても長いあいだ、眠っていたように感じる。気付けば私は、きちんと布団に入つて眠っていたらしい。湿気つた布団は重たく、私の体を優しく押し潰さんとしている。目を開けると、目の前には花柄のついた小さなライトスタンドがあつて、私は今更、自分がかつての寝室で眠つたことを思い出した。

「ね、布団、入つてもいい」

「ええ、いいわ」

布団の隣には、古明地こいしが座っていた。私は背を向けていたけど、気配がした。彼女は布団に潜り込んで、私の背中にぴっとりくつつく。

「えつと、ごめんね。こいし、ちよつとふざけすぎちやつたかも」

「いいわ、もう」

彼女はまた「こいし」だった。何故かはわからないけれど、私はずれがなんだか悲しいような、哀れなような気がして、なるべく柔らかい口調で、彼女に返答するように努めた。怒りはもうまったくなくなつたし、そもそもこいしが出て行つてから、私はずっと後悔していた。「えへへ、よかった。……ねえ、おねえちゃん。その、こっち向いて」「ん」

私が寝返りを打つて向き直ると、こいしは私の胸に寄りすぎるように体を寄せて、えへへ、と笑う。

今回のことは、私もこいしに謝らなきゃいけない気もしたけど、それをするのは、やめにした。その代わり、すこしだけやさしくしてや

ろう。そんな一種傲慢なことを考えると、私がまた、自嘲めいた笑いを零した。

「ねえ、こいしのこと、抱きしめて。恥ずかしかったら、こいしが眠つてからでもいいからさ。……そうだ。こいしね、今日はおねえちゃんに悪いなーって思ってた。人里でパンフレットの映画を探してきたの。おねえちゃんが私と会ったとき、公園で持ってた、あの新しいやつ。ふたつとも見つけてきたから、今度二人で一緒にみようよ」

こいしが言っているのは、あの「F」から始まる二つの映画のことだろう。地底じゃ、探しても見つからなかったのに。

「イヤ。私、映画は一人で観るって決めてるの。それに私、ほんとに気になった映画しか、探したりしないんだから」

私がそう言うと、こいしは、そっか、つまんないの、と笑って、そのまま眠ってしまったようだった。

私に体を密着させて、こいしはすーすーと寝息を立てている。私はそんなこいしの体を、そつと抱きしめてみる。殆ど初めて触れたこいしの体は暖かく、柔らかかった。そして何より、心許ないほどに、小さかった。背中に腕を回すと、そこから心音が伝わって来るほど、こいしの線はか細くて。でも、その心音が果たしてこいしのもものだったかどうかは定かではない。

そうしていると、次第に、どういうわけか。この細い体を、心もとない小さな体を、めちやくちやにしてやりたいような気が起きた。思いつきり、折れてしまいそうなほど抱きしめてやりたいような気もしたし、くすぐって、静かな眠りから覚ましてやりたい気もした。その刹那、或いはおもむろに、私の中にまた一つ、感慨が湧いた。

その感慨は言葉としてではなく、ぼんやりとした靄として私の脳内、或いは私を俯瞰する私の視界を占拠した。白む視界の中、私は彼女と抱き合っている。その格好はやはり、ひどく滑稽に見えるのだった。

瞬間。あのときの、古明地さとりの会話を思い出す。

『それじゃあ、私はこれで失礼します。ああ、橋姫の子のあなたなら、

私も安心です。』

ああ、私はやっぱり、橋姫の子だった。

「ん、んん……。あれ……。おねえちゃん、まだ起きてるの。……。そう
だ、言い忘れてた。……。おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

そのまま、私は朝が来るまで、かつての寝室の匂いを懐かしんでいた。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 9

「あはは！ 楽しいね、おねえちゃん。景色がどんどん流れていくよ」
「そりゃ、あんたは楽しいでしょうよ。これ、疲れるったらないわ」

昼下がり。私は久々に地上に出て、彼女を乗せた自転車のペダルを漕いでいる。自転車に乗るのは初めてだったが、地底を出る頃にはもう慣れた。地上の空は馬鹿みたいに広く、阿保みたいに青かった。雲ひとつない空の下、木々は僅かにその葉を朱く染め始めている。

「うーん！ 空気が澄んでるね、暑くもなければ寒くもない。でもちよつと肌寒い。『ザ・秋』だね、おねえちゃん」

「そうかしら、まだ木の葉が緑色よ」

気がつけば夏は終わっていたらしい、地底に住んでると、時間感覚も、季節感も狂う。まあ、私はあまり地上には出ないので、あまり関係ない話だけど。無論、私は根暗じゃなければ、人が苦手ということもない。こともないが、今日は助かった。今日の人里は、人通りが少なくて、妙に静かだった。

されど、通りに行く人々こそ少なかったが、それでも一人一人の怪訝そうな視線は私たちに突き刺さった。しかし、私はそれほど悪い気はしなかった。ああ、ともすれば、あの公園の『あの』アベックも、こんな気持ちだったのかもしれない。

いやいや違うな、まず前提が違う。私はこいつと付き合っているわけでもないし、あのアベックのようにいやらしいことはしていない。久々に地上に出たせいで、私はどうかしてる。

「うーん、風がゆっくり吹いてて、気持ちいいな。ね、おねえちゃん。自転車で里を走っていると『街』を感じない？なんか、ハイカラでさ」
こいつは急に何を言うのだろう。

「感じないわよ、こんな田舎。そんなスクーターブームのときの若者みたいなことって、ますます田舎くさいわ」

「スクーターブームって、なあに」

以前、ヤマメとキスメと遊んだ時に、洞穴に落ちてた雑誌を読んだことがあった。曰く外の世界には『スクーターブーム』なるものが

あつて、その渦中、若者は皆一様に「スクーターに乗って都会を走ると“街”を感じる」と主張したそうなの。

「さあ、私もよく知らないわ」

里には、穏やかな風が吹いていた。

自転車で走っていると、すぐに里を抜けてしまった。帰ろうかとも思ったが、こいしが楽しそうだから、そのまま少し走り続けた。緩やかにせせらぐ川沿いだったり、柳の立ち並ぶ小道だったり、色んな景観の中ををゆつくりと走り抜けた。

見知らぬ寺の階段の前、小さいながらに風情のある墓地の前で、なにやらこいしが私を引き止めた。

「なによ」

こいしはじつと、墓地の方を見つめていた。墓地の向こうの高いところに寺の屋根が見えていたけれど、彼女があんなものを注視するはずもない。私は墓地に何かがあるのだろうと考え、暮石の一つ一つへ目を遣った。そうして私は、暮石の一つに黄色い蝶がとまっているのを見つけた。おそらく彼女は、あれを見ているのだろう。

「なに、蝶がそんなに珍しい?」

「え?」

こいしは蝶を見るのに夢中になっていたようで、なにやらハツとした様子で私に答えた。私は蝶を指差して、

「あの蝶がそんなに珍しいかって聞いているの」

と言った。

「あ、ああ、うん。結構、珍しい蝶なんだよ。外の世界ではそんなに珍しくもないみたいだけど、キチヨウって言ってね、秋のキチヨウは模様が違うの。ほら、前翅表の黒い縁取りが夏のキチヨウと比べて少ないし、代わりに裏の黒い斑点が目立ってるでしょ? ……あ、見えるわけないよね、ここからじゃ」

「あんた、意外と物知りよね」

私が言うと、こいしはえへへ……と気まずそうに笑った。

意外と言えば、彼女は意外と金を持つてる。浴衣にしたって、自転

車にしたって、映画のビデオにしたって、どれもそんなに安いものではないはずだ。彼女は一体どこからそんな金を工面しているのだろう。私が一瞬そんな方向へ思考をとばすと、こいしはおもむろに、「せっかくだから、近くに行って見てみようよ」と言った。

私は自転車をその場に停めて、こいしと一緒に墓地へと入った。

しかし、当然と言えば当然だけど、キチヨウは私たちが近づくと、ひらひらと宙へ逃げてしまった。私たちはぼんやりと、それを見送ったのち、地底への帰路に着くのだった。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 10

それからまたしばらく経った。あれからあの寝室には入らなかつたけれど、私とこいしは夜抱き合つて眠るようになった。私はその都度、彼女をめちゃくちゃにしてやりたい気が起きて辟易としたし、また、優しい気持ちにもなつた。きつかけは、間違いなくあの夜にこいしの体に触れたことだ。私はやっぱり、そんな自分を白々と滑稽に感じながら日々を過ごした。

そんなある日のことだった。私は、こいしにどうしても話したいことがあつて、彼女を公園に誘つた。何度もやめようと考えたが、私はそもそも「綺麗で清潔なもの」ではない、と自分に言い聞かせて、納得した。自分から彼女を誘うのは初めてだったので、少し緊張したのだが。しかしこいしは、然程驚いた様子もなく、「ちようどよかつた、私も話したいことがあるの」と言つて、準備を始めた。

公園に向かう道中、私は例のソーダ水を買つた。こいしにも買つてやろうと考えたが、こいしはそれを断つた。これ、嫌い。とのことだった。

公園の入り口は、あいも変わらず『夜間侵入禁止』の看板が貼られており、フェンスの内側には生意気に緑が茂つていた。

いつものベンチに腰を下ろして、私は彼女に語りかける。

「あのや」

その言葉を、彼女、古明地こいしは、

「おねえちゃんに重大発表！」

と、遮つた。

こいしはベンチから立つて、私の顔の前に立つた。私はふと、こいしにここで驚かされたことを思い出す。

そしてこいしは朗らかに、その口を開いた。

「わたし、おねえちゃんの恋人をやめます！」

瞬間、地底に鈍い風が吹いて。地底の風に靡いた彼女の髪は、翡翠の色とも、浅葱の色ともれぬ色をして揺れた。公園はなんとなく、

夕暮れの色をしているような、そんな気がした。

「理由はいろいろあるんだけどね。でも、おねえちゃん、つまんなさそうだったから。私と手を繋いで歩いてくれても、私を抱きしめてくれるときも、おねえちゃん、上の空って感じで、なんかつまんなさそうだった。わたしね、別に、お互いが同じ気持ちである必要もないって、思ってたんだけど、でもやっぱり、わたしは同じ気持ちの方がいいなって、思ったの」

こいしは朗らかに喋り続ける。その朗らかさの裏に、なにか空元気めいた感情を察したけれど、私はやっぱり、ただなんとなく、ずるいな、と思った。

なにより、彼女が彼女なりに、恋についての解を持っていることが、私には辛辣だったような気もする。

「でもね、でもね。べつに、おねえちゃんが嫌いだからやめるんじゃないよ。おねえちゃんと一緒にいるのは楽しかったし、面白かったもん。……でもね、わたし、ほかにやりたいことが出来ちゃったの！」

彼女は一寸間を置いて、言い放った。

「わたし、僧侶になる！」

宇宙みたいだな、と私は思った。

気がつくと、古明地こいしは私の前から姿を消していた。あれ、私は、なにを話そうと思ってたんだっけ。忘れてしまった気もすれば、元から考えなしにここへ来た気もする。とにかく私に分かったのは、私はやはり、滑稽だということだった。

緑の瞳に映る恋々青春。パンク編 11 (了)

それからまたまた、しばらくが経った。あれからの私の日常はめぐるしかつた。とはいっても、自分でそうなるように仕向けたのだが。

先ず私は、遊郭に行った。遊郭に行つて、古明地こいし似の、例の彼女を買つた。しかし、部屋に入つても私はなにをするでもなく、彼女と会話を交わすのみだつた。

彼女は驚くほどふつーの人間だつた。

『お話だけして帰る人、結構いるよ』

みたいなふつーの会話をした。以前彼女と一緒に歩いてきた男について尋ねたい気持ちも起こつたが、私はそれを聞くことをしなかつた。あの男はどうにも「モテそう」だつたから。帰りしな、彼女は、『どうせなら、キスぐらいしていく?』

なんて提案をしたが、私はそれを断つた。理由は特にない。

それから、こいしの置いていったものについて。

まず、着物は売つた。自転車は「B」のアベックにくれてやつた。前に自転車を蹴り飛ばしてしまつたお詫びに、と言つたら、彼奴等は怯えながらそれを受け取つた。そして、部屋だが、部屋は元に戻すのが億劫で、そのままにしてある。無論、棚の中のパンフレットは色ごとに並べて、重ねられている。

それから、「F」から始まる例の映画を二つとも観た。やはり二つとも、パンフレットを見てたときが一番楽しかつた。

ヤマメとキスメは別れたらしく、私の心の平穩は、二人の席の近きと同時に戻つた。

地底の深部にも行つた。あの白いアネモネを探しに行つたわけだ。広い空洞のなか小さな花を探すのは骨が折れそうだが、そも枯れてしまつていのではないかと覚悟して深部に降つたが、意外なほどにそれはすぐ見つかつた。やはり、アネモネは作り物のような美しさでそこに在つた。私はそれを摘んで自宅に戻り、キスメに貰つた桶に土を入れて、植えた。その際に気付いたことだが、作り物のような美し

さを放つその花は、まさに造り物だったのだ。私は悔しくなって、自分で同じぐらい綺麗な白い花を咲かせてやろうと、地上に種を買いに行った。妙な威圧感を放つ妖怪から、一年中どこでも育つアネモネの種を買って、それを育てた。しかし、ようやく咲いたアネモネの色は、驚くほどに紅かった。

それから私は、少し汚れてやろうかな、とタバコなどを始めてみた。それが、今現在である。私は地底の橋の欄干に肘をつけて、淀んだ川を眺めているというわけだ。

地上はもう冬らしく、地底もそれなりに冷え込んできて、私はマフラーなどを巻いてるし、ニットなどすら被っていた。長年、地底は季節の影響など受けない、と主張してきた私だったが、あれは嘘だ。夏は暑いし、冬は寒い。

橋の上から眺める川は、今日も汚濁に淀んでいる。ガラクタやら骨やら肉やらが大量に流れていくその川は、もはや川と形容するには汚れすぎていた。私はそんな川に、自宅から持ってきた「F」から始まるビデオを二つとも投げ捨てた。ぐらぐら揺れながら川に落下したビデオ二本は、すぐに汚濁に紛れて見えなくなった。とても心がスツとしたので、吸っていたタバコも箱ごと川へ投げ捨てた。やはり、とても心がスツとした。それからしばらく、私は欄干に肘をついたまま、ぼんやりと川を眺め続けた。

「ああ、妬ましい」

気付けば私の口からは半ば口癖と化したいつものそれが意味もなく溢れていた。

頭上に開いた地底で唯一の大きな風穴から覗く空は、ひたすら高く、遠く。冬空らしい淀んだ灰色をしている。そんな真冬の鈍い陽が私の真上に昇る頃、私は一っため息を吐いて、いつもの店に向かうのだった。

灰色の季節（全4話 主演：少年、及び小野塚小町）
灰色の季節 1

人里近くの桜並木はこのところ大盛況で、今日だって、シートやなんかがたくさん敷かれて、舞い散る桜の中、人々は賑やかさを担っている。真昼の陽射しでなんだか白みがかかって、まるで楽しいだけの夢みたいな光景だ。

僕に言わせれば、それは馬鹿騒ぎで、奴らは烏合の衆だった。僕は桜を見てはしゃいだりなんかしない。大人が思うほど、僕は子供じゃないんだ。寺子屋の、なにもわかっちゃいないアホ共とだってもう少しておさらばできる。僕にとってこの桜並木はただの通り道、帰路だった。

ああ、寺子屋といえば、あの、風見鶏の、パープリンの、忌々しい、左だ。今日だって、あいつは僕に謝らなきゃいけないことがあるはずなのに、それを無視して、馴れ馴れしく声をかけてきやがった。声をかけられて着いていく僕も間抜けだった。でも、人が死ぬところを見に行かないか、なんて言われて、断ったら、後で馬鹿にされるに決まってる！

左、あいつは卑怯だ。いぎ、流行り病で死にかけの爺さんを目の当たりにしたら、そそくさビビって一人だけ逃げやがった。なにが、これは見世物じゃないな、だ。言い出したのは自分のくせに、かっこつけやがって。

けれど不思議なのは、今現在視界に映るすべてのものが、なんだか僕のせいに思えることだ。白んだ陽射しも、桜の木々も、舞い散る淡桃の花弁も、楽しそうな人々も、賑やかな喧騒も、屋台の匂いも、捨てられた串に群がる蟻達も、目付きの悪い犬も、なんだかすべてが、僕のせいに思える。

僕はきつと、そんな景觀の、どんな箇所も担えていない。そんな気がする。団子でも買ったなら、僕も少しは、格好がつくかもしれないが、有象無象に迎合する理由なんかはどこにもないんだ。

そんな、漠然とした感慨に足を取られながら歩いていると、不意に、視界の端、妙な女が目についた。女を妙と言わしめたのは、女の赤い髪の色と、持ち物だった。服もこのあたりじや見慣れないものだったかもしれないが、そこらへんに関しては、僕はあまり自身がない。

女は片手に酒瓶を提げて、もう片手には盃を持っていた。盃にちびりと口をつけるその仕草は、桜並木じゃありふれた、見飽きた仕草だけれども、女は一人だったのだ。女の、陰気だけれど、そうと言いつれない表情や雰囲気も、僕にはどうも、気になった。

だからといって声をかけるなんてことはせず、僕は止めていた足を動かして、通り過ぎようとしたのだが、女の方から声をかけてきた。「なんだ、あんた。あたいが見えるのかい」

なんて、奇怪な言葉を投げかけられた時点で、僕はそそくさ逃げろべきだったのかもしれない。しかし、僕の口は殆ど勝手に動いて、「そりや、見える」とかなんとか、吐き出してしまった。

女は僕の言葉にさして反応を示さず、へえ、と息を吐くのみで、桜やなんかを眺め続けた。そもそも、女は端から僕の方なんか見ちゃいなかった。女はずっと、どこかを見ていた。けれど、舞い散る花卉を見てるのか、往來のど真中に一本だけ生えた大樹を見てるのか、はたまた行き交う人々を見ているのか、あまり、判然としなかった。とにかく、女が二の句を放つ様子もないので、僕は気まずく一礼をして、歩きはじめようと考えたのだが、そこでまた、女が口を開いた。

「今年の桜は、妙な色をしているねえ」

妙なのは自身の放った言葉ではないか、女から、意外とおしゃべりな気配を感じながら、僕も口を開く。いよいよもって女との会話が始まってしまふけれど、一つ言えるのは、僕も意外とおしゃべりなのだ、ということだ。

「そんなことないと思うけど。例年通り、ただの薄い、桃色じゃないか」

「あんた意外と、目が悪いんだね。若いつてのに」

「だから眼鏡をかけてるんだけど」

「あ？ ああ、ほんとだ」

女はそのとき、初めて僕の顔をみた。ああ、ここらへんで、彼女のことはお姉さん、と呼び替えるべきかもしれない。年功序列はアホらしいけど、礼節つてのは重要なんだ。

「じゃあ、あたいの目がおかしいのかな。いやでも、この酒もさ、なんだか以前と味が違うんだよ。随分薄口になっちまった」

「そのお酒、売れ方がずっと変わらないから、味が変わったなんてこと、ないと思うけど」

お姉さんは眉を顰めて、右上辺りの虚空に揺れ落ちる花卉を睨みながら、「あれえ」とか、「妙だな」系の言葉を発音した後、僕に向き直った。

「なんだい。じゃあみんな、あたいのせいだって言いたいのかい」

唇を尖らせて真面目くさつて言うもんだから、僕は思わず吹き出してしまった。するとお姉さんも冗談めかして笑うから、僕たちは少しの間、笑いあった。

「お姉さんは、里の人じゃないね。だって、里の中でみたことないもの」

「ああ。でも仕事でね、しばらくはここらへんに住むことになったんだ」

「仕事？」

僕が問いかけると、お姉さんは何かハツとして口を切った。

「ああ！ 今日はいくつかから仕事だったんだ！ いやあ、天気が良かったもんで花見しに出てきたんだが、すっかり忘れちゃったよ」

「お姉さん、抜けてるね」

うるさいやい、と笑って、お姉さんは歩き始めた。かと思えば立ち止まって、僕に向き直って、口を切る。

「あんた、ええと。流行病に罹って死にかけてる爺さんとか、知らないか？」

「……それなら、稗田邸裏の横町だね。こぢんまりした庭に松が生えてて、一人で暮らしてる。……お姉さん、医者？」

あの爺さんが一番激しく咳き込んでからどうなったか、僕は知らない。恐ろしくて逃げてきた。でも、お姉さんが行くなら、きつと大丈夫

夫だろう。根拠はないが、そう思えた。

「医者。まあ、そんなところかな。……ありがとね。それじゃ、あたいは行くよ」

あんな、昼間つから酒を飲んでるような赤い髪のひとつが、本当に医者なのだろうか。また歩き出したお姉さんの背中を眺めながら、そんなことを考えていると、「ああ、そうだ」とお姉さんが振り向いた。

「あんだ。今後町中であたいを見かけても、声をかけないでくれよ。あんまりね、好きじゃないんだ。そういうの」

声をかけてきたのは自分のくせに、よく言うな。それじゃ、と笑いながら酒瓶を掲げて、お姉さんは歩き出す。不意に、どうしても聞きたくないことが浮かんで、僕はお姉さんを引き止めた。

「ねえ。お姉さんの桜はさ、どんな色してるってわけ」

お姉さんは振り向くこともなく、「は、い、い、ろ」と発音して、今度こそ、行ってしまった。

去っていくお姉さんの背中を、随分見つめていたけれど、僕はどうにも、白んだ陽光にしたって、桜の木々にしたって、舞い散る淡桃の花弁にしたって、楽しそうな人々にしたって、賑やかな喧騒にしたって、屋台の匂いにしたって、捨てられた串に群がる蟻達にしたって、目付きの悪い犬にしたって、なんだかすべてが、お姉さんの背中を彩っている気がした。お姉さんのせいな気がした。何故かはわからないが、そんな気が、したのだ。

声をかけるな。お姉さんにはそう言われたけど、僕はきつと、それを守ることはしないだろう。だって、あのお姉さんと親しくなるのは、クラスのアホどもやパープリンの左なんかと仲良くするよりも、ずっと有意義な気がするから。

そうして、僕はとりわけ軽い足取りで、地面の上で行われる馬鹿げた酔宴の幾つをも、見送った。

灰色の季節 2

恐らく樹脂とかビニルとか、床の感触はそんな感じ。キッチンの小窓には川が流れて、川の流ればキッチンにせせらぎってやつを運び込む。昨今はコンロ程度ならどんな家にだってあるから、四角いフライパンの中で、卵は四角くなっている。

とはいえ、このキッチンにコンロがあるのは意外だった。こんな川沿いの、打ち捨てられた小屋めいた長屋にも、憎き河童どもの侵略の魔の手が伸びているとは。有難がる奴もいるけど、僕はどうにも、好きになれない。

「なあ、あんた。いい加減にお友達と仲直りしなよ。こう毎日来られると、どうも落ち着かないね、あたいはさ」

畳張りの居間からお姉さんが声を上げる。

「僕が来ないとお姉さん、料理だって掃除だって、ろくにしないでせに。それに、あんなやつ、もう友達でもなんでもないんだって、何度も言ってるじゃないか」

言いながら、僕は卵焼きをお姉さんの前まで運ぶ。お姉さんはなにやらずっと、手紙を書いていた。それは、なにも今日に限った話ではなく、僕が里で、飲み屋の暖簾越しにお姉さんを見つけた日からずっと、お姉さんは手紙を書き続けている様子だった。

僕が初めてお姉さんの部屋に入ったとき、四、五畳の部屋にはお姉さん宛の手紙が溢れていた。そんな部屋の中で黙々と手紙を書き続けるお姉さんを見て、こんな量の文通をする相手がいるのか、と、そのとき僕はそう尋ねた。しかしお姉さんから返ってきたのは、「手紙が届くんだ」という、いまひとつ要領を得ない返答で、結局、お姉さんの書く手紙も、お姉さんに届いた手紙も、どういった内容の手紙なのか、知ることはできなかった。最も、散乱した手紙の内容を読んではしまえばよかったのだが、僕にそこまでの勇氣はなく、出来たのは、大量の手紙の、掃除を兼ねた処分、それくらいだった。

僕が卵焼きを低くて四角いテーブルに置こうとすると、お姉さんは、「頼んでもいないのに」とかなんとか言いながら、机の上の手紙を

どける。封筒の飽和した机になんとか皿を乗つけければ、お姉さんは筆を置いて、手を合わせた後、卵焼きへと親の仇のように醬油をかけた。

「あんたの料理、味が薄いんだよ」

眉をひそめる僕を尻目に、お姉さんが言い訳めいた言葉を吐き出す。それにしたって、この量はかけすぎだと思う。

お姉さんが食べてる間、畳に座って、壁にもたれて、本を読んでいく。すると、箸を動かすお姉さんが不意に口を切る。

「あんた、あれだろ？ 浮浪者と少年の奇妙な友情劇、みたいなのを、あたいに期待してるんだろ」

「お姉さんは浮浪者じゃないでしょ」

じゃああんた、あたいの身元がわかるのかい、とかなんとか、お姉さんは自身を浮浪者の立場へと貶めて続ける。たしかに、僕は未だお姉さんの名前すら知らない。

「それで、あんた。あたいによく言うよな、『お姉さん、たまには外に出た方がいいんじゃない』なんてさ。それってあれだろ？ 外に出てあたいと歩いてるところを、誰かに見られたいんだ。同級生やなんかにさ」

「なんでそんなこと」

「なんでって、決まってる。噂されたいんだ。『あいつ、あやしい大人と仲よさげに歩いてたぞ』なんて。あんたみたところパツとしないからね、みんなの気を引きたいんだろ？ それで、いざ直接指摘されたら、はにかむんだ。『あはは、みられちゃったか』なんてさ。いやあ、あんたは恥ずかしいやつだよ」

お姉さんの言うことは的外れだ。どうして僕がクラスのアホどもの気を引かなくちゃならないのか。そもそも、奇妙なユウジョウゲキを期待しているのはお姉さんの方なのではないか。そうじゃなければ普通、里で会った見ず知らずの少年を部屋に入れたりしない。僕のことを本ばかり読んでいる内気な少年に、人との温もりを求める孤独な少年に当てはめようとしているのは、きつとお姉さんの方だ。

「お姉さんこそ、恥ずかしいひとだよ」

「まあ、あたいが言いたいのはさ。本ばっか読んでないで、子供は子供

らしく外で遊べって話だよ。お友達と仲直りして、さつきと子供らしく振る舞えって、そういう話」

お姉さんは箸を食べ終わった皿の上に置いて、勝手に話を締めくくった。大人は、いつもこんな具合に話を逸らす。

お姉さんの卑劣さに内心憤っていると、お姉さんは皿を片付けることもなく、手紙を書くのを再開した。卑怯だ、なんて口に出せばまた馬鹿にされるだろうから、僕は平静を装って、本に目を落としていたけど、正直、文字が頭に入らなかった。

そんな沈黙がしばらく続いて、不意に、筆を手に持ったまま、お姉さんが口を開いた。

「あれ、あんた。苗字はなんていったか」

「門。……僕宛の手紙？」

本からお姉さんに視線を移すと、お姉さんはやはり手紙の上に筆を構えて、手を止めていた。どうやら僕宛の手紙であることは間違いないらしいけど、僕はここにいるんだから、言いたいことがあるなら直接言ってくればいいのに。

「門、門。……ちよいとあんた。嘘ついちゃいけないな。お姉さん、そういうのはわかるんだよ。あんた、ほんとはなんて姓なんだい」

姓に嘘もなにも無いと思うけれど、偶然、僕には門以外のもう一つの苗字、その心当たりがあった。しかし、お姉さんにそれがわかるのはどうも不可解だ。

「……左。前の苗字が左だったんだ。門は新しいお父さんの名前です。……おかしい話だよ！ 稗田邸の左側にある家はみんな左なんてさー！」

「やっぱりね。こういうときに姓を聞かれたら普通、元々のやつを答えるもんなんだよ。頼むよ、まったく。左、左ね。よし……」

僕の言葉の後半部分をほとんど無視して、お姉さんは手紙に筆を落とす。僕はお姉さんの言うように、僕が間違っていたとは到底思えるはずもなかった。姓は現在のものを名乗るのが普通なのではないか。僕はなんだか居た堪れなくなつて、お姉さんに問いかける。

「それ、何処に出す手紙なの」

「ええと、この手紙は……あれ、どこだったかなあ」

「僕に苗字を聞いたってことは、僕の家に出すんじゃないの。でも、僕の家はいま門だから、それじゃあ届かないと思うよ、きつと」

「いや、あんたの家じゃないよ。……あれ、でもほんと。どこに出すんだったかな。あんたの苗字を聞いたなら、普通、あんたの家に出すんだけど。でも、それは絶対に違うんだよ。とすると一体、この手紙はどこに出す手紙なのか。……あれ、なんで、わかんないんだろ」

お姉さんはそこまで言って、僕の方を向いては照れるように笑った。お姉さんは本当にわからなさそうにはにかむものだから、僕もつい、笑ってしまう。

「お姉さん、抜けてるね」

うるさいやい、なんて言って、お姉さんは腕を伸ばして、諦めたように仰向けに寝転がっては、また、笑った。

灰色の季節 3

家に帰ると、家の前で暴動が起きていた。夕日の橙が暴力的に橙だったから、家の前の人混みは、きつと暴動に違いなかった。しかし、そんな人集りを青ざめた顔で愕然と見つめている父さんを見つけたとき、夕日の橙に押し止められていた僕の焦燥が、胸中、躍動を開始した。

少し震える足を操作して父さんの隣まで行くと、僕が尋ねるまでもなく、父さんはやおろ口を開いた。曰く、母さんが死んだらしい。

僕は矢庭に地面を蹴って、玄関を潜ろうとしたけれど、周りの、父さんの友人やなんかには邪魔されて、家に入ることは叶わなかった。僕は大人たちに押さえつけられながらでかい声で疑問符を叫んでいたと思う。そんな僕に父さんがゆっくりと近付いてきて、父さんは僕の顔をしっかりと両手で押さええて、静かに、でも確かに、口を開いた。母さんは、流行病で死んだらしい。

大人たちが僕を押さえつけるのに飽きた頃、僕は走った。お姉さんの住む長屋は桜並木沿いの川辺にある。だから、橙の世界も、桜の木々も、舞い散る淡桃の花弁も、爺さんが死んだのも、母さんが死んだのも、屋台の匂いも、捨てられた串に群がる蟻達も、目付きの悪い犬も、それら全てが、お姉さんのせいに思えた。

玄関を潜ると、そこには夕陽に彩られた壁と畳があるのみで、お姉さんの姿は見当たらなかった。窓から差し込む橙は徐々に色調を落として、終いには紺色になった。

月明かりが妙に明るく思えた頃に、玄関の戸が開いて、お姉さんが帰ってきた。

「ちよいと、あんた。勝手に他所様の家に上り込むなんて、なに考えてんだい」

お姉さんの声色がいつも通りの軽さで、僕は胃が痛くなった。

「……………どこに行ったのさ」

「どこって。……………ああ！ さつきあんたの母さんと会ったよ。里を歩

いてたら、偶然さ」

「嘘つくなよ。母さんは死んだんだ。お姉さんのせいで」

「死んだ？ なに言ってるんだい。さつき会って来たって、言ったばかりじゃないか」

「——とぼけるなよ！ 母さんは流行病で死んだんだ！ お姉さん、医者だろ！ お姉さんがちゃんと薬を飲ませてたら、母さんが死ぬこと、なかったじゃないか。あんたのせいだ。あの、爺さんにしたって、みんな、あんたのせいだよ！」

「流行病？ ち、違うよ！ あんたの母さんは自分で首括って……あれ？ 違う、あたいはさつきあんなの母さんと会ったばかりなんだ。ああ、違う！ 違うんだよ！ あたいに、手紙が届くんだよ、手紙が届くんだ」

それから暫く、お姉さんは頭を抱えて、手紙が届くんだ、と、それを繰り返した。その時の僕が、そんな様子のお姉さんに向けられる言葉といえば、「あんなのせいだ」なんて言葉で、お姉さんから返ってくるのは、「あたいのせいじゃない」なんて言葉と、「出ていっておくれ」という言葉のみだった。

僕は家に帰るのが嫌でたまらなく、夜が白むまで里を徘徊した。そのときの発見といえば、鈴奈庵の開店の早さだ。詳しい時間はわからないが、道に人の歩かないことから、相当に早い時間だったと思う。僕はそのとき、鈴奈庵で借りた本を持ったままでいたから、大人たちには押さえつけられた際、本を土で汚してしまったことを詫びるついでに、それらの本を返却しようと考えて、鈴奈庵に入った。

入って、まず本を汚してしまったことを詫びると、小鈴さんは笑って許してくれた。だからついでに、僕は小鈴さんに告白をした。

——小鈴さん、僕と付き合ってはくれませんか。母さんが死んだんです。

こんな具合に。

当然、断られたので、僕はアガサクリスQの新刊以外を返却して、貸本屋を後にした。

灰色の季節 4 (了)

あれから、しばらくの時間が流れた。母さんの居ない生活にもすぐ慣れた、というより、料理や家事全般は、元々僕の仕事だったから、あまり、変わりはないかもしれない。

今日は寺子屋を卒業する日で、卒業式の終わった僕は気まぐれに、お姉さんの家に向いた。里の白昼は相変わらずに平和で、川辺のせせらぎにしたって春だった。けれど、お姉さんの家に着いても、お姉さんの姿は見当たらず、どうやら、どこかへ引越してしまったようだった。

代わりに、長屋に備え付けのテーブルの上には一枚、封筒が置かれていて、それはどうも、僕宛の手紙だった。僕はいま、長屋を出て川辺を離れ、桜並木の端に座って、その手紙を眺めている。

—— 拝啓、左くんへ。

あたいはどうやら、あなたにいろいろ、謝らなくちゃいけないらしい。何故ってそれは、あなたにいろいろ、嘘をついていたから。

まず、あたいの名前は小野塚小町。種族は死神。医者じゃない。

あんたが、お姉さん医者か、なんて聞くもんだから、あたいうっかりその気になっちまったよ。いや、どうも、最近はおんやりしちまっていてね。春だからかな。まあ、あなたの言う通り、あたいはどっか抜けてんだな。

死神、なんて言われてもピンと来ないだろうから、まあ、あたいの今やってる仕事は引率、舟渡しってやつさ。死んだやつを舟に乗つけて、例の川を渡らせるんだ。これもなかなか大変な仕事でね。やれ死にたくないだの、降ろさないでくれだの、人殺しだの、やつらの外れなことばかり言うんだよ。

でも、あなたの母さんはまともだったね。舟を降りるまでずっと、あなたのことを心配していたよ。

あの子は本ばかり読んで運動なんて全然やらないから、私みたいに病気で死んでしまうんじゃないか。なんて言ってるね。

とにかく、あんたもつと外で遊ぶことだよ。お友達と仲直りしてさ。舟を降りたがらなかつたり、往生際の悪い的外れなやつつてのは大概、本ばつか読んで死んだやつなんだ。

あんたと次に会うのは暫く先になるとは思うが、そのときにさ、恨み言ばかり聞かせないでくれよ。出来れば、あんたには笑つて舟を降りてほしいって、そう思つてるんだ。

まあ、それじゃあね。

手紙に書かれている内容の真偽は概ね分からずじまいで、お姉さんは未だ、奇妙なユウジヨウゲキを僕に期待しているのではないかと邪推してしまう。

けれど、一つ明らかに不自然な箇所がある。

それは、首を吊つて死んだ母さんが、遺言の一つも残さずに死んだ母さんが、果たして僕のことを心配するなんて、有り得るのだろうか。ただ一つ分かったのは、今現在視界に映るすべてのものに、理由なんて無いということ。

白んだ陽射しも、桜の木々も、舞い散る淡桃の花弁も、楽しそうな人々も、賑やかな喧騒も、屋台の匂いも、捨てられた串に群がる蟻達も、目付きの悪い犬も、それらすべて、誰のせいでもない。

往来のど真ん中に立つ桜の大樹はつけた花弁の殆どを散らせて、春の宙を彩っている。行き交う人々も、立ち止まって眺めている人も、座つて酒をやつてる大人たちも、みんな、一様に桜を眺めている。

僕がそろそろ行つてしまおうと思ひ立ち上がると、不意に、側方から声をかけるやつがいた。

「門じゃないか。お前が花見なんて、意外だな」

聞いた瞬間、知能指数が下がったことから察するに、声の主は左だろう。僕は向き直ることもせず歩き始める。

「左、お前こそなににしてるんだよ。式が終わったら親の店手伝いに行くなんとか、言つてたじゃないか」

いやあ退屈でさ、なんて宣つて、左は勝手に僕の隣を歩く。

「……なあ門。お前、アガサクリスQの新刊読んだか？ 今回は凄

かったぞ。まさか犯人が……」

僕は頭を引つ叩いて左を黙らせた。こいつは本当に学習能力のないやつで、何度言っても、新刊の内容を聞きもしないのに教えてくれる。ぶち殺してやりたくなる。

「左。そんなことよりさ、僕、少し前に変なお姉さんと仲良くなったんだよ」

「なんで俺に紹介しないんだ？ お前、やってることおかしいぞ」

僕は左を無視して続ける。

「それでさ、そのお姉さんが変って言うのも、この、桜があるだろ？

この桜がさ、灰色に見えるって言うんだよ」

言いながら、桜の大樹に首を向けると、左も僕に続いた。

「左、あの桜。お前には何色に見えるよ」

「何色って、そりゃ桜色だろ。灰色に見えるだなんてその女、ちよつとおかしいぜ。やっぱ、紹介してもらわなくていいや」

左の軽薄な言葉に、僕は思わず笑ってしまった。何故なら、僕の視界の端にはお姉さんが立っていた。お姉さんは僕に気付いていない様子で、初めて会ったときと同じように、盃を構えて、桜の舞う宙を見上げている。お姉さんあんた、酷い言われようだよ。

「そんなことより門よ。俺、面白い遊び考えたんだよ。……河童の倉庫のさ、トルエンを盗りに行くんだ。……まあ、臆病なお前はきつとついてこないだろうけどさ」

「いいよ、行くこうじゃないか」

「え」

「左、言い出しつぺはお前だからな。今更冗談でした、じゃ済まさないぞ」

「いや、で、でも」

「まずは腹ごしらえだ、団子を買うぞ！ 何やってんだ、さつさと走れよー」

「あーちくしょう！ 俺、まだ死にたくないよおー」

左より先に駆け出した経験はこれまでなかったけど、思いのほか気持ちがいいもんだ。振り返ってみると、心底嫌そうな顔をして追いか

けてくる左がいて、視界のもつと奥、端の方にはやはり、お姉さんが立っていた。お姉さんは相変わらずにぼんやりと宙を見上げているから、僕は一つ、心の中でお姉さんに尋ねてみた。

お姉さんの桜は、相変わらずの色ってわけ。
なんてさ。

人面樹（全5話 主演：東風谷早苗、多々良小傘）

人面樹 1

始まりといえ、やはり、あの日だったのかもしれませんが。

そのころ、世界には雨が続いていて、その日もやはり雨で、半分開いた障子窓の向こうに、かつての日常を浮かべていました。のっぺりとした校舎、触れればたしかに堅い教室の壁、シャープペンシルの転がる机。私は、同級生を懐かしんでいました。一人、変わった子がいたのです。

変わった、とはいえ、とりわけて目立つということも、暗すぎるということもなく、ほんの少しだけ独特な間を持った、黒髪の女の子でした。ただ、その独特な間が、授業が終われば集まってお喋りをする子達にとって、彼女を変と言わしめる原因ではあったのでしょうか。試験で点数をとれないとか、忘れ物の多いとか、そんなこともありませんでした。彼女はすこし、会話が苦手だったのかもしれませんが。たしかに、おはようの一言でさえも、彼女がまともに返したのを、聞いたことがありませんでした。だからといって、無視をする、というわけでもないのです。彼女は、おはようのその一言に対して、日常的な会話の殆どに対して、なにもわからなさそうに笑う、という返答をしました。もちろん、普通の高等学校に通っていたわけですから、なにもわかっていない、なんてことはありえません。ただあまりにも、その笑い方といえ、本当に、なにもわからなさそうにするものですから、お喋りな子達の、「もう！」と云う気持ちも、わからないではなかったかもしれません。

けれど、私は彼女が好きでした。そんな、なにもわからなさそうな笑顔がどこかいじらしく感じられて、見るたびに、ちよつとだけ変な気が起きたのをよく覚えています。ほら、例えば、眠る我が子をわけもなく起こしてしまう親と、おんなじ気持ちですよ。中途半端になった指のささくれを、思い切つてとつてしまいたくなる、あの気持ちです。

彼女と友人関係にあったかどうかは確信がありません。私は所謂八方美人、風見鶏と云うやつで、教室ではとりわけて、誰とも分け隔てなく接していました。いえ、実際は誰とも、ほんとうには接していません。なかつたかもしれませんね。ですから、彼女にしてみれば、私も数ある同級生の一人だったかと思えます。けれど、彼女と私は、帰り道が同じでした。校門を出てまっすぐ、今となつては懐かしい、アスファルトの路面表示を三度折れるまでは、いつも一緒に歩きました。

どうしてでしょうね。雨の日が多かつたように思います。というのも、記憶の中で彼女は、いつも傘をさしていました。ビニールに注ぐ雨のポツポツといった野暮ったい音の中に、彼女の曖昧な笑い声が、いつでも鮮明に聴こえていました。だから、その日も私は起き抜けに、障子向こうの雨の匂いに、彼女を思い出しながら、里へのおつかいのため、身支度や何かをしていたと思います。

そのとき、縁側の方から、諏訪子様が私に声をかけました。さなえ、ちよつとおいで、なんて言つて、いつものことながら、諏訪子様のその声を聞きたびに、私はいつもドキドキしながら、神棚のある、黴臭い畳の部屋までついていったものです。ドキドキする、というのも、そうじゃありませんか。ちよつとした用事だったのなら、呼びつける必要はありません。その場で話してくれたら、幾分安心できます。それをわざわざ改まつて呼びつけて、暗い畳の上で対面の形を取らされるから、或いはこれは、なにか怒られるのではないだろうか、心当たりがなくても緊張してしまいます。今にして思えば、それは私の、私的ノスタルジーというものでしょう。なにかから話したのか、だとか、ううむ、だとか、腕を組み唸つてばかりで一向に始まらない諏訪子様のご様子に、きつと、すこし過保護すぎた両親を重ねていました。だから、お説教までの秒読みに似たその時間に、私は緊張と一緒に、不思議な安心感を覚えていたのです。

けれど、あんまりに始まらないものですから、そのうちに、程よい緊張感と安心で、うつらうつらとしてしまいました。もつとも、諏訪子様のソレはある人特有の癖というもので、実際にはお説教をされたことがあります。どれほど唸られていても、せいぜいおつかいの品

が増えるのみでしたから、余計に、眠たくなってしまうというものです。

そのときに見た夢を、よく覚えています。

彼女の夢です。なにもわからなさそうにはにかむ彼女の夢。はじめは、彼女ではなく、キラキラと、髪の明るい子達の夢でした。授業が終わるや否や後ろの方に集まって、なにやら高い声でお喋りをしています。一番後ろの席の私が、教科書やノートを鞆に整理しながら、それを聞くとともに聞いていて、実際の私は、それを俯瞰して見えます。夢の私に、髪の明るい子達の一人が声をかけたところで、不意に、場面が飛びました。そうすると、今度は森になりました。暗くて、じめじめとして、知らない植物がたくさんあり、どこにも構わず蔭を巻く、陰鬱な森です。なんてことのない細い木には、ロープが巻かれています。ロープには、きつと、か細い線よりずっと重たい、女の子がぶら下がっています。聴覚に、曖昧に、声が響きました。諏訪子様の声です。おつかいがどうか、神奈子様に内緒でとか、おそらく、半覚醒の夢です。だから、陰鬱な森には古い映画のようなフィルムターがかかって、まるで、雨が降ってるみたたく、ざらざらしたり、明滅したり。一瞬、女の子にパツと視点が近づいて、学生服だと分かったり、また離れて、なにもかもよく、わからなくなったり。それこそ夢は本当に、映画のショッキングな場面のように、女の子の縊死体を、目まぐるしく強調して見せました。

諏訪子様の声が一際大きく聞こえて、ハッと、目を覚ましました。紛れもなく、例の彼女の夢です。彼女は、私がちらへ来る年の夏休みの最中、ご両親に行つてくると言い残して、消えてしまっていたのです。夕立が過ぎた暮れ、所謂行方不明というものでした。その後あれこれと噂が立つのは道理ではありませんが、学校での噂といえればひどいもので、彼女は死んだ、自殺した、樹海で首を吊つたんだ。なんて、誰も彼もが彼女の死について口を動かしていました。もちろん私は、実際のところ彼女がどうなったのかなんて、知る由もありません。当然、今だつてわからないままです。けれど、畳の上で船を漕いだそのあと、増えたおつかいの準備をする最中に、なんとなくではあり

ますが、誰もが語った彼女の噂は、本当なんだと思いました。雨樋から滴り落ちる、塊のような水滴が打ち付ける音の中に、彼女の死を理解しました。そうしてぼんやりと考えたのは、彼女の死には少なからず、私も関わっていたということでした。

彼女はよく、からかわれていました。大げさな言い方をするならば、いじめられていたのかもしれない。髪の毛の明るい子たちが彼女にかける声の軽さを、よく覚えています。私がなんとかしてやれたら、また違った形でお別れができたかもしれない。本当に、準備の片手間に漠然とした想像を浮かべていました。そのとき同時に思っていたことは、私がなんとかしてやれたらなんて、そんなふうに考えるのは、私が彼女を好いていたがゆえの、その頃流行していたドラマ式の、ヒロイックさに起因しているのかも、だとか、準備の片手間に落ち着ける私は、すこし冷酷なのかもしれない、だとか、とにかく彼女の死を軽視した、不可思議に冷たい感触ばかりでした。連日のことでしたから、里ではもう誰も雨など気にせずに、どの店も人も、普段通りに賑わっていました。けれど、それがまた、私を妙な気にさせたのです。もはや誰も彼もが諦めて、晴れの日と同じように賑わっているのに、実際には雨が降って、紫陽花が湿る薄紺の中、色調の落ちた町の中に居るわけですから、妙に、それが本当な気がしました。普段の晴れた明るい世界は嘘で、雨が降るのに賑やかな世界が、本当のもののように感じました。普段と変わりなく、八百屋さんの快活な呼び声に誘われるがままに、おつかいの品を買いました。けれど、私はその普段通りが、妙におかしな気がしたのです。こんなにも雨が降っているのに、こんなにも、普段通りに生活をするなんて。そんな、漠然とした感覚を持って余しながら、残りのおつかいを済ますべく、里を歩きました。

正午を待たずして、おつかいは済み、諏訪子様もお出掛けになったので、縁側で、ぼんやりとしていました。いつもなら、境内の掃除でもしていたかと思いますが、あいにくの雨で、それに連日続くものですから、もう、諦めて梅雨明けを待つしかなかったのです。雨溜まりに踊り溶ける砂の粒を眺めて思うのは、やはり、古いことばかりでし

た。けれど、そうこうしているうちに来客があるのではないか、なんて、緩やかな期待も胸中にはあつたのでしょう。そうでなければ、わざわざ飛沫の跳ねる縁側に腰を落ち着けたりしません。実際、その頃はひとり、神社へと頻繁に訪れる方がいました。いえ、どうも、変な感じですね。ひとり、というのも、方、というのも、他人行儀な感じがして、なんだか可笑しいです。しかし、ひとり、というのはいはり誤りかもしれませんね。正確には一匹になるのでしょうか。ああ、決め兼ねてしまいます。その方は妖怪でした。怪は唐傘、性を多々良、名が小傘。そうですね、やっぱ便宜上、ひとり、としておきましよう。彼女はとも妖怪らしく、そして人らしく、ああ、今でもわかりかねます。妖怪というのは得てして、人を惑わすものなのですね。

話を戻せば、私は縁側で、彼女を待つていたのです。そのころ、彼女は毎日私のところへやってきては、荒唐無稽な悪戯をしました。もちろんそれは、彼女の習性によるもので、偶然、標的に選ばれたのが私だったのでしよう。彼女はいつでも傘をさしていて、それだけで、隠れているつもりになって、傘から顔をひよいと出しては、驚け、なんて言葉を発音するのです。赤ん坊ならいざ知らず、そんなことで、私が驚くはずありませんから、だから余計に躍起になって、毎日、私の前に現れたのでしょう。妖怪らしいのは、私がどこにいても現れるという点です。彼女は私が行くお使いのことなど知らなくても、里に行けば里で、林道を歩けば林道で、縁側に座れば縁側で、私を驚かさんと現れるのです。きつと、驚いたふりでもしてあげられたら、彼女がああもしくくすることもなかったのでしょうか。標的に驚かせるまで付いて回る、きつと、それが彼女の習性でした。けれど、いないないばあで驚ける人間もそうそういませんから、いまでもすこし、不条理に感じます。

私はそんな彼女のことを大嫌いでした。いえ、それは嫌悪というよりも、どうでしょうね。ウザい、なんて懐かしい言葉が、しつくりくるような気がします。彼女は常に、私がして欲しくないことを、一番して欲しくないタイミングでやってのけるのです。今にして思えば、なにか驚かしてくる妖怪、などというのはただの、便宜上の、都合の

いい解釈で、本当なら、彼女はそういう妖怪だったのかもしれない。当人が一番にいやがることを無意識的に体現する、恐ろしいだけの、妖怪らしい妖怪だったのかもしれない。もちろん、本当のところはわかりませんが、とにかくとして、他人の気分を解さずに、所構わずはしやぐ彼女を嫌っていました。都度、きつく諫めたのを覚えています。それはもう、威勢良く飛び出してきた彼女がふにやふにやになるまで、諫めてやりました。

もうお分かりかとは思いますが、私はその時間をたのしみにしていたのです。学校に通っていた頃は、気兼ねなくひとを詰る楽しさなんて知らずに過ごしていましたが、彼女のおかげで、なんとなくではあります、そのたのしさがわかりました。都度しよぼくれる彼女に当たって、次の日になれば、記憶を失くしたような威勢の良さで飛び出してくるものですから、私はそんな彼女との時間に、まるで、お昼時に何度も繰り返される、紋切り型の時代劇のような快さを感じていたのです。

境内の土がおおよそ雨に沈んだ頃、階段の方から、足音が聞こえました。不思議ですよ。雨の降りしきる境内で、それなりに遠い、足音を聞くなんて。それだけ、私は彼女がやってくるのを、楽しみにしていたのかもしれませんが。もう一寸すれば、彼女のさす傘の頭がみえてくる。そんなふうに思いました。けれど、一寸して現れたのは、彼女本人の、水色い、濡れた髪の毛だったのです。彼女が傘をささないなんて、ほとんど、考えられないことでしたから、思わず私は縁側から、階段の方まで近づいていきました。なにかあったのではないか、確かめなきやいけない気がしたのです。

見れば、彼女は片手にしつかりと、いつも通りの茄子色を携えていました。ですが、やはり傘は閉じられて、下を向いて、役割を放棄しています。彼女の水色い髪は濡れ、その色を少しばかり重く落としていました。表情にも同様の陰りがさして、その日だって、いつもの調子でくるものと思っていた私は声をかけるにも言葉が浮かばず、そんな彼女をみるのは初めてでしたから、狼狽して、思わず口をついたのは、間の抜けた、挨拶の語句でした。

そうです。

おはようございます、と私は言いました。

彼女は、なにもわからなさそうに、はにかみました。

そのとき、私は悟ったのです。

少女の縊死体は、模倣とした幻などではないということ。

彼女のことなんて、なにひとつ知らなかったのだということ。

そして多々良小傘は、妖怪であるということ。

よく覚えています。忘れようにも忘れられません。

ねえ、早苗さん。わちき、部屋に出た虫を潰しちゃったんだ。かわいそうかなと思っただけど、でもやっぱり、気持ち悪くて、こわくて、潰しちゃった。だから、早苗さんのいうように、わちきはやっぱり残酷で、臆病なんだ、って思ったら、急に、早苗さんに話さなきゃいけないような気がしたの。ねえ、早苗さん。わちきはやっぱり、残酷で、臆病で、わちきな、ダメな妖怪でしょう？　だって、両目の色だって、ちがうから。

彼女は照れたように、諛うように、曖昧に、笑いました。

人面樹 2

それから、私と彼女は友達になりました。敬称の代わりにちゃんをつけさせ、彼女が訪れればお菓子を作って、お茶を淹れました。一緒にカップケーキを作ったことを覚えています。おそらく晴れ、いえ、曇り空の、お昼時でした。雨の降らない代わりに、蛇口から、水が流れていたのを思い出せます。お台所か、お風呂場か、いまとなつては定かではありませんが、つやつやと、周囲のものを捻じ曲げて反射する鉄から、蜘蛛の糸を思わせるほど、細く、また頼りのない、透明な柱が伸びていたのを覚えています。その日も彼女は傘をさしませんでした。閉じた傘を片手に下げて、ひたひたと、裸足でお台所まであがつて、物珍しそうに、カップケーキの材料を見つめていました。なにも知らない彼女に手本を見せると、魔法みたい、と彼女は笑って、見様見真似を始めるのです。私は、そうして出来上がった彼女の不恰好なカップケーキを食べました。彼女に私が作った方を食べさせると、彼女は喜び、また笑います。当然、味はどちらも変わりません。けれど、彼女は私が作ったカップケーキの方が、美味しいと云うのです。わちぎが作ったものなんかが、早苗ちゃんに敵うはずない、などと嘯くものですから、そんなことはないとからかうと、彼女はまた、なにもわからなさそうに、はにかむのでした。

その頃には、彼女元来の威勢の良さや前向きさ、生意気さはもうすっかりとなりを潜め、殆ど別人のように振舞っていました。虫を怖がり、曖昧にはにかみ、私に肯く。ただそれだけの存在と思わせるほど、あの間の抜けた驚けの四字が、幻だったのではないかと疑わせるほどに、掴み所のない、ぼんやりとした仄暗さを纏うようになっていました。もちろん、私はそういつた彼女の変貌を、多々良小傘という妖怪の習性からなる変化と捉えていました。ですが、罪悪感を覚えずにもいられなかったのです。こちらに来てからというものの、妖怪なんてその程度のもの、という考えがあり、私はその考えに則って、彼女の驚けという四字をキツく叱責していました。大袈裟な言い方をするなら、いえ、私はきつと、彼女をいじめていたのです。その日にど

れだけ落ち込んでも、次の日には記憶をなくしたように振る舞う彼女を詰ることに、たのしみを見出していました。私を標的とした彼女の習性、至らなさのみならず、目の色髪の色、言葉尻までをも、彼女を追い詰める道具にしたのです。そう。私が彼女を追い詰めたのです。虫を怖がり、曖昧にはにかみ、私に肯くだけの存在となるまで追い詰めてしまったのは、他ならぬ私本人なのではないかと、そう思わずにはいられませんでした。彼女は私の言うことをなんでも聞きました。早苗ちゃんと呼ぶように言えば、それを守りました。お菓子作りなかに誘えば、一寸も待たずに領きました。けれど、そんな罪滅ぼしの最中にだって、私は彼女のなにもわからなさそうな笑顔を眺めれば、いじらしくって、苛々として、度々、たまらない気持ちになっていたのです。

ああ、どうしましょう。そうですね。

この話をするのなら、やはり、魔理沙さんの話をしなくてはいけないように思います。霧雨魔理沙さん。昔なら、よく一緒にいろいろと共にしました。いえ、今でも大切なお友達であることには変わりありません。ですが、その頃はすこし、今よりは疎遠になっていたと思います。原因という原因は、私と、魔理沙さんの双方にあったのではないのでしょうか。私はもともと、彼女のことをあまり意識していませんでしたし、正直なところを言えば、苦手意識すら持っていたかもしれない。髪も言動も明るくて、軽やかな感じのする人でしたから、私はどうにも、彼女のことを考えれば、校舎の下駄箱や、階段の踊り場、鍵が開きっぱなしの屋上を思い出してしまい、すこしだけ、心がささくれるような気持ちになっていたのです。それが、私側の原因というものなのですが、彼女側の原因も、これまた妙でした。

彼女はどちらかといえば、私の友人というよりも、霊夢さんの友人だったように思います。いつも、霊夢さんの隣にいて、お話をするときだって、霊夢さんの話ばかりでした。ですから、彼女も彼女で、私のことを別段意識するということはなく、きっと、霊夢さん以外の数ある交友の中の一人に過ぎなかったのではないのでしょうか。ですが、いつときを境にして、彼女は変わってしまった。どうしてでしょ

うね。不定期ではありませんが、神社まで、ときたま足を運んでくれるようになったのです。おしゃべりの内容にしても、変化がありません。彼女は霊夢さんのお話を、一切と言ってもいいほどに、切り出さなくなりました。霊夢さんとの間になにかあったのではないかと、邪推してしまふほど、彼女は霊夢さんに関連する話題を避けるようになったのです。喋り方にしたって、以前の快活な、軽やかさはどこかに消え、訥々とした、まるで雨のような語り口に変わりました。

なあ、私はさつき、中華飯店に行ってきたんだけどね。知らないかな、里に出来たんだ。それでね。餃子と、炒飯を注文した。出来上がる前に、小籠包も食べたくなった。追加で注文したんだ。それで、先に出て来た餃子と、炒飯を食べながら、小籠包を待った。だけどね、食べ終わる頃には、小籠包はいらなかった気がしてきたんだよ。でも、小籠包は出来上がった。蒸籠で蒸されて三つ。それなりの大きさなんだ。仕方がないから、箸でつまんで、持ち上げたよ。そしたらさ、皮が底にくっついちゃって、破けちゃったんだ。それも、三つ全部。

そんな話ばかりで、私は返答に困ってしまい、都度、曖昧に相槌を打つ機械のようになっていました。ですが、彼女は話が終わるが早いかな、それじゃ、と言い残し、去っていくのです。あまり好きな時間ではありませんでした。やはり、思い出すのは雨の日です。境内の土に、ついたそばから水で埋まっていって、去り行く彼女の足跡です。雨に紺色く日暮れて濡れる白線上、信号機の赤に血液色で流れていく川と似た、気だるく、どこか加虐的な心象ばかりなのです。一度だけ、彼女に霊夢さんのことを尋ねたことがあります。曰く、霊夢さんは変わった、とのことでしたが、正直、私には判断のしようがありませんでした。里で会っても、神社で会っても、とてもではありませんが、霊夢さんに変わりというものは見受けられず、やはり変わったのは魔理沙さん本人なのではないかと、模糊とした感慨に包まれるばかりで、今の今まで、本当のことはなにひとつ、掴めないままです。

諏訪子様におつかいを頼まれ、縁側から世界を眺め、多々良小傘、彼女と魔理沙さんが偶に来て、お茶を飲んで相槌を打つ。梅雨が明ける

まで、雨の世界で、私はただただ茫然と、いつも通りの日々を送っていました。とりわけて何か起きることもなく、だからといって、なにもないわけでもない。なんとなく、減っていくお米と増える黴に、そんな日々がいつまでも続くことを思えば、陰鬱な気が起きてくる毎日でした。

人面樹 3

きつかけは梅雨明け、唐突に、雨の止んだ日のことです。

いつも通りに目が覚め、顔を洗い買い出しの準備をしていると、諏訪子様に声をかけられたのです。さなえ、ちよつとおいでと、いつも通りの声色でしたから、私はまた、幾許かの緊張を抱え、少し黴の増えた畳まで、諏訪子様の背中を追いました。諏訪子様はいつも通りに、ううむ、だとか、何から話せばいいのやら、だとか、腕を組み唸つては、お説教前の秒読みに似た焦燥を私に与えます。けれど、その日は舟を漕ぐこともなく、無事、諏訪子様の口切まで堪えることが出来ました。雨が降っていなかったからかもしれないね。雨の音は、妙に頭をぼんやりとさせます。人を取り留めもない空想の彼方へと置き去りにします。畳の部屋には襖から、はちきれそうな晴天が降り注いでいました。直方に照らされた畳の鮮やかさを、よく覚えています。

諏訪子様は言いました。

わたし、今日から神奈子のところに行つてくるよ。だから、買い出しは一人分、少なめでいいからね。いつもより。

それはきつと、夏の始まりでした。諏訪子様もお山へ行かれるとなれば、何か重要な案件があるということですから、神社には当分、私一人ということになります。ええ、まさに夏休みの気分でした。空は澄んで晴れ渡り、縁側から覗く境内に散らばった無数の水溜まりは、どれも、小さな青空でした。諏訪子様がお出かけになって早々、縁側で腕をうんと伸ばし、夏の始まりめいて吹き抜ける風に、胸を躍らせて、たくさんのあらぬ空想を揺蕩わせました。どうしてでしょうね。考えるのは小傘さんのことばかりでした。彼女と一緒に山道を歩こう。滝を見よう。麓まで降つて湖に行こう。近くの緑が多い公園で、お弁当を食べよう。空想の中、どんな景色の中でも、彼女は曖昧にはにかみました。ええ。それはきつと、恋だったのかもしれないね。でも、違うんですよ。私はちゃんと、彼女が妖怪であるということも、仮に人間だとしても、同性であるということも、分かっていたのです。

から。そのときにだって、彼女のことばかり考える自分に気付いて、同性同士なんて気持ち悪い、とか、すこしはしやぎすぎかもしれない、とか、自分の行き過ぎた空想に、キツく平手を打ったものです。

不意に、思い出したのは彼女のことです。小傘さんではなく、向こうの、行方不明になってしまった、同級生の女の子。学校からの帰り道、珍しく晴れた日のことを思い出しました。きっと、なにかの行事の日で、普段より早い家路でした。もちろん、私は彼女と隣り合って歩いて、およそ会話の望めない彼女に、いろんなことを話していました。遊びに誘って断られることを恐れて、当たり前障りのない話題ばかりを選んでいたと思います。部活のこと、髪やお洋服のこと、同級生の声の高いこと。なにを話しても、彼女はただ、曖昧に笑うのみです。私はそれが妙に嬉しく、とにかく、いろんなことを話し続けました。それから、一つ目の角を曲がったとき、私の声は目の前の、踏切の高い音に遮られてしまったのです。そのときでした。鳴り響く警報音の中、彼女はおもむろに、私の肩からぶら下がった左手を、弱々しく、ゆつくりと、握りました。虫の、這うような速度でした。大きな芋虫の、お腹のような温度でした。思わず胸に引っ込めた手のまま、電車が通り過ぎては、踏切が上がります。私は何事もなかったような声で、話を再開しました。たしか、好きな映画の話です。幽幻道士のデブ署長がどうか、そんなくだらない話を、軽すぎる声に乗せました。彼女は、照れたように、諛うように、曖昧に、笑ったのです。

そんなことを思い出しているうちに、境内の向こうから、足音が聞こえました。雀の声に混ざって二つ。階段の向こう、次第に見えてきたのは、金色く明るい髪の毛と、いやに水色い髪の毛です。魔理沙さんがすこし大きな声で、客人を連れてきた、そう云いました。所在なさげに遅れて歩く彼女はわからなさそうにはにかみます。不思議なほど、魔理沙さんが憎たらしく思えました。手を振って近付いて、急かすように要件を尋ねると、魔理沙さんは巫山戯て、私にふたつの選択肢を与えました。とっておきの話を聞くか、聞かずに、自分を追い返すか。珍しく朗らかで、冗談めかした口調でした。夏に逸る気をおさえ、とっておきとやらを尋ねると、魔理沙さんは勿体つけて、全く

関係のない話を始めるのです。

それにしても、最近のお前らは仲がいいな。ああ、ときに。ときに。小傘よ、お前のその両目は、やっぱり片方ずつ別々な色に見えるのか。だって、カラアコンタクトってやつだろう。それは。

陽のひかりに焦がされながら、魔理沙さんと冗談まじりの会話を交わす私の目につくのはやはり、小傘さんのわからなさそうな、照れ臭そうな笑顔ばかりで、私はまた、どうも魔理沙さんをいやに憎らしく思いました。不思議な感覚でした。妙に、世界の回転を速く感じて、空の青さ、始まる夏に、みんなも、私も、私の気持ちも、必死に食らいついているのに、それらとは別の、ちっぽけな私だけが、どこかに取り残されているような、そんな気がしていました。魔理沙さんのとっておき、人面樹を退治した、という話が始まったときの小傘さんときたら、いないいないばあに突然飽きた赤ん坊のような表情をするものですから、余計に、夏の眩い白さと、色濃い影に潜む死の暗さが、一緒になって、私たちのあいだにあらわれたような、はたまた、いまにも消えてしまいそうな、そんな気がしたのです。

私はどうにも、彼女を自分だけのものにしたくなって、魔理沙さんの話の途中、遮るように。とうとう、言っではいけない一言を、口にしてしまいました。死にたくなるほど空の青い、六月の、終わりの日ことでした。

人面樹 4

ええ。

とにかく私はお弁当を持って、山道を歩いていました。山道は山の管理地と、関係者用のルート、僅かな私有地で成されていて、関係者用のルート以外は登山者や観光、修験僧のために誰でも立入れるようになっていきます。私も、傘を持っておらずと隣を歩く彼女も、誰でも立入れる道を選んでいました。立ち入り禁止のロープや看板の多い代わりに、広く、綺麗で、穏やかな道でした。そのころは神社の管理すら投げ出して、彼女の住まう長屋に泊まりきりでしたから、出発は里からほど近い川沿いの、古びた長屋の階段です。彼女には何でもおんなじだったかもしれません。ですが、彼女が私に会いにくるとき、いつも通っているであろう参道を歩くというのも芸がないように感じて、山に入るなりすぐに道をそれ、違った道を選びました。きっと、通な登山者や観光客用の山道でした。ところどころ、鬱蒼と茂った木々が開かれ、どれほど登ったかを見晴らせる、休憩用の避暑地があり、それまでそんなものの存在を知らなかった私は都度、諏訪子様と神奈子様の兩名に、行き過ぎた過保護さと、面映さを感じたものです。彼女といえばカヤの枝を指して、きれい、とか、なんだかたのしい、だとかはにかむばかりで、感嘆を除けば、会話という会話はやはりありませんでした。美しい木々や木漏れ日を指す彼女を眺めれば、私はまた、ひどく意地悪な気分になって彼女に尋ねました。今指している植物はなに？ どうしてきれいな？ 彼女は焦ったみたいなのに、困ったみたいに、言葉を詰まらせながら、それは、だって、わかんないけど、きれいだから。などと、自信なさげに笑いました。結局、そのなかで彼女が知っていたのはヤブムラサキのみでした。じゃあそれ以外の植物はきれいじゃないのかと尋ねれば、彼女は泣きそうになりました。ながら、弁解にもならぬ言葉をしどろもどろに絞り出していました。

それから、それは彼女が下を向いて、焦燥を梳かすみたく、水色の髪に手を潜らせたときのことでした。他のもきれいだけど、名前がわ

かんなくて。何の不自然さも、言い訳がましきもない筈の言葉は、不思議なほど、不自然に、言い訳がましく聞こえました。またなにかを言ってやろう、頭の中で彼女のこんがりそうな言葉を考えつつ、隣歩く彼女の左腕に隠れた横顔を眺めていると、すこし不健康に白い彼女の腕に、一匹の虫が留まったのです。蚊だったとは思いますが、あれは果たして蚊だったのでしょうか。とにかく、お腹の特徴的な虫でした。赤黒く膨れた腹部は見るからに血を吸う虫然として、彼女はきつと、あの怯えた表情で、その醜悪な腹部を見つめていました。私に助けを求めるともなく、ただじつと、見つめていたのです。私も虫が大の苦手でしたから、怯える彼女にただ言葉をかけたのみです。潰さないんですか。尋ねると、可哀想だから。と、彼女はそう言って、振り払おうとする素振りすら見せず、ただ為すがままに、グロテスクな虫の吸血をじつと見つめました。美しい木漏れ日の山中で、私は漠然と、二つのことを考えました。腕に虫の触れる埃に似た異物感、為すがままに血を吸われることは、きつと愛だと思いました。それから、彼女の華奢な身体にも、人となんら変わらない、虫に求められるような赤い血が流れていること。

妙に生々しく風が吹いて、不意に、頬に冷たい感触を感じました。気がついてから降り出すまでの時間というのは、不思議なほどに一瞬です。空を見上げた途端に、雨はなにかを急かすよう、瞬く間に降り出してしまいました。明るい夏を騙すような夕立です。太陽が舌を出して雲に隠れていくのを、たしかに私は見たのです。

お弁当の包みを持っていました。しかし、傘は持っていないませんでした。私は濡れなくなかったのです、いつのまにか虫のいなくなつた彼女の腕に視線を移しました。すると、彼女は言うのです。わちきの家が近いよ。濡れた山道を行くぐらいなら、早苗ちゃんの家よりずっと、わちきの家が近い。妙な口調でした。普段の彼女らしからぬ、整然とした口調。そのまま歩き始めた彼女の背を追ううちに、私はどうも不安になって、なにか、取り繕わなければいけない気が起きました。小傘さん、小傘さんの傘をさしましょうよ。そしたら、二人とも、濡れずに済むんだから。だめだよ。これはわちきの、大切なものなんだか

ら。使わないと意味がないじゃないですか。いくら早苗ちゃんでも、だめ。

為すがまま、彼女とお弁当がだめになって、気付けば長屋に着きました。季節というのは本当に不可解なもので、例えば春に訪れた桜並木と同じ場所を通っても、それが冬なら、同じ場所と思えないのとおんなじに、彼女の黴臭い四畳は、夏の日差しに照らされたそれとは全く別の、真新しく古びた印象を帯びていました。懐かしくて、苛々する香りがしました。黴と、雨と、衣類の香りです。彼女は家に着くなり、濡れちやつたねなんて、いつも通りに笑うものですから、思わず彼女を押し倒しました。夕立に晒された体を拭く間も無く、湿気っていた布団は決定的に濡れてしまいました。いやがる彼女の爪が、腕や背中に突き刺さりました。彼女は爪に着いた私の血を見るとたんにしおらしくなって、それからはずっと、いつもみたく、申し訳なさそうに、諦めたように、曖昧に、いえ。彼女が笑ったのは、彼女の髪を撫でたあとです。つまり、彼女の爪はずっと、私の肌に突き立てられていたのでしょうか。それを愛だなどとは思いませんでした。それはもつとくだらない、なにか、別のものだと感じました。私は彼女のことなんて何も知らなかったし、知る気だって、ちつとも、なかったのですから。何時間も経つても、空は明るいままでした。代わりに雨のよわくなつて、しとしと、しとしと、いつまでも、屋根や、地面や雨樋を打ち続けていたのです。どうして、陽が落ちてしまったのでしょうか。気付けば外は夜の世界で、雨は、わかりません。覚えていません。でもきつと、降っていたと思います。だって、そのとき私の考えていたことを、よく覚えていますから。雨が降ればいいのに。きつとそんなふうには、何もわからなさそうな彼女の寝顔を眺めていました。生暖かく体を湿らす、夏至の夜でした。

人面樹 5 (了)

彼女とはそれきり、とはいきませんでした。翌朝のことです。じめじめした布団の上に眼を覚ますと、彼女の姿がありません。しかし枕元に、彼女の傘がありました。ええ、殆ど考えられない、異常なことでしたから、悪い想像にせき立てられるよう、傘を持って部屋を飛び出しました。けれど行くあてなどなく、存外緩やかな歩調で、濡れそぼる里の明朝を歩きました。昨夜の雨でどこかしこにある水溜りが霧の空を仰いで、草花が濃く匂って、むせ返るようにひんやりとした朝でした。あてもなく歩きながら、そのまま傘を持って神社へ帰ってしまおうか、とか、魔理沙さんや、ほかのみんながいるところへ混ざってしまおうか、とか、いろいろと、冷たい想像をしました。けれど、そのどれもが耐えられないほどに冷たく、到底実現し得ないことのように思えて、私はただふらふらと、もはや彼女を探すでもなく、ふらふらと、濡れた町をひた歩きました。蜻蛉が、飛んでいましたね。それから猫、猫がいました。民家の脇、小さな納屋の脇で毛をぼさぼさにして、丸くなっていました。思えば、どうして何処へも帰らなかったのでしょうか。せめて、彼女の部屋に帰っていれば、二度と彼女に会うこともなかったかもしれないというのに。でも、何処へも帰れない気がしたので。帰りたくないよりずっと強く、帰れないと、そう思つて、ただ、歩いていました。

気がつけば私は里の、ちよつとした広場についていました。入り口から円形に、広く山砂が敷き詰められていて、端のところどころのベンチが設置された、子供の遊び場でした。昼に行けば里の子供達や親御さんの声が賑やかなところですよ。入り口から直進して向こう縁まで突き当たれば、そこから先は山の麓になります。そこから森に入ることできますが、もともと子供達の遊び場として作られた広場ですから、それほど深くまでは行けないようになっていきます。ぼんやりと中ほどまで歩くと、森の入り口から、小傘さんが歩いてくるのが見えました。私に気付くと、小傘さんはすぐに駆け寄って、すこし興奮した様子で、森の奥で見たものを教えてくれたのです。

ねえ早苗ちゃん。森の奥にね、あの人の言つてた人面樹があつたよ。すごいんだ、ほんとに人の顔でね、すごい。こんなわちぎの話でも、なんだつて、笑つて聞いてくれるんだよ。楽しそうにさあ。

私の持つ傘には目もくれず、一息に話してくれました。じゃあ、なんで戻つてきちゃったんですか。なんて。無駄だとはわかつていましたが、つい、またそんなことを尋ねました。彼女は。いえ、小傘さんは。

だつて、話してたら、実が落ちちやうんだ。一つめは偶然だと思つただけ、二つめでわかつたんだ。あの実は、笑いすぎると落ちちやうんだつて。かわいそうだから、帰つてきちゃつた。

そこまで言つて、彼女は思い出したように、私の手から傘を奪い返しました。なんで早苗ちゃんが持つてるのさ。とにかく、朗らかな口調でした。私が黙つているうちに発せられた二の句はどうしたの、続く言葉は早く帰ろうよ。私は適当な相槌を打つて、彼女を先に帰したのです。彼女の背中を見送つて森に入れば、すぐに例の木を見つけたことができました。なんてことのない細い木に、いくつもの、人の顔をした実がなっていました。おはようございます。そう言うと、実は一つ、二つ、なにもわからなさそうに笑つたのです。きつと、人の言葉なんて解してはいない。解つていながら、私はこれまでの全てを、洗いざらいに話しました。

彼女を嫌つていたこと。彼女を好いていたこと。彼女がいなくなつて嬉しかったこと、それでも真つ当に悲しかったこと。彼女をいじめていた主犯の子を好いていたこと、それでも真つ当に嫌つていたこと。魔理沙さんを嫌つていたこと、逆に、どこか惹かれていたこと。それから、今日話したことすべて。

気付けば実はなくなっていました。雨が降ればいいのに、なんて、そんな無味乾燥な言葉がそのまま梅雨明けとなつて、本当の夏が始まりました。どれだけ願つても、もう雨は降らなかつたので、私はそれきり諦めて、彼女に会うこともなく、ひさびさに帰つてきた諏訪子様と、それから神奈子様と。いつも通りの夏を過ごしていたのです。

いろんな後ろめたさを忘れかけた頃です。諏訪子様がいつものよ

うに、さなえ、ちよつとおいで。と、私を呼びつけました。黴た畳まで歩けば、胡座に腕を組む諏訪子様の後ろに、また、険しい顔をした神奈子様が立っていたのです。そして始まったのは諏訪子様の、いつもの癖。お説教までの秒読みに似た、すこしばかり過保護すぎる退屈な時間でした。そのうちに痺れを切らした神奈子様が口を切つて、諏訪子様はバツが悪そうに私を一瞥して、畳の部屋をあとにします。厳しく、また落ち着いた、神奈子様のさなえ、と呼ぶ声は忘れられませんが。さなえ。あんたわかつてんだらうけど。あの、妖怪のことなんだけれどね。

それほど長い話にはならず、そのあとはいつも通りにお使いを頼まれて、身支度を終え、私は里を歩きました。すると、あれは巡り合わせだったのでしょうか。それとも、なにかの計らいだったのでしょうか。前方、誰かと何かを話している小傘さんを見つけました。小傘さんは私を見つけると涙目になって駆け寄って、ひとつ、私の頬を打ち、そのまま去って行きました。小傘さんと話していたもう一人はゆっくりと私に近づいて、それから言いました。なあ、私はいいい友達だろう。

それは魔理沙さんの声で、声の主だつて、いつも通りに髪が明るい、魔理沙さんでした。きつと、あの人は彼女に、私の非を打ち明けてくれたのでしよう。何もわからなさそうに笑う彼女なら、きつと、説明するには骨の折れることだったでしょう。しかし、彼女はもう元どおりの彼女でしたから、私には、私の頬を打った彼女の涙目が、よくわかりませんでした。

ええ、話はこれですべてです。ちようど、あと一つでみんな落ちてしまいますね。どうしましょうか。時間合わせに、なにか喋らないといけませんね。

ええと、彼女とはそれから会っていません。以前なら何処へでも現れた彼女ですが、こちらから会おうとなると、なかなか難しいものがあります。魔理沙さんとは、文字通りいい友達になりました。魔理沙さんがあなた方を最初に退治したとき、あの人いったい、なにを話したんでしょうね。中華飯店のことでしょうか。それとも、霊夢さんの

ことでしょうか。定かではありませんが、ともかく。あなた方の増え方をみると、どうでしょうかね。

今年の夏も、思い通りにはならなさそうで、安心します。

あ。落ちた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。(全13話 主演：赤蛮奇)

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 1

次に私が目を覚ますと、私は大きな鏡の前に立っていた。

鏡を見やると、件の「首から上のない体」に、私の首がくっついて
いることが判った。不思議と、そこまでの驚きは感じなかった。「首
」の辺りに広がるじんわりとした暖かさが、この体が自分の一部であ
ることを俄かに確信させた。

しかし、首から下の感覚は無い。

私がか首から下を動かそうとして、云々と念じていると、鏡
に映った体が徐に慌て始めるのだった。

その慌て方は、私に向けて、ちよつと待って、と言っているように
見えた。

体は、慌てた様子で私の頭を両の手で撫でたり、私の頬を両掌で軽
く、ぺちぺち、と打つたりと、首から下を動かそうと急ぐ私を宥める
のに必死だった。

そんな体の慌てぶりを鏡越しに見て、私は首から下を動かすのを暫
しの間諦めてやることにした。

すると、体は安心したようで、それを私に伝えるためかは分からな
いが、体は、わざとらしく胸をなでおろして見せるのだった。

それから、体はおもむろにストレッチを始めた。

両腕を上げ、背筋をぐんと伸ばしてみたり、軽く屈伸してみたり。
軽くその場で跳ねてみせたりと、体は私に見せつけるようにストレッ
チを続ける。

体が軽く跳ねるたびに、ギシ、ギシ、と木の板が張られた床が鳴る。
木の板は、とつくの昔に傷んでいるようで、その悲鳴にも似た音は、私
に一抹の心許なさを抱かせるのだった。

ああ、或いはこの床は、ちよつとの拍子に抜けてしまうのではない
か。私がヒヤヒヤしているうちに体のストレッチは終わった。

ストレッチが終わると、体が一つ、気持ちよさそうに伸びをした。体の一連の奇妙な行動を鏡越しに眺めていた私は、その妙な時間から逃げ出す術はないかと躡いていた。

今やっと、首から「私」が外れそうな、そんな手応えを感じたところなのだが。

首から逃れようとする私の頭頂部を、ガシ、と両の掌が押さえた。その力は優しいものだったが、しかし確実に、私を首へと押し込んでいる。

抵抗はしなかった。しかし疑問はあった。この体は、私に何をしろというのだろうか。

私の首がすわると、体はもう一度屈伸を試みせた。

屈伸が終わると、体は鏡の中の私を指差すのだった。

やってみろ、ということだろうか。

一間置くと、私と繋がっている首の部分に広がるじんわりとした暖かさが全身に広がった。体全体に広がる暖かさは、首の辺りの暖かさと比べれば微かなものだ。しかし、手の先、つま先までもが確かに暖かいのを、私は感じた。

ああやはり、これは私の体で違いない。

腕を動かしてみた。動く。

指を動かしてみた。動く。

つま先を丸めてみる。よし、つま先も動く。

ストレッチか、よおし。

まず、私は伸びを試みることにした。

両手の指を絡ませて、そのまま腕を上へと挙げる。首を両腕の間にくぐらせるように。私はぐんと、背筋を伸ばした。

ぐ、ぐ、ぐ、と伸びをすると、とても気持ち良かった。私の口から、思わず呻き声が洩れる。

絡めた指を解き腕を下げると同時に、ああ、と深く息を吐く。首、肩、背中、脇腹。暖かさが、じんわり広がる。

よおし。次は屈伸といこう。

私は膝に手をつき、ゆっくり、しかし確かに力強く屈み込む。が、屈

みこもうとした、その時。

「あ、あれ？わ、わわ」

衝撃に、ギシツ、と力強く床が鳴る。

私は、床の上に尻餅をついてひっくり返っているのだった。

鏡に映る私のその姿は無様なものだった。

「あいたたた」

痛みに悶えていると、ふいに体の感覚が遠くなった。気分としては、体を動かす主導権を体に取りられたような気分で、私は少し腹が立った。

おい、なにするんだ。返せ。私が口を開こうとすると、私の腕がやおら動き始める。腕は下半身へと伸びていき、身に付けた「スカート」を押さえつけた。なんか腹立つな、こいつ。

その日、私に主導権が戻ることはなかった。

体は私を首から取り外し、抱きかかえたまま、腐りかけの床の上に敷かれっぱなしの布団に入った。

布団の中で体は、体をうまく動かせなかった私を慰めるかのように頭をぽんぽん、と軽くたたいた。

布団は煎餅のように固く、酷く黴臭かった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 2

しばらく歩いていっていると、里が見えてきた。ああ、あれが人里か。里の家々を眺めながら、私は里へと歩みを進める。

里への道は、均された地面が歩くために程よい幅を為しており、道の両脇は草木に囲まれている。息を深く吸い込むと、澄んだ空気と微かな草木の香りが胸いっぱい広がる。私は息を深く吐き、空を見上げた。

空には恰幅の良い雲が疎らに浮かび、その青さはどこまでも澄んでいた。日差しは少々眩しすぎる気もしたが、そんな空模様は、私に、清々しい解放感を抱かせるには十分だった。

そんなとき、私は視界の中に不思議なものを見つけた。

「んん？」

視界の端に、何やら小さい「ミミズ」のようなものを、私は見つけた。

——もし、お前の視界の端に小さなミミズのような物が現れても、それを目で追ってはいけないよ。

私はそんな忠告を思い出すよりも早く、ミミズを目で追っていた。

しかし、私がどれだけミミズを視界の中心に捉えようとしても、ミミズは視界の端へ端へと逃げていく。

次第に、私の視界はぐるぐると、回転を始めるのだった。

視界の端へとミミズが逃げる。

路に建てられた立て看板が視界に映る。

ミミズは更に逃げていく。

立て看板を素通りし、視界に背後の道が映る。

ミミズは更に逃げていく。

視界は背後の道を素通りし、森へと続く岐路を映す。岐路に何やら人影を見つけたが、私は御構い無しにミミズを追いつく。

ミミズが逃げる。立て看板を素通りし、ミミズが逃げる。背後の道を素通りし、ミミズが逃げる。森を背後に此方へ近づくと人影を素通りし、ミミズが逃げる。

そんな具合に、私は首から上をくるんくるんと回転させ、ミミズを追いかけた。

立て看板、背後の道、森へと続く岐路、里の入り口。立て看板、背後の道、森へと続く岐路、里の入り口。逃げるミミズ。……。

里の入り口、立て看板、背後の道、森への……ぎやあ！

私の回転を、ガシ、と両掌が押さえた。

これが私の両の腕から伸びたものならさして驚くこともないのだが。視界の端のミミズを追い回す私の回転を止めたのは、見知らぬ人物の、その両掌だった。

「ばんきちちゃん、また『飛蚊症』？こないだ治ったって言ってたのに」私の頭部を、ガシ、と押さえ、私の目を見てそう語る人物。この人物は恐らく――。

「今泉影狼、か？」

私がそう口にする、目の前の人物は怪訝そうに眉をひそめるのだった。

「ばんきちちゃん、目、回ってるんでしょ」

確かに、視界はぐらりぐらりと揺れていた。ああしまった、二分の一を外してしまったか。じゃあ、目の前のこの人物がわかさぎ姫か。

「私が影狼じゃなかったら、誰が今泉影狼なのよ、まったく」

違った。やはり目の前の少女は今泉影狼で間違いないようだ。いやあ、わかさぎ感が不足してるとおもってたんだ、私は（？）。

「あ、ああ影狼か。そりゃ、そうだよな。いや、視界の端に妙なミミズが現れてな、でも、もう大丈夫そうだ。だからその、そろそろ頭を離してくれないか」

影狼は怪訝そうな面持ちのまま、私の頭から両掌を、ぱつ、と離れた。

「……飛蚊症」

「え？」

「だから、『飛蚊症』でしょー？それ。ばんきちちゃん、治ったって言ってたのに、またぐるぐる回ってるんだもん」

ヒブンシヨウ、聞き覚えがあるような、無いような。

「まあ、ばんきちちゃんが自分で『季節の変わり目に治ったり、罹ったりする』って言ってたから、昔。まあ、そういうことなんでしようけど」とにかく、と影狼は続けた。

「人里の近くで首を三六〇度ぐるぐる回すなんて、そんな妖怪じみたことしちやダメよ」

おっしやる通りである。でも、気になっちゃったんだもん。

「それに、ばんきちちゃん是人里で働いてるんでしように。『おせきちゃん』なんて呼ばれて。余計に気をつけなきゃよ。そうでしょ？」
「いやあその通りで。言いかけたそのとき、『体』が私から『主導権』を奪った。」

体は何やら慌てていて、暫し意味のない身振り手振りを経たのち、右の掌で私の後頭部を押しつけ、下を向かせた。そして、ピン、と伸ばした左手を、今泉影狼の前に突き出すのだった。

それは、所謂『御免！』のポーズだった。影狼と私の間に、微妙な沈黙が流れる。

あ、主導権を奪われてる時も喋るのは私なのか。

しかし場に流れる居心地の悪い沈黙は、私に口を開くののためらわせた。なにより、体の言わんとするところを、私はいまいち察せていなかった。

そんな沈黙を、今泉影狼が打ち破った。

「こ、こわいわー。急にどうしたのよ。急用でも思い出したわけ？」

ああ！急用か！

「ごめん！そうなんだ、ちよつと、急用を思い出して……」

口に出してみると、私は私自身の発言に胡散の臭気を感じずにはいられなかった。

急用を思い出した。それは、偶然会った友人と別れる際に使うには、どうにも頼もしさに欠ける言葉に思えた。

急用、急用、急用。

急用とは、果たして如何なる用なのか。私は思索を巡らせるのだが、それらしい用事が思い付かない。

「ああ、ばんきちちゃん、仕事でしょ。人里で。もう、最近ばんきちちゃん

全然捕まらなくて、久々に会えたー、と思ったんだけどな」

「そうか！仕事か！」

「そう、仕事なんだ。いやあ、悪いな。折角久しぶりに会ったっていうのに」

正直、私にとって今泉影狼は初対面他ならない。しかし。

——影狼はいい奴だ。まず可愛げがあるし、何より一緒に居ると面白い。

それでも何故だか、初対面という気がしなかった。

出会って数刻もしないはずなのに、私は今泉影狼に親しみを感じていて、そんな今泉影狼とこの場で別れるのを惜しく感じていた。

「仕事なら仕方ないわ。そうだ、ばんきちちゃんの仕事が終わったら、いつもの居酒屋〆に行きましようよ。折角久しぶりに会えたんだから、いいでしょ？」

「それで、仕事は何時頃終わるの。ばんきちちゃんの仕事が終わる頃、私、先にお店に入って待っていようと思うんだけど」

すると、体はまた慌て始めた。

「え、ええと。何時頃だっけなあ」

体はやはり意味のない身振り手振りを経て、漸く、ああ思い付いた、と言わんばかりに何か意味のある動作を始めた。

まず体は右手の人差し指で空に浮かぶ太陽を指差した。次に、左の人差し指で何も無い西の空を指差す。

ああ、これは分かりやすいぞ。

「そうそう、夕方頃に終わると思うよ。詳しい時刻は分からないけど」
影狼はそれを聞くと、分かった。じゃあ、その頃に、と言って、里とは反対方向に歩いていくのだった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 3

その後、私は人里に来ていた。正確に云えば、人里の、大衆食堂に居た。影狼と別れてから体は私に主導権を返す事は無かった。体の歩みに身を任せていると、この大衆食堂にたどり着いたというわけである。

体が慌てた様子で食堂に入ると、怒号が飛んで来た。それはしわがれた声で、声の主は店主と思しき婆さんだ。

「困るんだよねえ、無断で何日も休まれたら。人の苦勞が考えられないかい。最近の若いのは全く」

ここで、この食堂が私の働き先であることを確信した。しかし、急に婆さんから叱責を浴びせられた私の口からは、いやそのええと、といった言葉が溢れるのみだった。

「何をごによごによ言ってるんだい。先ずは何か言うことがあるんじゃないのか」

トレイを抱き抱えた少女が、台所の入り口付近に立ち、そんな光景を気まずそうに見つめていた。

体が慌ててポーズを作った。それは例の「御免！」のポーズだった。

例の如く、場に微妙な沈黙が流れる。ああどうしたものか、謝ると言う事は分かるが、どう謝ったらいいものか。悩んでいる間にも、微妙な沈黙、この場の雰囲気はどんどん妙な重みを帯びていく。

「その、すみません、でした」

私の口から出た言葉は、それはシンプルなものだった。

「まあ、良しとするかね。……それで、今日は」

婆さんが私に詰め寄るように問いかけた。

「今日は」

体が、私の口元を左手でぼりぼりと搔く。何か喋れということだろう。

「ええと、今日は……」

「今日は空が青いですねえ」

体が、ビシツと敬礼を決める。……うーん、多分間違えたな。互いに。

場に、またしても微妙な沈黙が流れる。

台所付近の少女は何やら驚いた様子で、抱き抱えたトレイで顔の下半分を覆っていた。

婆さんも一瞬目を丸くして驚いていたが、すぐに口を結び、眉間にしわを寄せるのだった。

「今日は、働けるのかい」って聞いてるんだよ」

婆さんは顔をしかめたまま言った。

漸く、婆さんの言う『今日は』の意味を解した私だったが、正直なところ、その問いにどう答えたものかと迷っていた。

まず、私は妖怪である。妖怪である私が、どうしてこんな婆さんの下で働かなければならないのか。そもそも、妖怪が働くなんてナンセンスではないか。妖怪なんて日中眠って、夜毎ふらふらついていれば、それで十分だ。

そして、百歩譲って人間の下で働くことを許容したとしても、それは私の意思でなく体が勝手にやろうとしていることだ。何故、私がそんなことに付き合わなければいけないのか。私には納得できなかった。

今日は帰ります、というか、もう来ません。口に出そうとしたその時、体がその掌で私の両頬を強く叩いた。二度も！

「なんだ、やる気じゃないか。ならいいんだよ。その調子でバシバシ働いていっておくれ」

体はまた、ビシツと敬礼を決めるのだった。

「それにしても相変わらずだねえ」

婆さんが出し抜けに言う。

「相変わらず、格好と表情の決まらないやつだ。敬礼なんてするのなら、もう少しシャキツとした顔をしたらどうなんだい」

婆さんの話はそれからしばらく続いた。

私は婆さんの話を、はあ、それは、はい、等々、それらの言葉をあむあむと述べ、聞き流していた。

「そんなんじゃないや人を疑われてしまうよ、全く」

婆さんは私への小言をそう締めくくって、その矛先を今度はトレイを抱き抱えた少女へと向けるのだった。

「ほらーあんたも突っ立ってないでとっとと働くー！皿洗いはいつになつたら終わるんだい？ぼーっと見てる事ないだろうに。き、動く動く」

「は、はいー」

少女は慌てて返事をし、慌てて台所に向かい、皿洗いを始めた。

婆さんはそれを一瞥すると、何やらボソボソとぼやきながら、店の奥へと引っ込んでしまった。

食堂に客はいなかった。その代わりに、各テーブルには大量の食器類が積み重なっていた。

少女は必死に皿洗いをしている。体は、そんな少女に徐に近づいては、またしても「御免！」のポーズを取る。そろそろ慣れて来た私は、言い澱むことなく口を動かした。

「あー、ごほん。ごめんごめん、勝手に休んだりして、悪かったね」私の口から発せられた言葉に私自身、多少大根の感を覚えたが、まあ、こんなものだろう。

少女がハツとして皿洗いの手を止めた。

「ああ「おせきちゃん」！私なら大丈夫だよ。そりゃ、少しは大変だったけどね」

えへへ、と笑って、少女は言葉が続けた。

「それより、おせきちゃんは大丈夫なの？また「気象病」？今度はどうしたの？「片頭痛」？それとも「風邪」？あ、「関節痛」だ？」

少女は立て続けに私に疑問符を投げ掛けた。しかし、少女の口から発せられる聞き慣れない言葉の数々に、私の脳内は疑問符に埋め尽くされるのみだった。

また、体が私の頬を搔く。

「まあ、そんなところ」

少女は、仕方ないなあ、と言わんばかりに、一つ息を吐き出した。「おせきちゃんたら、季節の変わり目に絶対体調を崩す、って自分でも

分かってるはずなのに、なんでかなあ。どうしても、体調崩しちゃうんだよねえ。抵抗力が弱いのかな？」

少女はそんなことをボソボソと、誰に言うともなく呟いていた。

少女はそれからしばらく、ボソボソと続けていた。『呟き』が一通り終わると、少女は何か納得したように、コク、コクコク、と小刻みに頷き、こちらに向き直るのだった。

「うん。私は大丈夫。気にしてないよ。そうだ、お婆ちゃんはあんな風に言うけど、あんまり気にしちやダメだよ。お婆ちゃん、あれでもおせきちゃんが来ない間、なんだかんだでずっと心配してたんだから」

体が、わざとらしく私の後頭部を右手で『わしわし』とした。

「いやあ、そうか。心配かけてしまったようで、申し訳ないやら照れ臭いやら」

少女はそんな私を見て、何故だか可笑しそうに微笑んだ。

「あはは。おせきちゃん、なんか変ー」

そのとき、店の奥から怒号が響いた。

「あんたら、もしや手を止めてくつちやべってるわけじゃあないだらうねー！」

少女はギクリとして、私に小さな声で話しかけた。

「じゃあ、体調、もう大丈夫なんだ？」

「ああ、問題ないよ」

「そっか、よかった。じゃあ、私はお皿洗ってるから、おせきちゃんはテーブルの食器持って来ちゃってね」

それから、体はテキパキと働いた。テーブルの食器を全て台所に運び終え、食器の載っていたテーブルを全て綺麗に布巾で拭いた。

その間、私は暇で暇で仕方なく、テキパキと働く体をよそに、店の窓から見える景色などを眺めたりした。

窓から見える空はとても青く、雲は白く。ああ、私はどうしてここにいるのだろうか。そんなことを、私はぼんやりと考えていた。

ぼんやりしていると、店の奥から婆さんのしわがれた声が響いた。

『こら、おせき。もし余所見なんてしながら仕事をしようものなら、首

斬りにしてしまおうよ』

婆さんが、見てもいけないのに私の余所見を看破するものだから、私は婆さんが少々恐ろしくなって、慌てて余所見を止めた。

そんな私を見て、台所で皿を洗う少女は、くすくす、と笑うのだった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 4

体が少女と並び、二つある流しの一つでコップ類を洗っている頃だ。

私はやはりどうしても暇で、またも余所見をして、食堂にある窓の外の、空を眺めていた。

窓は台所からでも見えた。

窓から見える空はやはり青く。でっぷりと肥えた雲は白く。夏が始まってからずっとあの廃屋のような家で過ごして来た私は、どうしてもそんな空に焦がれずにはいられなかった。

そういえば、仕事が終われば影狼と居酒屋に行くのだった。空を眺める内に、その事を思い出して、私の心は踊った。

空を見ながら、この煩雑な仕事が終わる事を願っていた私の視界を、不意に何か横切った。

気がつけば、私の視界の端にはあの“小さなミミズ”が現れていた。私はぼんやりしながら、ミミズを目で追いかける。

ミミズが逃げる。追いかける。

首から上が、四十五度回転する。

ミミズが逃げる。追いかけて、ぎゃつ。

体が、私を泡だらけの両掌で押さえつけた。

同時に、パリン、と、コップの割れる音がした。

「ああーおせきちゃん、……やっちゃったね」

隣で皿を洗っていた少女が、僅かの驚きに憫然を混ぜた視線をこちらに向けた。私が俄かに焦りを感じて下を向くと、私の足元には粉々になったコップの欠けらが散らばっていた。

私はこのとき、計らずも“しまった！”のポーズをしていた。

当然、音を聞いた婆さんは店の奥からやってきた。

コップを見ると婆さんは、

「ああー、やった”よこの子は。全く、大方余所見しながらぼんやりしてたんだろ。仕方ない子だね」

「まあ、割れちゃったもんは仕方ないが、しっかりしておくれよ。全

く」

それから婆さんは、全く、全く、と、いつまでもぼやきながらまた奥へと引つ込んで行った。

「まあ、お婆ちゃんの言う通り。割っちゃったものは仕方ないよ。おせきちゃん、あんまり気にせずね。まあ少しは気をつけないと、ダメかもだけど」

少女はそう言つて、えへへ、と笑つて、流しに向き直しては皿洗いを再開した。

「あ、ああ。すまない、気をつけるとするよ」

体はいつまでも私を責めるように、その泡だらけの両掌で、私を首へと押し付け続けるのだった。それはもう、ぐりぐりと。

それから、少女と私、或いは少女と私の体が皿洗いを終えると、しばらく私は少女と共に暇を持て余していた。その間ずっと少女は私に語りかけては、他愛もない話を繰り広げるのだった。

あまり話題の持ち合わせのない私は、少女の話に相槌を入れて頷くことしかできなかつたが、それは意外な程に楽しい時間だった。

日暮れ、そんな楽しい時間を打ち破るように、食堂に人が雪崩れ込んできた。客が雪崩れ込んでくると、婆さんは店先に出て『商い中』の看板を裏返した。少女から後で聞いた話だが、この食堂は基本、昼、夕の“二回転”からなるらしい。

その客の多さに私は面食らつたが、婆さんと少女はテキパキと注文をこなし、体もまたテキパキとそれを運んだ。

そうして、空の橙色と紺色が程よい階調を為した頃、私の食堂での業務が終わつた。影狼との約束があつたので“賄い”は断つた。

店を出ると、体は私の頭頂部を、ぽんぽん、と二度叩き、私にその主導権を明け渡した。

瞬間、私の内に解放感が駆け巡り、私は思わず伸びをする。

ぐ、ぐ、ぐ、と体を伸ばすとともに気持ちがよくて、私の口から、勝手に呻き声が洩れだす。

頭上で絡めた指と指とを解き放ち、一つ大きく息をついた。

紺と橙が織りなす空、西の方角で、沈みかけている太陽はガラガラ

と輝いていて、それはまるで、今日の労働の終わりを讃えているようだった。

「まあ、私、何にもしてないけどな」

誰に言うともなく、私は独り言ちて、影狼の待つ、いつもの居酒屋へと歩き始めた。

胸中に湧き上がる借りてきた達成感と共に、地面を数歩踏みしめると、私は或ることに気がついた。

「いつもの居酒屋って、何処にあるんだ」

私は仕方なく主導権を、体へと明け渡した。すると体は私の頭を、ぽんぽん、と二度叩いて、私の知らない、いつもの居酒屋へと歩き始めるのだった。

体が私を居酒屋へと運ぶ間、私は夕空にうつすらと浮かぶ丸い月や、里の往来を眺めていた。岡持ちを気怠そうに担ぐ者、何やら小銭袋を遊ばせて鼻歌を歌う者、手を繋ぎ家路を辿る親子。そんな夕空に照らされた夏の景観は、私にどこか憧憬の念を抱かせた。

しかし、私は直ぐに居酒屋に今泉影狼の待つことを思い出した。それを思えば、憧憬は情景へと変わり、その情景は一層美しく映えるのだった。

ああ、居酒屋に着いたら、いよいよ私の夏が始まってしまうな。

私は無自覚に微笑んでいた。

不意に、体が足を止めた。能気な想像を頭に浮かべている頃、体が急に主導権を寄越すものだから、私は少しふらついてしまった。

少し蹴つまずきそうになりながら眼前の建物を見やった。

私の目の前には、影狼の待つ、いつもの居酒屋が待ち受けていたのだった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 5

居酒屋に入ると、端の方の小さなテーブル席に影狼はいた。

影狼は、こつちこつち、と言わんばかりに手をひらひらとさせている。

私は早足になりそうな心を押さえつけながら席に向かった。

「ばんきちちゃん、ちよつと遅かったんじやない？」

からかうように影狼が言った。店内の各所に括り付けられた電球が、影狼の少し赤らんだ顔を照らす。

「なんだ影狼、もう呑んでるな？」

「先に入って待ってる、って言ったでしょー」

影狼のその口調は、当たり前じゃない、とでも言いたげなものに感じた。

「あ、ほらばんきちちゃん、座って座って」

私は席に着いた。腰を下ろすと、自然と大きく息をついてしまった。

「おつかれさま。忙しかったんだ？」

「まあね。それと少し慣れないことをしてさ、いやあ疲れたよ。今日は」

もちろん私は影狼とは今日会ったばかりということになるが、今となつては関係ない。どうせ私の友人には違いなのだ。それなら、話したいように話してしまえ。私はそう考えた。

影狼は相槌を打つなりテーブルの上のジョッキに半分ほど残された麦酒を飲み干し、声を上げた。

「すいませーん。麦酒を二つ」

はいよ、という声が響いて、それから間も無く席に麦酒が運ばれてくる。

「あ、麦酒でよかった？」

私は運ばれてきた麦酒を見ると、脳が微かに“うづく”を感じた。

「ああ、多分これでいい」

「多分つてなによ。まあいいや、とりあえず……」

影狼は一瞬の間を作り、瞬間朗らかに口を開いた。

「改めましておつかれさま！それじゃ、カンパーイ！」

私は慣れた手つきで影狼のジョッキに自分のジョッキをがち合わせた。

「乾杯！」

私はたまらず麦酒を喉へと流し込む。瞬間、私の脳の皺一本一本に、冷えた麦酒が染み込んだ。脳の芯がじわあと冷えて、目の裏側が何とも言えない感覚に襲われる。

夏の熱気と仕事の疲れで火照った体と顔が、なんとも気持ちいい。気づけば私は、ジョッキ一杯飲み干していた。くうー、といった声
が、私の口から思わず洩れる。

ああ、これだ。これは「体」が覚えている。麦酒、これは悪魔の発明に違いない。

「さっすが、仕事終わりの人は飲みっぷりが違うわ」

ジョッキに半分ほど麦酒を残した影狼が上機嫌に言う。

「いやあ、ははは」

私は何か面白くなって、そう答える他できなかった。

すいません、麦酒追加で。私の普段より大きな声が、店内の騒めきの一部を担った。

それから私たちは麦酒をぐいぐい飲みながら、他愛もない話に花を咲かせた。話は麦酒の美味いことから始まり、夏の暑さ、じきに里で縁日のあること、幻想郷に海がないことへの不満、影狼自身の、最近体重が増えてしまった、なんて悩みについての話と、話は転々と転がっていった。

そんな中、それにしても、と影狼が出し抜けに言った。

「ばんきちちゃん、最近なにしてたのよ。全然見つからなくて、心配だったんだから」

どう答えたものか、と一瞬悩んだが、私はあえて正直に答えてみることにした。

「最近？最近は、そうだな。ストレッチをしてたよ、ずっと」

「ストレッチ？……あはは、ばんきちちゃんらしいわね。こわいわー、ばんきちちゃんこわい」

影狼の返答に、私は固まりかけていた私自身の自画像にどこか不安を感じずにはいられなくなつた。らしい、とはなんぞや。

私の内に湧き上がる疑問を他所に、影狼は続けた。

「にしても、ばんきちちゃんは時々そうよね。時々何処かに引っ込んで、全然見つからなくなる。思えばよくあるわ」

影狼は目を瞑り腕を組んで、何やら、ううむ、と考え込むような仕草をする。

「たしかこの間は冬の終わつた頃だつたっけ。そうだ！その前は秋が終わつた頃……。思えばいつも、季節の変わり目ね……。季節の変わり目、季節の変わり目……。わかつた！」

なにか合点のいつた様子で、影狼が私の顔を指す。ギクリ。

「ばんきちちゃん、ストレッチだなんて言つて！隠すことないのに、もう」

「ばんきちちゃん、風邪、引いてたんでしよう」

私は自信満々の影狼をみて、どうもその自信満々な口調に「影狼らしさ」を感じずにはいられなかつた。

「風邪か。まあ、そんなところかな」

影狼は、ジョッキを片手に持ち、テーブルにもう片手を置いて口を開く。

「まあ、季節の変わり目に風邪を引いたなんて、妖怪なら隠したがるのも分かるけどねー」

私たちの仲じやない、隠すことなんてないのに、と、影狼は続けた。

私は影狼の放つた「妖怪なら」という言葉に、影狼がなにか「妖怪」という言葉そのものに尊敬めいた感情を抱いているらしいことを感じた。影狼の放つた言葉には、どうも「人間なら或いは」などという含意が在つた。

「まあ、人間なら或いはね」

影狼の思想を確かめるべく、私は心中に浮かぶ「影狼の言わんとするところ」をすつと呟いた。すると、私の心に俄かに仄暗い愉悦に似

た感情が浮かぶのを感じた。ああ、ともすれば、妖怪とは本能的に人間を下に見る心があるのかもしれない。私は思った。

それから私たちの会話は、その心に沿った内容へと推移していった。無論、影狼も私も本気で人間に対する害意を持つわけもなかった。所詮、それは所謂「愚痴」だった。

まず影狼は、幻想郷の岡つ引き的存在である「博麗の巫女」をこき下ろした。夏が始まってから薄暗い廃屋同然の住居でストレッチしかしていなかった私は当然、博麗の巫女を知る由もない筈なのだが、どうやらそれも体が覚えていたようだ。

博麗の巫女の溢れ出んばかりの強さは、私や影狼といった木っ端の三下妖怪風情には震えが出るほど恐ろしいものだった。

せめて私たちに異変の起こせる力があれば、私たちはこんなところで博麗の巫女が取り締まる現体制にクダを巻くこともせず、博麗の巫女に勇敢に勝負を挑んだことだろう。しかし私たちはどうしても、悲しい程に木っ端だった。そうして博麗の巫女についてクダを巻いていると、その自覚は急加速して、私たちの愚痴に熱を加えるのだった。

「だいたいさー、なんで人間よりも何倍強い私たちがさ、金なぞ支払わなきゃならんのかなー。人里で働いて日当貰ってまでさー」

「わかるわー。ばんきちちゃんなんて、人間たちにおせきちゃん、なんて馴れ馴れしい呼ばれ方されてるのよね。なーにがおせきちゃんですか、喰らうぞこらって感じよねー」

「まあ、ばんきちちゃんもおせきちゃんも、呼び方としては大差ないと思うんだけどな。呼び方はともかくとしてさ、馴れ馴れしいんだよ、人間風情がさー。博麗さえいなければなー。そうしたら今頃、酒なぞ飲まなくても人喰って満足できてるだろうに」

「でも、ばんきちちゃん。私ね、人間の作る麦酒だいき。もはやこれがないと生きていけないわ。ある種私はもう既に、人間に支配されちゃってるのよ。こわいわー人間こわいわー」

「たしかに。人間の作る酒はやめられないな、私も。あーあ。妖怪に管理されてるはずの人間たちに管理されちゃってるんだなー、私た

ちつて。あの紅白もなまら強いらしいし、なんか、情けなくなってきたなー自分が。これはもう、やっぱりあれだな」

「うんうん。呑むしかないよ、ばんきちちゃん」

そのように、私たちの夜は更けていくのだった。

店を出る頃、私たちはふらふらだった。酒席を彩った妖怪の尊厳なんてどこへやら、千鳥足で満ちた月が照らす路傍の上をダンスした。程なくして、私は芒の生い茂る獣道を歩いていた。というのも、ふらふらになった影狼をその自宅まで送り届ける為である。

その頃には、店を出て、いいからいいから、送っていくよ、なんて言っていた「酔っ払い」はややおら鳴りを潜め始めていて、私は妙に息遣いの荒い影狼に少量の不安を抱き始めていた。

「おい影狼、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫……」

影狼はしおらしく答える。具合が悪いのか、と問いかけるも、どうやらそうではないという。

様子の妙な影狼を心配しながら、しばし芒の中を歩いていると、私の腕に掴まりながら歩いていた影狼が不意にその歩みを止めた。

真暗な夜を、大きな月が煌々と照らす。光は強く、視界は俄かに青白い。吹き抜ける風が、芒をざわざわと揺らした。

ひんやりとした夏の静寂の中、影狼がおもむろに口を開いた。

「……ばんきちちゃんはさ」

影狼のどこか弱々しい口調に、私は辺りが一層静まり返った気がして、口を開くことができなかった。

「……ばんきちちゃんは、隠し事って、ある？」

髪で隠れて、影狼の表情が読めない。

「ど、どうしたんだよ、急に」

私の腕を握る影狼の手に、ぎゅつ、と、力が込められるのがわかった。

「……私はね、あるの。隠し事」

不意に、影狼が私の胸に飛び込んできた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 6

それからの私かというと、昼は食堂で働き、夕暮れ、仕事が終われば影狼と呑む、そんな日々を送っていた。

“いつもの居酒屋”は、妖怪だということがバレてを出入り禁止になったので、私と影狼は新たな行きつけを見つけなるべく、夜毎店をハシゴしては呑んでくれていた。

影狼との酒席での話題は専ら“人間について”、或いは“妖怪の尊厳”、それらに付随する話だった。それから、比較的よく話題に上がったのは“姫”の話だった。“姫”の話をする影狼の表情はいつもどこか“うっとり”としたものだった。私はそんな影狼の語る“姫”の話を聞いて、件の姫に一度会ってみたいと考えるようになった。

しかし、その機会はなかなか得られずにいた。なんでも姫——わかさぎ姫は“水棲”の妖怪らしいのだ。その特性と一目見ただけで妖怪と判別がつく容姿から、人里に出るのは難しいようで、会うにはこちらから出向く他ないという。

私は影狼に何度か会いに行く提案を試みたが、影狼はその度にうやうやしく私の提案をはぐらかすのみだった。

そんなわけで、影狼の案内なしではわかさぎ姫の住処に辿り着けない私は、影狼のうっとりとして語る“姫”には会えないままだった。

そんなことよりも、夏の日差しの照りつける日々の中、私にとっての“切実な問題”は働き先の食堂に在った。

それは、また一段と暑い日のことだった。

私は日中目が覚めて、いつも通りに食堂へ向かった。道中、逃げて行く水溜まりを追いかけっていると人里へはすぐに着いた。

食堂の前に来ると、いつもならそこで体へと主導権を渡すのだが、その日、私はそれをしなかった。おい、今日は私にやらせろよ、と、それは一種の悪戯めいた思いつきだった。

結論、その日の昼の業務は散々だった。雪崩込む注文の山中にて、皿を二枚割った頃、私は体へと主導権を明け渡したのだが。体は、や

ると決めたらやり通してみろ、などと言わんばかりに、主導権を受け取ることはなかった。

婆さんはそんな私をみて、料理を作る手を止めることなく、全く、全く、とぼやき続けた。それから更に二枚ほど皿を割ると、ついには少女までもが、なんでかなあ、どうしてかなあ、と、眩き始めた。それはちよつとした地獄のような時間だった。そんな地獄の中、軽率な思いつきで業務に当たってしまったことを、私は猛烈に後悔したのだった。

しかし、昼間の客をなんとか捌ききり、テーブルの上も片付いた頃、私はそんな身を焦がすような後悔も忘れ、夕暮れあたりにもう一度起こる「注文の土砂崩れ」までの時間を持て余していた。素直にいえば、暇だった。暇で、ぼんやりしていたのである。

それは少女も同じだったようで、その辺りの時間は婆さんが店の奥へと引つ込むのをいいことに、少女は私に楽しげに話しかけてくる。

お皿、あんまり気にしちやダメだよ、なんてのを口開けに、少女の話は続いた。

これも、私にとって問題の一部だった。少女の快然たる表情や話口調は、連日の影狼との酒席での会話を私に想起させずにはいなかったのだ。

話もほどほどに、それにしても、暇だねえ、暑いねえ、などの言葉が頻出し始める。私はそんな少女に対し、なんとはない罪悪感を抱きながら、ああ、暑いなあ、なんて相槌を打っていた。

空が俄かに朱を帯びる頃、それは起こった。

やることが見当たらず、そんな時間が昼からずっと続いていた私は、いよいよもってぼんやりとしていた。

そんな普段にも増して「ぼんやり」な私の視界に、例の小さなミミズが現れたのである。気付けば私は「ぼんやり」と、視界の端のミミズを追いかけていた。体も「ぼんやり」していたのか、それを止めることはしなかった。

逃げるミミズを追いかけて、首が、くるん、くるん、くるん、と三回転したころ、私はハツとした。私の眼前には、目を丸くした少女の

顔があつたのだ。

少女は途端に腕を組み、なにやらぶつぶつと高速で呟き始めた。私
はそれが、少女が何か自身を納得させる際の癖だということを承知し
ていた。

私は焦つて、違ふんだ、これはその、特技であつて……などと頓珍
漢な弁明を試みるも、少女の「呟き」が治まる気配はなかった。

少女は時折首を傾げては、いやでもなあ……、たしかに首が……、と
呟き続けた。それから少しの間、少女のそれは続いたが、不意に少女
は、コク、コクコク、と二、三頷き、その顔を上げるのだった。

おせきちゃん、ちよつと。と、少女は私の手を引いて、店の裏口か
ら、其処の路地まで私を導いた。

路地の中、幅の狭い排水路の木蓋の上で、少女は私の方へと向き直
しては、出し抜けに私に尋ねた。

「おせきちゃん、私の名前、覚えてる？」

私は少女の問いに対して、沈黙する他出来なかった。私は少女の名
前を知らない。夏が始まつてから、聞く機会が無かったのだ。無論、
気にならないわけでは無かったが、名前を忘れたので教えて下さい、
などと、言えるはずもなかった。

瞬間、私は、私がか何か失敗する毎に励ましてくれたり、婆さんの永
遠に続くような叱責から私をかばってくれた少女の姿を思い出し、少
女に対して、とても申し訳ない気分になった。無論、連日の影狼との
酒席での会話——人間いじりも、少女に対する罪悪感をより辛辣なも
のへと変えた。

その、ごめんよ。と口を開こうとする私を、少女の声が遮った。

「やっぱりね。おせきちゃん、また、なんだ」

また。また、*「また」*。

その一言は、私を酷く当惑させた。

「まあ、今日はやけにお皿割るもんだから、怪しいなあとは思つてたけ
ど」

私は、少女の言わんとするところを今一つ解さないままだった。

「おせきちゃん。私の前で首回すの、今回が初めてじゃないんだよ。

覚えてないだろうけど」

「おせきちちゃん、お皿割ったり、ぼーつとすることが多くなると、いつもそのうち首を回すの」

「そして、首を回すたびに、私の名前も忘れてる。あーあ、ショックだな、私」

少女は、態とらしく私を責めるような口調で言っただけだ。

その時、私はどんな表情をしていただろう。もしかすると、鳩が豆鉄砲喰らって忽ち禿げて、その代わりに筋骨隆々になったような顔をしていたかもしれないし、街行く人が突然往来の筋骨隆々の鳩を捕らえて嘔り付いたのを目撃した雀のような顔をしていたかもしれない。わからないが、一つ言えるのは、それほど間抜けな顔をしていただであらうということだけだ。

「じゃ、じゃあ、知ってたのか。私がその、人じゃないって」「まあね」

少女は、えへへ、と笑って、言葉を続けた。

「最初に分かった時なんて、今日よりもっとショックなもの、見せられたんだから」

少女の語るショックなもの。それは、在りし日の「私」が屈んだ際、首が、ぽろつ、と落ちて、転がる首を、首から上のない私の体が慌てて追いかけた、と、そういう話だった。

「でも、あの時のおせきちちゃんの素っ頓狂な顔ときたら……」

少女はまた、えへへ、と笑った。私の口からは、思わず乾いた笑いが二、三溢れた。

「じゃあ、婆さんは。婆さんも知ってるのか？」

「お婆ちゃん？ 氣付いてないんじゃないかな。まあ、お婆ちゃんもあれで勘がいいから、氣付いてるかもしれないけど」

「そ、そうか……」

少女は、まあとにかく、と切り出して、

「そろそろ戻らなきゃ。もし混んでたら、お婆ちゃんカンカンだよ」

あんまり気にしちやダメだよ、少女はそう言い残して、足早に店へと戻って行った。

気にしないなんてそんなこと、出来るわけないよなあ。その時の私の心中に浮かんだのは、そんな言葉だった。

私は一つ溜息を吐いて、視線を下に向けた。そこには大雑把に組み上げられた排水パイプから流れ出た水が、生温くなって溜まっていた。

そんな水溜りを一瞥して、私は店に戻った。

店に戻るなり、私を待ち構えていた婆さんは私に小言を浴びせた。

「サボりに日当与えてたら、首が回らなくなっちまうよ。全く」

先に戻っていた少女に助けを求めるように視線を向けると、少女は私に向けて申し訳なさそうに、はたまた気まずそうに両手を合わせるのだった。

その後私は、結局有耶無耶になっちゃった少女の名前について尋ねてみたが、少女曰く、悔しいから教えてあげない、自分で思い出してよね。とのことだった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 7

朝、私は湿り気を帯びた夏の息差にやられて目を覚ました。体も同時に目を覚ましたようで、その上体をゆっくりと持ち上げる。

汗だくの体はやおら私を気怠そうに持ち上げて、その首にすわらせた。そうして私が体の主導権を握ると、私に気怠い体の感覚が繋がった。

どうやら外では蝉が鳴いているらしかった。恐らく昨日の雨で揺り起こされたに違いない。

ああ、そういえば、雨の音が聞こえない。今日の天気はどんな塩梅だろう。私は外の様子を確かめてみることにした。

木の板が乱雑に打ち付けられた窓を一瞥して、私は玄関へと向かった。

戸を開け、空を見やると、空は昨日の雨が嘘のように晴れ渡っていた。ギラギラとした陽光が、私の瞳を嫌という程に突き刺す。

土の均された路を見渡すと、路は泥濘んでいたが、そこかしこに出来た水溜りが、晴れやかな空を仰いでいた。

けたたましい蝉の鳴き声の中、私は無表情に夏を感じたのだった。その後、私は例の食堂に居た。食堂へ入ると、私はやはり少女の表情を窺わずにはいられなかった。しかし少女は私に含みのある笑みを一度浮かべてからは、まさにいつも通りの態度を一貫するのみだった。そんな少女のいつも通りな態度に、私はどこか頼もしさを感じて、思わず胸をなでおろした。同時に、やはり情けなさも込み上げたのだが、それは昨夜のそれに比べると「ちょっとしたもの」だった。それから一度目の「土砂降り」のような注文をこなした後、私と少女は相も変わらず暇を持て余していた。一つ変わったことといえば、私と少女の、暇だねえ、の応酬に、さんざめく蝉の鳴き声加わったことくらいか。

そんな折、不意に食堂の戸が揺れた。基本的に、食堂の客は決まった時間に纏めてやって来るもので、それ以外の時間には殆ど客は訪れない。私と少女は少し驚いて、思わず目を見合わせて首を傾げた。

「客かな」

「さあ」

立て付けの悪い戸は尚もガタガタと揺れている。

「客だったら、面倒だな」

「そうだね」

婆さんが奥に引っ込んでいるのをいい事に、私と少女はそんなことを言い合せた。暇だ、暇だ、とはいいつつも、客に来られると面倒がるのは、私も少女も同じだった。

その内に、戸はガラガラと不健康そうな音を立てて開かれた。

「いらっしやい」

戸が開くなり少女が言う。私はいつも出遅れてしまうのだ。少女に続けて、私もその句を述べようとした、その時だった。

「開いてるかな？」

そう言っつて、戸の前に立つ人物を見て、私は驚愕した。

「見ての通りがらがらです。どうぞ、お好きな席へ」

「すまないね、ありがとう」

妙に気障つたらしい口調で席へと向かうその人物は、今泉影狼に他ならなかったのである。

「ええと、メニユーは」

「品書きでしたら、あちらに」

影狼はどういうわけか、その身に妙な変装を施していた。

変装、とはいっても、身に付けた衣服はいつもの影狼然としたもので、なんら違和感はない。頭に被った大きめの鳥打帽——ああ、影狼曰く「きやすけつと」だったか。それもまあ、わかる。

しかしある一点が、私に妙と言わしめた。

影狼はその顔上半分を、なにやら「どでかい」サングラスで覆っていたのである。

「うーん。なにか、肉が食べたいな」

「お肉でしたら、生姜焼き定食などがございますが」

どでかい、は私の言い過ぎかもしれない。しかし、なにがどうして、そのサングラスはやたらに「ハードボイルド」だった。

「じゃあカレーで」

「カレーライスがお一つですね」

そんな「ハードボイルドなサングラス」は、私に「どでかい」印象を与えるには十分すぎるほど、妙だった。しかしよく見ると、なかなかどうして、似合っているように見えてくるのが影狼らしさか。

ああ、そんなことより、影狼は一体この食堂へなにをしに来たというのだろうか。

夏が始まって以来初めての出来事に、私はまた当惑した。

「あ。大盛りで頼むよ」

「はい、カレーライス大盛りですね」

……。

「カレーライス、お待ちどうぞさまです」

「ありがとうございます。いただきます」

……。

黙々とカレーライスを食べ進める影狼を、私は強張った面持ちで見つめていた。流石の少女もあのサングラスには当惑した様子で、同じようにそれを見つめていた。

がらがらの食堂は、ハードボイルドなサングラスを中心に、妙な空気を帯び始めている。間の抜けた蟬の鳴き声が、余計に「妙な空気」の輪郭を際立たせた。

「うん。中々美味しいよ」

「あ、ありがとうございます」

サングラスといい妙に気障つたらしい話口調といい、影狼はどういうつもりなのか。婆さんがカレーライスを作ってる最中、私は先日の影狼とのやり取りを思い出し、影狼は概ね私を絆した人間の「偵察」に来たのであろうことを察したが、私にはまた一つ疑問とは違う懸念が生まれたのだった。

「テーブルの調味料は好きに使っていいのかい？」

「ど、どうぞー！」

少女が多少緊張しながら答える。

私の懸念とは、影狼が妖怪であることを少女と婆さんに露呈してし

まうことだった。それでもし、影狼が私の友人であることを口を滑らせたりすれば、私が妖怪であることが、婆さんにまでバレてしまうのではないか。もしそうなれば、その時私は首斬りにされてしまうかもしれない。

いや、それよりも第一に。

「じゃあ、醤油を使わせてもらおうよ」

「どうぞ、ご、ご自由に」

友達だと、思われたくない。

こんな妙なサングラスをかけて里を歩き回り、カレーライスに醤油をかけるようなやつが私の友人だとバレたら……ああ！

それから影狼がカレーライスを食べ終わるまで、私は更に表情を強張らせて影狼を見張るかのように見つめていた。

少女もまた、どこか緊張した様子で、カレーライスをパクつく影狼を見つめていた。

婆さんも途中までそんな影狼を眺めていたが、暫くすると「なんだ、あのサングラスは。スタローンかい」などと奇怪なことを呟きながら店の奥へと引っ込んでいった。

程なくして、

「ごちそうさま、美味しかったよ」

影狼はそう言つて席を立ち、戸へと手をかけた。戸は意外にもすんなりと開き、それが意外だったのか、影狼は少しよろけていた。

ああよかった、何事もなくて。私が一息つくべくと息を深く吸い込むと、出し抜けに少女が口を開いた。

「あ、あのー」

「ん？」

少女は影狼に駆け寄り、その手に持ったトレイでうやうやしく顔半分を隠しつつ、影狼に尋ねた。

「あ、あの、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

ん、なんだろう、この感じは。

「私の名前か？ そうだな、今泉影狼、とでも名乗っておこうか」

本名じゃないか、と口を開きそうになったが、すんでのところで堪

えた。

「ありがとうございます！あの、それで、ま、また来てくれますか……？」

「また、か。いつになるかは分からないけど、きつと来るよ。そうだな。品書きに、君の名前が追加された頃に、きつとまた」

あまりにもな台詞に、少女は押し黙ってしまった。そんな少女を他所に、影狼は、それじゃあ、と去っていった。

暫くの沈黙の後、私はハツとして少女に駆け寄った。影狼について何か弁解なきやいけないような、こき下ろしてやりたいような気持ちになった為である。

しかし私の口から出たのは、当たり障りのない言葉だった。

「その、なんか変な客だったな」

少女は尚もトレイを顔下半分に抱き抱えて押し黙っていた。

「な、なあ、大丈夫か？いやそれにしても、変なやつだったなあ」

「……カ……ロウさん」

「え？」

「カゲロウさん。かつこいいい……」

「え？」

そうして、蝉の声だけが、私の聴覚を揺らし続けた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 8

そんな出来事があったからそう遠くない、ある日のことだった。
どんどんどん、どんどんどん。

と、何者かが戸を叩く音に私は目を覚ました。いつも暗い部屋からでは、現在が何時頃なのか判断がつかない。しかし、目が覚めてなお、睡魔が私を侵している。それは不十分な私の睡眠を指し示すには十分だった。

判然としないまま戸口へ向かう私の耳に聞き慣れた声が響いた。

「ばんきちちゃん？いないのー？」

それはかの今泉影狼の声だった。溢れ出る能天気さの世話をしない影狼の朗らかな問い掛けに、私は慨嘆せざるを得なかった。影狼の常に一定した一種の間の抜けた感のする声は、起き抜けに聞くには辛いものがあったのだ。

影狼は尚も戸を叩いては、ばんきちちゃん、ばんきちちゃん、と眠っているかもしれない私に呼びかけている。

「はいはい、今行きますよ」

と、半ば諦観をもつて戸を開けると、これまた妙な格好をした影狼の姿が私の視界に飛び込んできた。しかし、私は何より驚いたのは空のまだ黒いところだった。

「うわ、まだ真つ暗じゃないか。影狼、お前、今何時だと思ってるんだよ」

「何時って、三時ぐらいでしよう？」

私の言葉に理不尽な疑問符を付けて返答する影狼に、私は慨然と溜息を吐いた。

「お前、いつもこんな時間まで起きてるのか」

「そんなわけないじゃない！今日は早起きしたのよ」

影狼の早起きの理由、それは影狼の奇妙な格好を見れば一目瞭然だった。影狼の纏う衣服はやはりいつも通りだったが、普段と違うのはその頭に麦わら帽を被っていること、その手に網を持つてること、その肩に何やらカゴをかけていること。そして何より、もう片手には恐らく私の分と思しきそれら一式が、器用に握り込まれていたのだ。

ああ、いやだ！行きたくない！

「ばんきちちゃん、虫取りに行きましようよ。最近香霖堂がカブトやクワガタを高く買い取ってくれるらしいわ。はい、これ。ばんきちちゃんの分ね」

そう言つて、影狼は私に虫取り網とカゴと麦わら帽を押し付けた。空が僅かに藍色めいた頃、私と影狼は妖怪の山の中腹にて、カブトやクワガタの姿を数多の木の幹に探し求めている。

夜露の降りた草木は強く新緑の香りを帯びていて、息を吸うとむせ返るほどに私の肺を満たす。

影狼が熱心に虫を探している間、私はそれをせずに、眠気で薄ら靄がかつた意識の中、一人考え事をしていた。

というのも、私は影狼が私の住居の所在を知っていたことに驚いていたのである。

夏が始まってから初めて影狼と会った時、影狼は、その時節私が全然捕まらず、久々に会えた、と云っていた。なので、私はてつきり影狼は私の住居の所在を知らないのだとばかり思っていたのだ。しかし影狼は今回、あつさりど遠慮もせずに私の家に訪れた。影狼のいう「私が全然捕まらなかった」時期に、影狼がそれをしなかったとは考えられない。

そうすると、その時期の私——「前のやつ」はどこで何をしていたのだろう。

「なあ影狼。お前、私の家に押し掛けたのは今日が初めてか？」

木の幹を睨みつけながら私の前方を歩く影狼は、訝しげに答えた。「押し掛けたって、人間きが悪いわね。夏らしい儲け話を持って来てあげたんでしょー？感謝して欲しいくらいだわ。それに、なによその素っ頓狂な質問は、そんなわけないじゃない」

「はは、それもそうだな」

言いながら、私はまた或ることを思い出した。

私と影狼は道中河辺に沿って妖怪の山に向かったのだが、その河辺で、影狼が頻りに石を拾ってはカゴに詰めていたのだ。そのとき私は自身の眠たさと立ち向かっていて、それを気にするどころではなかつ

たのだが、思えば、影狼は何のために石などを拾い集めていたのだろうか。私は草木を掻き分けて行く前方の影狼に、なんなはなしに尋ねてみた。

影狼は、

「ああ、姫にあげようと思って」

と答えた。

ああ、そういえば、以前影狼から聞いたような気がする。姫、わかさぎ姫はどうやら綺麗な石が好きで、それを収集しているのかなんとか。

この後行くのか？と、私が何とは無しに尋ねると、影狼は、

「こんな格好で、行けるわけないじゃない」

と、それを否定するのだった。

私はそれから色々なことをとりとめもなく頭に浮かべた。虫取りが嫌だったというわけではない。もちろん、家を出る頃は嫌で仕方なかったのだが、妖怪の山の麓に着いた頃には、私はそんな気持ちも忘れて、やおら瞳を輝かせていた。

しかし、そこから山の中腹まで登ると聞いたとき、私の瞳の輝きは僅かに、しかし確実に濁った。中腹に辿り着いても目的の虫が中々見つからない状況は、私を退屈させ、ぼんやりとした思考の世界へ誘うには十分だったのだ。

それから暫くすると、影狼が出し抜けに、きゃー！と声を上げた。

「ど、どうしたんだよ急に。びっくりしたな」

「みて、みてばんきちちゃん！いるわよ、カブト、クワガタ、わんさかいるわ！」

「ほんとか！」

影狼の指差す大きな樹木には、確かにカブトやクワガタが “わんさか” 在った。私は、

「穴場ね」

とはしゃぐ影狼に引つ張られるように、私自身の心がはしゃぎ出すのを感じた。

しかし一方で、私はそんな流されやすい自分の心を、少し情けなく

感じるのだった。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 9

蝉の鳴き声が殊更その勢いを落とした頃、日中、私は少女の勧めで縁日に来ていた。

最近、食堂での業務になかなか身が入らない私を見かねた少女が、今日の縁日の存在を教えてくれたというわけである。

しかし少女は私に、縁日に行つて見てはどうだろう、と言つたのちにわ私がいまいち身が入らないのは夏バテが原因なのではないか、と私の体調を憂慮している様子だった。婆さんはそんな私と少女のやり取りを聞きつけて、少女と一緒になつて、

「また体調崩されたんじゃ、困るよ、全く」
なんてボヤいていた。

そのやり取りの中で、少女は縁日に行かないのか、と尋ねてみると、意外にも意外な答えが返つて来たので驚いた。

少女は私の問いに何か不敵な笑みを浮かべて、

「ふふん。私はね、なんとカゲロウさんと縁日をまわることになつたの」

と言つてのけたのだつた。加えて、だからおせきちゃんとは一緒にまわれないや、ごめんね、なんて同情までされてしまった。

私はその日の夜に、これはどういうことか、と影狼を問い詰めた。なんでも、里で見つかつてしつこく付きまとわれた、という話だった。普段「妖怪」という言葉そのものに尊厳めいた感情を抱いては人間をこき下ろしてばかりいる影狼が少女の猛攻撃にたじたじになつている様を想像すると、私はそんな影狼に「らしさ」を感じずにはいられなかつた。

ちなみに、その際例のサングラスはかけていたのか、と尋ねると、影狼は然として、かけていた、と答えた。

そんなわけで、私は白昼の中、一人寂しく縁日をまわっているわけなのである。

縁日は人で賑わっていたが、あの「虫取り」以来、どうにも体が重たい私は、いまひとつ縁日を楽しめないままでいた。

もしかすると、少女と影狼も今の時分に縁日に来ているかもしれない。かつたが、私はそれを探すでもなく歩き続けた。射的、型抜き、輪投げ、くじ引きと、様々な出店が立ち並んでいたが、私の食指が動くことはなく。

傍ら、河童が何やら子供向けの新製品の展示販売をしていたが、どうやら展示品が電池切れを起こしたらしく、子供達からブーイングを受けていた。それを横目を通り過ぎると、金魚掬いの出店が私の目を引いた。大きな水槽の中でたくさんの金魚が泳ぐ様子は、俄かに私の心を動かした。

綺麗だな。

そんな言葉を浮かべた途端、私の頭に例の蟬の死骸が点滅した。

夏が終わるまでにすくわれなかった金魚達は、夏が終わればどこへ行ってしまうのだろうか。そんな考えが私の中で鎌首をもたげた。私は途端に陰鬱とした気持ちになり、踵を返して家路を辿るのだった。

屋台の連なりを抜ける前、戯れにアクリルで宝石を模したおもちゃなどを救ってみたが、私の気分が晴れることはなかった。少女曰く、夏の終わりにもう一度縁日があるという話だが、それに私が赴くことはないだろう。

その日、家に帰っていつものように買い置きのお酒を呷り、夜には眠りに就いた。

夜中に目を覚ますと、布団の中から“体”が消えていた。

以前、夜中に私が目を覚ますと、いつもなら私を抱きしめて眠っている筈の体が布団の中におらず、部屋の古びた机でなにやら作業をしていたことがあった。それから、同じようなことが何度もあったので、私は今日もそうなのだろうと考えて、部屋の古びた机に目をやってみたが、どうやら今日はそうではないらしい。トイレにでも行っているのだろうかと考え、家の中をそれとなく探してみたが、終ぞ体を見つけないことは叶わなかった。

しかし、私はこれを好機と捉えた。というのも、私は黴だらけの敷布団の下にいつも“ノート”のような物の感触を感じていたのだ。いつもは体が私を抱きしめている手前、それを公然と確かめることが

出来なかつた私だが、今ならば或いは。いや、これを確かめるのは今しかない。私はそう考えた。

布団をどうにか無い腕でめくると、そこには確かにノートがあった。これはもしかすると『体』の日記だろうか。悪戯心に胸が踊るのを感じつつ、私はノートを開くのだった。

しかし瞬間、私の心を戦慄に似た不安が襲った。

開いたページには、大きく『ひみつ』と書かれているのみだったが、私はなにか、私がこのノートを見るのを予見されていたような気がしたのだ。

それでも私は、ノートの続きが見たい気が起こり、ページを捲ってしまったのだった。

そこで、先の大きな『ひみつ』の文字が、私の覗きを予見してしためられたものではない、ということがわかった。何故ならば、ペー지를いくら捲れども、ノートにはただひたすらに、同じ文字が綴られていたからである。

『ひみつ』、『ひみツ』、『ヒみツ』と、表記のブレはあったが、ノートに書かれているのはどこまでも『ひみつ』の文字だけだった。

私が言い知れぬ不安を感じながら『ひみつ』の文字を眺めていると、不意に上り口の木戸がガタガタと音を立てた。体が帰ってきたのだ。

私は慌ててノートを元の位置に戻し、敷布団を被せて狸寝入りをした。

幸い、体は何一つ勘付くこともなく、布団に潜り込んではいつものように私を抱きしめ、私の頭頂部を優しく叩いた。

体の柔らかさは、私をどこか不安にさせた。腕の中で、私の頭には何故か、昼間、縁日で見た金魚が浮かんでいた。金魚達が大きな水槽の中で、その小さな体を揺らしながら泳いでいる。赤いのや、黒く斑の入ったもの、また真っ黒の金魚。

それらが、私の頭の中を泳ぎ回っていた。そんなとき、不意に外で蝉が鳴いた。瞬間、泳ぎまわる金魚の映像の中、例の蝉の死骸が点滅を始めた。

そんな想像の傍ら、私はぼんやりと、言葉を浮かべていた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 10

それから私は、あまり外へ出ずに、家に引きこもるようになった。薄暗い部屋の中は落ち着いた。一応、暫く暇を貰うために食堂へと出向いたが、夏の穏やかな日差しは今の私にとってなんとなく辛辣に感じられた。

夜はまだよかった。夜になると、時々影狼が私の家を訪ねた。そうして影狼と飲み歩いていると胸のすく気分だった。

家にいる間も、私は極力体に主導権を与えなかった。体が私の意思とは別に動くのを見るのが、なんとなく嫌だったからだ。

それでも体は、私があんまり長い間引き籠もっていると、私の握る主導権に時たま指をかけた。私も、どうしても仕方ないときは体に主導権を明け渡した。すると、体は私の気をひくように、鏡の前でストレッチなどを始めるのだが、私はいつも、それを見るときもなく見つめていた。

そうした日々の中、私は漠然と例の金魚達を思い浮かべていた。金魚達が大きな水槽で美しく泳ぐ様に夢中になっていると、いつもそのうちに無数の蟻が私の脳内に蟬の死骸を運んできた。そんなとき、私はいつもし少し泣いた。

そんなある日、廃屋のような我が家の戸を、コン、コン、と丁重に叩く者があった。私はとつさに影狼の顔を浮かべたが、すぐにそれをかき消した。影狼の戸を叩く音は、どんどん、と云ったもので、今回のそれとは大きく異なっていたからだ。

しかし、戸を開けると、そこに居たのはやはり今泉影狼だったのである。

私は影狼がそんな丁重なノックをしたことに驚いたのだが、真に驚くべきは影狼のその姿だった。

先ず、身に付けた衣服が普段のそれとは大きく違った。その時の影狼の衣服には、普段の衣服にはない、慎ましいながらも瀟洒な装飾が施されていたのだった。影狼のその顔にも少なからず何か工夫が凝

らされていたように思うが、そういったものに頓着のない私は詳しいことまでは判らなかつた。

とにかく、影狼は普段よりずっと「よそ行き」だつた。

そんな影狼を見て何とは無しに予想はついていたが、影狼はやはり「姫」に会いに行こうと、そう言った。

比較的涼しい空の下、私は影狼に連れられて、霧の湖へ向かうのだつた。

山の麓、霧の湖までの道は意外なほど小綺麗に均されていて、それは歩きやすいものだつた。影狼曰く、妖怪の山の神様が、最近観光客向けに道を整備したという話だつた。私が妙に感心しながら小綺麗に均された道を歩いていると、程なくして霧の湖、その岸まで辿り着いた。

そこは大きく空が開かれていて、水面は陽光をキラキラさせながら、その大きな空を快く仰いでいた。その光景を見て、否応なしに湧き上がる感動に、私は少し変な気持ちになつた。

岸辺には独特な形の石が二つ置かれていた。影狼はその石を一つ拾い上げると、水面にそれを放つた。石はぼちゃん、という音を立てて、水底へと沈んでいった。どうやら、それがわかさぎ姫への合図になつているらしい。

ともすれば、岸辺にも一つ残された石は私の分なのだろう。私はなんとなく察していたが、それを放ることはしなかつた。

不意に水面が揺らいだかと思うと、程なくして、水面は勢いよく飛沫をあげた。

私は飛沫に驚いて、一瞬の間目を瞑つた。瞬間、

「影狼ちゃん！来てくれたんだ」

嬉しそうに影狼の名を呼ぶ声が響いた。

瞼を開くと、そこにはわかさぎ姫の姿が在つた。

「それにはんきちゃんまで！ああ、今日はなんて良い日なのかしら」
陽光をキラキラと反射させる美しく澄んだ水面の中、嬉しそうに語るわかさぎ姫の姿は、その美しい景色そのものと思えた。

それから、私は私が驚くぐらいに言葉を紡いだ。

夏が始まって、影狼に襲われかけたこと、視界の端のミミズを追って目を回したこと、影狼のかけるとてかいサングラスのこと。それらをわかさぎ姫に面白可笑しく聞かせると、わかさぎ姫はその口に手を当てて美しく、しかし可愛らしく笑うのだった。

私はそんなわかさぎ姫の姿が妙に嬉しくて、夏に起きた出来事を殆ど語り尽くしてしまったほどだ。しかし私の話はやはり今泉影狼の素っ頓狂な行動が主な割合を占めた。すると影狼は負けじと、私の人間に絆されたことや、私が酒席でミミズを追いかけて目を回して仕舞いに吐いてしまったことなどを、わかさぎ姫に面白可笑しく語るのだった。それでも、わかさぎ姫はその口に手を当てて、しとやかに、はたまた快活に微笑むのだった。わかさぎ姫の手は透き通るような白さで、その指はすんなりと長く、一本一本の関節にはうやうやしく薄い紅が差していた。私は気付けば、わかさぎ姫の一挙手一投足に注視するようになっていた。

中でも私の目を引いたのは、わかさぎ姫を「水棲の妖怪」足らしめるその鱗だった。私にはその鱗の一枚一枚がキラキラと輝いて見えた。しかし、その鱗達が水面からチラリと覗く度、私は妙に恥ずかしいような気持ちになった。それはなにか、気安く見てはいけないものな気がしたのだ。

それから、私と影狼の話は途切れることを知らなかった。私たちが何かを話すたび、わかさぎ姫はただただ楽しそうに微笑んだ。

わかさぎ姫のしとやかで、はたまた可愛らしい澄んだ笑顔は、私の視界の中、どこまでも美しく輝いて映った。

恐らくその時、私はわかさぎ姫に恋をしたのだろう。

そんな楽しい時間は、日が落ちるまで続いた。

そうして、その日を境に、私は外に出ることの一切を放棄した。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 11

今は何時頃だろうか。影狼が上り口の木戸を叩いているから、朝かもしれないし夜かもしれない。

あれから、私は一切の夏を放棄していた。

時たま戸を叩きにやってくる影狼には申し訳ないが、私はもうそれに応じる気が起きない。私はただ、日差しの差し込むことのない暗い部屋で、ただぼんやりと時をやり過ごしていた。

「ぼんきちちゃん？いないの？姫のところにいきましょうよー」

戸を叩きながら、影狼はいつも通りのどこか間の抜けた声をあげる。

行けば、きつと楽しかった。しかし私にとって、その楽しさは、夏の景色の美しさは——わかさぎ姫の美しさは、痛いほど、辛辣なものだった。私はもう、綺麗な夏を見たくない。

「今日は絶対、アローンってしないからー。……ぼんきちちゃん居ないのかな」

行けば、きつと楽しかった。でも、行って、笑って。それが一体何になるのだろう。

どうせ私は、夏が終われば。

……。

戸の揺れがおさまり、影狼が去った頃、私は或ることに気付いた。

ああ、ともすれば「前のやつ」もこうしていたに違いない。だから影狼は——。

ああ、ぼんきちちゃん、仕事でしょ。人里で。もう、最近ぼんきちちゃん全然捕まらなくて、久々に会えたー、と思ったんだけど。

——あんなことを言っていたのだろう。

私は、私が「前のやつ」と同じように時を過ごしていることに気がつき、少し救われたような気になった。しかし、それは一瞬のことだった。私の前のやつ——。

ああ。お前の生きる季節は「夏」というらしい。影狼から聞いた

話によると、夏は暑いだけで何も良いことがない、という話だ。ははは。まあ精々、楽しみにしておくことだな。

——あの生首は、確かに笑っていた。それを思い返すと、私にはそれが羨ましくて、妬ましくて、たまらなくなつた。

それから、私は“体”がどれだけ私の握る主導権に指をかけようと、その主導権を明け渡すことはしなかつた。

体が夜な夜な私の眠っている間に行うあの“作業”が、私にはどうも怪しく思えて、仕方がなかつたのだ。根拠はないが、あの“作業”をさせなければ、私にとつての“次のやつ”が現れることはないのではないかと考えたのだ。しかし、私は眠る。眠っている最中、体が動くことを止める術は私にはない。なので、私の頑なさは、幼稚な八つ当たりと表現することもできるだろう。

暗い部屋の中、私は一つ、自嘲めいた笑いを溢した。

それから、私がまたぼんやりとしていると、不意に、視界の端にある忌々しいミミズが現れた。私にとつてこのミミズは、今まで“私の首”が何度もすげ替わってきたことを明示する忌々しい証に他ならなかつた。

「……お前さえ」

私はミミズを追いかけた。

ミミズが逃げる。追いかける。

「お前さえいなければ、私は！」

回る視界に、用途不明の工具が映る。

ミミズが逃げる。追いかける。

「私はずっと、影狼と笑っていられた筈なのに！」

回る視界に、古びた机が映る。

「あの子の名前だって、覚えていられた筈なのに！」

ミミズが逃げる。追いかける。

回る視界に、木の板が打ち付けられた窓が映る。

「お前さえいなければ、私はもっと、姫と話せた筈なのに！」

ミミズが逃げる。追いかける。

回る視界に、床に転がる数多の頭蓋骨が映る。

「お前さえ、お前さえいなければ！私は春だって、秋だって、冬だって、好きになれた筈なのに！」

私は尚も、ミミズを追い回し続けた。

そのうちに、視界はぐちやぐちやになって、ミミズは見えなくなっていた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 12

目がさめて外に出ると、空はまだ明るかったが、最早薄らと少し欠けた月が浮かんでいるのだから私は驚いた。

私は焦って駆け出したが、不意に体が私を引き止めたような気がしたので、足を止めた。

体はどこか遠慮がちに私の握る主導権に指をかけている。急いでるから、少しだけだぞ。と念を押して、私は体に主導権を明け渡した。すると、体はおもむろに家の脇の茂みへ近付いて、その茂みをまさぐり始めた。

「あ、あんまり汚さないでくれよ。今日は大事な日なんだから」

体は尚も茂みをガサガサとさせていたが、程なくして何かを掴んだようにその動きを止めた。

体が茂みから勢いよく腕を引くと、茂みからはなんと手押し車であらわれたのだった。

体は茂みから手押し車を完全に引つ張り出したところで、私に主導権を返した。

私は茂みからこんな大きな物が飛び出してきた時点でかなり驚いたのだが、その手押し車は底が深く、何より御詠え向きに背もたれが取り付けられていたのだ。そんな手押し車は私の目に、ちよつとした車椅子のように映った。

まさか茂みからこんな御詠え向きな手押し車が出てくるなんて。

「これ、お前が作ったのか？」

私は思わず体に尋ねた。

体は反応を示さなかったが、なんとなく、これは体の用意したものに思えて仕方なかった。

途端に、昨日までの体への仕打ちが頭によぎった。

「その、ごめんな。昨日まで八つ当たりみたいなことしてさ」

やはり体はなんの反応も示さなかったが、それでも私は、どこか胸が暖かくなるのを感じた。しかしその暖かさは、まるで体が私に応え

て生じたものに思えて。私はどこか面映ゆい気持ちを感じながら、薄く浮かぶ月に急かされるように駆け出した。

「おおい、わかさぎ姫。おおい。」

霧の湖、岸辺に私の声が響く。麓の山道を手押し車を押して走るのはかなりキツかった。私は呼吸を乱して、石を放るのも忘れてわかさぎ姫に呼びかけた。空はまだ辛うじてその明るさを保っていたが、今にも緞帳が下りてしまいそうだ。

そこで私は漸く石を放る合図を思い出して、足元に二つ転がる独特な形の石、その一方を掴み湖に放った。ぽちやん、という音がして、石は水底へ沈んでいく。

程なくして、水面が揺れた。そして、水面が飛沫を上げる。

「影狼ちや……あれ？ばんきちやんじやない。もう、ばんきちやんの石はこつちでしょ」

ふふ。と笑いながら、わかさぎ姫は岸辺に置かれたも一つの石を指した。

「あはは、間違えちゃったか」

わかさぎ姫が笑ったのが嬉しくて、私は少し照れながら答えた。

「でも、来てくれて嬉しい。今日はどうしたの？あ、ばんきちやん走って来たんでしよう。そんなに息切らして。もう、ばんきちやん体弱いんだから、そんなに急いで来ることないのに」

わかさぎ姫はやっぱり、ふふ。と笑って。でも、嬉しいな、と付け加えた。

「姫、行きたいところはないか。どこでもいい、私が連れて行くよ」

「うそ！本当に？」

「本当だとも。ほら」

私は後ろに置いた手押し車を指差した。手押し車には並々と水が注がれている。注がれている、とはいえ、私が先ほど湖に沈めて持ち上げただけなので、厳密には注がれたわけではない。ちなみに、かなりキツかった。私の息切れの要因の一つである。

「ああ、その手押し車！」

懐かしい、なんて言いながら、わかさぎ姫は驚いたように口を両手

で覆っていた。

「姫、どこに行きたい。ほんとに、どこでも連れていくよ」

わかさぎ姫は暫し逡巡して、じゃあ、と徐に口を開いた。

「私、縁日に行きたい」

里に着く頃、空はもう夕暮れていた。紺色が、今にも橙色を押し潰してしまっそうだった。里では縁日が開かれていた。夏の終わりの縁日だった。ひしめく人々は、薄暗い紺と橙の空の下、屋台の灯に照らされている。私が見た夕景の中で、一番綺麗な夕暮れだった。

ひしめき合う人々が通りを流れていくその様子は、緩徐として強かに流れる川を思わせた。

そんな人の川の中を、私はわかさぎ姫の乗った手押し車を押しながら歩いている。手押し車にはわかさぎ姫の“水棲”を隠すために、私の外套をかけてある。外套をかける際、私はなんとなく裏地の青を表面にして水棲を覆った。

何やら向こうの方で演し物をやっているらしく、祭囃子の笛の音や、太鼓の音が響いてくる。人々の喧騒に絆されて、私の顔は何だか火照っていた。

わかさぎ姫は、

「賑やかね。綺麗ね」

なんて言いながら、綿菓子を啄むように食べていた。そんなわかさぎ姫の仕草を、私は少し息が詰まるのを感じながら見つめていた。あんまり見ているとわかさぎ姫に悟られてしまうのではないかとひやひやしたが、でも、バレたらバレたで、それもいや、と考えていた。すると、わかさぎ姫が何かを見つけたように、あ。と声を上げた。

「ねえ、ばんきちちゃん」

わかさぎ姫が、あれ、と指差したのは型抜き屋台だった。

屋台に入って、私とわかさぎ姫は型抜きをした。わかさぎ姫は器用に槌の型をくり抜いていたが、傍らで、私の瓢箪は物の見事にバラバラになっていた。ばんきちちゃんは意外に不器用よね、と、わかさぎ姫は笑っていた。

どれ、という気持ちで体に主導権を渡してやると、体は嬉々として店主に小銭を渡し、型抜きを始めた。しかし数秒しないうちに、体は独楽に亀裂を走らせるのだった。

「全然ダメだなあ」

なんて私が言うと、体は照れたように私の後頭部を搔いた。

それから、いろんな屋台をまわりながら歩いた。わかさぎ姫の射的の至妙さには驚かされた。わかさぎ姫の放った弾は、悪ふざけに設置された「香車」すら見事に撃ち抜いた。私自身射的の腕はそこまで悪くなかったが、やはりわかさぎ姫程ではなかった。しかし、輪投げは二人してダメだった。

それから、並ぶ看板の中に『河童の新製品 手を鳴らすと反応するおもちゃ』という何だかその宣伝文に不器用さを感じるものを見つけた。物は試しと、屋台の前まで行くと、そこには何やら憎らしい顔をした「カッパのおもちゃ」があった。屋台の前には子供達が集っていて、各々懸命に手を叩くので、それはまるで称揚の拍手のような具合になっていた。

子供達の拍手に反応し続ける「カッパのおもちゃ」は、延々と、『ウツサインジャイ ウツサインジャイ』と繰り返していた。

「なんか、憎たらしいおもちゃだったな」

「えー。可愛かったじゃない」

それから、河童の展示販売の屋台を後にして、私はまた人の川の中を歩いていた。わかさぎ姫の乗った「ちよつとした車椅子」押して歩いていると、人混みに揉まれることなく、比較的するすると通りを歩けた。

「まさか見るだけで金取られるとはな」

「ほんと。でも、安くてよかったわね」

わかさぎ姫はその手にりんご飴を握りしめている。屋台にりんご飴を見つけた、ばんきちちゃんに似てる、なんて言うものだから、私はまた息の詰まるのを感じてしまった。

「でも、おもちゃ自体は滅茶苦茶に高かったな」

「ふふ。あれじゃあきつと、誰も買ってくれないでしょうね」

そうして、私たちは暫く喧騒の中を曖昧に笑いながら、とりとめもなく話し続けた。私はそんなとりとめもない話が、嬉しくて、楽しくて、たまらなかった。

ふいに、わかさぎ姫が、ああ！と嬉しそうな声を上げた。どうやらその感嘆の矛先は金魚すくいの屋台に向いているようだった。泳ぐ金魚達を、綺麗、なんて言ってはしゃぐわかさぎ姫は、綺麗なのに可愛くて、私は、ずるいな、と思った。

「みて、あの赤い金魚。くるくる回って、可愛い」

「ああ、ほんとだ」

「赤くて尻尾がりボンみたいで、くるくるしてて、ばんきちちゃんみたい」

「私が回ってるどころ、見たことないくせに」

「あるわよ、何回も」

わかさぎ姫は口に手を添えて微笑んだ。私が財布を取り出して、やってみようか、と尋ねると、わかさぎ姫は、ううん、と答えて、少し憫れむような眼差しを、金魚達に向けるのだった。

そうして、金魚すくいの屋台を通り越し歩いていると、わかさぎ姫が突然、いけない、隠れて！と声を上げた。私は思わず踵を返して人混みに紛れた。

「ね、ばんきちちゃん。みて、あれ」

何やら愉しそうに微笑むわかさぎ姫の指差す先には、影狼と食堂の少女が並んで歩いていた。影狼が例のサングラスかけているものだから、私は思わず吹き出しそうになった。それに、影狼のあのおどおどした表情ときたら。

「あれが、ばんきちちゃんの言ってた子？」

「そうだよ」

「可愛い子じゃない！影狼ちゃん幸せ者ね」

「何だかおどおどしてるようだけどね」

「ほんと。影狼ちゃん面白い」

あんまり見てたら悪いわね、とわかさぎ姫が言うので、私はそのまま影狼達を背後に歩き始めた。しかし、私もわかさぎ姫もやっぱり影

狼達が気になって、いつまでも後方を見やっていた。

「金魚すくい、やるのかしら」

「そうみたいだな」

「ああ！影狼ちゃんたら、女の子にお金払ってもらってる。もう、情けないんだから」

「あいつ、金ないからなあ」

「まあ、影狼ちゃんたら、下手っぴねえ」

「ほんと。なんだ、あの情けない顔は」

私とわかさぎ姫の視線の先には、破れた網を残念そうに掲げた影狼がいた。少女はその傍らで、器用に金魚をすくい続けている。影狼はそれを、情けないやら、感心するやらの表情で見つめていた。

そんな光景を見た私の頭の中で、赤くて小さな金魚が、元氣よく跳ねた。

ろくろ首の夏、飛蚊症の夏。 13 (了)

それから、私とわかさぎ姫は麦酒を飲みつつ縁日を彷徨っていた。今日はお酒を飲むつもりはなかったのだが、思いがけずわかさぎ姫が飲みたがったので、結局私はのんでしまっているというわけだ。わかさぎ姫が一口ずつ口を離してはちびちびとやるので、私もそれに合わせた。

そろそろ殆どの屋台をまわってしまっていた私たちは何をやるとも無くウロついていた。祭囃子の笛や太鼓の音が止んでから、人々の数は減るところか増えてきているように思える。喧騒に耳をすますと、人々は何かを待っている様子で、それが私たちを縁日に留めた理由だった。もちろん、私がこの時間が終わるのを惜しんだことも、その理由の一つ他ならないが。

「なんだか、騒がしいはずなのに、静かに感じるわね」

「祭囃子が止んだからかな」

「それもあるんですけど、なんでかしら」

わかさぎ姫に言われると、俄然周りが静かに感じられた。そんな静けさは、私に夏の終わりを強く感じさせた。私は、少し寂しくなって。

「なあ、姫」

瞬間、辺りがパツと明るくなって、直後空から爆音が響いた。私もわかさぎ姫も驚いて、思わず空を見上げると、限りなく黒に近い紺色をした夜空を、綺麗な火花が彩っていた。

「わ。火花よばんきちゃん！」

わかさぎ姫はまた無邪気にはしゃいだ。その瞬間、散り散りになっていく火花の横に、一つ大きな火花が咲いた。続けざまに、一つ、また一つ、夜空に火花が咲いていく。爆ぜるたびに、パツと光って、火花に見惚れるわかさぎ姫の顔を照らす。

「綺麗……」

そう呟くわかさぎ姫の傍らで、その時私は、果たして火花を見ていたのか、それとも姫を見ていたのか。判然としないまま、それを見つめていた。

わかさぎ姫が麦酒にちびりと口をつけるので、私も同じようにした。そのように、私と姫はいつまでも、夜に咲く火花を眺め続けた。

「今日はほんとに楽しかった。ばんきちちゃん、本当にありがとね」
「うん。こちらこそ」

霧の湖の水面を、青白い月明かりが照らしていた。そこら中に螢がゆらゆらと飛んでいて、黒々とした水面に映る少し欠けた月は、風に吹かれて揺れていた。

「また、連れていつてくれる？」
「もちろん」

体の感覚はもう無い。霧の湖にわかさぎ姫を送り届ける最中に、体の感覚は遠のいて、気がつくど、私の四肢は“体”が動かしていた。
「じゃあ、今日はそろそろ帰るとするよ」

私がそう言うと、わかさぎ姫は一寸、寂しそうに俯いて。しかしまたその顔を上げる頃には、わかさぎ姫はいつものように微笑んでいた。

「うん。……じゃあ、ばんきちちゃん。ちよつとだけ、こつちに来てくれる？」

体が、湖の岸まで歩いていく。水面から、わかさぎ姫は私の顔を見上げていた。

「少し、耳を貸して欲しいの」
体が徐に私を首から取り外し、わかさぎ姫の顔の前に“私”を差し出した。

「あのね」
そう言つて、わかさぎ姫は、一瞬、その唇を、私の頬へと押し当てたのだった。

「それじゃあ、またね」
少し照れた表情でそう言い残して、わかさぎ姫は夜の湖に溶けていつてしまった。

帰り道、麓の山道にて、歩く体に小脇に抱えられながら、私は今までこのことを思い返していた。

初めての満月の晩に響いた、影狼の間こし召した遠吠えのこと。食堂で、私に、暇だねえ、と語りかける少女のこと。

ぶつぶつと、ぼやき続ける婆さんのこと。

影狼の、妙すぎるあのサングラスのこと。

虫取りに行つたのに、二人して虫の触らなかつたこと。

わかさぎ姫の、綺麗で可愛い笑顔のこと。

夏の空の青いこと。

夕空の、切ないこと。

水槽の中、泳ぎ続ける金魚のこと。

けたたましい、蟬の声。

そんなことを思い返す最中、私の視界の端に例のミミズが浮かんだが、私はもう、それを追うことはしなかつた。

家に着くと、体が私を抱きしめてくれた。体はとても柔らかくて、私はやっぱり泣きそうになった。でも、それ以上に幸せな気持ちだったから、涙がこぼれることはなかつた。

「もういいよ。ありがとう」

私が言うと、体は私の頭頂部を、ぼんぼん、と優しく叩いた。

でも最後に、一つ気になったことを体に尋ねてみることにした。

「なあ、もしかして、私とわかさぎ姫は、その……」

そこまで言うと、体は布団の下からノートを取り出して、白紙のページに何やら大きく文字を書いて、私に差し出した。

そのページには大きくて、拙い文字で『ひみつ』と綴られていた。

「そっか、ひみつか。あはは」

「よし。今度こそ、ほんとに、もういいよ。今までありがとうな」

体がない首で、ゆつくりと、頷いた気がした。

家に着いたその時には、既に次のやつが椅子に“すわって”いて。そんな“次のやつ”の前に“体”が“私”を差し出すと、次のやつの瞼が、ゆつくりと開かれたのだった。

そうだな、
まずは――。

テーマ（1話完結 主演：古明地こいし 古明地さと
り）

テーマ 1 / 1

きょうはせかいのおわりのひ。

どうしてかな。わたしはいま、お姉ちゃんの家に関じ込められて、お姉ちゃんを外に連れ出そうと躍起になってる。

「お姉ちゃん、知らないんだ。今日で世界が終わること」

「知ってるわ。だからこそ、あなたをここに閉じ込めたんじゃない」

窓も、扉も、窓も、扉も、ぜんぶ！ 全部に鍵がかかって、ところによってはシャッターが降りてる。ちよつと広いリビングならわたしたちは二人きりで、シャンデリアは高くておおきくて、光だけが、お姉ちゃん色した神様チックなガラス窓に濾過されて、お姉ちゃん色で逃げてゆく。どうしてかな。頭の中は思い出色の風景ばかり。凝った青空の下の田園とか、泥で汚れた素足とか、恋心を抱いてる女の子の横で甘い果物を食べたがる男の子とか、鄙びた屋に連なって輝かしい青果店とか、上下の曖昧なお姉ちゃんの変わらない目つきとか。

それか、或いはあの、世界の終わりの青白い……。

「ねえお姉ちゃん。バナナが好きだったよね？ 甘くて、やわらかいから」

「……私ほね、みんな、あなたの好物だと思っていたのよ」

この、二人でおしゃべりするには長すぎるテーブルと、多すぎる椅子のこと、わたしにわかる？ わかんない。雨の降らないのにエントランスにちんまりした傘立てに突き刺さった番いの傘のこととおんなじ。わたしはお姉ちゃんの口遊ぶ歌がいつも嫌いでもたらなかった。あの頃はなんにもなくてとか、這いつくばったり泥んこになつても空を見上げたりとか、まだまだやれるとかさみしくなるねとか、まるで、存在しない過去をでっちあげられてるような気持ちになった。「お姉ちゃんこわいんでしょ。休みを作らないのは外に出るのがいや

だからで、外に出るのがいやなのは旅行とか観光とかがいやだからで、旅行とか観光とかがいやなのは、なにも感じない自分がこわいから。そんな不貞腐れた成人未満成人以上のヒモのひとみたいな感情で、お姉ちゃんはわたしを閉じ込めてる。そうでしょ?」

「関係ない話はやめて。わたしの目をみてちょうだい」

お隣もお空も居ない。ふたりだけの広すぎるテーブル。お姉ちゃんはドラマが好きだった。画面の中のひとたちの心は読めなくて、感情だけはよく知ってるから、自分の思い描いた筋書きに沿えば沿うほど満足気な顔をしていた。ひとつしかない屋根の下とか、お金のない大人のひととか、暑苦しい聖職者とか、そんなのばかり。お姉ちゃんは未来が好きだったんだと思う。明るくて、先の見えなくて、筋書き通りの未来をきつと愛してた。

「あのブランコの公園で、いつまでわたしを待ってたの? 本当に帰ってくると思ってた? 雨が降るなんて信じてた?」

地底には雨が降らない。お姉ちゃんは筋書き通りに土の下で家族を作った。それでもまだ傘立てには子供じみた番い突き刺さっているから、お姉ちゃんにとってわたしはきつと、いつまでも子供で、子供で、子供だった。わたしが瞳を閉ざした理由なんて幾億通りある。パターンのうちのひとつに過ぎなくて、だから、お姉ちゃんはわたしをいまでもずっと待ってる。何百通りか、口遊む歌のなかに答えなんてあるはずもないけど、お姉ちゃんは有り得ない郷愁に浸りながら口遊む。青春には二通りの意味があつて、それはどちらにせよサクセス・ストーリー以外の何者でもない。夢を見ていた時間を泥濘とすれば、目が覚めたのなら晴天で、間の抜けた陽射しなら白昼夢だ。

「お姉ちゃんは子供が好きでしょ? それも、三歳とか、そのくらいの、自我が定着してなくて、次から次にいろんなことを考えて、一秒毎に表情を変えちゃうくらいなの、そんな年頃の子。だからね、カラスならわかるんだけど、どうしてネコは犬じゃないの。あ、そうだ。巢から落ちちゃった小鳥がいます、その近くには、それほどお腹の空いてないネコもいます。お姉ちゃんならどうする? ドブネズミはき

たない、自分はかわいい。わたしなら、ネコに小鳥のことを気付かせちゃうか、小鳥をネコから守るようにそつと巣に戻してあげるか、傍観するか、そのどれかを選ぶと思うんだけど。借りてきた猫を我が子と疑わずに可愛がれる生き物っているのかな？　ともすればお姉ちゃん、これって人生かな？」

「最後の日でも、姉ちゃんと一緒にご飯を食べることすら嫌がるのね」
向こうの世界からここに、お姉ちゃんに連れさられてきてからどれくらいのかは忘れちゃったけど、お姉ちゃんが夜な夜な空想していた偉大な計画をわたしは知ってる。地底を愛で満たしましょう。霧の湖に誰からも忘れられた、傷だらけの鯨が流れ着いたときだった。成すすべのないひとたちはみんなして鯨を哀れんでいた。死んじやう前から悼んでいた。鯨も歌うんだって、そのとき誰かが感じてた。興行にならないと即断した河童さんは鯨の最期をサーチライトで照らしてあげた。それから、お姉ちゃん曰く湖の水源はここじゃないどこか遠くの水底で、だから、霧の湖はしょっぱいんだって。其れ即ち愛で、お姉ちゃんは地底を愛で満たすことを空想していた。湖の底にヒビが入って、大きな穴があいたなら地底は水没しちゃう。しちゃうけど、海水には幾千の命が含まれていて、それこそが愛だと疑いもしなかった。お姉ちゃんをそんなくならない空想の彼方に置き去りにしたのは一体誰なんだろう。お姉ちゃんは誰に置き去りにされて、なにを待っていたんだろう。世界の終わりなんて紋切り型は例のごとく始まりに繋がってしまうのに。

「雨の代わりに星が降って、そしたら当然地底は水底になっちゃうよ。願ったり叶ったり？　それとも不本意？　夢は今でも夢のまま？　お姉ちゃん、海ってさ。誰かが泣くとできるんだよ。だからしょっぱいの」

「懐かしいわね。私の日記を読んだの？　悪いけど、鍵は返してくれないかしら。あなたに言えないことのひとつやふたつ、私にもあつていいと思わない？」

ナインティーンエイティフォー。わたしたちは泥まみれの町に生まれました。二千年を目前にして幻想郷にやってきた理由はお姉ちゃん

しか知らない。お姉ちゃんは地底にあの町をできる限り再現した。鬼の力を借りてまで、あの猥雑な町並みを造り上げた。町の中にはひとつだけ高級な青果店があつて、町外れには誰も立ち入ることの出来ない公園がある。公園にはブランコが設置されていたけど、今はもうがらんどうの、赤土のマットの思い出色したベンチ置き場。青果店にしたつて、本当はがらんどうなんだけど、お姉ちゃんはたびたび果物を買つて帰つてきた。貧困層のど真ん中をバスケット片手に闊歩できるのはお姉ちゃんぐらいなものだから、ともすれば地底のすべて、お姉ちゃんのための道だった。林檎、パイナップル、ぶどう、いろんなものをバスケットの彩りにしていたけど、やけにバナナが多かつたのは、きつとお姉ちゃんに菓食うノスタルジーのせいだとわたしは思う。お姉ちゃんはバナナを乾燥させて、いつまでも、いつまでも保管する。非常食になつてくれたのならありがたかつたのだろうけど、食べたがる子はお姉ちゃん以外に居なかつた。

「ズルだよ、そんなの。終わらせるのは簡単だけど、誰がそれを望んでるっていうの？ 残飯のない店にはカラスも寄り付かないこと、お姉ちゃんが知らないわけじゃないじゃない」

「わかつてる。わかつてるわよ。この日常はいつまでも続く。今日が本当に終わりの日なら、お姉ちゃんはこんなところに居られないもの。だけどね、こいし。お願い、今日だけ、今日だけでいいのよ。帰つてきてちょうだい。おねがいだから」

そう、わたしはこいし。古明地こいし。お姉ちゃんだけが歩ける道にお誂え向きに配置された路傍の石ころ。わたしだけが、お姉ちゃんの青春の蹟き。つま先からつぺんまで、わたしはわたしで出来ている。いつの時代にも便利屋さんつていうのがいて、便利屋さんで字の如しの便利な言葉を売つてくれる。例えばそう、人生はなんちやらと似ているだとか、この世界の人間は二種類に区分できるだとか、そんな感じの、オールマイティな言葉たち。お姉ちゃんの人生は不条理なまでに理になつて山と似ていた。お姉ちゃんは区分するなら負け犬の正反对だった。姉妹或いは双子の類似性について言及することの不毛さについては誰しも経験があると思うから、説明する

人だってひとりとして居ない。

「ライオンってすごいんだよ。シロサメやサギなんかと違って、カニバリズムの法則に則った早いもの勝ちの選別をしないんだ。本当に強いリーダーが現れたなら、弱い元リーダーの子供はみんな食い殺して、自分の子供だけにしちゃうんだって。それで、なんといいってもネコ科なんだよ。面白いと思わない？ わたしはね、つまんないと思うの」

「こいし、お願いよ。お願いだから、今日だけは帰ってきてちょうだい。お姉ちゃんのこと、無視しないで」

世界はどうせ続いてゆく。どうせで続いてゆく世界にはちいさな喜びがたくさんある。寄せては返す波の音とか、その中ではしやぐ子供の声とか、睦まじいカプルの返事じやない会話とか、聖職者が休日に歌う賛美歌とか、お寺の中の酒宴とか、ブランコの奇妙な浮遊感とか、ドライフルーツの甘酸っぱさとか。それらすべてが曖昧な幻想で、そのなかでも曖昧に笑えてしまうから、世界はどうせ続いてゆくのだ。

「帰ってくるのはお姉ちゃんのほうだよ。はやくここから出ていってよ。わたしをここから解放してよ。ハリボテのおしろを閉鎖したところでなんの意味もないこと、わかってるくせに」

「……ああ、もう」

零を突き刺すべく針が動けばごおん、ごおんって時計が鳴った。同時に、扉や、窓や、扉や、窓の錠がすべて落ちる。秒針が刻む音色はなにかに嵌っているようで、なにかが外れて折れるようでもある。それでもわたしは、どうしたって青春の躓きだったから、聴いたのはお姉ちゃんのだこか骨が折れる音だったのかもしれない。

自由になったわたしはどこへでもゆける。僧侶になってもいいし、誰かの恋人になってもいい。恋人じゃなくて、妹だって、弟だって、なんだっていい。わたしはなんにでもなれるけど、お姉ちゃんの間も続いてゆくから、わたしはどうしたって古明地妹。古明地こいしだった。

地底でいちばん大きな亀裂の入った天井は蒼い。なぜならそこに

は湖があつた。蒼い水底から覗く夜空は凝ってどす黒い。それでも、水は一滴も滴ることなく天井を塞いでいる。夜空にはゆらゆらと揺れる青白い光が見えて、世界を終わらせるはずのその光は何者かの手によつてたつたいま、木っ端微塵に消し飛んでしまう。もし仮に、雨を恐れて傘を射していたのならわたしはその光景を見ることすら叶わなかつたと思う。終わらせるのは簡単だけど、誰がそれを望むというのだろうか。個をひとつの世界と見做すなら、生き物の一生に意味はなくなってしまう。だから、だから？　だから、世界はいつまでも、どこまでも続いてゆく。

山の怪事件（全4話 主演：犬走権）
山の怪事件 1

犬走権は悩んでいた。妖怪の山、その山中にある寮の自室にて、上司に提出するための日報を前に、荒く研がれた鉛筆を構えては、うんうんと唸っている。というのも、三日前に山で起きた事件が、権の悩みの中だった。

事件の当日、非番だった権はその翌日に、部隊の仲間から事件の概要を聞いた。その日の哨戒中にも、同じ事件が起きた。しかし、権を始めとする白狼天狗達は、眼前の奇怪な事態を前にして、これといった対応を取ることはしなかった。上から「なにもするな」という指示が出ていた為である。部隊の隊長である犬走権は、もちろんその日起きた事態をありのままに日報に記し提出した。しかし哨戒部隊直属の部署である「校閲部」は、権の提出した日報を突っ返した。

元来、一種の日和見主義的な穏和さを抱え生きてきた権は、反発することもなく日報を書き直した。何度かリテイクを繰り返すうちにようやく受理された日報は、嘘こそ書かれていなかったものの、その報告に果たして意義があるのかと問いたくなるようなものと化していた。しかし、それから今日に至るまで、権は真面目に日報を書いた。そうしてその度、日報は突っ返され、用紙の薄っぺらくなるまでリテイクを強要されるのだった。

その際に校閲部の上司の放った、
「嫌がらせのつもりか」

という言葉が、今日の権を悩ませているのである。

もちろん、権は嫌がらせで「真面目な」日報を書いていたわけではない。その日起きた事を詳細に記録する、それが哨戒部隊の隊長に課せられた規則だった。今まで、権はそんな規則を忠実にこなしてやってきた。それで問題はなかったのだ。しかし、今回はどうやら話が違

うらしい、嫌がらせだなどと捉えられてしまつては心外だ。そう考えた椀は、日報を“真面目に”書くことを放棄しようと、努力をしていたわけなのだ。

先日、先々日のリテイクの際は校閲部の上司が削るべき箇所をそれとなく教えてくれていたが、今回はそれが出来ない。そうすると、忽ち椀の握る鉛筆は途端に重みを増すのだった。

椀は穏和で真面目ではあつたが、そういった性質の元を辿れば“荒く研がれた鉛筆”に繋がつた。椀は何より不器用だった。そんな不器用な椀に校閲部を納得させる薄っぺらい用紙をこさえるのは難しく、椀は自力での解決を早々に諦め、隣室の射命丸文の部屋に向かつた。

「はあ、日報の書き方を教えて欲しい？ 日報の書き方なら、椀の方がよっぽど詳しいじゃないですか」

射命丸文の部屋は多量のゴミ袋やらぐちゃぐちゃに丸まつた原稿用紙やらで埋め尽くされていた。そんな乱雑な部屋の中、射命丸文は椀の話を自身の発行している“文々。新聞”の原稿に筆を走らせながら、若干面倒そうに相槌を打っている。

文の部屋が荒れているのは大概、文が何かしらのストレスに追いかけられている場合だということを椀は承知していた。そのストレスは大抵、文の眼前に置かれている原稿が要因を担っているということも。何とは無しに文の心情を察していた椀だったが、文の部屋に入ってしまった手前、何も話さず帰るわけにはいかず、連日のリテイク問題について文に助言を求めた。

話を聞き終えた文は、椀に向き直ることもなく、筆を走らせながら口を開いた。

「ああ、それなら、事件と関連のある出来事を書かなければいいんですよ。お仲間が阿修羅めいた怪物に見えたとか、木々が巨大な骨つこに見えたとか、そういうことを書かなければいいんです。ええ？ それじゃあ日報の意味がない？ うーん、それはそうなんですけどね。 “校閲部”のやつらも、今回の件が上にバレるのが怖いんですよ。それに、これを見てください」

そう言つて、文が権に差し出したのは「文々。新聞」だった。新聞の日付は山で事件の起きるより前のものだった。見出しには、

『正体不明の怪事件！今度は人里にて発生』

とある。てつきり事件は山でのみ起こったものだとばかり考えていた権は、これはどういうことか、と困惑しながらも文に尋ねた。

「どういふこともなにも、こういうことですよ。これが中々反響がありませんね、よく売れるんです。山の看板としても、収入原としても新聞という媒体は優秀ですからね。校閲部が貴女方哨戒部隊にまで幅を利かせられているのはずばり、こういうわけなんですよ。昼間また里で事が起こりましてね、私はその傾向と対策を記事にしているというわけです。ああ、情けない情けない」

原稿と対峙している際の文はいつもこんな調子だった。権は今ひとつ文の返答を解さずにいたが、これはもう仕方がない、と更なる追求は諦めた。権はとりわけ、人の顔色を見極めるのが得意な性質だった。こういう時の射命丸文にこれ以上何かを聞いても、自分には解せない、同じような返答が返つて来ることを知っていたのだ。何より、あまりしつこくすると逆にしつこくされてしまう、権はそれを避けるべく、文に礼を言い早々に文の自室を去ろうとした。

そんな権の思惑とは裏腹に、文が出し抜けに口を開いた。

「ああでも、上から「なにもするな」って言われてる以上、何もしない方がいいと思いますよ、私は。権さんは隊長なんですから、なおさら気をつけないと。何より、白狼天狗程度じゃ太刀打ちできないでしょうからね。ああ、情けない。私もどつかのお嬢さまみたいに、好き勝手できればいいんですけどね」

文は筆を走らせながら、情けない情けない、といつまでもぼやいていた。

部屋を去る際、権はなんとなく文の原稿に書かれた「見出し」が目についた。見出しには、

『またまた里で事件発生 傾向分析と対策』

とあった。

部屋に戻り、文の助言に沿い日報を仕上げている最中、権は文の話

を思い返していた。確かに、権は上からの“なにもするな”という指示に疑問を抱いていた、しかし、部隊の隊長である自分が指示に逆らい勝手な行動をとっては、部隊の仲間にもその皺寄せが行くのではないか。権がそのことに気付いたのは、今さっき文の忠告を受けてからのことだった。それまで権が哨戒中に“なにもしなかった”のは、部隊の仲間達の、

「何もしなくていいなら、それでいいじゃないか」

という半ば投げやりかつ享樂的な雰囲気の流れられていた為である。文に言われるまで仲間への皺寄せについて思い至らなかつた自分の浅慮を、権は少しだけ恥じた。その日権が書き上げた日報はリテイクをくろうこともなく受理され、権は来たる哨戒任務に備え、早めに床についた。

山の怪事件 2

明くる日、権は意気揚々と哨戒に当たった。権は久しぶりに隊長という立場を利用し、先輩風を吹かせていた。隊長然として、

「何が見えてもなにもすることはないぞ」

と揚々と語る権に隊員達は引いていた。元々、権が隊長というのも、他の隊員が権の穏和さにつけ込んで押し付けた為だった。白狼天狗達は珍しく面倒な雰囲気を放つ権をたしなめながらその日の哨戒を終えた。

この日の日報を書き終えた権は、寮の食堂にて、今日発行された文々。新聞に目を通してている。周りでは同じく哨戒を終えた白狼天狗達がやいのやいのと騒ぎ立てている。

「や、連日の任務は楽でいいな」

「酒はもうないのか」

「今日も里で事件があつたらしいな」

「山でもあつたよ。誰の仕業なのかしら」

「給与が少なすぎるんだよ。校閲部のやつらなんて、何もしてないくせにさ」

哨戒を終えたあとの食堂はいつもこんな調子だった。権はそんな中で黙々と新聞を読み進める。見出しは昨夜文の部屋で見た通り、

『またまた里で事件発生 傾向分析と対策』

というものだった。

『連日里を賑わせている怪事件。見慣れた友人や仕事道具が正体不明の化け物や出所不明の珍奇な物に見えてくる、それがこの事件の大きな概要である。筆者はこれを一種の集団催眠と考える。さて、ここで重要なのが、催眠にかかり、幻覚が見え始めたときの対処法である。見慣れた友人が化け物に映り、取り乱して礫を投げた結果、その後ちよつとした諍いが起きたという例をよく耳にする。はたまた自宅の家具に齧り付いてしまい歯が欠けた、なんていうのも耳にした。筆者の考えるそれらへの対処は「ずばり」なにもしない」ことである。もし目の前のものが異質な何かに姿を変えたとしても、落ち着いて、

なにもしなければなんということはない。数刻経てばその催眠からは覚めることだろう』

新聞には凡そこんな事が書き連ねられていた。権にとって、事件が山だけではなく里でも連日発生しているという事実は意外だった。しかし、権にとつて最も意外に思えたのは、山で起きた事件については、一切なにも書かれていないということだった。権は首を傾げながら何度か記事に目を通したが、やはり山の事件については如何なる記述も見つけられなかった。そんな権を見つけた白狼天狗が聞こし召した調子で権に絡んだ。

「あー！権さんが新聞読んでる」

その白狼天狗はなにが楽しいのか、笑いながら権を指差した。その声を聞いた他の白狼天狗達も次々に口を開く。

「だめだめ、ダメですよ権さん。なんか今日もやる気だったみたいですが、校閲部の指示無視したら、面倒なことになるんですから」

「そうそう。やる気出して犯人捕まえようとしたって、あんなのどうしようもないんですから」

「別段敵意あつての攻撃とも思えませんしね」

「なにもしないことが今の私たちに出来る、出来る限りなんですよ」

「その通り！出来る限り頑張つてれば、いずれ給与も上がりますよ、きつと」

当然、権は新聞を読んで「なにかしよう」と考えたわけではなかった。しかし酔っ払った部隊の仲間達は、愚痴っぽく絡めれば何だつていいのだろう。白狼天狗達の酔宴は、全員が眠気にやられるまで続いた。権も仲間達に吞まされ、気付けばそのまま食堂にて眠りに落ちた。

それから数日後、権はいつも通りに哨戒中の「幻覚」をやり過ごし、日報を提出しようとして校閲部に向かっていた。校閲部の前まで着くと、扉の向こうから何やら怒号が響いていた。どうやら校閲に引つかかった者がいるようで、その者と校閲部の天狗とが口論になっている様子だった。ああ、不味い時に来てしまった。権が出直そうと考えた踵を返すと、背後の扉が勢いよく開かれた。振り返ると、そこには姫

海棠はたてが憤懣遣る方無いといった具合に立っていた。

「ああ権じゃない、聞いてた？」

権ははたての問いかけに、思わず、いえ、聞いてません。と答えた。権の返答を聞いたはたては、そ。と短く答え、さっさと歩いていってしまった。ああ、咄嗟に嘘をついてしまったぞ。権には先の口論の内容が微かながらに聞こえていたのだ。権の不器用な穏和さが、権に咄嗟の嘘をつかせた。そして、権の真面目さが、権にそれを後悔させた。謝りに行くべきだろうか、考え込んでいると、権の耳に八つ当たりめいた怒号が響いた。

「犬走、日報を提出しに来たんだろう。早くしないか」

権は慌てて、校閲部の扉を潜るのだった。

山の怪事件 3

日報の提出を終えた権は食堂でちよつとした食事を摂り、姫海棠はたての家の前まで来ていた。姫海棠はたては寮の離れの小ぢんまりとした家屋に住んでいた。通常、山に所属する天狗は寮での生活を強制されるのが規則だった。しかし、姫海棠はたてはその例から外れ、寮の離れに自室を持っていた。はたてが何故こつとも特別な待遇なのか、権は文やはたてと交流する最中に断片的ながらもその理由を察していた。戸の前に立ち、はたて宅を見上げる権の脳裏には、先日、去り際に文の放った一言が浮かんだ。しかし、権はすぐにそれをかき消して、はたて宅の戸を叩いた。

戸の向こうから、はーい、と気怠そうな返事とともに、ドタドタとした音が響く。程なくして、戸が開いた。

「ああ権じゃない。どしたの?」

権は先程校閲部の前で嘘をついてしまったことを白状し、それを謝罪した。大変申し訳なさそうに謝罪する権に対して、はたては驚いたような呆れたような感を抱いた。

「別に、気にしないでいいのに。聞かれて困るものでもないしね。ああ、そうだ。権も『校閲部』にだいぶいびられてるみたいじゃない。なんだっけ。そうだ、確か『なにもするな』とかなんとか。ま、いいわ。とりあえず上がっていったら?」

権は言われるがままに敷居を跨いだ。はたての部屋はこれまた汚かった。世のネタが増えたと部屋を汚すのは天狗の記者の習性なのかもしれない。そんな部屋の中、権が部屋に設置されたこれ見よがしな『客人用の椅子』に座らずそわそわしていると、はたては、

「座つたらいいじゃない」

と、お茶と茶菓子をテーブルの上に用意して、権をたしなめた。権は照れたように笑いながらようやっと腰を下ろしたが、用意されたお茶が一人分しか存在しないことに気付き、また少しそわそわし始めた。はたてはそんな権の様子には頓着せず、原稿に向かうのだった。

恐らく、校閲に引つかかかって書き直しを命じられたのだろう。そう

考え、権ははたてに同情を投げかけた。

「え？ああいよいよ、今書いてるのは次の分よ。さっきのはそのまま印刷するわ」

はたての返答は権にとって意外なものだった。校閲に引つかつてないのなら、どうしてはたては校閲部の天狗と口論などしていたのだろう。権ははたてに尋ねた。

「そりゃ、検閲には引つかかったわよ。でも、印刷の連中はそんなこと気にせず印刷してくれるのよ。知ってる？納品が遅れたときの連中の嫌な顔。ま、印刷部も印刷部で、今日の仕事を終えるために必死なのよね。それに、校閲部に持っていくのは“規則”だから、従ってやってるってわけ。目的は嫌がらせだけだ」

頻度で言えば稀だが、姫海棠はたての発刊する“花果子念報”は、過激と評される“文々。新聞”の“それ”より過激な記事を掲載することがあった。その都度山の中でちよつとした騒ぎになる。ともすれば、校閲部の前で聞いたあの怒号は、そういうことなのだろうな、と権は思った。

「いやー今回も相当怒ってたわね、校閲部。この記事が上に読まれたらどうするんだ、なんて言ってるさ。どうするもこうするもないわよ、ねえ？ああそうだ、良かったらさっきの原稿、読んでもいいわよ。あはは、権達の悪口も書いてあるんだから」

そう言っつて、はたては問題の原稿をテーブルの上に放り投げた。権は恐る恐るその原稿を手に取り、見出しに目をやった。

『山の怪事件！哨戒部隊の醜態』

見出しの通り、原稿の至る所に哨戒部隊の醜態を収めた写真が貼つてあった。木の幹にかじりつく白狼天狗、仲間に飛びかかる白狼天狗、仲間に追われ必死の形相で逃げる白狼天狗等々、権は記事には目もくれず、そうした写真を見やつては、慌てて写真の出所を尋ねた。「私が撮ったんじゃないってば。私はどっかの誰かが撮ったものを念写しただけ。それに、そもそも哨戒部隊が弛んでるのがいけないんでしょうが」

権はなにも言い返せなかった。権は写真の白狼天狗達の慌てつぷ

りを鑑みて、写真は恐らく山で最初に事件が起きた日のものだろうと確信した。山で初めて事件が起きた日は非番だった椀だが、それでも哨戒部隊の弛みの原因は隊長である自分にあるような気がして、やはり何も言えなかった。何よりも、写真の中の白狼天狗達の無様なまでの慌てっぷりが、椀を閉口させたのだった。

「あはは、冗談よ。それに、椀はその日非番だったんでしよう？どの写真にも写ってなかったし。それより、大事なのは写真じゃなくて記事よ、記事」

椀はやおら震えながら記事に目を落とした。しかし、白狼天狗達の「オフショット」の衝撃が抜けない椀の頭に、細かい文字がすつと入っていくことはなかった。一旦落ち着こうと、椀が茶の注がれた湯呑みに手を伸ばした、その時だった。

震える椀の手が湯呑みを掴むことはなく、湯呑みは勢いよく原稿の上に倒れ込んだ。原稿へと、湯呑みから威勢良く茶が注がれていく。はたては卒倒した。はたての意識が薄らいでいくと同時に、原稿の上のインクも解けていった。程なくして、はたては意識を手放し、原稿はふやけた。湯呑みに伸ばした椀の手は、いつまでも震えていた。

山の怪事件 4 (了)

それから数日経っても事件が収まることはなかった。哨戒部隊はもはや幻覚に慣れた様子で、仲間内で「わたし、今日は何に見える？」などと言いつけていた。権もそれに参加しないでもなかったが、権はなんとなく気が引けた様子で、哨戒の最中、いつもぼんやりと遠くを見つめていた。事件の収まることのないまま、とうとう権に非番の日が回ってきた。休日、権は大抵友人のところへ遊びに出かける。山で事件さえ起きていなければ今回もそのようにしただろう。しかし、事件を放つぱり出して悠々と遊びに出かけるのは如何なものか、という考えが、権を小ざつぱりした何もない自室に縛り付けた。

権はなんとはなしに、自室を眺める。備え付けの机、備え付けの食卓、備え付けの布団。机の上には支給された筆記用具の類が整然と置かれている。権が自身で用意したものといえば、シャツと枕くらいなものだった。窓の外を見やり、ふと考える。仕事のこと、哨戒部隊の仲間達のこと、事件のこと。里でも起こる連日の事件の犯人について、権は心当たりがあった。誰か、というのは分からなかったが、何時に何処に現れて、集団催眠をかけるのか。その手法についてはさつぱり分からなかったが、出現するおおよその時刻と場所は既に持ち前の能力で把握出来ていた。やろうと思えば、先回りして、待ち伏せすることも出来るだろう。

先日の食堂でのことを思い返す。哨戒部隊の仲間の放った言葉、なにもしないことが、今の私たちの出来る限り。果たして本当にそうなのだろうか。山で事件が起きて、校閲が厳しくなったとしても、あの人たちは、部屋の掃除も忘れて新聞を書いている。権は再度、自室を見渡してみる。部屋はやはり、小ざつぱりとしていた。権は悪戯に、机の中をひっくり返してみたり、布団をぐちゃぐちゃにしてみたりして、部屋を散らかした。それでも、部屋は依然として、小ざつぱりとしていたし、退屈から抜け出すこともできなかった。権は、後ろ髪を引かれる思いでしたが、仕方なく、外に出て気晴らしすることにした。「ええと。じゃあ、3—1金打」

権は友人である河城にとりの工房にて、にとりと将棋を指していた。にとりから、やろう、と始まった将棋だったが、当のにとりは対局が始まるやいなや機械を弄り始めてしまった。それからはチラチラと盤面に振り返りながら、権に口頭で手を伝える始末だった。尤も、権はそれをあまり気にしていない。縁日を二ヶ月後に控えたこの時期、にとりはいつもこんな調子で、発明に熱中することを権は承知していたのである。そんなにとりの部屋も、やはり用途不明の機械や工具や部品やらでごった返していた。権はにとりに次の手を尋ねるも、なかなか反応がない。権は一問置いて、何を造っているのかを訪ねた。機械いじりに熱中している際のとりは、殊こういった質問を聞き逃さない。

「ああ、これかい？なに、簡単なおもちゃだよ。去年はいろいろとコストが嵩んでね、今年はそれを回収しようと思ってるんだ」

確かに、にとりの作業机の上には、可愛らしい「カップのおもちや」が幾つか並んでいた。

「これはね、音に反応して喋るおもちゃなんだ。なにを喋らせようかはまだ決まってるないけどな。なかなか子供に人気が出そうだと思うかい？あはは。まあ、この形に落ち着くまでいろいろと試作してさ、その試作に大分コストをかけちゃったから、首尾よく捌けたとしても、結局とんとんなんだよねえ。あーあ、これなら「偽造通貨生産ロボ」でも造ってたらよかったな」

権は相槌打ちつつ、にとりに次の手を尋ねた。

「ああ、ごめんごめん。そうだな……。じゃあ、2一銀打で」

権が盤面を睨んでいると、にとりが何か思い出したように口を開いた。

「そういえば聞いたよ。山も大変なんだってな。なんでも、犯人はあの鶴らしいじゃないか。そりゃ、白狼天狗にや荷が重いよなあ」

権はにとりの口からするりと飛び出た言葉に驚いた。あれから毎日かかさず山の新聞には目を通していたが、山で事件が起きたことを記事にしてる新聞は存在しなかった。山での事件を知っている哨戒部隊と校閲部、それと一部の天狗ぐらいたらう。どうしてにとりがそ

れを知っているのか、なにより、権は“犯人の鶴”が気になった。

「え？鶴って言ったらあの、命蓮寺のぬえだよ。ああ、こないだ文が取材に来て、私はその時に聞いたんだ。でも、他の河童達にももう知れ渡ってるみたいだよ。なんでも、里で命蓮寺の連中が封獣ぬえを探し回ってるのかなんとか。それより権、それ、もう詰みじゃないかな」

権はいろいろと慌てながらも盤面を見やった。すると確かに、盤面はにとりが言う通り詰んでいて、それを理解した瞬間、権はすっと、体が脱力するのを感じたのだった。

それから暫くの間、権はにとり部屋に敷きっぱなしにされた布団の上でごろごろしたり、外の景色を眺めたりしていた。にとりの工房には大きな窓が在った。それは縁側に繋がっており、縁側のすぐ先には川が流れていた。そんな川沿いを、緑々とした木々が取り囲む。権はいつも、大きな窓からそんな景色を眺めては和やかな気持ちになっていた。にとりの工房は用途不明の機械やらに埋め尽くされていたが、権にはそれが不思議と、周りにある自然と調和を織りなしているように思えるのだった。そうして、権がぼんやりと景色を眺めている最中も、にとりは黙々と作業を続けている。静かな空間に、カチャカチャと、作業の音だけが浮かんでいた。

権は、そんな音を聞いているうちに、にとりに或る事を尋ねたくなった。それはまるつきりなんとなくの思いつきだったが、気付けば権はにとりに問いかけていた。

「なんで機械を造るのか？うーん、そうだなあ。まあ、やつぱり河童に生まれたからっていうのもあるけど、一番は、私にこれが出るから、かな。そりやもちろん、他のことだってやろうと思えば出来るんだろうけどさ、でも、それを始めちゃうと、今出来ることが出来なくなっちゃうだろう？ああ、うん。時間の問題もあるんだけど、そうじゃなくて。出来なくなっちゃうそう、というかな。とにかく、それが嫌なんだよ。今出来ることが出来なくなるのは、嫌だな、やつぱり」

「じゃあさ、権も教えてよ。権はどうして哨戒やってるのさ」

……

「ふうん、そっか。ま、いいんじゃないか」

寮に帰ってきた権は、外へ出る前に散らかした部屋を片付けた。忽ち部屋はより小ぎつぱりとして、権はそれを眺めて満足気に微笑んだ。帰途、里で件のぬえを探す命蓮寺の一行を見かけたことも、権の満足気な微笑みに助力した。権が食堂へと赴いた頃には、ちょうど今日の哨戒を終えた哨戒部隊がちらちら帰ってきてる様子で、食堂はいつも通りに騒がしかった。

「おい聞いたかよ。校閲部のやつら、今度は“犯人を捕まえろ”なんて言ってさ。何考えてんだか」

「聞いたところによれば犯人ってあの鶴だろう？あんな大妖怪、私達に捕まえられないじゃないか」

「どうせ新聞の売れ行きが怪しくなってきたから、私達にネタ作らせようってんだろ」

「うちの隊長なんか、放っておけばいい物を、なんだか息巻いててさ」「ああ、うちもうちも。犯人なんか一回も見たことすらないのに、捕まえるぞ！なんて言っつて」

「結局、下は上の意向に引つ掻き回されるのが世の常なんだなあ。あーやだやだ」

「まあ、やると決まったからには、出来る限りやるけどさ」

この日、権は珍しく自分から酒を飲んだ。帰ってきた権の部隊の仲間達がそれを見つけると、やいのやいのと一緒にってはしゃいだ。明日の意気込みなどを皆で喚き散らしては歌った。権も柄に似合わず、アルコールに溺れながらも、明日はやるぞ、やってやるぞ、と息巻いていたが、そのうちみんな眠たくなって、そのまま、食堂で眠った。

その翌々日、

『犯人は封獣ぬえ 哀れ山の哨戒部隊』

という見出しの新聞が発刊されたが、売れ行きはさほど芳しくなかった。

しかし、さらに翌日に発刊された、

『里の怪事件これにて終結！お手柄！博麗の巫女』

という見出しの記事は、それは飛ぶように売れたという話だ。

†神意† (閑話集 全9話 オールキャラ)

†神意† 1 曇りのち雨

煙草の煙がそのまま雲になったような空の下、古明地こいしは神を探していた。

探している、といつても、彼女は人里の往来に行く人々の中に彼女にとって神らしき人物を見つけ「あなたかみさま？」と声をかける程度なものだった。彼女が声をかけた人物の中には妖怪もいれば非人間的人間も在った。しかし、彼らは古明地こいしの問いかけに「はい、私は神です」と答えることはしなかった。

彼女の問いかけは問いかけられた側からすれば素っ頓狂で、ちんぷんかんぷんなものに聞こえた。よもや古明地こいしが本当に、この世の凡ゆる因果に説明をつけてくれる神を探しているとは露とも思わなかった。当然といえば当然だが、彼らの返答は古明地こいしを打ちのめした。

——ああ、つまんないの。

古明地こいしが人里を離れ、森の入り口周辺をふらつき始めたころ、ぽつぽつと雨が降ってきた。降り始めの雨は透明で、腕や顔に冷たく小さな感触が当たらなければ気付くことも出来ないほどだった。しかし、乾燥した土や草木に雨が染み込み、それまで忘れられていたものを思い出すかのように自然の香りを醸し始める。

古明地こいしは退屈と共に降り出した雨に、噓せるような雨の匂いに、やはり神の存在を感じずにはいられなくなった。

どこかに神はいないものか。

辺りに目を配ると、茂みがガサガサと音を立て揺れ動いているのを見つけた。目を凝らすと、茂みをかき分けて道へ出ようとする者が在った。

——もしかして、かみさまかも！

古明地こいしは胸を高鳴らせて、その者が茂みから出てくるのを待った。

一寸の間、茂みはガサガサと音を立てて古明地こいしの心を急かした。

そうしてその者は茂みをかき分け、いよいよもって古明地こいしの前に姿を現した。古明地こいしは直ぐに駆け寄って、問いかける。

「ねえ、あなたかみさま？」

その者は古明地こいしの問いかけに一瞬キョトンとした表情を見せたが、直後自嘲めいた息を一つ吐いてこう言った。

「まあ、神様といえば、神様だけぞ」

古明地こいしは目を輝かせた。

「ほんと！　じゃあ、あなたが全部を決めてるの？　この雨も、あなたが降らせたんだ！」

古明地こいしと向かい合う者——依神紫苑はまた一つ自嘲めいた息を溢して答えた。

「ええ、そうね。そういうことに、なるのでしょようね」

もちろん、そういうことにはならない。一介の貧乏神風情に決定付けられる事象などは殆どない。ましてや天候を操るなど、依神紫苑にはもちろん不可能だった。

「ねえ、じゃあかみさまのいろんなお話聞かせてよ。どこか、雨宿りできるところまで歩いてさ。あ、雨は止めなくていいよ。だってかみさま、必要だから雨を降らせたんでしょう？　ほら、早く行こうよ。それで、いっぱいお話聞かせてもらうんだ」

「……ええ。私なんかの話でよければ、いくらでも」

依神紫苑。

彼女はこの数日何も口にしていなかった。空腹のせいで睡眠もまならなかった。飢餓状態に伴うフィロソフィー・ハイが、彼女に一種の万能感、或いは錯覚を与えていた。

——万物に与えられる幸、不幸の因果は、ともすれば私に在るのかもしれない。

依神紫苑は空腹と目眩と出所不明の昂揚をもって、古明地こいしの後続に続いた。

やおら勢いを増す雨すらも、古明地こいしにとっては賛美の伴奏の

ように聞こえていた。

——ああ、なんて楽しみなのかしら！ まさか、かみさまのお話が聞けるなんて！

古明地こいしはワクワクして、後ろをひたひたと歩くかみさまの語るおはなしを想像しながら、歩きはじめた。

✦神意✦ 2 鈴仙が来ない

人里に“レストラン”が出来た。妖怪の山の企業努力により実現した出店は、人妖問わず様々な者を惹きつけた。レストランは開店から連日長蛇の列が出来ていて、店の中は常に満席だった。

人々が目に新しい洋風な食事を摂りつつ、思い思いの会話に興じるレストラン。十六夜咲夜と魂魄妖夢はその中の一つのテーブルに着き、黙々と、テーブルに置かれたコーヒーにちびちびと口をつけていた。

そう、鈴仙を待ちながら。

「……………」

「……………」

……………。

二人には、共通の話題が無かった。仮にあったとしても、それを考えることも出来ないほどに互いは互いにとって“友人の友人”だった。とはいえ、これまで二人は何度となく会話を交わしていた。鈴仙、咲夜、妖夢の三人で集まっている際ならば、二人は問題なく会話が出来た。

それもそのはず、三人で集まった際会話における第一声、話題の提供をしていたのは鈴仙・優曇華院・イナバ他ならなかったのだ。三人は休日、よく集まり、いろんな場所へ出かけた。湖畔へキャンプに行ったことさえある仲だった。しかし、三人で集まろうと最初に声をかけたのも鈴仙だった。そもそも、鈴仙が声をかけなければ、三人が集まることはない。今回、話題のレストランへ行くことにしたって、鈴仙の発案によるものだった。三人の中で比較的“空気の読まない”傾向があつた鈴仙だが、咲夜と妖夢にとっては鎚のような存在だった。

咲夜と妖夢はその事を、今になって、痛感していた。

「……………」

「……………」

……………。

二人は互いを嫌いあつていいるということはない。二人して、何か喋らねければと考えてはいた。比較的引つ込み思案な妖夢でさえも頭をひねつて、何か丁度いい話題を考えていたし、咲夜も妖夢が頭をひねつていいることを感じ、丁度いい話題を必死に思案していた。

しかし、二人の思考を邪魔するものがあつた。それは、二人にとつて、この場にある唯一の共通の話題だつた。

——鈴仙が、来ない。

二人してそれを口に出さないのには理由があつた。二人とも、それを口に出したら、これまで三人の関係の中にて埋没していた事実が表層へ浮き彫りになつてしまうことを恐れていたのだ。

“二人の関係は鈴仙の存在で持つていいる。”

“鈴仙さん来ないですね／来ないわね”この台詞を吐いた瞬間、二人はその事実を認めざるを得なくなる。

私たちはそれなりに仲の良い友人である。それが、二人にとつての共通認識だつた。これまでは。

「……。」

「……。」

……………。

「……あのー！」

先に口を開いたのは妖夢だつた。しかし、妖夢の頭には何も思いついていいる。あるのは“鈴仙が来ない”その文字だけだつた。

「……いえ、なんでも、ないです……。」

妖夢は何も言えなかつた。元来の優柔不断とも引つ込み思案ともとれるその習性とともに生きてきた彼女に、この状況を打破する名案は、浮かぶはずもなかつた。

「……そう」

平静を繕つていいる咲夜だが、内心ではかなり焦つていた。妖夢が開きかけた口を閉じた事により“私達の関係は鈴仙でもつていいる”という事実が切迫してきた空気を感じたのだ。

……………。

——この間を打破するのは私以外にいいる。

咲夜は鈴仙の話題の切り出し方を思い出した。鈴仙はよく、最近買った小物なんかを持ち寄り、それを提示して話題を切り出す。最近買ったもの、最近買ったもの……。咲夜は思考の果てに、懐からおもむろにナイフを取り出し、それをテーブルの上にゆっくりとのせた。

「……これ、私のナイフだけど……」

「ああ……」

「……最近、新調して……オーダーメイド……」

「おお……」

……。

咲夜は時を止めて頭を抱えた。それは失策だった。とりとめのない話題を切り出し、会話が続かないのは“友人の友人”感を助長させたのみだった。取り敢えず、テーブルの上のナイフを仕舞おう。そう決意したところで、時はまた動き出す。

「……。」

咲夜は無言でナイフを仕舞った。妖夢は混乱していた。

——私も何か出さなければ。

脳内はしどろもどろで混沌としていたが、妖夢はできる限りの平静を繕って、ゆっくりと椅子に置いた白楼剣に手を伸ばした。そして、咲夜に見えるようおもむろにそれを構えて、ゆっくりと鞘を抜いた。

「……これ、白楼剣って……」

「あー……」

「……えっと……人の迷いを断ち切れる……」

「へえ……」

……。

妖夢はテーブルの下に片手を伸ばし、半霊を揉みくちやにした。それはやはり失策だった。何より妖夢は恥ずかしかった。この妙な間が、恥ずかしくてたまらなかった。

——ああ、早く鈴仙さんが来てくれたら。

——ねえ聞いてよ！ ばんきちちゃんったら酷いんだから！——。

二人の沈黙の中、なにかよく通る声が響いた。それは、二人の座る席の後方に位置するテーブルから響く会話だった。

——姫、私ね、今日だつてばんきちちゃんのこと誘つたのよ！ それで、ばんきちちゃんへ行けたら行く、なんて言うからさ、不安だつただけど、当日になつたら案の定！ やっぱ行かない、なんて言つてさ！ じゃあ行かないで一人で何するつもり？ っつて聞いたらさ、わかんない、だからだらしてる、とか言つてくれちゃつて！ 腹立つつたらないわ、正直！

うーん、ばんきちちゃんはマイペースよね、少しだけ。

少しじゃないわ、マイペースすぎるのよ。こないだもひどかつたわ。二人で遊んでる時、お洋服の話になつたの。それで、新しい帽子が欲しいな—つて私が言つたの。そしたらさ、ばんきちちゃんたら本かなんかを読んでね、あ—とかお—とか言つて、全然聞いてないんだから！

それはちよつと、たしかにマイペースすぎるかも。

しかも、終わりじゃないのよこの話！ それから二週間ぐらい経つた頃ね、また二人で遊ぶことになつて、私は新しく買った帽子をかぶつてばんきちちゃんのとこに向かつたわけ。それでね、まあお茶飲みながら普通に話してただけど、ばんきちちゃんが急に、あ、そうだ、なんて言うの。なんだろうな—と思つて、なに？ っつて聞いたら、なんて言つたと思う？ こないだの帽子の話んだけどさ、ですつて！ もう、信じられないわ！

わー、すつごいマイペース。ちよつと引く——。

咲夜と妖夢はゾツとした。鈴仙が、もし、彼女らの友人のようにマイペースだったら。思い当たる節はいくつもあつた。二人にとつて鈴仙はやはり“比較的空氣の読まない人”だつた。

二人の間の沈黙が、一層重たくなる。

しかし鈴仙は、未だ来ない。

†神意† 3 ひとつめの宴会

射命丸文が宴会を企画した。今年はまだ春になるが、去年の忘年会からそれらしい宴会は一つもなく、皆も何となくソレを待っていた。射命丸文が企画したのは花見だった。しかし、山のお偉方や知人止まりの同僚達と宴会の際まで顔を合わせたくなかった射命丸文は、知る人ぞ知る花見のスポットを用意し、内々だけの宴会にする、予定だった。

妖怪の山からも人里からも離れた侘しい広場にて、それなりに実った桜の葉の下、ブルーシートの上に集まったのは射命丸文を除き四人。

犬走椀。 姫海棠はたて。 河城にとり。 星熊勇儀。

そのうちの三名は急性アルコール中毒で既に事切れていた。ブルーシートの上、はたまた地面の上に横たわる友人の無残な姿を、射命丸文は尋常ではない嘔気と共に見つめていた。

ああ、どうしてこんなことに。

考えるまでもなく、星熊勇儀の仕業ではあったが、射命丸文はもっと根本的な事柄に対し悔恨の念を送っていた。

なぜ、今日に限って鬼が見つかるのか。

射命丸文は神を呪っていた。

それなりの場所に、それなりの風が吹いて、それなりの桜吹雪が舞う。今の射命丸文には、そんなそれなりの綺麗な光景すらも、神が与えたもうた皮肉のような嫌味のように映った。

皮肉といえば射命丸文の胸ポケットだった。彼女の胸ポケットには鬼さえコロリと眠らせる睡眠薬が在った。それは、射命丸文が家を出る際、本当に戯れに胸ポケットに忍ばせた代物だった。

誰かにこつそり飲ませれば、なにかひと笑い取れるのではないか。

河童と天狗二匹が吐瀉物に塗れ転がるこの惨状は、自分が抱いた邪な感情に対する罰のようにも思えた。何より文は、その睡眠薬を星熊勇儀の盃に盛ってやろうと、何度も考えた。かつて鬼が山にいた頃、射命丸文は星熊勇儀と殆ど面識がなく、今日が久々の再会だった。射

命丸文は考えたのだ。

——どうせ名前も顔も覚えていないだろうから、ここで薬を盛ったとしても、後腐れはないのではなからうか。

しかし、射命丸文には確証が無かった。星熊勇儀が自分達のことを完全に忘れている、その確証が。

星熊勇儀が花見に乱入してからというもの、射命丸文は何度も確認を試みた。

——いやあそれにしても、お久しぶりですねえ。私達のこと、覚えていますか？ あはは。

あー？ 別にいいだろ、そんなこと。どうだって。それより呑もうじゃないか、さあほら、注いでもらおうか。

あはは。それもそうですね、注がせていただきます。あははは——。

射命丸文の試みは悉く失敗に終わった。切り札の睡眠薬は射命丸文の胸ポケットに眠ったまま、一人、また一人と吐瀉物に沈んでいた。

比較的酒の強い文は自分の体質と、友人達の酒の弱さを呪った。

「なんだよやつら、酔いつぶれちまって。河童はともかくとして、あの二匹は天狗だろう？ 情けないったらないね、まったく」

「いやあ、仰る通りで、あはは……」

「しかし。お前はなかなか見込みがあるな。いい飲みっぷりじゃないか。気に入ったよ」

「そ、そうですねえ。恐縮です……」

「そうだ。今度はサシでやろうじゃないか。なあ……」

「え、そりゃあもう。勇儀さんが仰るならば、喜んで……どうされましたか？」

「……いや、実のところ、お前の名前を思い出せなくてな。……というか、天狗共が呑んでる、と思って参加させてもらっただけで、ほんとは顔も覚えてなかったんだよ、今日は。黙ってて悪かった、すまない。だから、ちよつと、名前を教えてもらえないか？ 酒席で会った奴の事は大概忘れてしまっただが、お前、ペン持ってるだろ？ 名前書い

て、渡してくれ。そうすれば忘れずに済むから」

「ええ、喜んで！」

射命丸文はやはり神を呪った。神はどうして、自分にこれほど残酷な選択を強いるのか。彼女は吐瀉物の海に転がる友人達を眺めて考えた。

そうしていると、ひらひらと舞う桜の一枚が、姫海棠はたての顔の上に着いた。

「どうぞ。私、こういうものです」

「んん？　“かかしねんぼう　ひめかいどうはたて”か。わかった、ありがとう。じゃあ、はたて、桜の散らないうちに山に行って、お前を尋ねるとするよ。ああ、楽しみだなあ。よおし酒を注いでくれ、今日は呑むぞお」

「ははあ、仰せのままに！」

射命丸文は星熊勇儀の盃に、目にも留まらぬ早業で睡眠薬を盛った。盃に一口でも口をつければ、鬼だろうと何だろうと忽ちコロリだ。ああ、やつと解放される！　文は昂ぶる気持ちを堪えつつ、星熊勇儀に盃を返した。

「ああ、ありがとう。……んん？　なんか、変な味が……。あ、ああ眠い！　お前、盃になにか盛ったな……。くそ、鬼を嵌めたな……！」

姫海棠はたて、名前は覚えたぞ……。覚えておけ……。ぐう」

射命丸文は席を立ち、家路につくことにした。

帰りしな振り向くと、犬走権、姫海棠はたて、河城にとり、星熊勇儀が、ブルーシートの上、ぐちやぐちやに重なり合って眠っていた。その光景は、まさに宴会そのものだった。みな、楽しく呑み、酔いっぶれ、なにも考えず幸せそうな顔で眠る。舞い散る桜の花びらが、そんな架空の宴会の後を縁取っていた。

射命丸文は悲しくなつて、泣きながら家路を辿ったのだった。

†神意† 4 教師として

上白沢慧音は寺子屋での業務を終え、帰宅の為資料を纏め、残っている子供がいらないか、教室以外にも幾つかある事務室や用具入れ等を確認して回っていた。

——しかし今日は我ながら、なかなか良い授業をしてしまったな。慧音は上機嫌に、童謡などを口ずさみながら、寺子屋をチェックして回る。

今日、慧音は教え子達の中でもとりわけ幼い子供達に対して道徳の授業を行った。幾つかの童話等を読み聞かせたり、感想の浮かんだものに手を挙げさせたりしたが、中でも反応が良かったのが「金の斧」という寓話だった。木こりが泉に斧を落とすと、ヘルメスという神が現れ、あなたが落としたのは、という質問をし、正直に答えた木こりの正直さが報われる、というその寓話は、子供達に正直であること的美徳を伝えてくれたように慧音は感じた。

——みんな、良い子に育ってくれるに違いない。

ここ最近天狗の新聞で、貧困から窃盗などの非行に走る子供達が取り沙汰されていたが、慧音は今日の自分の授業が、子供達を非行から遠ざけた、と、そこまで大げさではないが、良い影響を与えたことには違いないと確信していた。

「教師冥利に尽きるとはこのことだな……と、ん？」

上機嫌が余って独り言を口走らせながら教室のチェックをしていた慧音だったが、教室の机の上に幾つかの「忘れ物」を発見した。

「なんだ忘れ物か。……筆箱と……筆箱と……筆箱だ。全部筆箱だ。まったく、弱ったな」

筆箱を忘れたことに気付いた子供が戻ってくるかもしれない。慧音は教室で、そんな子供達をしばらく待つことにした。

……。

「なんだ、この筆箱は、なになに『象が踏んでもこわれぬ』……お、高そうだな。どれちよつと、踏んでみようかな」

「こつちはどうだろう、うーん……。まあ、割合ふつうの筆箱だな。う

ん、ふつうだ。ふつーすぎて、特になにもいうことがない」

「最後のは……おお、ぼろっちなあ。もう、もはやただの布だもの。ああ、こういうの見てると、ちよつと心が痛くなるな。いやいや教師として、子供達は平等に見なければいけない、うん。いや、にしても、ぼろっちな」

待っている間の暇つぶしに、慧音は忘れ物の筆箱三つを観察していた。しかし一つ、問題があった。

「それにしても、誰が誰の筆箱なのか、さっぱりわからないぞ」

慧音が腕を組みそんなことを呟くと、不意に、教室の扉がガタガタと音を立て、開いた。

「先生ごめんなさい、わすれものをしちやって」

継ぎ接ぎだらけの衣服を着た、背の低い、痩せた少年だった。

「あ、ああ、入ってこい。ちようど忘れ物を見つけてな。待っていたところだよ」

慧音が言うと、少年は、よかった、見つかった、と喜びながら、少し駆け足になって、筆箱三つが並べられた教卓まで近付いた。

「まったくダメじゃないか。忘れ物なんてしちやあ、物は大事にしないな。……ああ、でも。先生はどの筆箱がお前のかわからないんだ。嘘ついて他のやつ筆箱を持っていったらダメだぞ。これと、これと、これ。さあ、お前の筆箱はどれだ?」

慧音は教卓に並べられた筆箱、高そうなのと、ふつうなのと、ぼろっちいのを順番に指差して、少年に尋ねた。すると、少年はどこか悲しげに押し黙ってしまった。

「どうした? ……もしかして、この中に無いのか?」

「……ううん」

「あるんだろ? じゃあほら、どれがお前の筆箱なんだ? 先生お前に筆箱渡したら今日は帰るからさ、ほら、早く先生を帰らせてくれよ。なんてな、ははは」

「……じゃあ、これ」

そう言って少年が指差したのは、高そうなのとふつうなのの間に挟まれた、一番ぼろっちな筆箱だった。

——しまった！ 配慮に欠けていた！

慧音は後悔した。しかし、極力教師然と堂々とした笑顔を崩さずに、ぼろつちい筆箱に手を伸ばし、それを少年に渡した。

「おお、よかったじゃないか。見つかつて。いや、なかなか大事に使ってるみたいじゃないか、その筆箱。もう、忘れたりしたらダメだぞ。物は大事に、な！」

「……。」

受け取った筆箱を胸あたりに両手で抱えた少年が、じつと、慧音を見つめる。

まさか。

慧音の頭に過つたのは今日の授業、その最中に聞かせた寓話「金の斧」他ならなかった。

「いや、渡すことはできないぞ。これらは他のやつのもものだから」なんて言葉が慧音の喉元まで込み上げたが、慧音はすんでのところをそれを堪えた。

——この子にそんなつもりがなかったら、私はどうするつもりなんだ！

「……。」

しかし、少年は尚も慧音を見つめ続ける。

——ああ、やっぱり欲しいのかな、正直さに対する報酬が！ どうしよう、いや、私はヘルメスじゃない。高そうな筆箱は金の斧じゃないし、フツの筆箱だって銀の斧なんかじゃ断じてない。ただ、この子の身なりといい筆箱といい……この子からすればこれらの筆箱は、金の斧、また銀の斧に、見えるのかもかもしれない……ああ！ 私は何を考えているんだ！ 教師たるもの、教師たるもの……。

「なあ「先生」」

慧音の言葉を、少年が遮った。

「先生、僕の先生のことわかるよ。おはなしはおはなしであって、現実とは違うってことでしょ？ いいんだ、僕。この筆箱、お母さんに作ってもらって、とっても大事にしてるんだもん。だからね、先生は気にしないで。金の斧も銀の斧も、僕は全然欲しくないから。」

ちつとも欲しくないんだから」

少年はそう言つて、すたすたと教室を去つていった。

教室に残された慧音は、教育というものの難しさを、一人、噛み締めていた。

✦神意✦ 5 鈴仙が来ない

座りっぱなしで痛む関節が、咲夜と妖夢に過ぎた時間の長さを教えていた。

——だからさー！ ばんきちちゃんはそういうところが——あの時にしたって——首がまわらないのはあんたのぐうたらが——だいたい人里で働いてる時点で——。

「……。」

……。

咲夜と妖夢は、特に何か取り決めを行ったわけではないが、二人とも無意識のうちに、同じ事柄に集中していた。

——夏に二人で虫取りにいったときだって！——付き合いが悪いのよ付き合いがー！——。

交わされている、というにはあまりにも一方的すぎる「ばんきちちゃん」への不満打ち明け大会に、二人は耳を澄ましていた。二人は隣のテーブルに座る妖怪二匹とも、二匹の語る「ばんきちちゃん」とも面識はなかったが、もはや二匹の人柄も、この場に存在しない「ばんきちちゃん」の人柄すらも、概ね把握してしまっていた。

初めは二人とも、狼の妖怪の余りある音量で発せられるソレを聞いていないふりをしていた。従者としての振る舞いが染み付いているということもあつたが、何より人として、二人は聞き耳を立てるといふ行為に良いイメージは抱いていなかった。そして互いが互いに、聞き耳を立てていることを勘付かれなくなかった。

「……。」

「……。」

……。

しかし、二人には話題がなかった。鈴仙を待ち兼ねて注文した食事も摂り終えてしまった二人の間に残ったのは、筒抜けの、赤裸々な、隣のテーブルから響く声のみだった。

——絶対家に居るはずなのにノックを無視したりして！——来な

いって言ったのに急に行くって言った！——自由すぎるのよ、行動が！——。

そんな声に、初めに反応を示したのは咲夜だった。隣席の「かげろうちゃん」と呼ばれるその妖怪の話は概ね「ばんきちちゃん」への不満に終始していたが、当の本人である「かげろうちゃん」の行動も、疑問点が多かった。

——でも、影狼ちゃんも深夜三時にいきなり尋ねるなんて——。

「かげろうちゃん」から「姫」と呼ばれるその妖怪は割合「ばんきちちゃん」擁護派だった。咲夜も初めは「かげろうちゃん」の語る「ばんきちちゃん」のマイペースさに引いていたが、「姫」の合いの手が入るたびに、咲夜は「かげろうちゃん」の人格にも難があることに気がつき、とうとう首を傾げるに至ったのだ。

咲夜が腕を組み怪訝そうな面持ちで首を傾げると、妖夢は咲夜に同調するよう、やおら二度頷いた。それから二人は公然と、聞き耳を立てる事が可能となった。聞き耳を立てるのは鈴仙が来ない所為であって、私達のやし馬根性に由来するものではない。それが、二人にとっての謂わば免罪符、暗黙の了解と為ったのだ。

——まあ、私も悪いところはあるんだけどね。だけどそれでも、ばんきちちゃんのアレは異常よ。日常生活をまともに送れているのが不思議なくらい、マイペースすぎるんだもの。

うーん、本人に悪気がないのが憎めないところよね。

そう！ 悪気がないの、一切無い！ え、憎めないかしら。私は憎たらしくってしようがないと思うんだけど。

でも、友達でしよう？

そりゃあ、そうよ。友達よ。でも、友達だから言ってるんじゃない。そんなんじや友達失くすわよ、って。

影狼ちゃん、ばんきちちゃんと友達やめちゃうの？

……やめないけど！ やめないけど、よ！ ……ああ、もう。まあ、喋ることも無くなってきたし、ご飯も食べ終わっちゃったし、そろそろ帰りましょっか。

そうね。……ああ、ばんきちちゃんも来ればよかったのに。カレー、

すつごく美味しかったね、影狼ちゃん。

洋食食べに来てまでカレーつてのも、どうかと思っただけど、まあ、美味しかったわね。

カレーは洋食でしょ？

そりゃ、そうなんだけど――。

二匹の妖怪が帰り支度を始めたことを受け、咲夜と妖夢の間には妙な緊張が走った。二人同時に、すっかり冷たくなったホットコーヒーにちびりと口をつける。

「……。」

「……。」

……………。

「……ねえ、私たちもそろそろ……。」

咲夜が口を開いた、その時だった。

――あー！ 姫、入り口！ 入り口みて！ ばんきちちゃん、いまさーら来た！

ほんと！ もう帰ろうとしてたところなのに、いまさーら――。

妖夢は何か得心のいった様子で、また徐に二度頷いた。咲夜も感じたことは同じだった。

――いやーごめんごめん。なんか、来たくなっちゃった。

来たくなっちゃった、じゃないわよ！ こちとらもう帰るところだったのよ！

影狼ちゃん、まあまあ。ほら、ばんきちちゃんも座って。とりあえずなにか注文したら？ 何にする？

いやあ、ごめんごめん。えーつと、洋食でしょ？ なんか、肉系のやつがいいなあ。

あー？ だったらほら、ハンバーグとか、あるけど。

うーん……。やっぱ、カレーで――。

「……私たちも、もう少しだけ、待ってみましょうか」

「……そうですねー！」

咲夜と妖夢は今日初めて、互いの心が快く繋がったのを感じた。二人は少し微笑みながら、コーヒーに口をつける。

「あのー、申し訳ないんすけどー」

しかしそこに、臨時雇われと思しき黒髪の河童が現れた。

「困るんすよね。出店早々、コーヒーだけで粘られるっていうのは。外の行列を見て、痛みませんか、心。まあ、なにか注文してもらっても、よろしいでしょうか」

咲夜と妖夢は不意に冷水を浴びせられた気がして、ウエイトレスの声にしゃんと応えることが出来なかった。二人して、いや、あの、えつと、等々、それらに類する言葉をあむあむとさせた。しかし、しつかりと発声するタイミングというのは、不思議と揃った。

「じゃあ、カレーで」

「はい、カレーが二つつスね」

黒髪の河童が気怠げに去って行くのを見送った二人は、顔を見合わせる、ふふ、と笑った。

二人はなんだか、今にも鈴仙が来るような気がして、ワクワクし始めた。そうして、二人の会話はこれまででは考えられないほど弾んだ。二人は楽しく談笑を交わしながら、朗らかな心持ちで、注文したカレーと共に、鈴仙を待つのだった。

それから三時間が経過した。

鈴仙は、未だ来ない。

†神意† 6 ユカリノシキのラン

「それじゃあ、行ってきます」

八雲藍が夕飯の買い出しへ赴くべく声を上げると、橙が「いつてらっしゃい」と声を上げる。八雲藍はそんな「いつも通り」にそこはかたない充足を感じ、靴を履き、片手に買い物袋を認め、上り口の戸に手をかける。ここまでが八雲藍にとってのいつも通り、まさに平穏というものだった。

「待つて、藍。私も行くわ」

そんな平穏を打ち壊すように声を上げたのは八雲紫だった。藍は主人の聞き慣れぬ発言に、されど聞き流すことも出来ぬその発言に、紫色の倦怠めいた衝撃を受けた。

「紫さま、なんでまた、急にそんな」

「たまにはいいじゃない。まさかダメなの」

「いえ別に……紫さまが仰るなら、私は特に……」

藍は多少の狼狽を敢えて前面に押し出しつつ、むにやむにやと主人の言葉に従う旨を述べた。むにやむにやとした煮え切らない発声は、正直面倒なのでいやです、の意が含まれていたが、八雲紫は含意に気付くこともなく、それじゃちよつと待つて、と外出の支度を始めるのだった。

——ああ、紫さまはどういうつもりなのか。まあ概ね、最近橙の紫さまを見る目が紫さまをちよつとした「その気」にさせたのだろうけど、どうだか。橙は存外聡いから、間の読めないよく寝てる人、つて印象はあんまり、変わらないのではないか。むしろ、そんな印象を助長させるだけなのではないか。だいいち、行動がいつも突発的すぎてなあ。買い物についてくるにしたって、だったら初めから支度をしておけばよかったものを、私がもう出るつて時に支度を始めるんだもの。……いやいや、主人に対し失礼過ぎるな、私。……それにしても、遅いな。支度にどれほど時間をかけるつもりなのか。そういうところか。橙の印象を……いやいや、失礼だぞ、私。私も少し、しゃんとしなきゃな。

待ち兼ねた藍が一度靴を脱ぎ居間に戻った瞬間、八雲紫の「支度」は完了した。橙は「主人の主人」の間の悪さを横目に観察していたが、言葉を発することはしなかった。

「それじゃ、行ってきます」

「橙。ちゃんとお留守番してるのよ」

二人の声に橙が「はい」と答え、ようやくと、上り口の戸が開かれた。

——八百屋に行くのにあんなにめかしこんで、あの人はどういってもりなんだろう。

橙の「主人の主人」に対する印象は、また一つ低層へ下った。

……………

里の往来は中繁盛といった具合で、多すぎもしなければ少なすぎもしない、ひどくそれらしい塩梅で人々が行き交っている。その往来の中を、藍と紫も歩いていった。

藍には隣を歩く主人について、その気合の入った風態以外にも一つ懸念があった。

——この人が居たら、八百屋の店主に「おまけ」をして貰えないかもしれない。

藍は無意識の内に統計を取る癖があった。八百屋の店主が「おまけ」をくれる確率についても、やはり無意識下で統計を取っていた。八百屋の店主がおまけをくれるのは、基本的に客の少ない場合だった。藍以外の客が多い場合——人目の多い場合は、少ない場合と比べると、おまけをくれる確率は半減する。そしてもう一つ、確率が低減する条件が在った。同行人が居る場合だ。同行人が居る場合、店主がおまけをくれる確率は低減に留まらず、むしろゼロになる。藍が橙と共に八百屋を訪れた際、店主がおまけをくれたことは一度もなかった。藍は八百屋が近付いた今になって、紫の同行によりおまけを貰えなくなる可能性に気がついてしまったのだ。

八雲家において半ば主婦としての役割を担ってきた藍としては、貰えるおまけを貰えないというのはちよつとした問題だった。そう、ちよつとした問題。主人の同行を拒否するには足りない、ちよつとし

た問題。——しかし藍個人としては由々しい問題だった。おまけの内容は往々にして、彼女の好物である油揚げだった。油揚げでさえなければ、今現在、藍がこうも悶々とすることもなかっただろう。

「……あの、紫さま」

「なにかしら」

「……いえ、なんでもありません」

——おまけ欲しさに主人を帰らせるなんて間違っている！

藍の良心は喉元までこみ上げた「ちよつと、帰ってもらえますか？」の言葉を押し留めた。

しかし、飲み込むには足りず。

藍は八百屋に着くまでの間、悶々と、油揚げの誘惑に揺れ続けた。

……………。

「ちよつと、帰ってもらえますか？」

八百屋に到着するや否や、藍は誘惑に敗北した。紫は藍の言葉を聞くと、なにかシヨツクを受けた様子で、やおらスキマを開きのこのこと自宅へ帰っていったが、藍にはそんなことはどうでもよかった。

——乾坤一擲、おまけを貰える確率をゼロから五分五分へと押し上げたのだ。私は今日どうしても、油揚げが食べたい。

八百屋にはそこそこの客がうようよしていた。藍の統計から言えば、おまけの確率は五分と五分。藍は持参した買い物袋をぎゅつと握り、どこか威勢良く、八百屋へと飛び込んでいった。

「コレと、ソレと、アレをください。あとソレも。ああ！　あとアレももらっちゃおうかな！」

藍には一つ考えがあった。たくさん買い物すれば、五分と五分の確率を上回るのではないか。普段必要以上の買い物をしていない藍に、その作戦の効果の程は分からなかったが、藍はどうしても、おまけが欲しかった。否、貰わなければならなかった。その為に、自身の主人を帰らせたのだ。貰わないわけにはいかなかった。

「お、今日はたくさん買ってくれるねえ！」

——きた！

藍は続く言葉を瞬時に予想する。

——『じゃあ、おまけもいっぱいつけちやおうかな!』……こうだ。こう続くに、違くない。

「あら? 今日はお嬢ちゃんと一緒にじゃないのかい」

「あ、ああ、橙には、今日はお留守番をしてもらっています」

「ふうん、そうかい……」

店主の予想外の発言に、藍は狼狽した。しかし、もう藍に出来ることは何一つ無い。あとはただ、買い物袋に品物を詰めてくれる店主を見つめることしか出来ない。

品物を詰め終わった店主が藍に買い物袋を渡す。

「はい、毎度! “おまけ” したいたから、帰ったらお嬢ちゃんにあげてやりな。きつと、喜ぶよ」

「あ、ありがとうございます!」

藍は店を出て、臆面も恥じらいもなく、買い物袋を検めた。

——橙にあげると喜ぶもの、そんなものは一つだ。それは、油揚げに違くない。

藍は買い物袋を漁った。

その場で五分ほど、漁り続けた。

油揚げは無かった。

代わりにあったのは、藍にとってはようわからん洋菓子。飴玉とか、チョコだとか、そこらへんのものであった。

藍は飴玉を一つ舌の上に転がした。悲しい味がした。

悲しくて、悲しくて、藍は家に着くまでに、おまけの洋菓子を残らず食べ尽くしてしまったほどだ。

結局、家に着いた藍に残ったのは、主人との軋轢と、主人間の軋轢に震える、橙の慄然とした表情のみだった。

その日の夕飯も、やはり。

とても、悲しい味がした。

†神意† 7 赤蛮奇が来た!

「いやー、不思議だよなあ。妙に、変だなあ」

今泉影狼は、席に着いてからというものの延々と話し続ける赤蛮奇の、どこか間延びした口調に辟易としていた。

「姫もカレーを食べていたなんてな、私はそれを知らないのに、偶然、同じものを注文したわけだ。や、不思議だなあ。妙に、気が合うんだよなあ」

影狼は眉間にしわを寄せ、頬杖をつきそつぽを見ていた。

——それは、あんたが姫の好物がカレーだってこと、知ってただけのことでしょうに!

赤蛮奇の大袈裟な論調に、わかさぎ姫もまんざらでもなさそうに、ほんと、不思議ねえ、なんてはにかむものだから、影狼は救われなかった。

赤蛮奇とわかさぎ姫は殆どデキていた。影狼がそのことに気がついたのは約一年前。影狼はそれからずっと、二人の煮え切らないぐずぐずのジャムのような関係に、辟易とする日々を送っていた。

本人の居ない間に、影狼がわかさぎ姫の前で赤蛮奇の性格的問題を指摘し続けるのは、かつて影狼がわかさぎ姫に恋心を抱いていた頃の名残でもあった。されど赤蛮奇の間の悪さ、自由奔放さは確かにあまりある問題ではあったので、わかさぎ姫が赤蛮奇に抱くイメージを是正するために、というのもあった。

しかし、そんな赤蛮奇も影狼にとっては「仲の良い」友人だった。仲の良い友人が、自分なりのペースをもって歩む道程を真剣に阻むことは、「友人思い」の影狼には難しいことだった。

——でも、こんなてきとーろくろ首の、どこがいいのやら。

わかさぎ姫は遅れてやってきた間の悪い赤蛮奇を責めることも無く、ただひたすらに繰り出される赤蛮奇の「なんか、妙に気が合うよね」に、はにかみながら同調している。わかさぎ姫は多少、蚊帳の外に影狼を気遣うような素振りを見せてはいたが、当の影狼にとって、それが逆に辛辣でもあった。

影狼の瞳に映るわかさぎ姫の表情は、なんだかんだ言っても「まんざらではなさそう」だったし、それは「止めないでほしい」という表情にも見えた。実際、わかさぎ姫は、陽炎に申し訳ないのと、止めてほしくないのです、半分半分の心持ちだった。

なので影狼は二人の煮え切らないやり取りを聞き流す他出来ず、ただただ頬杖をつき、辟易とした面持ちで、右方の虚空を眺めていた。

——しかしそれにしても、ほんと。ムカムカしてくるわ。ばんきちやんのアプローチは相変わらずズレにズレまくってるし、わかさぎ姫はわかさぎ姫で、まんざらでもなさそうだし。とつとと付き合ってくれたなら、この惚気も多少マシな気分で聞けるんだけど。

赤蛮奇はカレーにパクつきながら、今度は「なんか、妙に目が合うようね」なんてことをわかさぎ姫に宣っている。わかさぎ姫はやはりまんざらではなかった。

爪切りで爪を切って、僅かに繋がった爪がぷらぷらとしたなら、誰だって、それを放っておくことはしない。影狼はいつそ、とつとと二匹と一匹”になつて仕舞えばいいと考えていた。

「いやあ、最近なんだか、目が合うんだよなあ。なんでだろうなあ」「ど、どうしてかしらねえ……不思議ねえ……」

——たんに、目が合うまで見つめてるからでしょ！

影狼が内心で二人のやり取りに突っ込みを入れた、その時だった。

「なあ影狼、なんでだと思っ？」

——あ？

それは、影狼にとって衝撃だった。赤蛮奇はこれまで影狼の眼前で、何度もこういつた惚気を展開してきたが、影狼に意見を求めたことはなかった。影狼はいつも蚊帳の外だったのだ。不意の「なんでだと思っ？」の一言で蚊帳の内側へ引き摺り込まれた影狼は、酷く狼狽した。

「なんで、って、そんなの……」

「……そんなの？」

わかさぎ姫はおずおずと、影狼に発言を促す。

ついにこの時がやってきた。赤蛮奇とわかさぎ姫は、いよいよもつ

て二人の関係の進展、そのきつかけを、今泉影狼に求めたのだ。

二人が影狼に求めている言葉を、影狼は理解していた。

もう、付き合ったらいいじゃない。二人はこの言葉を私に求めているのだ。

——だからってそれを私に言えっての！ たまったもんじやないわ！

影狼は憤った。この一年近く地獄のような惚気に耐え、挙句二人の関係の“裁定者”に祭り上げられるなど、影狼には堪えきれなかった。

「そんなの、私に分かるわけないでしょ」

……。

影狼が裁定者の鉄槌を下さなかったことにより、三人のテーブルの上は混沌で溢れかえった。

「うーん、影狼もわかんないなら、私にはやっぱり、わかんないんだなあ。姫、わかる？」

「私もちよつと、影狼ちゃんにわかんないなら、その、わかんないかも、しれない」

「だよなあ、影狼にわかんないんだもんなあ。わかるわけないよなあ」
「影狼ちゃんにわかんないなら、ねえ。その、わかるはず、ないものね……」

二人はこういう気持ちで喋っているんだろう。影狼には分からなかった。ただ影狼にわかるのは、二人は未だ、自身に二人の関係の裁定を委ねようとしていることのみだった。

「なあ影狼、やっぱりわかんないかな？ どう思う？」

「でも、ばんきちちゃん。影狼ちゃんはさつき、わかんないって……」

「いやでもさ、なんか、やっぱり分かってるんじゃないかなって思ってます、影狼なら」

「そ、そうなの？」

「うん、なんとなく。そんな気がする」

「いえ、でも……」

「……ああ！ もう！ いい加減付き合ったらいいじゃない！」

影狼は堪えきれず、裁定者の役割を果たし、その役割からとっとと解放されることを選んだ。

「……えっ、そんな、付き合うだなんて！　な、なあ姫。影狼はこんなこと言ってるけど……」

「か、影狼ちゃんたら、急に、何言い出すのよ、そんな、急に！」

「……。」

役割から解放された影狼は、スツとした心持ちで頬杖をつき、右方の虚空を見つめていた。

——やってたらいいわ。私は言うべきことは言ったし、もう、あとは二人で、勝手にやってたらいいわ。

「いやでも……姫。影狼の言う通り、ちよつと、ちよつとだけ付き合ってみるっていうのも、その、アリなんじゃないか」

「ば、ばんきちちゃん……」

「姫、その、どうだろう。ほんと、ちよつと、ちよつとだけ」

「……ちよつとだけって、どのくらい？」

「えっ、と、どうだろう。この秋いっぱいとか、そこらへん？　いやでも、もし、もし姫がいいなら……」

「ばんきちちゃん……」

こうして、赤蛮奇とわかさぎ姫は結ばれた。しかし、二人は気付いていなかった。今までの表面的な馴れ合いの中に埋没していたさまざまな問題。住む場所の違い。本質的な価値観の違い、それに伴う互いへの苛立ち。種族の違い。同性のジレンマ。現在、二人の思考にはただ、一条の光が在った。

愛さえあれば大丈夫。

これからの二人は、これからの二人にのみ作られていく。

——また、影狼にも二人の痴話喧嘩の都度、裁定者の役割を担わされる未来があったが、役割から解放されたばかりの、半ば全てがどうでもいいような、投げやりな気持ちで頬杖をつき欠伸を噛み殺す影狼には、そんな未来を、知る由もなかった。

†神意† 8 鈴仙は来なかった

雲ひとつ無い黒い空に、星が疎らに散らばっていた。閉店したレストランの外、その入り口そばに二人は立ち、黒く広い空に浮かぶ、美しい星々を眺めていた。

「星って、こんなに明るかったのね」

「……本当。きれいです」

薄く欠けた月の鈍い光よりも、散らばった星々の方がずっと明るい夜だった。咲夜と妖夢は今日、レストランの開店九時から閉店の二時まで、ずっと、鈴仙を待っていた。しかし、鈴仙は来なかった。なぜ、来ないのか。二人はその理由を考えることは、もう、しなかった。

外は少し肌寒く、妖夢は薄ら白い息を吐いた。

「……この季節になると、そろそろ冷えるわね」

咲夜は自身の両の手を擦り合わせながらも妖夢を気遣った。妖夢は「いえ、慣れてますから」と微笑んで、両掌を吐息で暖める。

気付けば、二人はまともに会話を交わせるようになっていた。互いに、それがいつからかは分からなかったが、二人の間に、気まずい沈黙はもう無い。

テーブルとドリンクバーとレストルームを歩き来することのみに終始した一日ではあったが、二人は、どこか心地よい疲労感に包まれていた。

妖夢は、幼い頃、主人とその友人達の宴会に初めて連れていかれた時のことを思い出す。酒などはまだ吞めず、大人達のよくわからない会話や、笑い声といった喧騒の中、眠気に耐え、やっと外に出たときの感覚が、妖夢の胸中を過ぎった。

「この夜の匂い。……なんだか、小さい頃のこと、思い出しますね」

同意を求められた咲夜は、微笑みながら頷き、応える。

「……ええ、そうね」

咲夜に、そんな経験はなかった。しかし、心地よい疲労のせい、か、咲夜は、自身にもそんな小さい頃の思い出があったような錯覚がしたのだ。

咲夜は星空を見上げる。そこには、やはり眩い星々が在った。星々の中に、咲夜は一瞬、鈴仙の顔を見たような気がしたが、それこそ本当に錯覚だった。それでも、咲夜は一つ確かなものを見つけた。それは、本当に僅かかもしれないが、魂魄妖夢との「友人の友人」以外の関係、そのとっかかりだった。

咲夜は薄く微笑みを浮かべながら、妖夢に問いかける。

「……ねえ。今度二人で、どこかに行かない？」

妖夢はゆつくりと、頷きながら、応える。

「……ちよつと、いやです」

妖夢はちよつといやだった。

咲夜も冷静になって考えると、同じくちよつといやだった。

何せ咲夜と妖夢には話題が無い。否、無いわけではないのだろう。ただ二人は、鈴仙ほどお喋りが得意ではなかった、と、いうのも少し違うかもしれない。二人に共通する話題はたしかに有った。

——鈴仙・優曇華院・イナバ。

二人にとって共通の話題といえば、それだった。けれど、咲夜と鈴仙が会う際は、当然、妖夢もいるし、妖夢と鈴仙が会った際にも、当然、咲夜がいた。互いに全容を把握している会話を交わすというのも中々妙な気がして、二人は鈴仙をダシに会話をすることは出来なかった。無論、鈴仙がなぜ来ないのか、なんて言葉を口に出すのは、その何倍も有り得ないことだった。

「じゃあ、また、鈴仙を待ちましょうか」

「はい。……今度、鈴仙さんが声をかけてくれるのは、いつになるのでしょうかね」

「……さあ、いつになることやら」

二人はまた、ふふ、と笑った。

「それじゃ、帰りましょうか。一人で帰れる？」

「はい、大丈夫です。咲夜さんこそ、風邪をひかないよう、お大事に」
では、と妖夢がレストランを去るのを見送って、咲夜も歩き始める。それは静かな夜だった。人の気配も無ければ、風も無い。ただ少しだけひんやりと、空気が肺を湿らせた。

帰り道、咲夜と妖夢は今日を辿った。不思議と、悪い気分ではなかった。ただ少しだけ、妙だった。

——どうしてこうも、清々しい気分なのか。

二人にとって、それだけが妙だった。されど二人はそのまま、妙に清々しい気分のまま、家路を辿るのだった。

鈴仙は来なかった。

朝、目が覚めると休日は終わり、咲夜と妖夢は瞬く間に日常に戻った。

咲夜は吸血鬼の主人や、降り積もるタスクや埃の山々と。

妖夢は腹ぺこの主人や、積み重なっていく食器や食材の山々と。

二人は、小さな幸福と、小さな不仕合わせが星のように散りばめられた日常を、ゆっくりと、また、忙しく、送り続けた。そう。

鈴仙を、待ちながら。

†神意† 9 (了) 神意の雨

夜半。

昼から降り続く陰鬱な雨はやおらその勢いを増し、草木生い茂る森の中を湿らせていた。

静かな森の中、雨はじんわりと、森の静寂を縁取っている。森の中には一つ、柔らかな灯りが灯っていた。それは屋台の灯りだった。屋台では、網の上に八目鰻が焼かれていたが、煙と香りは雨に溶け、小さな灯りだけが屋台の輪郭を曖昧に縁取っていた。

そんな、柔らかく心許ない灯りの中に、二つの影が在った。

影は幾分情緒無く、朗らかに会話を交わしていた。

「なんだ。貴女、神様じゃなかったのね」

「そう、私はただの貧乏神。あなたの探してる神様とは、ちよつと違つたかもしれない」

古明地こいしと依神紫苑。二人は何度かの雨宿りを経て、ようやつと、腰の落ち着ける屋台を見つけ、言葉を交わしていた。

ようやく「神様のおはなし」が聞ける。期待に胸を躍らせたこいしが紫苑から告げられたのは、「あのときはちよつとどうかしたの、ごめんね」系の、謝罪とも、開き直りともつかぬ文句だった。やつと神様を見つけた、と胸を躍らせていたこいしにとって辛辣な貧乏神のカミングアウトは、こいしを子供らしく憤らせるには十分だった。

「あーあ。こいし、騙されたんだ。全部を決めてる神様だ、つて言うから、ご飯だつて食べさせてあげたのに」

「ごめんね」

「お酒だつて、のませてあげたのに」

「ごめん」

八目鰻と日本酒で空腹を満たして心の落ち着いた紫苑は、日中こいしと出会った際の自身の言動を、多少後悔していた。

「あーあ。やっぱり、神様なんていないのかな……」

紫苑は思うところがあつた。

「神様つてさ、いないから、いるんじゃないかな」

「……よくわかんない」

紫苑の思うところはこいしには伝わらず、ただただこいしの遣る瀬無さを助長させるのみだった。

そして一人。

二人のやり取りに憤つてる者が在った。

——早く帰ってくれないかな。

屋台の店主、ミスティア・ローレイである。

ミスティアは今日の雨天に客足の減ることを確信し、暮れもそこそこ店を閉めようと考えていた。そこにやってきたのが古明地こいし、依神紫苑の二人だった。それから二人はこの夜中まで居座っていた。ミスティアとしてはたまったものではない。

ミスティアも何もしなかったわけではないが、お客さん相手に「帰ってくれ」と言えるほど豪胆ではないミスティアにできたことといえば、二人分の茶漬けを提供することぐらいだった。茶漬けを完食した二人は「しよっぱいものを食べたなら甘いものが食べたくなる」と言い、ミスティアに八橋を要求した。ミスティアは引いた。

しかし、何も二人が普通のお客で、普通の会話をするのであればミスティアもそういう手段を講じることもなかっただろう。ミスティアに茶漬けを出させる要因となったのは二人の会話だった。

——神様がどうのこうのって、馬鹿げてる！

ミスティアは神様が嫌いだった。原因は間違いなくかつてミスティアが組んでいたバンド、その解散理由にあった。バンドメンバーが宗教にハマったのだ。ライブ当日、読経があるから、と土壇場キャンセルされたことが、解散の直接的な原因となった。

「その、神様なんてみつけて、どうするつもり？」

紫苑がこいしに問いかける。

「……お姉ちゃんに、カレーを作ってもらおうの」

「そんなの、神様じゃなくてそのお姉ちゃんに頼んだらいいのに。私だって、妹に頼まれたなら、いくらでも作るもの。……お金さえあれば」

「帰れないんだもん」

「どうして?」

「だって、こんなに雨が、降ってるもん」

屋台の侘しい灯りの外で、雨は既に泥濘と化した地面を、また、草木を、打ち続けている。

「雨が止んでから、帰ったらいいじゃない」

「帰れないの!」

「……どうして?」

「……帰りたく、ないんだもん」

「……そう」

三人は神を探していた。

古明地こいしは、なんでも出来る、雨だって止ませられる、絶対的な神を。

依神紫苑は、自身の貧困に、不可逆的なケリをつけてくれる神を。

ミスティア・ローレイは、二人を帰してくれる神、……かつてのバンドメンバーとの仲を再び取り持ってくれる神を。

しかし、屋台の灯りの外側では肅々と、雨が降り続けるのみだった。

すみれのなつ（全5話 主演：宇佐見董子、東風谷早苗）

すみれこのなつ 1

「董子さん。今日、うちに泊まっていきませんか」

私は夏休みの間、その殆どを眠って過ごしていた。

特に傾眠の傾向があるというわけでもなければ、通っている学校にも友人らしき人物もある。

しかし、冷房の効いた部屋の中、炎天下に焦がされた路傍を窓から見やると、どうにも外出する気が起きず、私は忽ち眠ってしまうのだった。

そんなわけで、私は炎天下真つ盛りの幻想郷、守屋神社に居る。

何か目的があつて守屋神社を訪れたわけではなく、寝て、目が覚めたらここに居たというわけだ。

守屋神社の境内に、夏の燦々とした陽光が照り付ける。

私の眼前には妙に照れ臭そうな顔をした、東風谷早苗が箒を握りしめ立っていた。

「今日から数日間、諏訪子様も神奈子様も神社に居ないんです。何でも新開発の打ち合わせで、河童さんたちのところへ行くとか……」

わたし、さみしいんです。とでも言いたげな上目遣いで私に「泊まっていけないか」と懇願する早苗に、私は困惑していた。

私が幻想郷で目が覚める際、目が覚めると誰かと話をしている最中だった。なんてことがよくある。

それというのも、眠りにつき、幻想郷に来てからの数十分の間、私の意識は曖昧なのである。

気がつくと妖精達と共に紅い館を襲撃する計画が出来上がったことがあつた。

目が覚めた私は困惑し、なぜそんな計画の渦中に自分がいるのかをリーダー格の妖精に尋ねた。妖精曰く「そちらからノリノリで話しかけてきた」とのことだった。

それから、眠りにつき、幻想郷にやってきては夢現に妄言を撒き散らす自分の姿を時たま想像してはゾツとするようになった。

気をつけようがないことではあるが、気をつけようと、そう考えていたのだが。

今回のこれは、一体どういうことだろう。向こうの茹だるような暑さを避けて眠ってみると、やはり私の体には暑い日差しが照りつけ、加えて、熱い視線までもが私を焦がしている。

寝ても覚めても、という慣用句が何となく私の頭に浮かんだ。

「あの、董子さん。もしかして嫌ですか……？ やっぱり、お泊まりなんて急過ぎますか……？」

東風谷早苗の手に握られた箒を見て、早苗は恐らく境内の掃除をしていたであろうことは想像に易かった。ああ、私はそんな掃除中の早苗に、何を言ってしまったのだろう。

私はやおら二枚目の仮面を下げて早苗を口説く自分の姿を想像して、首筋が寒くなるのを感じた。

面識だつて、あんまりないのに。

恥ずかしさと浮かばぬ返答でしどろもどろになる頭の中の混沌は、あの、や、そのう、や、ええと、という形になって私の口から零れだした。

「董子さん。嫌、ですか？」

「えっと、そのう……」

「嫌、ですか……？」

「う」

「う、伺わせて、頂きます……」

私は殆ど寝惚けたままに、そう答えてしまった。というわりも、答えさせられてしまった、というのが正しいか。

私が早苗の誘いを承諾すると、早苗の妙にしおらしい態度は一変した。早苗は途端に可笑しそうに笑い出し、私に謝罪するのだった。

「ごめんなさい。掃除をしていたら董子さんの姿が見えたものだから、声をかけてみたんですけど、董子さんったら、ぼーっとしてるもんだから少しからかつちやいました」

ふふふ、と笑いながら、早苗は話す。

ここに来て漸く私の寝惚けた頭も次第に冴えてきて、降り注ぐ陽光の暑さや、疎らに雲の泳ぐ空の青いことを鮮明に知覚し始めたのだ。た。

ああ、東風谷早苗は起き抜けの私をからかっていたのか。まあ、急に境内に現れてはぽけーつとしている人間をからかいたくなるのも分からないではない。ましてや早苗は「現人神」なのらしい。神が人をからかうのも、うん。道理だろう(？)。

ともかく、此方へきたばかりの夢現の私が妙な事を口走ったりしていないようで、安心した。

そもそも、東風谷早苗とはあまり面識がなかった。完全に無い、というわけではないが、数回話したことがある程度で、友人、と呼ぶには憚られる程度の関係だった。実際早苗について私が知っていることと言えば、先ず早苗が現人神であること。次に、早苗は元々「此方側の世界」の学生だったということぐらいなものだ。正直、心中で東風谷早苗を想像するとき、敬称を付けずに彼女の名前を浮かべると後ろめたさを感じる程だ。

私にとって東風谷早苗、さんは、そのくらい微妙な立ち位置に立っている人物だった。

人物というより、神仏というか(？)。

「いやあ、早苗……さんは私をからかっていたんですねー。いやあ、早苗……さんも人がわるいなあ」

もつと正直に云えば、私は早苗、さんが苦手なのだと思う。

早苗さんは、一見私と同一年くらいに見えるが、やはり明確に幻想郷に生きる人物で、住む世界が違って。しかし、元々は此方側に居て、私と同じように学生生活を送っていたという共通項が、何だか妙に引つかかるのだ。

時に、幻想郷には私と同じくらいの年齢に見える人物が多い。

その中でも、霧雨魔理沙や博麗霊夢とは、それなりの友好関係にあると自負している。

タメ口で話せるし。霊夢さんは、たまに霊夢さん、だけど。

私が魔理沙や霊夢さんと博麗神社で談笑していると、偶に早苗さんが神社に訪れることがある。

魔理沙や霊夢さんとの「お喋り」を早苗さんに聞かれると、私は不思議と「友人と喋っているところを親に聞かれた」ような気分になるのだった。

やはり、元々は同じ世界で暮らしていたという共通項が、私をそんな気持ちにさせるのだろう。

そうして、実際に早苗さんと話してみると、敬語を使うべきか、タメ口で話すべきか、迷ってしまうのだ。なんだか、どちらも失礼な気がしてしまうし、なんにしたって、何処か面映さを感じるというわけである。

早苗さんはふふふ、と笑いながら、私の二の矢を待っている様子だった。

幸い、早苗さんは私をからかってみただけのことで、泊まりがどうこうというのは本意ではないのだろう。

こんな気まずい空間からは、さつと離れてしまおうに限る。

そうだ。人里の茶店に、かき氷でも食べに行こう。

「ええと、じゃあ、私はこれで……」

早苗さんは少し驚いた表情を浮かべたが、直ぐに和かに微笑むのだった。

「お昼はどこかに用事があるんですね。わかりました。じゃあ、晩御飯を作って待ってますから、それまでには帰って来てくださいね」

ううむ。

「私、実は楽しみだったんですよ。董子さんとは何れもつと仲良くなりたいなーと思ってて。それが今日偶然、神奈子様も諏訪子様も外出する今日に、董子さんが神社に来てくれて。これは神の思し召しに違いありませんね」

ふふふ、と笑いながら、早苗さんが話す。

どうやら今日、私はやはり守屋神社に泊まるらしい。

「でも、少し不安だったんです。董子さん、私と話す時いつも少しよそよそしいから……。でもよかった。夜が楽しみです。晩御飯、気合い

入れて作っちゃいますから、お腹空かして帰って来てくださいね」

あはは、と笑いながら、早苗さんは言った。

最早断るには遅すぎることを理解した私は、観念して守屋神社への宿泊を覚悟したのだった。

「はいー夕飯までには戻ります。それじゃあ！」

私はとりあえず、人里へ出て、夜、守屋神社での立ち回りについての作戦を立てることにした。

すみれこのなつ 2

私は溶けていくかき氷と、里の道に面した椅子に座り談笑する少女達を眺めながら、ぼんやりと早苗さんのことを考えていた。

早苗さん……。早苗さん……。早苗……。ちゃん。

早苗、さんの云う「よそよそしい」とは、恐らく私の早苗さんに対して使う敬語が原因で出て来た言葉だろう。

しかしながら、今更早苗さんに対して急にタメ口で話すなんて、私にはおおよほ不可能だ。

魔理沙のようなタイプ。謂わば幻想郷の住人然としたタイプの相手に対しては割合自然体で話せるのだが、どうも、早苗さんに対して同じようにするのは気が引ける。

何というか、そんなはずはないのに、私自身のことを色々知られてしまっているような、そんな気がして。

私の通っている学校。そこでの私の評価は「比較のおとなしい子」というものだった。あり得ないことだが、早苗さんに、そんな「おとなしい子」の宇佐見董子が、なんだ、流暢に喋るじゃないか。なんて思われてしまうことを、私は恐れている。

私は自分が、おとなしい子であるとはあまり思っていない。どちらかといえば、繊細な感情等に対して頓着しない方だと考える。

それはもちろん、元来持ち合わせた能力のおかげでもあるが、同時に、私が周囲から押される「おとなしい子」の烙印の原因はそこにあつた。

幼い頃は周りの子と遜色ないほどに「お喋り」もできた。しかし様々な経験を経て、私は人間関係というものに対して、保守的な考えを抱くようになった。人間関係を保守するという考えに希薄になった、と言つてもいい。

それでも私は、見知らぬ人に道を尋ねたりするのは得意だ。道を聞くついでに、ちよつとした雑談だつて出来る。近状とか、天気についてとか。

ふと、道に面した椅子に座り、談笑している少女達の会話が耳につ

いた。どうも、自分たちは「ラッキー」だ、ということについて話しているらしい。

少女達が何について話しているか、私は一つ思い当たりがあった。恐らくは、この溶けかけのかき氷のことだろう。

守屋神社から里に出て、しばらく歩いていると『ふらつぺ、あります』という旗を見つけ、この茶店に入った。

お店の人に、フラツペ一つ、と注文すると「お嬢さんは運がいいね」と言われた。

フラツペ、と聞いて注文し、実際出て来たのは氷を砕いて甘露水かけたもの、まあ、かき氷だった。

幻想郷のフラツペ感が分からないのでそこは無視して、自分がどう運がいいのかを店の人に尋ねた。

店の人が言うには、夏の暑い日、里に幾つかある貯水槽のようなものがいたずらに凍りついていることがあるらしい。

そう言う日以外はこの「ふらつぺ」を出すのは多少困難で、たまたまその日に当たった私は運がいい、ということらしい。

少女達の会話を聞き流しながら、私は件のリーダー格の妖精の顔を思い浮かべた。

あの妖精の名前はなんと叫んだか、確か涼しそうな名前をしていた。

ちる……？チル……。チル……。ド。
ううむ。

私は他愛もない会話に盛り上がる少女らを尻目に、殆ど溶けたかき氷を流し込み、店を出ることに決めた。

かき氷を流し込んだせいで、冷たさに少し怪しくなった呂律でお店の人に会計と礼を済ませ、私は人里の道を歩き始めた。

それにしても、あの妖精はなんと謂ったか。

チル……。チル……。チル……。ド。

最後の一文字が「ど」では無いことに薄々感づいていた私だったが、「ど」の付くほど暑い陽射しに、妖精の名前を思い出すための唯一のつかかりである「涼しげな名前」という連想が、私の舌を「ど

“の字に貼り付けるのだった。私はふと、幼い頃、暑さのあまりに冷凍庫から氷を取り出し頬張ったところ、氷が舌に張り付いた事を思い出した(？)。

ううむ。それにしても。

ちる……。チル……。チル……。ド。

私はしばらくの間むにやむにやと、思い出せない妖精の名前を、冷えた舌の上で転がしていた。

すみれこのなつ 3

しばらく歩いて、私は妖精の名前を自力で思い出す事を諦め、五十音順に当てはめていこうと思いついた頃だ。夕行が終わりナ行に差し掛かった時、ふと空を見上げると、日が暮れ始めていることに気がついた。空はにわかにはその青色に朱を差していた。

はて、私が眠ったのは何時頃だったか。確か昨夜は徹夜で3Dモデリングの作業をして……。

気がつくとも正午をまわっていて、お腹が減ったことに気がついて、食べて、シャワー浴びて、寝たんだ。

ああ、そんなことはどうでもいい。

陽が沈むとなると、私は守屋神社に帰らなければならない。

結局里をふらついただけで、早苗、さんへの対策を何も考えていなかった。

結局、私はどうすればいいのだろう。さして親しくない早苗さんと二人きりで、何を話せばいいのだろう。

そんな時、私の視界に里の酒屋が飛び込んで来た。

これだ。と私は思った。

幻想郷の住人といえばこれだ。酒だ。幻想郷の住人は皆酒浸りなのだ。

私は酒屋に飛び込み、店でも一等高い酒を買った。金ならあった。

香霖堂の店主に適当なものを遣って、謝礼にとせしめた金がそれなりに。

私は半ばヤケクソになって、その金であれも、これも、と、多種多様な酒を購入した。

これだけあれば、早苗さんとの会話の話題にも事欠くまい。

私自身アルコールを呑んだことはないが、それは飲むだけで会話の弾むという代物らしい。

私はこれだけ買い込めば文句はあるまい、と店を出た。

さあ行こう。いざ行こう。守屋神社へ！

私は不自然に息を巻いて守屋神社へ向かうのだった。

しかしその矢先、里の家々の軒先から漂う匂いが、私の鼻腔をくすぐった。

それは、なんだか懐かしい匂いだった。

玉ねぎやら、じゃがいもやら、そんな類の野菜を刻んでいるときの匂い。

瞬間、私はひどくノスタルジックな気持ちになり、先程までの対早苗さんの熱は急激に冷めていくのであった。

ああ、早苗さん、夕飯作ってくれてるって言ってたな。

なんだかんだ、少し楽しみになって来たかも。

いや、でもやっぱり不安だな。お酒、いっぱい買っちゃったけど、役に立つのかな。少なくとも、二人で飲む量じゃないけど。

ふわふわと、守屋神社への帰路を辿っていると、在ることを思い出した。

ああ、*ッノ*だ。

日中私を悩ませた妖精の名前の最後の文字を、思い出したのだった。

守屋神社が見えてくる頃、空は夕焼けを通り越していて、紺色が橙色を、今にも押し潰してしまいそうだった。

戸の前までたどり着くと、美味しそうな煮付けの匂いが鼻腔をくすぐった。

魚かな、と、私は思った。

すみれこのなつ 4

守屋神社に入るなり、買って来たお酒は早苗さんに取り上げられてしまった。

高校生がお酒をかうなんて。と、少し怒られた。

でも、せっかくだから、と早苗さんが夕飯の際に一杯だけ、とお猪口を用意してくれた。

晩御飯は、思った通り魚の煮付けだった。

魚はカレイだった。それも中々上等なナメタガレイらしかった。

煮付けには刻み生姜とシシトウが添えられていて、とても美味しかった。

他にも汁物や漬物等、副菜にも事欠かない食卓だったことは言うまでもない。

私は殆ど一口食べるごとに、美味しいとか、それに与する言葉を早苗さんに述べたが、早苗さんは終始笑って応えてくれた。

特に株や胡瓜等の漬物が絶品で、それを早苗さんに伝えると、早苗さんは少し照れたような表情で、漬物を漬ける事の上手い訳を弁明し始めた。

元女子高生らしくないでしょう。なんて言って。

それが私には可笑しくて、つつい笑ってしまった。

食事が終わると、早苗さんがお風呂まで用意してくれていた。

流石に一番風呂は申し訳ないと思ったが、早苗さんに言われるがまま頂いてしまった。

お風呂に入る前、もし良かったら一緒入りますか？なんて言われたけど、それも流石に遠慮した。

お風呂は神様が入るものだけあって、中々に立派だった。

先ず露天なのだ。

早苗さん曰く、二柱の内の片方が無理を言って作ったものらしい。

聞けば、神社の中につーのお風呂もあるらしく、わざわざ手間のかかる露天風呂を用意してもらったことを申し訳なく感じた。

早苗さんは、お客さんが来るなら当然です。なんて言ってたけど。

お風呂を上がると、寝巻きまで用意されていた。用意されていたのは、所謂パジャマだった。

この辺りで、私はいよいよ早苗さんが今日私を誘った意図が読めて来た。

現在、早苗さんがお風呂からあがるのを寝室で待っている。

昼にここに来たばかりの私だったら、私は或いはこれから襲われてしまうのではないか、などと邪推したかもしれないが、今の私の頭には、そんな考えは全く浮かばなかった。

それと言うのも、お風呂からあがった早苗さんは、恐らく私に用意されてものと似たパジャマを着用してくるであろう確信があったのだ。

早苗さんは、多分『お泊まり会』がしたいのだろう。普通の女子高生がするような『お泊まり会』を。

確証はないが、私はそう確信していた。

早苗さんと話していて、気が付いたこと。

早苗さんは、ふふふ、と笑う。

落ち着いた笑い方。早苗さんに対して、私が思わず敬称を付けずにはいられなくなる理由の一つが、この落ち着いた笑い方だ。

そして、早苗さんは、あはは、とも笑う。

快活で、少女らしい笑い方。

早苗さんに対して、私が敬称を付けるのを思わずためらってしまう理由の一つが、この快活な笑い方だった。

霊夢さんから、早苗さんはかなり呑む方と聞いていたけど、今日は口をつける程度にしか飲まなかったり。

パジャマなんて、用意されてたり。

私の中の根拠はそれくらいだ。

しかし、もし本当に早苗さんが『女子高生らしいお泊まり会』を望んでいたとして、私はそれに応えられる自信があまりなかった。

私がそれを望まないわけではないし、敬語だって、もうきっかけがあればやめられる。多分。

でも、私には経験がないのだ。

小学生の頃、修学旅行には行つたが、中学生の時は行かなかつた。それからだつて、そういうものには参加しなかつた。

そういう催しが嫌いなわけではない。むしろ好きな方だろう。しかし、私は『普通の女子高生』からは些かかけ離れている女子高生である。

そんな私に、早苗さんが望む普通のお泊まり会を演出することができるのだろうか。

「お待たせしました！見てください、パールックですよ。いやあ、やってみたかつたんですよ、パジャマパーティー」

私の不安を他所に、いやに上機嫌な早苗さんが寢室に訪れた。

思考に耽つていた私は、少しレスポンスが遅れてしまい、布団の上に座つたまま、不自然に硬直してしまつた。

「あれあれ？董子さん、もしかしてもう眠たいんですか？」

「いや、そんなことは、ありませんけども」

思わず変な語調になつてしまつた。

「それは良かったです。いえ、このパジャマなんですけど。いつかこんな日が来ると思つてこつちに来て以来大事に保管しておいたんですよ。向こうでやり残した唯一のことが『お泊まり会』でして、お泊まり会をするならパジャマパーティーにしようつて決めてたんですよ」

「いえ、友達がいなかつたわけじゃないんですよ。女子高生でしたからね、バリバリの。写メだつてめちやくちやに送りあつてましたよ。ただ、お泊まり会だけはなかなか機会に恵まれず……」

上機嫌に喋り続ける早苗さんを他所に、私は予想が的中したこと少し面食らつていた。

ああどうしよう。私はそんなバリバリの女子高生然としたお泊まり会を知らない。

「あれー？董子さん。やつぱり眠たいんじゃないですか？それとも、お泊まり会、好きじゃありませんか？」

あははーと笑いながら、早苗さんが私に尋ねる。

「そんなことはないです、けど」

夕飯を食べていた時のように、普通に話せばいいのだろうが、先ほどより幾分か上機嫌な早苗さんに面食らってしまったて、どうも上手くない。

「そうですね。女子高生が、嫌いなわけありませんもんね。お泊まり会」

「となると、董子さんが無口な原因は」

「あんまりお泊まり会をしたことがない！違いますか？」

「ずばり、言われてしまった。」

「はーん。でも大丈夫ですよ。パジャマパーティーマスターの私がいますから」

早苗さんがふふん、と笑って語る。私はその語気に、だんだんと気が楽になるのを感じた。

よし、パジャマパーティーマスターに質問してみよう。

「はい。私はパジャマパーティー初心者であります。早苗さん、パジャマパーティーとはどういうものなのでしょう」

言ってみると、少し楽しかった。本当はお泊まり会とパジャマパーティーの違いや、お泊まり会の機会に恵まれなかった早苗さんがどうしてパジャマパーティーマスターなのか、そこらへんについて尋ねたかったが、まずはジャブを打つことにした。

「んー、そうですね。まずは敬語をやめましょう！ね、董子ちゃん。ずっと思ってたんですよ。私たち、同い年くらいなのに、変じゃないですか」

「はい。私もそう思っていました。しかしマスターは漬物や煮付けなど、ものを漬けるのが上手であります」

「それは関係ないじゃないですか！それに、まだ敬語だし」

早苗さんは照れ笑いを浮かべながら言った。

尤もである、と私は思った。

それと、これは、楽しいかもしれない、と思った。

「じゃあまず、さなえちゃんって呼んでみてくださいよ」
「さなえちゃん。」

今ならすんなり言えそうだ。

「早苗……」

あれ。なんか。

早苗、ちゃんが私を悪戯っばい目付きで見つめてる。

「早苗……」

ああ。私は気付いた。

これはなかなか、恥ずかしいぞ。

「あ、ごめんちよつと無理っばい」

「えー」

早苗、ちゃんがわざとらしく落胆してみせる。

「じゃあ、呼び捨てでいいですよ」

呼び捨てでもまだ恥ずかしいかもしれない。

面と向かって呼び方を変えるって、こんなに恥ずかしいのか。

私は小、中学生の頃同級生だった男子のことを思い出した。

その男子は小学生の頃は自身の父親を「パパ」と呼んでいたはずだが、中学生になると、その呼称はしれつと「おやじ」に変わっていて、私はそれに違和感を抱いたものである。

そのことを件の男子に直接指摘したら、少し嫌われてしまった。

しかし今この状況になつては、あの男子の厚顔さを見習いたいものである。

しれつといこう。しれつと。

「ああ、面と向かって言われると恥ずかしいよ。そのうち勝手にやめるから、なんか他の話しない？」

「あ、タメ口だ」

一秒しないうちに指摘されてしまった。恥ずかしい。

「あはは。照れてますね董子ちゃん。他の話ですか。うーん。董子ちゃんは普段友達とどんな話をするんですか？」

マスター、意外と主体性がないぞ。

ふふん、しかし勢いに乗った私には当然次の話題が浮かんでいる。

女子高生、お泊まり会といえば、やはり。

「教師の悪口とかは？」

「えー」

思ったより良い反応が得られなかった。

学校の中では割合ポピュラーに親しまれてる話題を選んだつもりだったのに。

「もつと、こう、綺麗な話をしましょうよ。好きな男の子の話とか」「えー」

「董子ちゃんはいないんですか、好きな男の子」

生憎、私には好きな男子なんて居なかった。

しかしながら、同級生の話を聞いている限りでは、好きな相手一人選ぶにも色々と問題があるらしい。例えば、クラスの中心的な女子が好意を抱いてる男子と被らないように自分の好きな男子を選ばなければならぬとか。人気の男子に声をかけようものならば、抜け駆けとみなされ村八分の憂き目に逢うとか。

好きな異性の話とは、そういうケレン味を含んだ話題であることを、私は知っていた。

それを考えれば、教師の悪口の方がよっぽどピュアな話だと私は思う。

けれど、どうしたものか。ここで、いないかな、なんて言うものなら、折角盛り上がり始めたこの『お泊まり会』が白けてしまうのではないか。

「そりゃあ、私も女子高生の端くれですから。憧れの男子の一人や二人、いるけどね」

「えー、本当？ね、ね。どんな人なんですか」

えつとね、と、私は架空の男子像をでっち上げつつ、早苗、に話して聞かせた。

先ずは、一学年上の先輩ということにしてみた。

それから、その先輩の容姿等について言及してみると、早苗はきやーきやーとわざとらしくはしゃいで見せるのだった。

作り話を聞かせていることには心が痛んだが、はしやく早苗の顔を見ると、なんだか嬉しいような照れくさいような気持ちになった。

私に仲のいい同級生がいたのなら、こんな風に笑い合うこともあったのだろうと、なんとはなしに思った。

「じゃあその先輩は何部だったんですか？あと名前、名前も教えてください
ださいよう」

早苗は目を輝かせて聞いてくる。
しまった。名前までは考えていなかった。

「ええと、サッカー部だったかな。マラドーナが好きっていつてた気が
する」

私は名前についての質問を無視して答えた。

すると、早苗の目の輝きが、俄かに滲んだような、そんな気がした。
まずい、作り話だと勘付かれてしまったかも。

「……マラドーナ、ですか？」

「う、うん。マラドーナが好きって、いつてた気がするけど」

「あの人、私と同じなんですよね」

「え？」

「現人神なんですよ、あの人」

初耳だった。

「えっと、それはどういう」

「やっぱり、まだ人気なんですか？マラドーナ」

「う、うん。人気だと思うけど」

「そうですか。まだ人気なんですネ、マラドーナ」

私はマラドーナについて詳しくは知らないが、何やら早苗はマラドーナをライバル視しているらしい。ああ、私は、どうしてよりもよってマラドーナをチョイスしてしまったのだろう。

それにしても、一塊のサッカー選手が現人神とは、一体どういうことなのか。私はポケットのスマートフォンを弄りたい衝動に駆られたが、幻想郷でネットは使えないし、何より人と話している時に携帯を弄る事に抵抗があったので、その衝動をぐっと堪えた。

「じゃ、じゃあさ。早苗は誰か憧れの人いないの？早苗の話も聞きた
いな」

「えー。私ですか？それはもちろん向こうにいた時はいましたけど
……」

「こつちにはいないの？里のアイドル！みたいな人はさ」

「うーん。里の中で人気な青年も、いるにはいるんですけどねえ。どうも、身近さに欠けるといいいますか」

言われてみればそうだ。

早苗はここでは現人神で、里の人間は早苗にとって、基本的には「お客さん」なのだ。

どちらかといえば、アイドルは早苗の方だった。

「んー、そっか。じゃあ身近な男の人といえば……」
「うーん」

早苗と一緒にあって暫し思索してみたが、この幻想郷においてそれらしい身近な青年ら思い浮かばなかった。

苦肉の策で香霖堂の店主の名前を出してみたところ、憧れの異性の話をしているときにその名前が出てくる童子ちゃんはおかしい、と引かれた。

それから暫く好みの異性の話をして盛り上がった。

他にも色んな話をした。好きな食べ物の話から、苦手だった教師の話など。

ときに、私は幻想郷の女の子は全員同性愛者だと勘違いしていたことを打ち明けた。昼間、早苗に泊まらないかと誘われたときに少し身構えてしまったことと合わせて話すと、早苗はお腹を抱えて笑っていた。

それから、早苗と私は布団に入って、現代の「写メール」の文化について話したりしているうちに、外の世界の新しい技術について話した。

最新の映画館では、映像に合わせて匂いがしたり、席が揺れたり、水が飛んできたりすることを話した。

その中で3D映画についての話をしたが、早苗はなかなか信じなかった。

飛び出す映画、というアバウトな私の説明が良くなかったのだと思いい、再度、専用の眼鏡をかけると、映像が飛び出して見える「ぐらいなものだと説明すると、早苗は、それならわかります。青と赤のやつですよね。なんて言っていたが、私は逆に、その青と赤のやつ、がピ

ンとこなかった。

それから、互いの好きな映画の話になった。早苗が「幽幻道士」が好き、なんて言うものだから、私は思わず「あんな映画」という形容と共に驚きを口に出してしまった。

しかしそれについては早苗はそれほど気分を害さなかったようで、バツが悪そうに微笑むばかりだった。

それから幽幻道士に出てくる好きなキャラクターについて話し合った。早苗はデブ署長が好きらしい。私はフルメタルキョングー。そんな他愛もない話で盛り上がっていると、次第に私の体を心地よい眠気が襲い始めた。

「でもやっぱり、「あんな映画」ですよ」

ふふふ、と笑いながら早苗は言った。

「まあ、「あんな映画」だよ」

私も笑いながら、相槌を打った。

「少し眠たくなってきちゃいました」

「うん。私も」

「じゃあそろそろ。電気、消しますね」

私が消すよ、と口にする前に、早苗は立ち上がって、紐を引っ張って電気を落とした。

忽ち部屋は真っ暗になって、微かに差し込む月の光が寢室の静寂を縁取った。

……。

すみれこのなつ 5 (了)

不意に、眠たげな口調で早苗が言った。

「董子さん。今日はありがとうございます。私のわがままに付き合ってもらっちゃって」

ん、と私は答える。本当は、私がお世話になった一日なのだから、色々返答したかったんだけど、なんだかそれ以上は気が引けて。

「今日はとっても楽しかったです。それで、今、久し振りに本当に寂しくて、なんだか嬉しいんです」

早苗は、やはりふふふ、と笑いながら言った。

「寂しくて、嬉しいの？」

「えへへ。なんか、そうなんです。でも、いつも寂しいのは、もちろん嫌です」

「そりゃあ、そうだよ。誰だって」

「でも、私は普段、ほんとに幸せなんです」

「幻想郷に来る前は、不安だったんですけどね。そんな私の不安を他所に、こっちはとっても賑やかで、楽しくて。……でも、時々戻りたくなることもあります。そんなときは、やっぱりちよつと寂しいけど、でも、ちよつとなんです。ほんの、ちよつとだけ」

「神奈子さまが居て、諏訪子さまがいて、霊夢さんや、魔理沙さんがいて。忙しくないくらい賑やかなのに、どこかゆったりした日々が流れていく。ああきつと、ここにいれば、こんな日がいつまでも続いていくんだなあつて、思うんです」

「そう思うと、寂しきなんて、ちよつとの間に、何処かに消えてしまうんです。それがまた、少し寂しいんですけどね」

寝室は、夏にしては涼しかった。少し開けた窓から、そよそよと風がそよぐ。

「そっか」

……。

「……私が、そつちにいた頃。高校生だった頃は、寂しさつて、もつと痛切なものだった気がするんです」

私は少し、胸が締め付けられるのを感じた。

「幻想郷で暮らしていると、寂しきなんて、ほんとにちっぽけに感じられるんです。寂しくなっても、ほんの一瞬。寂しきなんて、すぐに押し流されてしまうんです。そのくらい、ここは賑やかで、楽しくて。向こうにいた時のことなんて、忘れてしまいそうになるくらい」

「でも、いまはほんとに寂しいです。幸せで、寂しいです」
そして少しだけ、いじわるだなあ、と思った。

「何がそんなに寂しいのさ」

分かってたけど、私も少し、仕返ししてみた。

「おやすみなさいを言うのが、です」
分かってるってば。

「でも、言わないまま眠っちゃうのも、それはそれで寂しいかもよ」

「それは、そうかもしれないですね」

それでもおやすみなさいを言わない早苗が、私はなんだかいじらしくなってきた。

気がつくとき、私は早苗と同じ布団に入っているのだった。

布団の中は、とても暖かくて、なんだかすぐくさらさらしていた。

「董子さん。明日はゆっくり眠って下さいね。私が朝ごはんを用意しておきますから」

早苗は殆ど眠りそうになりながら、そんな事を言う。

ああ、やっぱり早苗さんだなあ。なんだか、明日起きた後、ふつーに敬語使っちゃいそうな感じ。

そんなことを考えると、私は少し寂しくなった。

でもいいや。布団、暖かいし、眠たいし。

「ほんと？楽しみにしてる」

「はい。楽しみに、しててくださいね。気合い入れて、作っちゃいますから」

そう言って、早苗は寝息を立て始めるのだった。

結局、おやすみなさいは言えなかったけど、でもいいや。

私もそろそろ、眠ってしまおう。

朝ごはん、楽しみだな。

…
…

目がさめると、私は布団の中にいた。

目を瞑ったまま、布団をまさぐって早苗さんの存在を確かめるが、
どうやら早苗さんは布団の中にはいないようだ。

ああそういえば、寝る前に、朝ごはんを作ってくれてるって言うて
たっけ。

思えば何か、味噌汁のいい匂いがする。

我ながら、ちようどいい時間に起きたかもしれない。

起きて行ったら、テーブルに朝食が並べられてたりして。

流石にそこまで期待するほど凶々しくはないけど、早苗さんなら有
り得るかもしれない。

そんなことを寝ぼけながら考えていた。

うーん、このままもう一度、眠ってしまおうか。

しかし、蒸し蒸しとした夏の熱気がそれを許さなかった。

茹だる暑さに堪えきれず、思わず勢い良く上体を起こすと、窓から
燦々とした日差しが部屋の中に降り注いでいた。

窓から炎天下に焦がされたアスファルトを見やると、やはり私は部
屋から出る気力すら奪われ、カーテンを閉じるのだった。

ああ、夏だな。と、私は思った。

機械（全2話 主演：小野塚小町）

機械 1

外の世界勤務のやつらがどっかに飛んで、穴埋めの鉢があたいに回るのによくあることで、そんな勤務の最中だった。

あたいはどうも、全てがなにか陰鬱になってしまつて、業務も何もほつぽりだして、何処かへ行つてしまおうと決めた。何度目の遁走になるかはわからないけれど、今回は決断までのうだうだ悩む時間が短かった。

いつもならこうするより先にあらゆる事柄の有意義と無意義が私たちごつこを始めるのだが、今回は虚無が介入する余地もなく。あたいはさつさと逃げてしまおうと考えた。

仕事を始めたばかりの頃は——といつても、生まれた瞬間から死神てなもんだから、生まれたばかりの頃、と言い換えても差し支えはない。——こういつた遁走にあたつて罪悪感や後先の叱責や罰に押しつぶされそうになっていたけれど、それももう、だいぶ薄れた。

今回はごみごみとした街中での勤務だったから、あたいは早速洋服屋に入つて、適当なジーンズとシャツを買つてそれに着替えた。元々着ていた辛気臭い服は更衣室に置き去りにしたし、髪留めだつて解いてそこに置いてきた。

髪留めに癖のついた髪をひんやりとした晴天の下で一つぶんぶんと振つてみると、それは清々しい気持ちが出た。真新しくパリツとして肌に擦れるシャツの感触も、ジーンズのちよつとした締め付けだつて、全てが寒空の空気めいて新鮮だった。

あたいは電車つて乗り物が割合好きで、こんなときはよく乗つた。今回も、入場券だけ買つて、宛てもなくどこまでも行つてしまおうとしている。

ホームから僅かに覗く青い空が、ホームの柱に座り込んでいる故知らん青年と酷似しているような気がして、青年が何故座り込みぼんや

りとしているかは知れないが、なんとなく、励ましてやりたいような心持ちになった。

けれど、あたいはもう電車の中で、電車の扉も閉まっている。

あたいはせめてもと思い、やおら動き始めた車窓から、青年に向かって緩く手を振ってみた。そんなあたいに気づくと、青年は少し驚いたような表情を浮かべた後、何か諦めるようにふと笑って、あたいに手を、振り返すのだった。

電車が街を離れてからは、あたいは自然と、何も考えないようぼんやりとしていた。

野山が増えて空が広くなった頃、周りの若者たちの会話を聞くともなく聞いているうちに、車内の人間はだんだんと減っていった。

車内を刻んでいた晴天の日差しは、気付けば爆ぜた黄色とすり替わっていた。

それは静かな夕暮れだった。ほんとうに、屋台が笛でも鳴らしているようなほどに、穏やかな夕暮れだった。車内の揺れに伴う不規則な衝突味の雑音は、静寂の輪郭を一層際立たせている。

あたいはそんな、記憶ごと黄色に焼かれてしまいそうな窓辺で、広い空を、広い世界を、なんだかとても身近なもののように感じた。

そのようにぼんやりしていると、短い睡眠の予感を覚えた。それから間もなく、あたいは穏やかな眠りに、落ちていく。

夢を見ない短い睡眠に思えたけれど、あたいは存外長いこと眠ってしまったっていたようだった。目を覚ましたときにはもう、世界は漆黒の緞帳に包まれていた。

とつぷりとして液体めいた闇の中に、ぼつりぼつりとしずくのように燈が灯っている。僅かでぼんやりとした灯りに目を凝らせば、草木が鬱蒼と蔦を巻いていた。ここはどうやら山中らしい。

現在の木々と闇の間を小さな灯りが次々と流れていくその様は、あたいに妙な強迫的な焦燥を与えた。一瞬前の穏やかな夕暮れと現在の差異も、そんな焦燥感を助長させているように思えた。

とにかくあたいは、電車の扉が開いた瞬間、車内から逃げるように

転がり降りた。

無人の改札を潜って駅から飛び出すと、空は星一つ灯らない完全な夜だった。あたいはそんな空がどうも恐ろしく、できるだけ空の見えない狭い道を探した。

この場所は想像以上に閑散としており、先程見たような草木が何処にでも蔦を伸ばしている。

殆ど駆けるような歩調で闇の中を這いずれば、いつしかやっと、空の狭い道を見つけられた。

そこは住宅地だった。

雑に舗装された路面や、響く自分の足音、冷たい夜風やカーテンの向こうの暗がり、あたいの心を落ち着かせる。

落ち着くと同時に、逃げ回ったツケがあたいに追いついた。ツケは空と同じ暗さで、電車の扉が閉まるのと同じ速度で、あたいの心を蝕んでいく。

そのうちに、あたいの中で有意義と無意義のいちごっこが始まった。そうすればいつしか虚無がやってきて、あたいをまたいつもどおりの日常へと回帰させるのだろう。

耳を片手で塞ぎながらぼんやりと歩いていたら、自分の髪がくねくねと手の甲を滑った。

緑色とは正反対にくせのついたあたいの髪は、あたいの日常に酷似していた。手で何度か櫛をかけても、くせのついた髪の毛が綺麗になることはなかった。

何度も何度も繰り返したけれど、結果は同じで。

そろそろ帰らなきや。なんてことを考えていると、曲がり角の向こうから鉄を鉄で打つような高い音が何度か響いた。あたいはこの音をよく知っていた。それは、電車の通過を告げる警報だった。

角を曲がると、ちょうど列車が通過した。列車はあたいの目の前を霞むような速度で通過していく。目についたのは列車よりも、紅く点滅するライト。その光に照らされた少女だった。

少女は規則的に点滅する紅い光を浴びながら、列車が通過していく様を羨むような、また怯えるような面持ちで睨みつけていた。

その表情があんまりに悲痛なものだったから、列車が通過したあと、あたいは少女に話しかけてしまった。

聞けば少女は死にたいらしく、死ねる列車をずっと待っていたという。語る少女の表情は、これまた絶望と希望が緋い交ぜになった、悲痛なものに思えた。

冥福の前借りに飽きたと語るその少女は、次の列車が通る際、文字通りあたいに背中を押してほしいと言った。

警報音が鳴り響く。

どうも、少女が羨ましいような、悲しいような気がしたけれど。結局、どうも判然としない心持ちのまま、あたいは少女の背中を押した。

少女の最期の言葉はありがとうで、続く言葉は、ほんとは死にたくなかった、だった。

「やあ、あんた。さつきぶりだね。さあ、いやいや言っていないでさつきと行くよ。あんたは死んだんだ。……いいじゃないか、死にたかったんだろう？　輪廻って冥福が欲しかったんだろう？　地獄だろうか天国だろうか、どちらにせよおんなじさ。そんなに責めないでおくれよ。そんな言い方しないでおくれ。それじゃあまるで——」

救えないのは、あたいは舟に乗った死神を見たことがないってことと、あたいたい自身は、踏切を超えられないってこと。

「——あたいが悪いみたいじゃないか」

機械 2 (了)

あたいの話が聞きたいって？ わざわざあたいに休日なんて与えて、あんたも物好きだなあ。まあ、聞きたきや聞かせてあげるよ。酒も奢ってくれるって話だしね。ただ、その目をやめておくれよ。嫌いなんだ、その目。

そうだな。まずはあんたの知ってる話、何回か話したかもしれないが、まあ、やな顔せずに聞いておくれよ。あんたが聞きたいって言ったんだ。

死神の、あたいの主な仕事ってのは引率。死んだ人間をあの世まで引率することだ。死亡現場付近をうろついているやつ、所謂霊に死を自覚させて、三途の川まで連れて行く。三途の川に着きやあ、向こう岸まで渡してやるんだ。これも結構キツイ仕事でさ、あんたも知ってるとは思うが、カッチカチの規則ってやつがあつたんだよ。

まず原則として、必要以上の会話をしないこと。別にあたいが、死神が死者にどれだけ肩入れしようと裁判の判決が変わることはない。なのに、まあ、禁止されてたんだな。

それから細かいところでは、川までの引率の際は必ず死者より先行すること。立ち止まらないこと、振り向かないこと。死者が小走りになるぐらいの歩調で歩くのさ。ほら、犬の散歩ってあるだろう？

あれが近いね。

んっんー。まあ、こんな感じにやるんだよ。

ああ、貴女。私のことが見えるのですか。貴女以外は私のことが見えていない様子で、もしかすると、私は死んでしまったのでしょうか。そうだよ、あんたは死んだのさ。それで、あたいは死神。あたいはあんたを連れて行かなきゃいけないんだ。どこに連れて行かれるかは、分かるだろう？

こんな具合で、歩き始める。奴らは大抵未練やなんやで、よたよたよたよた、トロいんだ。でも、あたいは振り向かないでさっさと歩く。奴らは小走りになって着いてくる。なもんで、三途の川に着く。

川の幅は乗せる奴によつてまちまちだけど、大抵長くて、そして暇だ。だから奴ら、話しかけてくるんだな。こちららそれを禁止されてるつてのに。それも、やれ生前がどうだったとか。やれ残る家内が心配だとか、徹頭徹尾、よくある話でさ。あたいは相槌を打つんだ、そうかい、そうかい、つて、全部に同じ相槌をさ。嫌になるよ。それでも奴ら、話終わると満足した様子で、暫くは黙って揺られてるんだけども、なんでかな。最終的には口を開いて、みんな同じことをあたいに聞くんだ。

あの、私は、地獄に落ちるのでしょいか。つてさ。

あんたなら分かるかもしれないが、そんなことはあたいが知るはずないだろう？ だからあたいは言うんだよ。

どうだろうね。つて。

何かどうも、奴らは死神つてもんを勘違いしているらしいんだよ。死神は生き死にに精通していて、達観していると思ひ込んでるんだ。いい迷惑だよ、まったく。死神なんて生き物に出せる解なんてありやしないんだよ。死神つてのはそういう風に出てくるんだ。死神は、なんの解も出せない性質なんだよ。そんな生き物がさ、言えるかい？ あんたはきつと天国だよ、あんたは地獄だよ。なんてさ。どうだろうね。それ以外、言えるわけがない。

だつて、死神は生まれた瞬間から死神なんだよ。河童や人間なんかは、よく自身の種族に課せられた生産つて命題で悩んだりするらしいけどさ。死神よかよつぽどマシな種族だよ、あれは。河童だつて人間だつて、とどのつまり辞められるじゃないか。種族への迎合を捨てたらそりや生きていけないかもしれないが、自由に生きて、自由に死ぬるならよつぽどマシさ。少なくとも、あたいはそう思うよ。

それに、あたいは天国や地獄がどんな場所かよく分かつてるんだ。冥府つてのはつまり、魂をリサイクルできるようになるまで漂白する場所なんだよ。

なあ、閻魔様。あんた自我つてなんだか知ってるかい？

自我つてのは要はそいつがそいつ足る明確な他との差。まあ、個性だな。じゃあ、個性つてのはなんだと思う？ あたいはね、そいつが

何を楽しいと感じて、何を苦しいと感じるか。そういった人それぞれ
の苦楽の基準。それが個性だと思うんだ。

よし、仮に辛いことを快く感じる人間がいたとしよう。それから、
そいつが天国に行ったとする。天国ってのは何はどうあれ楽しい場
所だろう？ だから、そいつは天国でつまらない思いをするだろう
ね。ほら、よくいるじゃないか。酒席で、端の方に座って黙ってるや
つ。きつと、そんな感じになるんだろうね。だけどそれでも、天国つ
てのは絶対的に楽しい場所なんだ、そうじゃないといけない。だか
ら、そいつは否が応でも楽しくさせられる。感情を楽しいに固定され
るのさ。地獄に行ったとしても同じ。そいつがどれだけ苦痛を快く
感じたところで、地獄って場所は絶対に苦痛を固定するんだ。そこに
個人の苦楽の基準、個性は介在しない。どんな人間も楽しいだけ、ま
たは辛いだけにされて、魂を漂白されるってわけさ。人間達はそれを
冥福、なんて呼んでいるらしいが、ははは。ああ、その目をやめてお
くれよ。嫌いだって言ってるじゃないか。

え？ 天国や地獄で、楽しいかったり悲しかったりするのには自我が
あるからじゃないか、って？ あー閻魔様、言ったじゃないか。自我
とは他者との差異、つまり個性で、個性とはそれぞれの持つ苦楽の基
準だって。感情ってのは自分の所有物じゃないんだよ。それはきつ
と、どっかから供給されるものなんだよ。

いや、こんなあたいにも、我を忘れるほど笑ったり、悲しんだりし
たことはあるんだよ。楽しいときや、箸が転げるだけでどうにも楽し
いし、悲しいときや何がどうして全てが悲しい。そうだろう？ でも
それってようは、苦楽の基準を逸した状態だろう？ つまり個性を逸
した状態さ。感情が自分の所有物だってんなら、いつでも蛇口を捻る
ように感情をコントロールできるはずじゃないか。でも、喜びと悲し
みってのは突然やって来る。それは交互に入れ替わったり、ずつとど
ちらかに偏ったりしてき。それがつまるところ、感情が自分の所有物
じゃないって証明になるだろう。そう思うとき、楽しさとか悲しさ
に、意味を見出せなくならないかい？ 少なくとも、あたいはそうだ
ね。

そうだ、それで思い出したが、たまに面白いやつもいるんだよ。ここで聞いたか、天国や地獄がどんな場所か分かってるやつがさ。そういうやつは渡し舟の上で、私は地獄に……なんて聞かないんだ。その代わりよく喋るね。天国と地獄、どちらにせよ自我が消えたらそれで終わり、その瞬間こそが本当の死だ、なんてさ。まあ、結局怖くてたまらないから、喋らずにはいられないんだと思うけどさ。そいつはたしか地獄に落ちて、そうだな、結構早く、まっさらになっただって話だよ。流石、生前から冥福を前借りしてただけあるよな。

いやいや閻魔様、人間ってのは割と合理的に生きるように出来てるんだ。こないだあんた、外の世界の死神との交流会を開いてくれたろう？ ああ、あれは楽しかったなあ。ああ、ともかく、ともかくさ。そこで、向こうの死神から聞いた話なんだけどね。向こうの世界で、どうしても殺される運命の男がいたんだよ。運命って言っても、あれだよ、ヤクザに狙われたとか、死刑囚とかさ。それで、そいつを殺す側の男がそいつに尋ねるんだと。銃か毒か、好きな方を選べ。ただしお前が毒を選び、奇跡的に死ななかつたとしても、その時は俺がお前を殺す。何がどうあれ絶対に殺す。助かることは方が一にも無い。さあ、銃か毒か、好きな方を選べ。なんてさ。そしたら殺される側の奴ってのは、大抵銃を選ぶらしいんだ。閻魔様、これってどうしてだと思う？ あたいはね、早く次に行くこうとしてるんじゃないか、って思うんだよ。さっさと死んで、さっさと冥福にあやかっつて、リサイクルされよう。って。そういう算段が、生まれた時から魂に刻み込まれているんじゃないかって思うんだ。向こうのその死神は統計を取っていたらしいんだけど、八割は銃を取るって話だよ。なんか、不思議だよなあ。ははは。

え？

いや、もちろんそりゃあそうだよ。天国や地獄かどういいう場所かなんて、あたいに、一介の死神風情に解るわけがないじゃないか。言つたらろう？ 死神なんて生き物に出せる解は一つもないって。なんで、って。何を聞くんない。それこそ分かりきったことじゃないか。死神を渡した死神はいない。あたいらが死んだら何処へ行くかなん

て、誰も知らないんだから。

ああネエちゃん、酒、お代わりね。

まあさ、あんたが色々変えてくれるって話だけど。どうだろうね。

あたいは結局、何も変わらない気がするんだけどね。

日々は槻を濁すよに（全11話 主演：リグル・ナイトバグ、ルーミア）

日々は槻を濁すよに 1

「あー、暇だな」

晴れでもなければ、雨でもない。その中間の様な空の下、リグルはいかにも退屈そうに言う。

「鬼ごっこでもする？ それか、かくれんぼとか」

おずおず、と言った様子でミスティアが言う。

空の下、とはいえ、木々に囲まれた森の中。私たちの視界は殆ど枝葉に覆われていた。僅かな木漏れ日に照らされた白い靄は湿気を孕んでいて、湿気は私たちの健やかな運動への熱を奪い去るには十分だった。

「鬼ごっこ？ かくれんぼ？ あーあー、今更そんなこととして、楽しいわけではないよ」

リグルは半ば八つ当たりをするかのようにミスティアに答えた。

リグル、リグル・ナイトバグは寺子屋でもいつもこんな調子だった。

昔はもう少しマシだったのだが、最近では腹を空かした子供のように「楽しさ」に貪欲だ。私は最近、そんなリグルを少し軽蔑している。遊んでばかりいるわりに、勉強はそこそこできるし、数学なんかは私よりよっぽどいい点を取る。私がリグルを軽蔑するのは、そこにも原因があるのかもしれない。しかし、かくれんぼや鬼ごっこなぞ今更面白くない、というリグルの主張には同感だった。

「ミスティア、他。他になんかない？」

私が尋ねると、ミスティアはなにかもじもじし始めた。ああ、またか。

「じゃ、じゃあ。みんなで歌をうたうとか……」

ミスティアはさつきよりも、おずおず、として言う。

「誰が！ みすちーが歌いたいだけだろー。僕はどうも苦手だな、歌は」

リグルは正直だった。私はこんな、リグルの歯に絹着せぬ物言いがどうも最近、苦手だった。主張としては全く同感なのだが、どうも。「そ、そうだよね！ ごめんね。最近、わたし前よりずっと歌に夢中で……」

はにかみながらミスティアは言う。

ミスティア、ミスティア・ローレライは、初めて会ったときからこんな感じだった。いざ遊びが始まったり、それこそ歌をうたうときなんかは、私たちの誰よりも声が大きいし、快活だ。私はたまに、引く。とはいえ、私はミスティアのことが好きだった。彼女は勉強こそ出れないものの、なにか、私とリグルが持つていないものを持つている気がして、羨ましかった。ああ、勉強ができないなんていつても、音楽の成績は私とリグルに比べたらまず抜けて高い。もっとも、私とリグルがダメすぎるだけかもしれないが。

そうだ。音楽に関していえば、リグルは私よりもずっと不真面目だ。リグルはみんなで何かを歌うとき、頑なに蛍の光しか歌わない。とおりやんせを歌うときも、荒城の月を歌うときも、頑なに蛍の光を歌う。リグルは、

「マッシュアップだよ」

なんていうけど、正直邪魔で仕方がない。私の音楽の成績がこうも低かったのは、全てリグルのせいなのではないだろうか。

「じゃ、じゃあ……」

私がリグルを内心で罵っていると、ミスティアがまた口を開いた。

「なにや」

リグルが全く期待を含めない声で聞き返す。

「……久しぶりに、チルノちゃんのところでも、行かない？」

ミスティアの提案に、リグルは大きくため息を吐いた。

「だからさ、ミスティア。今更鬼ごっこやかくれんぼなんかしたつて楽しいわけないって、言ってるだろー」

なあルーミア？ と、リグルが私に同意を求める。正直、リグルのいうことは尤もに思えた私だったが、リグルの奔放な物言いにそのままの同意を返すのも癪だったので、まあ、と曖昧に答えた。

「う、うん。そうだよね」

と、ミスティアが呟く。

ミスティアの気持ちも、私には分かった。というのも、私たちはチルノとしばらく会っていなかった。妖怪の私たちと妖精の彼女では心身の成長の速度が違ったのだ。リグルは背が伸びて、ミスティアは背こそあまり伸びなかったが、以前より胸が膨らんでいる気がする。私はいえ、背も伸びたし、自分で言うのもなんだが、頭が良くなった。これも、自分で言うのはなんだけど、三人の中で一番“大人”なのは私だと思う。多分それは、私たちの中で一番成長の早い妖怪が私だったから、というのもある気はするが。リグルは子供がそのまま大きくなったように、小狡いまでに楽しさに貪欲だし、ミスティアはずっと優しいままだった。ミスティアはきつと、そんな彼女特有の優しきからチルノを気遣ってあんな事を言ったのだろう。私はミスティアのそんな優しきが好きだけど、だからといってチルノに会うなんて、そんな残酷な提案に乗ることは、できなかった。

しかし私だって、チルノに会いたくないわけではない。わけではないが、もはや私たちにとって下級生のような彼女に会うには、それなりに、なにか特別な機会がなければいけないような気がしていた。

「あーあー。……僕たち、あともう少しで卒業だっていうのに、なんとも浮かない毎日だなあ。なんか、楽しいことはないものか」

リグルは右上の方を見ながらぼやいている。ミスティアは何か楽しいことを捻り出そうと腕を組んでしかめっ面で悩んでいるが、きつと名案は浮かばないだろう。

「慧音先生は『卒業したあと来い。来たらもつといろんなことを教えてやる』なんて言うけどさ、行くわけないよ。勉強、あれはちつとも面白くない。やればやるほどつまんないよ」

リグルが言うと、ミスティアのしかめっ面は少し寂しそうな表情に変わった。

「でも、寺子屋に行かなかつたら、みんなが集まれないよ」

腕を組んだままミスティアが言う。

「いいよいいよ。ここら辺で集合したらいいじゃん。決まり。次から

集合場所はここな」

「……わかった」

「じゃあそういうことで、今日はもうお開きにしようか。どうせやることないしね」

リグルはそれじゃ、と言うが早いか踵を返して走っていつてしまった。

「あ、リグル……またね」

ミステイアが手を振ると、リグルが振り返って、おう、またな、と声を上げる。私も軽く手を挙げて、それを見送った。

私がどこへ行くともなく再び歩き始めると、ミステイアも少し後ろをてくてくとついてくる。しばらく静かな時間が続いて、私は口を開いた。

「ね、ミステイア。帰ろっか。私たちも」

「……うん、そうだね」

ミステイアは一瞬俯いて、そう答えた。

「えっと、じゃあリグルの言う通り、次集まるときはさっきの場所ね」
私は歩いてきた道の方を指差して、ミステイアに言う。そのとき気がついたことだけど、指差した方、道の脇の木々の葉が、ほんの数枚、黄色く染まっていた。

「うん、わかった。……また会えるよね？」

「当たり前じゃん。寺子屋だってまだ行かなきゃいけないわけだし」
「そっか、そうだよね」

でも、私は言いながら、なんだか永い夏休みが終わってしまうような気がして、少し寂しくなった。だから、

「歌、続けてよね。私、ミステイアの歌好きなんだから」

なんて、言ってみたりした。ほんとは、ちよつとどうでもよかったけど。

「うん、ありがとう。……それじゃあ、またね」

ミステイアがそう言って手を振るので、私はそこそこに背を向けて歩き始めた。しばらくしてちら、と振り向くと、ミステイアの歩く後ろ姿が見えたので、私もそのまま、歩き続けた。

帰り途、私は寺子屋のちよつと広い裏庭について考えていた。子供の足で十秒も走れば端から端までを辿れるその庭を、慧音先生は“校庭”と言い張って聞かなかつた。そこは驚くほど狭かつた。鬼ごっこをやるにも、かくれんぼをやるにもどうにも狭すぎた。というのも、元から“ちよつと広い”程度の庭の中心に、そのちよつとした広さを圧迫する要因があつたのだ。

それは大きな槻だつた。私が初めて寺子屋に行つたころからあの槻は大樹だつた。私がつつと小さい頃はそれほど気にならなかつたけれど、背が伸びるにつれて、槻は邪魔で仕方がなくなつていった。

けれど、そんな大樹の構える狭い“校庭”にて、みんなと遊んだのをよく覚えている。チルノもリグルもミステイアも私も、飛べるのに木登りをしてみたり、意味もなく周囲を走りまわつてみたり、隠れる場所の限られたかくれんぼを何度もやつたりした。あれは夏だつたか、木陰で涼んで、西瓜を食べたのも覚えている。

そんな槻が、私たちが卒業して間もなく切り倒されるといふ話だつた。そこまで思い入れがあるというわけでもないが、なんとなく寂しい。

そんなことを考えながら、私は帰路を辿つた。

そうしてその後、チルノはもちろん、リグルやミステイアに会うこともなく、いつのまにか、木の葉は朱く染まってしまった。

……。

日々は梶を濁すよに 2

「えー、たったこれだけ？ この本全部で」

会計台の上、山のように積まれた厚い本をペシペシと叩きながら、私は店の婆さんに抗議した。婆さんの時化した顔の皮膚に寄せられた皺は所謂しかめっ面というやつで、そこからんで動かない。思えばこの婆さん、店に入った時からちつとも表情が変わっていない。店内の古びた本棚、又、古びた本と同様に、この婆さんの面の皮、その時間も止まってしまっているのだろうか。

「だいたいさ、婆さん。婆さんにこの本の価値が本当に分かっているの？ うつすい新書に分厚いだけの学術書。これ全部びつくりするほど高かったつてのに、婆さんそれをこんな二束三文で買い叩くつての」

言うのと、婆さんの顔の皺が蠢く。しかめっ面を更に顰めたようにも見えるし、薄ら笑っているような気もする。私が眉を潜めて婆さんの不気味な口元を見つめていると、婆さんはやおら、ゆらり、ゆらりと、二度、頷く。そして、婆さんの震える拳が私の胸元付近に差し出される。

「だーもう。わかんない人だな、全く」

私がブルブルと震える婆さんの拳の下に手のひらを広げると同時に、婆さんの拳も開かれた。がちや、なんて擬音を格段に弱体化させたような音が私の手のひらに降ってくる。私はそんな弱々しい音を握り潰すように拳を固め、それを握りしめたまま店を出た。店を出る際、婆さんを今一度睨みつけてやろうかとも考えたが、振り向けば婆さんの顔に刻まれた皺は先よりよっほど深くなっているのではないか、などと恐ろしく思えて、それを諦めた。

握りしめた拳のまま、憤懣遣る方無い心持ちで往来に行く。通りにはいつも通り岡持ちを持ったのや、祭りでもないのに高そうな着物を着て歩くの等がわんさかしていた。もちろん、他にも色んなのがいたけれど、特に私の目に付いたのは岡持ちと着物だった。

そこに特に理由は無かった。私はそこにプロレタリアートの格差を見いだすこともなかったし、岡持ちと着物に何かしらの共通項を見つけたということもない。仮に共通項があるとすれば、今日はたまたまその二つが私の目に付くということぐらいだ。

日は高く、暑くもなければ寒くもない。だから季節は多分春。それか、秋。

私にとって季節なんてどうでもよかった。というのも、数年前までは季節が過ぎる毎に私の背は少し伸びた、が、数年前から私の背が伸びることはなくなった。それまでは自分の視点が少し高くなったことに気がつく度に、私は時の流れをしみじみと感じたものだった。けれど、最近ではそんな流れなんて感じやしない。私はまるで時が止まっているかのような日々の中にいた。しかし、時間は確かに流れている。あの婆さんの皺にしたってそうだ。私がまだ勉強熱心だった頃は、あの婆さんもまだオバちゃんくらいなもので、私はよくオバちゃんから新書や学術書を二束三文で買い叩いたものだ。

さて、あの時化した本屋を出て数分経つが、気がつけば目的地が目の前までやってきている。はて、普段なら通りに面した店先に、ずらー、と塵か何かのように有象無象の酒類が並べられていて、その中の会計台越しにこれまた幸薄そうな婆ちゃんの顔が覗いているはずなのに、全く、それっぽいものは見つけられない。目の前にあるのは木製の、横開きの大きな扉のみだ。よく見ると扉には何やら張り紙が貼つてある。

『誠に勝手ながら本日は休業させていただきます。腰が痛いのです。ごめんね。』

ごめんねて。

どうやら今日は休みらしい。私は一瞬、酒屋の婆ちゃんの腰の様子を見舞おうか、などと考えたが、握りしめた心許ない硬貨の数枚を拳の中で確かめて、自身の思い付きを却下した。

「仕方ない、帰るとするか」

「にしても酒屋とか本屋はジジババばかりだな、あと数年もすれば、私の行きつけはみんな潰れてしまうかしらん」

以前よりずっと増えた独り言を遊ばせながら、私は家路を辿った。かと、思われたが、私は酒を諦めきれなかった。自分でもそこまでアルコールに執着するとは思っていなかった。自分自身大変驚いたが、考えてみれば当たり前のことだった。

仮に、薄っぺらな硬貨数枚を握りしめて家に帰ったところで、結局は床に薄っぺらな数枚のそれが転がるのみで、それもいずれ、床板と床板の狭間に吸い込まれ気づかぬ間に消えてしまう。私はきつと、床下に吸い込まれた事実にも気づかなければ、そもそも床に転がる硬貨数枚の存在を覚えていられるわけもない。だから、このまま帰ってしまつては本当に、後には何も残らないというわけだ。せつかく役立たずの書などを全て処分して、それが二足三文に成つたのだ。酒を買わずに帰つては、味気ないにも程がある。

私は本日休業中である婆ちゃんの酒屋から最寄りの酒屋へと向かった。酒を飲まずして酒屋をハシゴするとは私も酔狂よのう、なんて下らないことを考えながら、私は右上の方を眺めて歩く。そこには通りに立ち並ぶ家屋や店の屋根があり、屋根の向こうにはあおい空があつた。私はもちろん、あー、あおいなー、とか、そこらへんのことを、考えた。

ふわつとした気持ちで歩いていると、酒屋にはすぐに着いた。店主の爺さんの息子らしき男が会計台の向こうにて店番をしている。肩肘をついているその男は、なにやら左上の方をぼんやりと見つめていて、非常に印象が、悪い。

ときに、実のところ、この酒屋こそが私の家から最寄りの酒屋だった。家を出て五分と歩かぬうちに、この酒屋にはたどり着く。しかし、私はいつもこの酒屋ではなく、少し遠くの婆ちゃんの営む酒屋まで出向くのだ。その理由は間違いなく、現在店番をしているこの男にあつた。

「電気ブラン」

近付いて声をかけると、男が気だるそうに視線を寄越す。ん、だか、あ、だか、そんな声を上げたことから、この男のたるみ具合が窺える。そうして男は伸びをして、これまた気だるそうに口を開いた。

「ん、んー。あーあ……。オネエちゃん、また昼間つから呑むのかい」
これが、非常に、嫌だった。昼間つから左上の方を見上げてうたた寝をしているやつに、こんなことを言われる筋合いはない。

「関係ないでしょ。はい、お金。さっさとしてよね」

会計台の上に生暖かくなつた硬貨を全て放つて、私は奥の商品棚に置かれたためあてのそれを指で差す。

「いやー、関係あるかもよ。案外知り合いだったりして。……まあ、関係ないけど」

男は眠気を噛みながら、たらたらと酒を取りに立つ。

「あんたみたいな知り合い、いないよ」

「……向こうの酒屋は休みかい。婆ちゃん、腰でもいわしたかな」

男は背を向けたまま、私の質問を無視して言った。

「関係ないでしょ」

「これは関係あるんだなあ。あの婆さん、親戚なんだ。はいよ」

男が脱力のままに酒を置くもんだから、ダン、と結構な音がした。

「はい、ありがとね。それじゃ」

片手で酒をふんだくつて、歩き始める。来た道をそのまま真っ直ぐ進めば、私の家に辿り着く。

「まいど。……あ、これ、お代足りねえじゃねーか」

男が背後で、なにやらごによごによとぼやいていたけれど、私は片耳を塞いで、そのまま店を後にした。

あの男を見ていると、なんだか床にこぼした水を放つたらかして出来た黴を見てるような気分になって、妙に居心地が悪い。私は早速瓶の蓋を開けて、胸中の靄を洗い流すようにそれを、飲んだ。

日々は楯を濁すよに 3

朝、目が覚めて、床の上。窓の向こうはいつも通りに他所の家の外壁があるのだろう。部屋の中はいつも通りに果たして意味があるか程度の薄明るさに満たされていた。あってもなくてもいいような、まるで教養のような薄暗さ、と形容したとて差し支えないほどの光量の中、私は脳と胃に僅かな宿酔を感じ、なんととはなしに寝返りをうつ。

眠る際、一部屋のみの木造住居にはロフトがあったが、私はそれを使わない。ロフトの下の空間は、これまた低いベッドが基本的構造物として備えられていた。動かせない二段ベッドといえば、わかりやすいだろう。しかしそれでも、私は床で寝た。床で眠るようになったのは、私がお勉強などを熱心にした頃だ。その頃、部屋には小さなテーブルが在って、私はそのテーブルの上でノートをとったり本を読んだりして、そのまま眠ったものだ。テーブルは先月売った、いや、先々月だったか。あまりよく覚えてはいないが、おかげで部屋が広くなった。

広くなったとはいえ、用途のない不動の二段ベッドの存在の所為で、就寝以外の居住スペースは、狭い。今では、およそ三畳ほどの木板が張られたその床に、布団が一式ぐちゃぐちゃになっている、というのが私の部屋の全てだった。この空間には布団しかない。布団は三式あった。一つは床に、一つはロフトに、一つはその下段に。

小さい頃、リグルとミステイア、それとあの子が泊まりに来たことがあった。たしか、この家が私のものになってすぐのことだったと記憶している。僅か三畳ほどの空間を暴れまわり、転げまわり。遊び疲れて、二つのベッドに二人づつ眠った。

たしかリグルとミステイアが上の段だった。本当は、上の段は普段私の就寝スペースだったはずで、私はそこで眠ろうとしたのだけど、リグルがどうしても、上じやなきやイヤだ、と抗議して。トランプか何かで勝負して決めたんだっけかな。それで、私は下の段で、あの子と一緒に眠ることになったのだ。布団の中が、涼しくて、気持ちよかったのを、覚えてる。

私はあれから、あの子には会っていない。あの子、なんて呼び方も、記憶の中のあの子が、私の成長に比例して幼さを増していった結果の一つだ。とはいえ、時折ふいに思い出される彼女は概ね、私やリグルやミステイアの手を引いて、湖や山や里、それから寺子屋なんかにくぐんと歩いていく姿だった。ともかく、特別な機会なんて言葉は結局、時が経つにつれて、その抽象さを増していくのみで。きつともう、会うことはないかもしれない。そんな可能性も、私はすでに受け入れている。それほどに、時間が経ってしまったのだ。

『やればやるほどつまんないよ』、か」

ふいに、いつかの誰かが放った言葉を思い出す。その言葉が提げた看板にはやはり、勉強、とか、問いA、とか、それらに類する語句が刻まれていた。

勉強も、随分したけれど。

結局、無やら数やら空間やら、それらの前提を疑ってしまえば、ここにはなんの意味がないように思えた。視野が広がるにつれて、いろんなものや、いろんなことを疑えるようになっただけで。生きる上で肝要な答えらしきものは何一つとして得られなかった。だからといって、絶望、なんかはしていない。ただ、其処にあるものがあるがままに受け入れるには、その時すでに、私は少し、捻くれ過ぎていただけなのだろう。無論、私が今所謂モラトリアムめいた恒常性の渦中にいることなんて自覚している。けど、私はちつとも不幸じゃないし、むしろ幸せだった。或いは快樂原則なんてもものを持ち出したなら、私はきつと、不幸で幸せなのだろう。

また私は、この世界の全てに意味があつて、ときに全てが無意味になることを知っている。けれど、景色のちよつとした美しさの中に幸せがある、とか、思い出は時が経つほどに輝きを増す、とか。そういう言葉の意味だつて、理解している。もちろん、どれもこれも、ただの言葉だ。ただより安いものはない、とまでは言わないが、無料で配られるソレは大概、無価値である。

つまり私は。

今の私は、つまるところ。

幸せなほど、不考でいると、いうわけだ。

だから、考えれば考えるほど、つまらなかつた。

とりあえず、起き上がろうと腕に力を込める。瞬間、敷き布団の下で、床板がキイ、と猿楽うので、起き上がるのはよしてやることにした。何より、寝転がった私の低い視界の中心に、昨夜の飲みかけが目に入った。私はその瓶に手を伸ばして、仰向けになり。瓶の中、琥珀色のそれを、飲んだ。不精により固くなった敷き布団の感触が、妙に柔らかい。さて、この布団は、いつ、どこから持ってきたものだったか。

酒を飲むと、思考の制御が効かなくなる。それはつまり、行動に干渉できなくなるということで。自分の意思とは関係なく、景色がやたら綺麗に見えて、泣きそうになったり。積み上げまで来たガラクタを、売っぱらったり。更なる酔いを、求めたり。あの子が作った瘡蓋を、血が出るまで、弄くり回したり、するのだ。寝たきりの暴れ馬に乗るのは、とても、スリリングだ。

遠目で見たら綺麗だったものが、近付いてみると、そうでもなかったり。手品なんかの種や仕掛けが、なんとなくわかってしまったり。あの頃のリグルの、不可解なまでの軽薄さとか。知らない方がマシなことはたくさんあって。だから、アルコールで視力が下がるなら、私はいくらでも、それを飲むと、いうわけだ。

ああ、起きて十分も経たないけれど、もはや、眠たいな。……そういえば、ミステイアは今、なにをしてるんだろう。未だに歌なんて、歌ってんのかな。……リグルはきつと、マッチポンプを続けているに違いない。何年か前に会った時、目を輝かせて、その仕事の素晴らしさを説いてくれたぐらいだし。それから、あの子。きつと、あの子は今でも、同じくらいの背丈をしたのを捕まえて、楽しいことをしてるんだろう。そうだったら、いいな。……そうだ。今度リグルに会ったら、金の無心でもしてみようかな。あいつならそれくらい、笑って済ませてくれそうだ。

そうして私は薄暗く、陽光溶かす部屋の中。重くて鈍い微睡みに、次第に解けてゆくのであった。

日々は槻を濁すよに 4

緩やかに流れる時間、日々。それらは往々にして悪辣である。自覚やら知覚なんてものは、私の視界に映る景観から彩度を奪うには十分だった。酒を入れれば、長針と短針は途端に乱拍子を刻むが如く暴れ始める。必要なのは酒だった。だから、私が欲するものは何より、金だ。時間を短縮するために必要なのは科学でもなければ化学でもない。要するに私は、金が欲しい。

幸い、幼い頃のバカ喰いのおかげか、腹は空かなかった。もう何年かまともに食事を摂った記憶はないけれど、嫌になるほどに、私の体は健康そのものだ。だから余計に、流れる時間を穏やかに感じ取ってしまうというわけなのだ。ああ、何処かに金目のものは落ちてはいないか。そんな程度のふわっとした心持ちで、私は里の白昼を漂っている。

時折往来を見やれば、人を襲つてしまおうか、なんて考えが頭を過るが、今更それをするほど私は飢えてもいない。私は流れる人々を、何の気なしに見送り続けた。こんなに大勢の人がいて、人それぞれに目的の品を買い求めたり、無計画に茶屋で散財しているのにも関わらず、自分一人が無一文でふらついていることを思うと、やはり人間というのは薄情な生き物だな、なんて勝手な感慨が湧いた。私は別に人間に敵愾心なんか抱いてはいない。むしろ毎日毎日同じ働き先で同じような物売りを続けることが出来ることを尊敬しているぐらいだ。だから、胸中に湧いた勝手な感慨はあまりにも勝手に、可笑しかった。「ほんと、殊勝だよな」

その様なことを呟きながら、私は里をぐるぐる、ぐるぐると、回り続けた。

気がつけば、また例の酒屋のある通りまで来ていた。けれど、私は未だ金を手にすることも出来ていなかったし、酒屋で店番をする若いやつの顔も見たくなかった。例の如く、右上の方を見ながら通り過ぎることにした。そうして、並ぶ家屋の屋根の向こう、間抜けな青

空に無感動を覚えている頃、恐らくは酒屋の前に差し掛かったときだ。私の聴覚に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「いやー、知らないな。おにいさんみたいな知り合い、居なかったと思うけど」

「や、俺は覚えてるぜ。名前だって覚えてる。あんたたしか、リグル・リグルナイトバッグだろう」

向けば、酒屋で店番をする若いのと、私の友人、リグルナイトバッグが向かい合って、なにやら言い合っていた。

「うーん。リグルナイトバッグ。その通りなんだけどさ、ごめん。やっぱりおにいさんのこと、覚えてないや」

「なんだよあんたもか。あーあ。いいなあ、あんたらみたいな奴らはさ、俺たち人間なんかよりよっぽど生きるし、そのくせなんでもすぐ忘れちまう」

そんなこと言われてもさ、なんて嘯くリグルの隣まで行くと、私に気付いたリグルは片手をあげて反応したので、私もそれに合わせた。

リグルはそのまま、酒屋の男に問いかける。

「じゃあさおにいさん。私とどこで知り合ったってのさ」

「あ？ ああ、いやな。思えば知り合った、なんて言えるほどの事じゃないんだが。昔、よく見てたんだよ。あんたら、チルノとよく遊んでただろう？ 寺子屋でさ」

男が言うと、リグルは合点がいった様子で声を上げる。

「あー！もしかして同級生だ？ ……いやでも、それにしちや若いね、おにいさん」

「ああいや、俺は三つ四つ下の課程だったからな。でも、あんたらがチルノと遊ばなくなってから、よくあんたらの話を聞いたよ。チルノがらさ。まあ、あいつも、そのうちそんな話はしなくなったけど。俺にはどーもそれが、記憶に残ってたんだな」

男はどこか懐かしげに、右上を眺めながらそんなことを話す。自分で勝手に軟化した男の態度は、私を妙に苛立たせた。まあでも、怒ったって仕方がない。だいいち、何もそんなことで腹立てることもない。

「じゃあなに、あんた私がおこに来る度〃知り合いかもな〃なんてミステリアスな態度取っておきながら、なんで今までこんな風に確認して来なかったのさ」

私が言うと、会計台の向こうで、男が多少たじろいだ。

「い、いや。実のところ、驚いてたんだ。たしかルーミアって言ったか、あんた。あんたは、ほら、変わったじゃないか。服装だってだいぶ違うし、背だって伸びてるわけだろ。似てる他人なんじゃないかな、って、思ってたさあ」

あ、チャンスかも。

「それだけ？」

「あ、ああ」

「それだけの理由で他人かもしれない客に、あんな謎めいた接客してたわけ？」

「い、いや、悪かったよ」

無表情な笑みを浮かべるリグルを尻目に、私は捲し立てる。

「いやー見えないね。悪かった、その言葉に誠意が見えない。全くもって、見えません。どうしようかなー。あ、そうだ。店主のお爺ちゃんって、あんたのお爺ちゃんでしょ？」

「悪かった、悪かったって。いいよ分かった。なんでも一本持ってた方がいいからさ、爺さんには余計なこと、言わないでくれよな」

そうして私は、私とリグルの分の酒を獲得することに成功した。タダで。

「いやーちよつと、悪いことしちやつたかなー。私としたことが、お恥ずかしいところをお見せして」

「いいんじゃない？ 別にさ」

その後、私とリグルは通りをそのまま歩いていた。酒屋を通り過ぎてそのまま進めば、もうすぐ私の家がある。なんとなく、だから、これは、なんとなく。私の家に向かって歩いているような気がするのだが。別に、リグルを家に入れたくないわけではない。ただ少し、リグルと会うのは久しぶりすぎて、なんだか気まずかった。先程酒屋で男が言った通り、私は自分自身だいたい変わったように思える。私をも

う、あの頃のようなスカートは穿かなかつたし、喋り方だつて、随分変わつてしまつた氣もする。だから正直、氣まずさよりも、氣恥ずかしさが大きいのかもしれない。

「ルーミアお前さ、随分変わったね」

「そーかな？」

リグルは私の胸中を見透かしたような言葉を投げて来る。私は極力平然を繕つて、それに答える。

「前は酒なんて、飲んでなかつたじゃんか」

「あー、そうだつて」

「それにしてもまた、珍しいの飲んでるね」

リグルが私の片手に下がつた瓶を指して言った。

「ああこれ。安いんだよ」

「へえ。外の酒なの？」

「うん。何故か安い。多分、名前の所為だと思つただけ」

「なるほどねえ」

リグルも片手に瓶をぶら下げていたけれど、それを飲もうとはしなかつた。私もリグルに倣つて口をつけることはしなかつたけど、なんとなく。なんとなくだけど、リグルも、私に倣つていふような、氣がする。そんな予感、半ば確信に近いレベルで私の脳内を這い回つていた。

靴の下で砂が滑る。気付けば、既に我が家の近くまで来ていた。ここまでくると、何故か人通りがやけに減る。思えば、家にいる際、隣の生活音を聞かない氣がする。もしかすると、私の家を挟むように建っているボロの二軒も、周りの数十軒も、もうとつくにみんな、空き家なのではないか。今度はそんな、妙な想像に、私の思考は囚われる。

ああきつと、珍しいやつが隣を歩いてて、それでもつて、片手に握つた瓶のキャップを開けられないから。私はこんな妙なことを考えるんだ。いつそ、開けてしまおうか。

親指に、力を込める。

二つの足音のみが響く世界のしじまに、かちかち、と、音が響いた。

リグルの表情を窺うと、リグルは相変わらず前を向いたまま、笑顔とも無表情ともつかぬ顔をしていた。リグルの表情は昔から、形容しがたいものがあつた。笑つてるような、キョトンとしてるような無表情。それがリグルの普段の表情だつた。

そして、そんなリグルの普段通りの表情を見つめていると、不意に、かちかち、という音が聞こえた。それは間違いなく、瓶のキャップを開ける音だつた。リグルの手元を見るまでもなく、私は瓶のキャップを完全に開け放つた。するとやはり、リグルもそうした。瓶を叩き、一口流し込む。隣で、リグルも同様の動作をする。瓶から口を離すと、私たちは笑つた。

「いやあ僕、もう一生飲めないかと思つたよ」

「あはは、私も。握りしめた酒瓶を遠く感じたね」

閑静な秋の宙に、私たちの声はよく響いた。

「いいのかよ、昼間っからさ。お前、勉強は？」

「勉強？　ありやダメだよ。アレは人を不幸にする」

言えてる、と、リグルが笑う。リグルが笑うのを見て、私は何だか、過去感じていたリグルへの侮蔑めいた感情が薄れていくのを感じた。

「あんたこそ、いいの？　昼間っからさ。仕事は？　ほら、害虫駆除だっけ」

「ああ、休業期間なんだ。まあご贔屓さんのところはぼちぼち行くけど。なんてつたつて秋だからね」

どこか軽妙さを感じさせるリグルの口調に、私は自然と笑つてしまふ。リグルも、それを聞くとなんだか同調するように笑つた。その時、私の心に一つの想念が浮かんだ。胸中曰く、いけるかも。浮かんだ言葉は、それだつた。曖昧に笑い合う最中、第一声として、いやあ、を選択し、私は続けた。

「ところでさ、お金かしてくれない？」

「……え？」

秋風が、身にしみた。

日々は規を濁すよに 5

「うわ、懐かしいなあ。昔と全然変わってないね。あ、でも、昔はもうちよつと物があつたね」

「最近減らしたの。全部お金に変えたつてわけ」

埃っぽい部屋の中、リグルが懐かしそうに部屋中を見渡す。リグルは一瞬、部屋を物色するような素振りを見せたが直ぐにやめた。触るまでもなく、其処に何も無いことを察知したのだろう。

「じゃ、僕は上の段ね」

「お好きにどうぞ」

金を貸してくれないか、その問いに、リグルは二つ返事で応えた。それどころか、返さなくてもいいとまで言う。曰く、暇だから。私になるほどなあ、と相槌を打つと、リグルは、

『そつちも暇なんですよ?』

と、聞いてきた。私はどうしても、はいその通りです、と答えるほがなく、実際、はいその通りです、と答えた。するとリグルは唐突に、じゃあしばらく、一緒に暮らそうよ、なんてことを言った。私は少し驚いたが、やはり暇だったから、承諾したというわけだ。会うこと自体久々のリグルとの暮らしに頭がかき乱されそうな予感はあるけれど、なにもないよりはずっとマシに思えた。そして家の前まで着いた際、私は片手に下げた馴染みの酒瓶を見て、どうせなら高い酒を持ってくればよかった、なんてことを考えながら戸を開けたのだった。

「あー、天井が近い。寝惚けて起き上がったら、頭打ちそうだ」

「下の段使えば?」

「いいよ、上で。せつかく勝ち取った場所だし」

リグルは早速上段のベッドに上がって、寝心地を確かめている。私は床に敷かれた布団の上で、それを見るときもなく見上げていた。断続的に、布と布とが擦れる音が上の方から聞こえてくる。暫くそんな静寂が続いて、リグルが唐突に口を開いた。

「それにしても、意外だな。お前は教師にでもなるのかと思ってたんだけどな、僕は」

「まさか」

リグルが起き上がったようで、二段ベッドがけたたましく悲鳴を上げた。ラダーを軋ませながら降りてくるリグルに私は言う。

「私が寝てる時はゆっくり起き上がってよね」

「まかせてまかせて、よつと」

床に足をつけたリグルは続けざまに口を開けた。

「じゃ、僕。一旦帰るね」

「あ、なんか持ってきてくれるってわけ？」

「うん、いろいろ。ここ、何も無すぎで結局暇だし。いいよね」

「いいけど。ご覧の通り狭いから、あんまりでつかいのはダメ」

私が言うと、リグルは分かった、と答えて家を出て行った。

私は自分の言動に対し、これから生活費等を工面してもらおう相手に対して随分な物言いだな、なんて思ったけれど、不思議と、罪悪を感じることはなかった。リグルと久々に会ったこの短い間に、もはや以前感じていた友人というソレよりも、もつと近い間柄を感じていたのだ。言い表すならばそれは、共感とか、共鳴とか。そんな薄暗い軽薄な言葉だろう。リグルがどう思ってるかは定かでは無いけれど、なんとなく、リグルは私と同じな気がした。

「いや、私が寄せていったのかな」

あはは、と笑って、酒を呷った。ともかくとして、これからは、なにかと忙しなくなるのだろう。それならそれで、いいやと思ひ、私はそのまま仰向けに、寝転ぶ。

「こうして見ると、なかなか新鮮な気もするけど」

短い睡眠を予感しながら、天井の木目を眺め続ける。瓶の中は未だ、たつぷりと、琥珀色に、満ちていた。

それから私は、何やら話し声で目が覚めた。工事がどうか、代金はどうのとか、そんなやり取りが戸口の方から聞こえてくる。とにかく起き上がって部屋を見渡すと、床の上に一台、テレビがあった。ラジオなどが普及し始めた昨今の人里でも中々お目にかからないソレからは一本の線が伸びていて、なにか壁に突き刺さっていた。うちに、コンセントなんてないはずだが。

「うわ、小銭ばかりだなあ。ひい、ふう、みい、よお……。はい、丁度ね。じゃ、またなにかあったら。それじゃあ」

「はい、ありがとーございましてー」

人の声や物音で起こされると、寝起きの割には音がハッキリと聞こえてくる。家の狭さもあって、リグルが戸口から部屋に向かってくる足音もしつかりと聞き取れた。

「なに、誰か来てたの」

「ああ、河童だよ。電気工事を頼んだんだ」

私はさして驚くこともなく、ふうん、と相槌を打って、床の上に置かれたテレビの周辺を見やった。テレビの横にはこれまた見慣れない機械があった。それは恐らく、DVDプレーヤーというものだろう。プレーヤーからはやはり何本か線が伸びていて、いずれもどこかしらに突き刺さっていた。未だ寝ぼけた私にとって、勝手に電気工事を敢行されたことや、河童の技術力の逞しさよりも、まず頭に浮かんだのは突き刺さった線のことだった。突き刺さった、という言葉が、やけに、無意味に思考に張り付いていた。

「あんだ、なに。これ、どこから持って来たの」

「拾ったんだ。無縁塚で。河童に修理を頼んでただけだし、いやあ、取りに行くのが面倒だね。この機会に、と思って、電気工事のついでに持って来てもらったんだ」

当然、此処ではテレビが見られない。リグルはきつと、プレーヤーを使って何かみようというのだろうか。

「ええなに、なんか、みるの」

「うん。この日の為に色んなところ回ってき、集めてたんだよ。無縁塚で拾ったものとか、拾った奴から買ったのとか、怪しい露店に並んでたやつとかさ。結構な量あるから、しばらく退屈しないと思うよ。ああ！ 楽しみだなあ！」

リグルが思いのほか本当に楽しみそうに話すので、じゃあ何故今まで一人で観なかったのだろうか、とか、修理を頼むだけ頼んで取りに行かなかったのだろうか、とか。その辺りの疑問が浮かんだ。しかし答えはすぐに出た。すばり面倒だったのだろうか。私は勝手にそう決めつ

けて、気怠さに苛まれながら上体を起こした。

「じゃあ、酒とツマミを買ってこないとだ」

「当然！ あ、一緒に行く？ 準備に時間かかったりするかな。僕はもう待ちきれないよ！」

イヤに上機嫌なりグルに感化されて、私はよっしやと目紛しく外出の準備を急いだ。

日々は槻を濁すよに 6

……。

「はえー面白い」

「なあ、オレンジは結局死んだのか」

「うーん、どうだろう。どっちでもいいけどな」

「言える」

「僕はホワイトが好きだな。こいつが居たから映画がオチた」

「オチたかな」

「ルーミア、お前は？」

「うーん。ブラウンかな」

「誰だっけ、そいつ」

「一番最初に死んだやつ」

「あー……？　ところで、どうだった？　この映画」

「なんだろうな、よく分かんなかったよ。面白いつて言ったら、馬鹿にされそうな感じの映画」

「そっか。いやー僕はさ、この映画。夢みたいな映画だと思ったよ」

「あー、夢。夢ねえ」

「なんか下らない話しててさ、場面が飛んで、ショッキングな状況。時系列が前後してぐちゃぐちゃ。でも、最後に死ぬのは決まってる。夢ってそういうもんだろう？　いつも、死ぬ瞬間には目が覚める。少なくとも僕はそうだった」

「なるほどねえ、んー。じゃあ、誰の夢さ。死ぬ瞬間に目が覚めるってんなら、オレンジの夢？」

「あー……。……ブラウン、かな」

「そりゃ、監督だからな。オチ考えてから喋んなさいな」

「いや、オチただろう」

「そうかな」

……。

あれから暫くが経ち、映画も見慣れて来た頃だ。私とリグルはいつ

も通りで床に敷かれた布団に座し、同じく床にくつついたテレビモニターに張り付いていた。家には椅子がなかったのも、私とリグルは大抵、動かない二段ベッドの下段の柵にもたれて、それを観た。リグルはごく稀に「ご贔屓さん」の所へ出向く程度で、他に外出といえれば酒とツマミを買いに行くぐらいだった。私の場合はそれだけだ。

そして、かつてリグルに対して感じていた軽蔑、或いは侮蔑、それかその両方は、もう完全になりを潜めていた。それは、気付けば私もリグルを笑えなくなっていただけのことかもしれない。マッチポンプで享樂を送るリグルと、その金で悠々と暮らす私。どちらにせよ、ろくでもないということは確かだった。

というかぶつちやけ、私の方が下じやないかな。あー、やだやだ。

「ところでさ、あんた。なんで無縁塚なんてところに行ったのさ」

「あー、探し物かな」

リグルは映画のディスクをケースにしまいながら答えた。ディスクをケースにはめるとカチ、と音が鳴るし、ケースをたたんで閉じるときにも同じ音がする。

「探し物ってなにさ」

「いやあ、失くしものがあってさ。それを探しに行っただよ」

また、カチ、と音が鳴る。リグルと暮らし始めてから意外だったことが二、三あり、この音はそのうちの一つだった。リグルは深く息を吸い込んで、吐き出した。灰色をした煙が部屋の薄暗さに溶けて行く。意外なことに、リグルは煙草を吸っていた。別に、リグルの楽しいことに貪欲な、一種の軽薄さを感じさせる性格から考えれば、それほど不自然ではないような気もしないではない。しかしリグルは虫の妖怪なのだ。勝手なイメージには他ならないけど、虫の妖怪は煙が苦手なものだとばかり思い込んでいたのだ。けれど、リグルが初めて懐から煙草を取り出した際に気になって尋ねてみたところ、苦手だよ、なんて言っていた。謎は深まるばかりである。

「それで？ 見つかったの、その失せ物は」

「うーん。あそこってさ、要は忘れられたものが落ちてるわけじゃん。一瞬、見つけられたと思ったんだけどねえ、手を伸ばそうとした途端、

消えちやった。それから、なに探してたかすら思い出せないけど、代わりにコレが手に入ったから。いいんだ、別に」

リグルは言いながらプレーヤーの電源を落とした。私は私で、リグルの左手の煙草から伸びる煙が消えていくのを眺めつつ、ふうん、と口を動かした。

「じゃあまた、少し行ってくるよ」

「あいよ。酒はいつものでいいんでしょ？　つまみ、なんか食べたいのある？」

聞くとリグルは、特にないよ、と言つて、そのままふらふらと部屋から出て行つた。

「特にない、とか言うわりに、文句言うんだよなあ」

下段のベッドにてきとーに撒かれた金をてきとーに握つて、私も家を出た。

外は肌寒かった。木々はすでに葉を落とし、秋は終わりを迎えようとしていた。外気は冷たく、冬服を売ったことを後悔させる。自分の体を抱くように、二の腕辺りを互いの腕で掴んで、うとおの間辺りの発音で唸つたところで、白いシャツの袖口は私に心許なさを運ぶのみだった。

ぽつり、ぽつりと、人とすれ違う。その中から、一等暖かそうな服を着たのを見つけて、私は心中でそいつの身ぐるみを剥ぎ、着た。やはり寒さは拭えずに、私は雲の薄い、秋空の下をとぼとぼ歩いた。

目的の品を買い揃えて、私はまたまた道を歩く。婆ちゃん営む酒屋は未だ開くことはなかった。私は仕方なくあの男が店番をする酒屋に行ったが、男はやはり左上辺りを見ながらぼんやりとしてあたし、私は右上の方を見ていた。その後、適当な店でてきとーなつまみを買った。両腕に袋を提げているせいで、さつきみたいに体を抱くことができないので、とても、寒い。

見上げれば、空は相変わらず白かった。雲を引き延ばして、引き延ばして、引き延ばし続けたものをいくつかばら撒けば、きつとこういう白になるのではないか。そんなことを考えると、私は猛烈に酒が飲みたくなつたし、映画が観たくなつた。

今にも雪が降りそうだから、冬の映画がいいな、なにか、ちようど良さそうなタイトルはないものか。リグルが帰ってきたら聞いてみよう。と、そんなことを考えていると、不意に、見覚えのある格好をした人物が向こうから歩いてきている。向こうも私に気がついたよううで、少し駆け足で向かってくる。どこか嬉しそうな面持ちでこちらへ向かってくるミスティアを見て、私はなぜか、強盗団に潜入した捜査官のような気分になった。

「ルーミア！ 久しぶり、元気だった？」

「うん。元気元気。ただちよつと寒いけど」

「あ、ほんと！ こんな寒いのに、上着一枚じゃ風邪引いちやうよ」

ミスティアが自身の羽織る上着を脱ぎこうとするので、私は慌てて制止した。

「だって、寒いでしょ？ だいじようぶなの？」

「うん。だいじようぶだいじようぶ。すぐ帰るからさ」

言うと、ミスティアは、そっか、と少し寂しそうな顔をした。私はハツとして、何かちようどいい話題を探した。

「あ、いやえつと、そうだ。ミスティア、最近何やってるのさ。まだ、歌うたってるの？ そうだ、ずっと前に会ったとき、バンド組んだって言ってたよね。なんだっけあの、山彦の子とさ」

「……うん、まだやってるよ。バンドね、最近調子良いんだ。八橋さんって人がいてね、いろいろ教えてくれたりして、絶好調って感じ。……チケツト、あるんだけど、よかったら……」

ミスティアは相変わらず、おずおず、として言う。そうか、まだ、やってるんだ、歌。なんだか少し安心する。なんてことを考えながら、私は一方でチケツトを受け取らないための言い訳を考えていた。「いや、そのう。私、最近忙しくてさ。チケツト貰っても行けるかどうかかわかんないし、行けなかつたら悪いからさ。その分、他の人にあげてよ」

「……そっか」

……。

「いや、でもさー。すごいよねミスティアは。子供の時から好きだっ

たものまだ続けててき、なんか、こつちまで勇氣湧いてくるよ。あはは、ちよつと言い過ぎかな。でも、ほんと、なんか嬉しいんだ。ミスティアが歌続けてるの。とにかくさ、頑張つてよ、応援してるんだから。ね！」

ミスティアが「うん、ありがとう」と返した後、もう一度、頑張つてね、なんて言葉を吐いて、私は歩き始めた。しばらくして振り返るってみると、ちょうど、ミスティアも振り返って、目があった。私は軽く手を振って、前を向いて、歩いた。

「応援してるんだから、か」

家までの道筋の中、囀捜査官に自分を重ねてみたり、右上を眺めたり、積雪を願ったり、した。

……。

日々は槻を濁すよに 7

リグルも酔うと口数が減る。逆に、酔って口数が増えたときのリグルは最悪だった。口調そのものは上機嫌なのだが、話す内容は大抵不機嫌なものが多かった。「河童の殺虫剤がヤバイ」だとか、「河童共が憎い」だとか。一番酷かったのは、やはりリグルが一番酔っ払ったときのことだった。映画を観終わって呑んでいたら、リグルが唐突に妙な話を切り出して、そこから訳が分からなくなった。

思い出せる限りでは、

『なあルーミア。おまえ、ベニクラゲって知ってるか』

『ああ、なんとなくね。あの死なないってやつでしょ』

『あいつら死なないでさ、増えるんだぜ。どう思うよ、ルーミア』

『いや、別にどうとも』

『どうともって！ このままだといずれ、海はベニクラゲだらけになって、ベニクラゲのものになってしまうよ。僕はどうしたらいいのか、ああ！』

『ここには関係ないでしょ。あんた少し飲み過ぎじゃない』

『だいじよぶ、だいじよぶ。ときに、ルーミア。セックスってさ、どう思うよ』

『お酒、残りは私が飲むわ』

『セックス、アレはさ。感染症のリスクがあつて、子供が出来たら金が掛かるだろう？ ああ、それで。ルーミア、里で一番多い苗字って、知ってるか？』

『呉』

『え、マジ？ どーしよー、呉だらけになるよう』

『話の続きは？』

『ああ、そうだ。だからさ、要はさ、子持ちの人間にタバコを注意されたくないってはなし！ 歩きタバコはさ、そりゃダメだけど。タバコ吸ってるならやめたほうがいいよ、お金は減るし、悪影響だし、って、なんなんだよ。余計なお世話だよ！ 僕は煙が苦手だし、お金なんて

『どうだっついていいんだ!』

『つまみも残り、食べていいでしょ』

『ああ、そうそれで。世にはさ、あーていすと、なんて呼ばれる連中がいるけどさ。あれはダメだよ。映画でみたんだ、本でも読んだ。雑誌でもみたし』

『なにがどうダメだったの』

『不幸の、不幸の中毒なんだ。悲しいこと辛いこと悔しいこと虚しいこと、それを良しとしてるんだ。僕は嫌いだね、報われない努力なんて』

『ミスティアは?』

『みすちー……あいつは、あいつは、好きだよ。もう、僕はどーしたらいいのか、ああ』

『寝たらいいわ』

『……うん、そーする』

こんな感じだった。

ときに、言葉を吐き出すのは大抵その言葉を飲み込めなかったときだ。愚痴なんかを想像するとわかりやすい。吐き出す相手によつてはそれを食べやすく刻んでくれる相手もいるが、えいやと飲み込んだそれが薬であるとは限らないし、毒であるかもわからない。あるいは毒でも薬でもない、毒にも薬にもならないものかもしれない。ただ言えるのは、毒も薬も、大概苦いということのみだ。だいいち、今更感情の話なんてしたくもない。

私たちの日々は概ねこんな具合に流れていたが、しかし家でじつとしているばかりではなかった。私は家でじつととしていたかったのだが、リグルがそれを妨げた。だから私は、現にこうして雪降りしきる空の下、雪玉などを丸めているわけなのだ。互いにどこかに隠れて、先に相手を見つけて雪玉をぶつけければ勝ちという、どう考えても待ちが有利なこのルールはリグルの考案だった。リグル曰く、冬っぽいことできればなんでもいい、とのことだった。勝負はどちらかが勝するまで続く。互いに冬服を所持していない私たちにとって、もはや勝敗はいつでもよく、さっさと勝負を終わらせることが肝要だった。は

ずなのに。現在私は4勝4敗と、くだらない経過に至っている。特に何かを賭けているわけでもないが、意地の張り合いが続いたというわけだ。

「あいたっ」

後頭部に衝撃が走り、今まさに決着。私の負けだ。もうなんでもいいから、早く帰りたい。

最近なんだか暖かい。そんなこんなで春は終わり、気付いたらもう夏だった。蒸し暑い部屋の中、肌にシャツを張り付かせながらリグルのタバコを拝借していると、二段ベッドが悲鳴をあげた。リグルが起きたのだろう。リグルはいつも、私の後に起きてくる。バレて困るということもないので、私はゆっくりと煙を吸って、ゆっくり吐いた。

「おはよ、ルーミア」

「おはよーさん」

今日何観る？ 覚束ない身振りでラダーを下るリグルに尋ねる。リグル動くから、部屋に差し込む僅かな光芒の中、埃が舞っている。「え、っとね。今日は、どーしよつか。よっ、と」

リグルは最近、仕事に行かない。正確に言えば去年の冬、ちようど二人で雪合戦などに興じた辺りから、リグルは仕事に行かなかった。理由を聞けばその都度、冬だからとか、春だからとか、夏だから、とか。毎度、要領の得ない答えが返ってくるのみだった。

「うう、う、ん、うーん、と」

リグルがラダーを使って、猫のように体を伸ばす。背骨等の軋むくぐもった音が、私の聴覚にさえ聞こえてくる。リグルがこの柔軟体操をやる日は、大抵外出を提案する日だ。雪合戦のときもリグルは起き抜けにこれをやった。だから私がこれまでのことを回想できる時間は残り僅かだろう。あと十秒もしないうちに、リグルはその口を朗らかに開くに違いない。

去年の冬、私たちは一日だけ酒を飲まなかった日があった。腰の悪い婆ちゃんの店も例の男の店も閉まっていたのがその日だ。その日私はいつものように右上らへんを見やりながら腰の悪い婆ちゃんの店へ向かった。するとやはり、婆ちゃんの酒屋は閉まっていた。婆ちゃんの酒屋が閉まっているのは、その時には既に当たり前のようになっていた。だから私はいつも通りに、仕方なくあの男が店番をする酒屋に行ったのだが、閉まっていた。酒を買わずに帰ってはリグルに

顔向けができない。そう考えた私は、しばらく待った。数刻、待ったと記憶している。そして、空に朱が差した頃、男が喪服を着て帰って来たので、その日の酒はそこで諦めた。後日、男は聞きもしないのに教えてくれた。腰の悪い婆ちゃんは腰の悪いまま、逝ったそうだ。

それからもう半年も経つが、やはり婆ちゃんの酒屋が開かれることはなかった。親族間でどんなやり取りが為されたかは分からないが、きつともう、二度と開くことはないのだろう。外でけたたましく鳴く蝉が、聞きもしないのにそれを私に再確認させてくれたわけだ。なんともまあ、殊勝なことだ。

「よし、ルーミア。早速買い出しに行こう。昨日の話、覚えてる?」
二度、首を鳴らしてタバコに火をつけたリグルが口を開いた。

「昨日の話? なんだっけ。ああ、どの作品のゾンビが一番強いかってはなしだ」

多分、違う。幻想郷にショッピングモールはないし。

「違うよ。夏らしいことしようって言ってただろう? バーベキューだよ、バーベキュー。水辺でさ」

「……ああ、言ってたかも」

本当は覚えていた。霧の湖、その湖畔でバーベキューをしようというリグルの提案は、忘れられるはずもなかった。私はもう何年も霧の湖に行っていない。というよりも、避けていた、という方が正鵠に近い。何故なら「特別な機会」がなかったからだ。しかしだからと言って、今回の「バーベキュー」などが特別な機会足りえないことは、リグルも承知しているだろう。

だから、

「いやあ楽しみだね! ちょっと良い肉買っちゃおうか」

「いやいやこういうのはさ、やすすいのがいいのよ、やすすいのが」

私たちは、イヤに元気だった。

「おいルーミア、野菜も買わないと」

「正気? 肉だけでいいでしょ」

「お前の気持ちは正直分からんでもない。けどルーミア、お前が肉のみを所望する理由を考えてみるよ」

「野菜が邪魔だから……あー」

「そう、野菜が邪魔だから、肉が欲しいんじゃないか。な、野菜は必要だよ。野菜も買う、いいね？」

「うーん。まあ、あんたの金だし、好きにしたらいいわ」

食材を買い込んで、湖畔に来た。リグルが自分の住処からそれっぽいグリル（私は悪くない）を持ってきたところで、バーベキューが始まった。

「おお、いいね。さつそくジュージューいつてるよ、なあ。湖面が風に揺れてキラキラして、うーんなんとも夏っぽい！」

「全くだなあ！ 吹く風一つとっても夏だね、いやはや！」

私にとって懐かしい湖畔の景観は、恐らくリグルにとっても懐かしいものに違いないのだろう。互いに酒を持参しなかったのがその証明に思えた。網の上では食材たちが競うように身を焦がしていく。なんとも、もどかしい気分である。

「ああ、もどかしいなあ！ ときにルーミアよ、お前、一口目はどうするよ」

「二口目！ 大事だね、一口目は。でも、やっぱり肉だよ。肉しかない」

お、もう食べられるぞ、とリグルが肉を箸で摘む。ここで、リグルと私は調味料を買い忘れたことに気がついたが、そんなことは私たちにとってさしたる問題ではなかった。私もやけになって、焼けた肉を口に運ぶ。

「うん、安い肉の味がするよ。調味料がなくても全然いけるな。なんてつつたって夏だもの」

「ほんとほんと。湖畔で夏の風を感じながら肉を食べる。なんて夏らしいんだ！」

私は尚更、一刻も早くこの馬鹿げた催しをやめたかった。それは、リグルもきつと同じだろう。

「ははは、楽しいなあ、ルーミア」

「ほんと。愉快で仕方ないわ、あはは」

その後も、二人して「ははは」と笑いながら箸を動かした。野菜も食べたし、肉も食べた。ただ、そのうちに口数は減っていった。無論、

互いに食べることに専念したとか、そういうわけじゃない。妙な沈黙の中、私たちはきつと、互いに、同じ言葉を吐き出せないままだった。

「おいおいルーミア、肉が焦げちゃうぜ。早く食べないと」

「わかってるよ。そつちこそ、野菜ばっか食べてさ」

「いやあ最初に肉ばっか食べちゃったから、ちよつと胃がやられちゃってさあ、ははは。ははは……はあ」

リグルのため息によつて、一瞬にして、空間が静まり返る。空気は重たく、息を吸えば肺らへんがどこかひんやりとするのを感じた。安っぽい畜肉の水分がしみ出して、網の上で蒸発する音だけが、私とリグルの間を滑っていく。

「……なあ、ルーミア」

先に口を開いたのはリグルだった。リグルの声は、普段の軽い声色とはうつつかわつて真剣な色を帯びていたから、私は気が滅入った。リグルが何を吐き出そうとも、私にはそれを飲み込めるよう刻んでやることはできないし、何より聞きたくもなかった。

「帰ろつか」

私の口から溢れた声は、思うよりずっと軽い声色をしていて、自身、驚いた。リグルはおずおずといった具合に、うん、と頷いたけれど、下を向き眉を潜めて、視線を泳がせている。どうやらまだ、何か言いたいことがあるようだ。

「……違うんだ、僕……。僕さ、あの頃のこと」

「いいから、帰ろうつて。いいからさ」

やはり私は、リグルの言葉に懺悔めいた予感を感じた。私はやはり、それに付き合うことはできない。リグルのことは嫌いじゃない。友人だし、一緒にいると楽しい。ただ、一緒にいて楽しくなければ、当然、一緒にいたいとは思わない。そんな、当たり前のような、血の通わないような、どちらともつかぬコトの是非を自問しているうちに、リグルは、うん、と、頷いた。

家に帰って、私たちは酒を飲んだ。それは、いつもより緩やかなペースで進んだけれど、いつもよりずっと、長い間、飲んでいたように思う。夕暮れ、外にポツポツと雨が降ってきた。雨は時間が経つに

つれ勢いを増し、一向に止む気配は見えなかった。

そうして、気がつけば眠りに落ちていた私は、大きな雷の音で目が覚めた。時刻はわからないが、リグルと共に瓶を空にしたのが夜だったから、恐らく朝だろう。私は布団を頭から被って眠っていたらしく、瞼を開けど視界は真つ暗だった。外から地面を鞭打つような激しい雨音が聞こえてくる。布団からはみ出た足を布団の中へおさめようともぞもぞさせると、爪先が何か人体を蹴った。リグルはどうやら胡座をかいているらしく、私の爪先が蹴ったのは太腿のあたりだ。しかし、蹴られた本人は声を上げることもなく、特にこれといった反応を示さなかった。

いや、違う。声は上げていた。起きた時から、雨音に混じって、リグルの音が聞こえていた。それは小さな声だったけど、この狭い部屋の中、聞き取るには十分な音量だった。

『じゃあ久し振りに、チルノちゃんのところでも、いかない』
「だからさ、今更鬼ごっこやかくれんぼなんかしたって、楽しいわけないって、言ってるだろ」

布団の中から隙間を作りリグルを見やると、リグルは灰皿辺りの遠くを見つめながら、空いた酒瓶に手を添えて、その口を小さく動かしていた。

「ああお婆ちゃん、待って、待ってください。お婆ちゃん、もしかすると部屋に害虫などは出ていませんか？ ええそうでしょう、そうでしょう。先程御宅の玄関先を通りかかった際にですね、妙に気が掛かったんですよ。なんだかやけに目に付いた。きつと、虫の知らせというやつでしょう。ときにお婆ちゃん、ワタクシ害虫駆除を生業にしていますこういうものです」

「人間も、意外にチョロいなあ」

『あたいの家より、よつぽど上等だ』

「ええ？ お婆ちゃん、また虫が出たんですか？ おかしいなそんなはず、ああいやいや、やらせてもらいますよ」

『トランプで決めようよ』

「え、お婆ちゃん、また虫が出たの。わかったわかった、じゃあ、お昼

頃、お茶を買っていくからさ、待っててね」

『婆ちゃん、腰悪いまま逝っちまったとよ』』

「次から集場所は……。『雪合戦であたいに勝とうなんて』……。あ
あ、暇だな、何か楽しいことはないものか……。』……。』……。』

妖怪の体と心は人間のそれほど密接でなかったり、ときに密接であつたりする。あの頃、人間の体と心の仕組みについて必死で学習したけれど、分かったのは妖怪の心身の成長、その不可解さのみだった。だから、私は一つ、意味もなく。わざとらしく自然な寝返りをうって、そのまま眠った。起きて酒を買いに行った際にようやく、私は昨夜の雨が酷い嵐だったことを知った。

日々は槻を濁すよに 9

そんな日常にも次第に飽き、私はまた日柄里をふらつく日々に戻っていた。プレーヤーやらモニターやら、吸い殻の詰まった灰皿やらは、まだ私の家に在ったが、リグルは段々と、私の家には帰らなくなっていた。

里をふらついていたら、ミスティアに会った。ミスティアは歌をやめるらしく、私に最後のライブのチケットを手渡した。ミスティアの最後のライブとあつては受け取らずにいられなかつたチケットは今も二段ベッドの下段に置いてある。どうやらライブは明日らしい。私はどうも、行かなければならないような、いよいよもって終わりの日が訪れてしまったような、何かそんな、後悔に似た焦燥を胸中に感じていた。

とはいえ。

「とはいえ」

「何かしようとも思えないけど」

「リグルは帰ってこないし、映画ももう面白くないし。酒を飲むほど体調も優れない。これが、暇というやつなのだよ。全くもって、諸行は無情である。なんて、私は何を言ってるのやら」

『やればやるほどつままないよ』ねえ。あいつもあいつで、悩んでいたってわけだ。あー、どーも、ダメだな。素面のはずなんだけど。……素面だからかな」

『私達も帰ろつか』か。なんだか、昔のことばかり思い出すなあ。あんなこと言わず、二人でチルノのところでもいきやよかつたかな。いや、どーだろ」

「チルノ、チルノねえ。あー、ダメだ、ダメだな。ミスティア、結局歌やめるのか。なんだかなあ。……ああ、人間の増える理由は分かったよ。『では何故、妖怪は成長するのか。』教えてほしいよ、慧音せんせー」

「公共、交響、孝経、虹橋。……いやあ、どうもさつぱりだな。あの人さては、思いつきでテキスト言っただけなんじゃないか。なんか、あ

りえそーで、ははは。笑える」

「ああそーいや、大妖精なんてのが居たなあ。たまにしか、遊ばなかったけど。いやでも、いい子だったな……たしか。あの子らは、いや、みんな……ああ、もう。ダメだな、こりや」

……。

私は、かつてリグルが指定した「次からの集合場所」に来ていた。全くもって馬鹿らしいが、ここに来ればまだ終わらない気がしたのだ。何が終わらないのかはわからないが、とにかくそんな気がした。晴れでもなければ雨でもない里の白昼を抜けるのには苦労した。思いもよらず半分ほど残っていた瓶の中身を空にしてしまったほどだ。

木々に囲まれた森の中。私の視界は殆ど枝葉に覆われていて、僅かな木漏れ日に照らされた白い靄は湿気を孕んでいる。汗と湿気で額に張り付いた前髪を少し整えて、私はまた、歩き始める、

「ここ、昔はもう少し明るかったと思うけど。ああ、木もでかくなったのか、そりやそうだよな。背も伸びてて、気付かなかった」

口から出る言葉よりずっと、内心は落ち着かなかった。こんな所を歩いていると、今にもチルノがそこら辺から飛び出して来そうで、ドキドキしていた。

ああ、今そんな事が起きたら、私はきつと声を上げて驚いてしまうかもしらん、およそ起こり得ない空想をへらへらと揺蕩わせていると、目の前を背の低い妖精が左から右へと横切った。私が思わず、あ、と声を上げると、妖精もこちらに気付いたようで、妖精は私の視界の右らへんで足を止めた。妖精は私をじつと、見つめている。

「あ、あのさ。今、なにやってんの？」

先に口を開いたのは私の方だった。酒のせいで、少し呂律が怪しかったかもわからない。とにかく私はへらへらと、訝しげに私を見つめる妖精に、そんな言葉を投げかけた。

「かくれんぼ」

妖精はそう言って、森の深い方へ走り去った。

「……あー、やっぱり……」

一人残された私は、そうなのか、なんて言葉を舌の上で燻らせた。

枝葉に覆われた森の空気は、嘘のように澄んでいて、あの妖精の髪の色は、私が引き延ばして来たあの夏と、同じ色をしていた。

家に帰ればリグルがいた。てつきりもう帰ってこないものかと思っていたけど、そんなこともないらしい。まあ、さして驚くこともない。

「おかえり、随分疲れてるみたいじゃん。……チルノにでも会った？」
リグルは窓のそばの壁にもたれて、タバコを吸っていた。窓枠に置かれた灰皿にぐちゃぐちゃに丸められたタバコのパッケージが見えるから、どうやら最後の一本らしい。

「私さ、知ってたんだ。本なら何でも読んだから、妖精の一回休みがどんなもんか、知ってたんだよ」

……。

タバコの火を消して、リグルは窓を閉めながら口を開いた。

「あいつ、やんちゃだったからな」

そう言って、リグルがはははと笑うから、私もつい笑ってしまう。

「覚えてるはず、ないね」

「全くだよ」

乾いた笑いを互いに交わしたのち、リグルは一息置いて話し始めた。

「僕もさ、薄々、知ってはいたんだ。ほら、大妖精っていただろ？よく遊んだじゃん、たまに」

「あー、覚えてる。よく遊んだ。たまに」

「でもあいつさ、住んでるところ絶対教えてくれなかっただろ？」

「気にしてたの、あんただけだったけどね」

「いやあ、それでさ。気になって、つけてみたことがあったんだよ、あとを」

「あんたらしいわ」

「それで、あいつの住処までつけたんだ。もうどこだったかは忘れちゃったんだけど、場所なんてどうでもよくてさ。部屋の中が凄かったんだよ」

「入ったの」

「うん、後日出かけたのを見計らって。いや、何が凄かったってさ、日記だらけだったんだよ。紙もあつたし、紙じゃないのもあつた。とにかくすごい量だったよ。それで、悪いかなとは思ったけど、何冊か開いてみたんだ。そしたらさ、書かれてる内容が、大妖精の日記のはずなのに、まるでチルノの日記みたいなんだよ」

「なるほどね。やんちゃだもんなあ、チルノは」

「そう。だからさ、それからさ、その……何となく、つまんなかったんだよ。ずっと……いやあ、僕ね……悪いと思ってるんだ。お前にも、ミステリアにも。……みんながこんなに集まらなくなったのは、あの頃の僕のせいだよ。ごめん、ごめんな」

「そんな、話のついでに謝られてもなあ」

「いやあ……ははは」

「冗談だつて、気にしないよ。なにより、もう終わったことだしね」

「……うん、そうだね。……明日、ミステリアのライブ、どうする？」

「ルーミアもチケット貰ったんだろ？」

「あんたも貰ったわけ。うーん、そっか。じゃ、行こうか。明日。最後だしね」

「うん、最後だ」

話終わると、リグルは部屋にあつた自分の荷物を纏めて帰っていった。とはいっても、プレーヤーも金も、もういらなから、とすべて置いていったから、リグルが持ち帰ったものと言えば自身の僅かな衣服ぐらいなものだった。二段ベッドの下段にばら撒かれた金は以前より随分疎らになっていた。私にとつてももはや必要とは思えなくなったそれらを処分する気も起きず、私はただただ、引き延ばしすぎてぶつつり途切れてしまった水色の先の、空白をイメージし続けた。横たわる視界の不可解な明瞭さが曖昧になった頃、私は意識を手放した。

そして、電気をついた明るい部屋の中で暮らす、妙に生活感のある夢を見たけれど、ただそれだけの夢ですら、今の私には寂しく思えたのを、覚えている。

月の出ない夜だった。妖怪の山、その山中の、とりわけ平らで開けた場所にライブステージはあった。ステージは四つの照明で照らされていたけれど、そのうち一つは非等間隔で点滅を繰り返していたし、一つは完全に切れていた。ステージの上には既に機材が置かれていた。ドラムセット、ギターアンプ、ベースアンプ、PAスピーカー等々。出所不明のそれらは私に酷くそれっぽさを感じさせたが、ステージ全体で見ると、やはりどこかチープだった。しかしそんなステージを取り囲むように、そこそこの人集りがザワザワと蠢いている。客席から遠い後方にはどこから聞きつけたか河童たちが屋台を出しており、屋台の前にはテーブルやら椅子やらが設置されていて、ライブ会場はもはやちよつとしたビアガーデンの様相を呈していた。

椅子等に座り酒やらフランクフルトなどを食らってる奴らもライブを観に来たことには違いないのだろう。しかし、ステージ前で何かつんのめってる奴らこそが、とりわけファンと呼ぶに相応しい連中なのではないかと、私は思った。

「ビールでいいよね、フランクフルトなんかも買ってきたよ」

リグルは河童達の屋台から持ってきたそれらをテーブルの上に置いた。私たちはステージ前から後方の、ビアガーデンめいた席からミスティアのライブを見届けることにしたのだ。

「いや、一曲ぐらいいは素面で聴かないと。なんか悪いでしょ」

たしかに、と言って、リグルはフランクフルトに噛り付いた。ステージ前の連中はそれなりに落ち着きを持って騒めいている様子だけれど、ここら辺に座って酒を飲んでる奴らは既に落ち着きを逸し喚いている。無関係かつプライベートな話で盛り上がっている奴らが凡のウェイトを占めるこの近辺だが、それでも所々から「鳥獣伎楽」という単語が聞こえてくる。

「結構、人気だったみたいだね」

「ほんと。あ、リグルあんた、一曲ぐらい素面でつて言つたじゃん」

「いやあ、フランクフルト、食べちゃったらもう無理だよ」

「も、いいや。私も飲んじゃえ。……たまらん！ もう一杯買ってよ」

「えー、今度はそっちが買ってくる番だろー。僕はさつき行ったし」
「行ってきて行ってきて、おーねーがーいー」

ビール一杯程度では酔わないけれど、私たちは変なテンションだった。リグルがどうかは知らないが、私はなんだか、心が軽くなって、軽くなりすぎて、スースーするのを感じていた。それは、まあ、清々しいといえば清々しい気分には違いない。違いないけれど、やはりどこか違うのだろう。脳内で言葉を探したら、何も無い、というのが見つかった。これはなかなか、合致しているような気がした。

どちらがビールを買ってくるかを、リグルとジャンケンで決めることにした。リグルがパーを出して私がグーを出している最中、私はジャンケンの勝敗よりも席を立つ億劫さよりも、夜風の匂いを感じていた。それは私の体を通り抜けて、心を撫でるように滑り抜けていく感覚だった。あー、今日はなんだか妙に抽象的な感慨ばかりが起る。そんなことを考えていると、席に着く私たちに声をかける者がいた。

「あ。あんた達。あんた達アレでしょ？ ルーミアと、リグル・ナイトバグ。ミステイアのおともだち」

「おねえさん、だあれ」

リグルが無表情に笑いながら尋ねる。面倒だから私は黙っていいうと考えた。

「私はおねえさんじゃなくて妹。九十九妹よ、知らない？ 結構有名なんだけど」

「あー、バンド関係の人だ」

「そ、バンド関係の人。昔は琴など爪弾いてたけど、最近はギターを弾いてました八橋と申しまして。まあ、最近つてのもちよつと昔だけだね。ほんとに知らない？ ねえさんと私と堀川雷鼓のあのバンド。有名だったでしょー？」

「あ、雷鼓って人は聞いたことあるかも」

「でしょー？ でもうちは“ウィズH”じゃ無かったのよ。元々三人

で出来たバンドだったんだから」

「ふーん。なるほどなあ」

八橋と名乗るその人は話も半ばにどこかへ行ってしまった、かと思えば、ジョッキを三つ持つて戻ってくるなり私の隣の席に着いた。

「一杯ごちそうするわ、あの子今日も調子良さそうではなかったし、飲まなきゃムカムカして観れないわ」

九十九八橋の口振りを聞いて、私はようやく、以前ミスティアと交わした会話を思い出した。なるほどこの人はミスティアの先輩のような存在にあたる人物なのだ。そうだ、ちよつと、聞いてみようかな。そこまで興味はないけど。

「ねえ九十九さん。ミスティアの先輩なんですよ？ あいつ、なんで歌やめるの」

「九十九さんて。それじゃねえさんと区別つかないじゃない。八橋さん」でいいわ。あの子が歌をやめる理由ね、えつとたしか……」

瞬間、ステージから音楽が流れた。それなりの音量で鳴らされた音楽に九十九八橋の語る“ミスティアが歌をやめる理由”はかき消されてしまった。しかし、九十九は気にせず話し続けている様子だったので、私は何も聞き取れないまま、適当に相槌を打ち続けた。そのうちに、ステージ前から歓声が上がった。どうやら演者が出てきたらしい。ステージを見やると、ギターを抱えたミスティアと、ベースのサングラスのちんまいのと、それと何故か、堀川雷鼓が現れた。あの尖ったサングラスのちんまいのが、ミスティアの言う“響子ちゃん”なのか、私は悩んだが、恐らくその人で間違い無いのだろう。多分。リグルは一組目にミスティアが現れたのが意外だったようで、大量のSEの中必死になって、

『トリじゃないんだね！』

と私に伝えてきた。知らん。

SEの途切れた頃、九十九が口を開いた。

「ほんとはトリのはずだったんだけど、断ったのよ、あの子」

リグルがほえーと相槌を打つと、九十九が早口になって喋った。

「お、始まるわ。まあ今日はMCからでもいいけど、うわ響子が喋るの

か。あの子から入ると、長くなるのよね」

九十九が喋り終わると同時に、ステージ前から何か生温かい笑いが起きた。どうやらマイクの電源が切れていたらしく、電源の切れたまま勢いよく第一声を発した「響子ちゃん」に対して起こった笑いのようだ。九十九の、

「あーあー、愛想ふりまいちゃって」

という眩きが、イヤに耳についた。

『あーあー、マイクテス、てすてす、マイクテス。え？ 河童さんともうやったって？ じゃあなんで電源切れてんのさ。全く。あー、えー、改めまして、どーも鳥獣伎楽です』

尖ったサングラスの「響子ちゃん」が挨拶の部分を妙に早口で捲し立てるとステージ前から歓声が上がった。テーブル席に着いたこちら辺のやつらも、おー、とか、うえー、とかそんな声を上げる。リグルは「おー」だった。

『えー今日は、私たちの、所謂解散ライブ、というやつで、実際は、活動休止なんだけど、まあ、解散ライブでも、さほど変わりはないね』語り口は訥々としているが、一区切り一区切りまでが妙に早口で、どうにもわざとらしい息遣いだ。それはきつと、長いバンド活動の中で響子ちゃんの見つけたスタイル、或いは敬愛する何者かの模倣なのだろう。どちらにしたって、人に歴史あり、という言葉は無遠慮に私の軽薄さを詰る。

『結局、最後までドラムは見つからずじまいだったよ』

その一声で前列あたりに起こった笑いに対し、八つ当たりにも似た軽蔑が浮かぶ。ああ、なんにしたってもう終わりだというのに、この期に及んで、私の振くれは直らないようだ。はは、それはそれで、人に歴史あり、ってことだろう。

『じゃ、あんまり長くくつちやべつてると、コワイ先輩に怒られるから。……最初だけ、湿っぽいのを一曲、私はこういうときに、そういう、湿っぽい曲をやるのはね、反対したんだけど。まあ、ここも今日限りで取り壊されるし、私たちも解散するしで、まあ、御誂え向きのやつでは——』

そこまで言うのと、堀川雷鼓がドラムを二度叩く。前列の生暖かい笑い声から察するに、二度の叩音には恐らく「話が長い」の含意があるように感じられる。ああ、どうも乗り切れない。これの、なにが面白いというのだろうか。

『ははは、怒られちゃった。こわいねえ、はは。……じゃあ、やろつか、ミステリア。……それじゃあらためまして、鳥獣伎楽。よろしくおねがいます』

限られた歓声と疎らな拍手と同時に、堀川雷鼓が等間隔のリズムを刻む。九十九を見やると、彼女はなにか感慨深そうに、また、愉しむような表情で、ステージの上を見つめている。視線を戻す際、対面のリグルと目を合わせれば、リグルはイヤに感傷的に、寂しげに、諦めたように、笑ってみせた。その頃には、ミステリアがギターを弾き始めていて、リグルの開いた口が何を言っていたかは判然としないが、それはおそらく「ははは」だった。私も、同じ顔をして、同じように発声したはずだ。

♪ Good bye my JAM

ステージの上、演奏された一曲目は赤かった。赤く、錆びて、きつと、赤褐色の鉄の球だった。極小の錆びた鉄球が、落ち着いた、等間隔のリズムの上を飴玉のように転げ回るような、そんな曲。歌詞の内容としては思い出の場所が消えることを皮肉たつぷりに歌い上げたニヒルなもので、抽象的なイメージに落とし所をつけるとすれば、取り壊しまで残りわずかなライブハウスに、ピツクの当たる部分以外が錆びついたギターが打ち捨てられている。そんなところだ。

曲が終わって、響子チャンがなにやらくつちやべっているが、私の心は賑やかな夜風に凧いでいた。それは、リグルも同じだったように、黙っていればいいものを、感慨深そうに腕を組む九十九に対し、なにやら問いかけた。

「ねえおねえさん、今の曲はさ、ミステリアが作ったの」

九十九はステージを見つめたまま笑い声を乾かして、言った。

「あの子たちはコピーバンドよ。オリジナルも無理矢理作らせたことがあるけど、どうも、才能ないんだなあ、あの子らは。……あはは、ほ

んとに、全然観に来てなかったってわけね」

私たちは無感動に気まずい笑いで相槌を打って、顔を見合わせた。リグルの目は相変わらずに無感動で、私にしたって、きつと、それは同じだろう。ただ、賑やかで寂しい喧騒の中で、終わりを悟った。

そのあと、ミスティアたちは打って変わって、賑やかなだけの曲を演った。九十九日く青春パンクというジャンルで、ミスティアたちが随分世話になった曲目らしい。夜に靡く青春パンクの爽やかさは虚しさも内包しているように思えたが、実際のところはわからない。ミスティアのよく通る歌声が空騒ぎであるか、青春との永別であるかは、前列あたりでしっちゃかめっちゃか汗をかいているやつらと、したり顔で酒を飲む九十九の方が、私たちよりもよっぽど詳しいのだろう。

そのうち、九十九が消えた。どうやら次の演者は奴のバンドらしい。リグルも、判然としない狂熱の中へ飛び込みに行った。どうせ最後だし楽しんでくるよ、とかなんとか、エクスクラメーションマークを付けて。空っぽの心で身体を動かす才能は、なるほど、リグルの方が上らしい。

どうも、やってられない。直視に耐えずステージから目をそらすと、会場の端の方、見覚えのある妖精が腕を組み、演奏を見つめていた。妖精の周囲には、おそらく妖精に拐かされて来たであろう悪ガキどもがよくわらなさそうな顔でステージを見つめていた。仁王立ちで腕を組むリーダー面の妖精は私の視線に気付くと、組んだ腕のまま、顎でステージの方を指し示した。まるで、ちゃんと見ておけ、とでも言いたげな顔で。

しかし、私は妖精を眺め続けた。妖精はもう私なんか気に留めることもなく、ミスティア達を口を結んで見つめている。その表情は、ミスティアにとって最後の歌と演奏を、見届けてやろう、そんな表情にも思えた。

なんて、はは、私は本当に、どうしようもない。

リーダー面した妖精の隣にはこれまた見覚えのある妖精が立っていて、私に気づいたそいつが、困ったような笑みを浮かべて、手を振

るものだから、私も同じように手を振り返して、それっきり、妖精たちから目を逸らして、仕方なく、演奏を眺め続けた。やはり、夜の匂いが、鮮明だった。

「ああ、よかったね。ミスティア、こんなにかっこいいことやってたんだ」

「ほんと。もっと、観に来てればよかった」

「それは言いつこなしだろ」

「うるさいな、ステージ前まではしやぎに行つたやつには言われたくない」

私たちは空しく笑い合いながら、有象無象の演奏が全て終わるまで、ぬるいビールを飲み続けた。全ての演奏が終わつたのは空が漆黒から薄青へと推移した頃で、おそらく、大団円というやつだったのだろう。

「終わったね」

「うん。帰ろっか」

会場の人々はなにかをやり切つた様子各々疎らになっていく。妖精達も、もういない。河童は軽薄にも既にステージの解体を始めて、前列のやつらはその様子をしみじみといった具合に観賞していた。

「結局さ、ミスティアはなんでやめちやうのかな。あんなに楽しそうに歌つてたのに」

「さあね。いろいろ、あつたんでしょ。私たちには分かり得ない、いろいろがさ」

しかし今、前列のあたりからはフォークギターの落ち着いた音が朗らかに響いて、それに混じつて、楽しそうな歌声が聞こえていた。それは間違いなく歌をやめるはずのミスティアの声で、果たしてどういう気持ちで歌っているのか、慮るのは不誠実な気がするからしないけれど、不思議と、悪い気はしなかった。

「僕たちもうたいながら帰ろうか？」

「いいね。むしろもう、バンド組んじやお」

「ルーミアお前、天才かよ」

「私がボーカルね。あとは全部あんだ」

日々は槻を濁すよに 11 (了)

それから私は教師になった。初授業の日、慧音先生の見守る中、私は鼻水を垂らしたクソガキどもに言つてやった。

——今日からこの寺子屋で勉強を教えるのは慧音先生だけじゃない。自己紹介までに、名前はルーミア。まあ、私の名前なんて覚えなくたっていい。ただ一つ、お前らに言つておくことがある。いいか、一度しか言わないからよく聞けよ。んっんー。……いいかおまえら、学問とはずばり、我々の世界のクウキョウなんだ。

——意味はわからずじまいだったが、目的はクソガキどもに教養を授けることではなく、それは、慧音先生に対するアピールだった。先生、私は今でも覚えています。なんて、そんな気持ちで放つてやった文句だったのだが。小さい頃憧れてた人物が実はポンコツだった、なんて話はよくあることのように、先生は教卓の横で不可解そうに首を傾げていた。

おまけに、私の自己紹介が済むなり、クソガキのリーダーとその仲間たちが、「あたいはおまえなんかを教師なんかとみとめない!」と蜂起して何処かへ遊びに行つてしまった。散々だ。

しかし、そんな連中を見て浮かんだ感慨があつたので、授業のあと、私は先生に或ることを言つてみた。私。

——先生。チルノも、いわばみんなの教師みたいなものなのかもしれないね。体育かなんかのさ。あはは。

——先生は相変わらずに何もわからなさそうに首を傾げて、どういうこと? なんて聞くものだから、私は先生を危うく罵倒してしまひそうになった。しかし根が善良で、かつ、たまにいいことを言うので、私は先生に対する尊敬をかううじて保っている。

さて、リグルについてだが、やつは今まさに、私の隣に座つて酒を飲んでる。

「いやあまさかほんとに、教師になるなんて! はは、僕は、僕はなんだかうれしいよ、ルーミア!」

上機嫌に顔を赤らめ笑うこいつにしたつて、あれから変化があつ

た。相変わらずに害虫駆除という火消し労働を続けてはいるが、放火はやめたのだ。その際に名刺に使っていた肩書きを「害虫駆除業者」から変更したとの話だが、どうも、リグルのセンスは読めない。

「おいおい、センスがおかしいのはおまえだよ、ルーミア。今や、僕が里を歩くとみんなが指を指して目を輝かせるんだぜ」

いわく、ムシキング。アホか。

「はい、おまたせしました、日本酒ね」

「ありがと。ああ、ヤツメウナギもおねがい」

「はい」

それから、ミスティアはやっぱり歌をやめた。しかし、屋台の壁には使い込まれたフォークギターが飾られており、ミスティアはよく、頼んでもいないのに、弾いてくれる。ああ、そう。私たちは今ミスティアが始めた屋台で飲んでいる。だから、私はいま、酔っている。「うう、教え子の作った店で、教え子たちと呑める日があるなんて。こんなうれしいことはない。う、うう、教師冥利、教師冥利というやつだなあ……」

「僕うれしいなあ。泣くほど喜んでもらえるなんて。でも先生、僕の服でいろいろ拭うのはやめてよ」

今日は私の就任記念というやつで、それは、リグルとミスティアの、二人の計らいだった。先生はどうにも酒に弱く、二杯と飲まないうちに涙腺が壊れてしまったようで、さつきからよくわからないことばかり言う。

「ああ、特に、ルーミア！ 私は、私はお前のことが一番うれしいよ。心配だったんだ、卒業間近つてときに、寺子屋に来なくなつて、それきりだったから！ だから、厳密に言えばお前はまだ卒業していないんだぞ、卒業もせず教師だなんて。おかしな話もあったもんだなあ」

泣いていたかと思えばキョトンとして、感嘆混じりに腕を組んだり。うーん、この人にお酒飲ませるべきじゃないな。

「そうだ！ ルーミア、なにか、なにか詩を読んでくれ。就任に御誂え向きののを、そしたら先生、きつと、もつと泣いてしまうから！ あ、

出来れば三十一字で頼む。先生な、好きなんだ。三十一字が」

ともかくとして、私の日々はこんな具合に流れている。その日々は、思いのほか、あの青い夏と地続きで。まあ、つまるところ、終わりを決めるも決めないも、結局、自分自身、というか、なんとというか……はは、わかんないや。

先生に頼まれた詩に関しては、そのとき、私は就任を祝われてる、ということもあり、随分前向きなのが思い浮かんでしまった。それは、私の日々は次の世のため、とか、そんな内容で。小つ恥ずかしかったから、頭をひねって、わかりにくくしてやった。

朝の月

酔えばのたうつ

平熱の

日々は槻を

濁すよに

槻の別称とか、そういうのを捻って考えた詩なのだが、どうも、慧音先生のみならず、リグルにも、ミステリアまでにも、きよとん、をいただいた。

まあ、この孤立感というのが、すなわち教養というやつなのだ。きつと、そうに違いはない。

いや、でも。うーん……そうなのか？　とか、言ってみたりしてさ。

革命前夜（全5話） 主演：鬼人正邪、少名針妙丸
革命前夜 1

「せーじや？せーじやってば、聞いてんのかよー」

そう呼びかける小人の声で我に帰る。

「ああ姫、すみません。少し、姫と出会ったときのことを思い出ししていました」

針妙丸とわたしは森の隠れ家の中にいた。

素晴らしき革命を明日に控えた幻想郷の視察のためだ。

しかし、既に空は黒く染まり、そこには大きな丸い月と、小さい星の屑がチカチカと疎らに散らばっているのみだった。

ところで、わたしは天邪鬼だからって常に嘘しか言わないわけではない。そんなの、頭がこんがらがって仕方ないし、なにより嘘を相手に信じ込ませるには、程よく正直でいるのが一番だ。

「そうやって、またすぐ嘘ついて。天邪鬼ってみんなそーなの？」

しかし、先入観というのは恐ろしいもので、天邪鬼であるわたしの言葉を信じる者は少なかった。

木々の立ち並ぶ森の中、重なり合う枝葉の隙間から青白い月明かりが漏れ出して、微かな虫のざわめきが、穏やかな夜を縁取っている。

「せーじや、また壁の中から音がしたんだ。これはもう間違いないよ」
わたしたちの住まうそれは隠れ家とはいっても、森の中でとりわけ大きな木の「うろ」をみつけて、それを簡単に掃除をしただけの空間だった。針妙丸は初めこそ「虫が出る」などと言って嫌がっていたが、わたしがそこらへんから拾ってきた防虫剤を設置すると、信じられないものを見るような目でわたしを凝視したが、そのことについてそれ以降は何も言わなくなった。

「間違いない、とは？」

そんなの、虫に決まってるだろう。

「虫に決まってるだろー！やつら、やっぱり私が眠るのを待ってるんだ

よ。間違いないね。おいせーじゃ、このままじゃ計画実行を前にして、私は虫に食われてしまうよ」

針妙丸とわたしは輝針城を出て直ぐに幻想郷の視察を始めた。計画を実行するにあたって、使えそうな「道具」を探すためだった。もちろん針妙丸には他の理由を用意した。

あれ？

あのととき、わたしはなんて説明したっけな。

どうにも思い出せないが、それは思い出せないほど下らない理由だからだろう。

兎も角、それから三ヶ月程の日々を視察に費やした。ちなみに、この隠れ家をつけたのも、視察を始めてすぐのことだった。

そんな中で、少名針妙丸という小人が、案外冗談の通じることが分かった。

「差し上げた防虫剤が、あなたを絶対にお守りしますよ。だから今日くらいは針などは手離し、安心して眠ってください。姫には明日が控えてるんですから」

例えば、わたしが防虫剤を設置したにもかかわらず、針妙丸はこの隠れ家で眠る際、自らの武器である針を手放すことはなかった。

「お前が川で汲んできた水に、防虫の効果があるとは到底思えないんだなあ。わたしには」

正直、気が合うと感じていた。

「何を仰いますか。姫さまがご存知ないのは仕方ないかもしれませんが、どうやらこの世界には『ぶらせぼえふえくと』という法則が存在しているらしいんですよ。なんでも、たとえ、その水に防虫の作用が無かったとしてもですね、姫自身がその水の防虫の作用を信じていれば、その、なんの変哲も無い水は確かに防虫の効果を発揮すると、そういう話らしいですよ」

似た話で『引き寄せの法則』なるものがあるらしいが、わたしはどちらにも信じていない。なぜなら、針妙丸が虫と戦うところをどうしても見たかったわたしは、この三ヶ月間眠る前には必ず、針妙丸の寝床に虫が現れることを願って眠ったのだが、結局今の今まで何も起きて

いないからである。

それは、この世界にそんな法則の存在を否定してること他ならなかった。

仮に法則が存在していたとするならば、小人族は虫も寄らないほどに忌み嫌われているという事になるだろう。

それは、天邪鬼にも同じことが云えるが。

そもそも、そんな「願えば叶う」ような法則が存在しているのなら、わたしは逆さ城から針妙丸を解放しようなどとは考えない。

「そんな法則が存在していたら、せーじやとわたしの「弱者が虐げられることのない平和な世界」って目標はとづくに叶っているはずだろ？ 欲するだけで手に入るなんて、そんな都合の良い話あるわけないよ。欲しいものを手に入れるなら、対価を払わなきゃ」

小人族のように。と、続くかと思われたが、針妙丸の言葉がそれ以上続く様子はなかった。

針妙丸は、何時も一切の皮肉を口にする事はない。防虫剤の話にしたってそうだ。わたしが、防虫剤を半ばただの水であることを認めても、その嘘について言及することはなかった。嘘か本当かわからない言葉に対して懐疑的な姿勢を示すことはあれど、確実に嘘だとわかるものについては徹底的なまでに言及しなかった。

恐らく針妙丸は、そういった数々の言葉の裏を「敢えて」無視している。

自己防衛の一種か何かは知らないが、言葉の裏の意味に気づいた上で、針妙丸はそれを無視しているようだった。

何度か分かりやすい嘘を吐いて試してみたが、やはり絶対的な嘘に對して針妙丸の姿勢は頑なだった。

そういった針妙丸のある種一貫性のある態度は、わたしに或る事を確信させた。

少名針妙丸は、わたしの本当の目的に気付いている。

「対価ですか。いやあ、さすが。小人族らしいお言葉ですね」

「……どういう意味だよー！ まったく！ せーじやはたまにズレた返し方するよなーほんとー！」

ほら、やっぱり。

針妙丸の表情が一種曇るのを、わたしは見逃さなかった。

「ははは。ちよつとズレてましたか？やっぱりなー。わたしもズレてるかなーとは思ってはいたんですけどね。ははは」

かつて一人の小人が、小人族全体の繁栄を願った。小槌が一人の小人に求めた対価は、小人族全体の衰退だった。

ははは。

「あーもういいよ！やっぱりさ、今日は寝ないでさ、こないだ呑んだ人里の居酒屋に行こうよ。そうして朝まで飲み明かすんだ。前祝いだよ、前祝い。なー？行こうぜーじゃー」

あー、そんなこともあったな。

「姫、それはなりません。何度も言うように、姫には明日大事な役目があるのです。それに、あの店にはもう出入りできないじゃありませんか。姫のせいで」

革命前夜 2

針妙丸が珍しく視察しておかなきゃならない場所があるなんて言うから、そのときは感心したんだが、わたしが連れて行かれたのは居酒屋だった。

針妙丸曰く、情報を集めるなら酒場が一番、とのことだったが、わたしは正直ピンとこないまま店に入った。

しかし、そこで思わぬ収穫があった。

店の中には妖怪が二体。人間に紛れ、愚痴を肴に酒を飲み交わしていたのである。

わたしはそいつらの会話に耳を澄ましてみた。

「だいたいさー、なんで人間よりも何倍強い私たちがさ、金なぞ支払わなきゃならんのかなー。酒飲むために働いてまでさー」

「わかるわー。ばんきちちゃんなんて、人間たちにおせきちゃん、なんて馴れ馴れしい呼ばれ方されてるのよね。なーにがおせきちゃんですか、喰らうぞこらつて感じよねー」

「まあ、ばんきちちゃんもおせきちゃんも、呼び方としては大差ないと思うんだけどな。呼び方はともかくとしてさ、馴れ馴れしいんだよ、人間風情がさー。博麗さえいなければなー。そうしたら今頃、酒なぞ飲まなくても人喰つて満足できてるだろうに」

「でも、ばんきちちゃん。私ね、人間の作る麦酒だいすき。もはやこれがないと生きていけないわ。ある種私はもう既に、人間に支配されちゃってるのよ。こわいわー人間こわいわー」

「たしかに。人間の作る酒はやめられないな、私も。あーあ。妖怪に管理されてるはずの人間たちに管理されちゃってるんだなー、私たちって。あの紅白もなまら強いらしいし、なんか、情けなくなってきたなー自分が。これはもう、やっぱりあれだな」

「うんうん。呑むしかないよ、ばんきちちゃん」

「なんだか情けないやつらだが、計画の駒としては十分な思想を持っていた。」

「そーいや外の看板みた？なにあれ。妖怪と思しき方の飲み放題の注

文は拒否させていただきます”って、あまりにも差別が過ぎるよな―」

「あー、なんかここで蟒蛇って奴が飲み放題で元を取るほど飲み散らかしたって話よ」

「あー、あいつか。馬鹿だなーあいつ。ほんとあほ」

「ねー。しかもその蟒蛇ってやつ、妖怪だってことが店にばれた直後、博麗に割られたらしいわ」

「なんだよ割られたって。え、なんだろ、割る？わかんないけどおそろしーな。影狼、私たちも気をつけような―」

「ほんと。おそろしーわ、人間。あーあ」

暮れも早々にして酒を飲みクダを巻く妖怪たちの会話を聞き飽きた頃、酒に顔を赤らめた針妙丸が私に訪ねてきた。

「なあせーじや、蟒蛇ってやつが悪いのに、なんで全ての妖怪から飲み放題注文の権利を奪う必要があるんだ？」

「妖怪ってのは基本大酒飲みですからね。それを見越しての対策なんじゃないですか？人間なりの」

「ふーん。じやあ、せーじやも結構呑めるってわけだ？」

針妙丸が何やら挑発的な表情をするので、わたしは少し、こいつをいじめてやりたい気分になった。

「もちろんですとも。わたしはこれでも鬼の端くれですからね。そんなじよそこらの妖怪の呑む量の倍は軽いもんですよ。まして、体の小さな小人族なんて比にならないでしょうね」

針妙丸はカチンときた様子で喋り出す。

「言うじやないか。これはもうアレだな、アレしかないよ」

「飲み比べをしようじやないか」

単純なやつだな、と、わたしは思った。

「あれは私のせいじやないだろ！お前が酔っ払って、店の中で演説を始めるからいけないんだ。そのせい関係ないあの妖怪たちまでまで出入り禁止になったんだから。反省しろよな―」

演説なんてしただろうか。記憶にない。

そもそも飲み比べを始めてから店を出るまでの記憶は曖昧だった。店を追い出されたことは記憶にあるのだが。わかつてはいたが、どうにも、わたしはあまり呑めないたちだった。

「酒は進めた方にも責任があるんですよ、姫。下戸にあんな量の酒を飲ませた姫がいけないんです。反省してくださいね。あ、でも帰り道の川で吐いたゲロの量はわたしの方が断然上でしたね」

針妙丸は驚愕、といった表情を浮かべて私を睨んだ。

わたしを睨むこの目が、例の『信じられないものを見るような』目である。

やっぱり面白いな、こいつ。

「当たり前だろ。せーじやと私じや、飲める絶対量が違うんだから。しかも、飲み比べは呑める量を競うものであつて、吐いた量は関係ないだろ。きたないよ、はなしが。だいたい、弱いなら弱いって、正直に言えよな。まったく「天邪鬼ですから」

声を被せてやると、またしても針妙丸が眉を潜め、わたしを睨む。

微妙な表情だ。

これがなかなか癖になる顔で、わたしはこれを見たいがために、必要以上に針妙丸をからかかってしまうのだった。

革命前夜 3

「はあ。お前と話してるとますます眠気が遠のいていく気がするよ。もう、あの店じやなくてもいいから何処か行こうよ。そうだ、前に見た湖に行こう！あそこなら、ここからそんなに離れてないし。ね、そうしようよ」

えー、行きたくない。面倒だ。

それに明日はいよいよ満願成就の日だというのに、どんだけ眠りたくないんだこの小人は。

「あー、二日酔いの朝に姫に無理やり連れていかれた湖ですか。うーん、姫もあそこは微妙だつて仰つてたじゃないですか。陽が反射して眩しいわ、いきなりどつかから氷の塊が飛んでくるわで、散々でしたし。それに、あそこつてここからそんなに近くでしたっけ。わたしは相当歩いたような気がしますけど」

「近いよ近い！せーじやは二日酔いで歩くのが辛かったからそう感じるだけだよ。それに、上に登れば、ここからだつて見えるんだよ。付いてきてみてよ」

そうか、二日酔いのせいで距離を長く感じたのか。そういえば湖につくなり吐いたのを思い出せるな。

しかし、上に登ればとはどういうことだろう。わたしたちが隠れ家としてこの木のうろの中に、上へ登るための機構があるとは思えない。

針妙丸はうろの外へ出るが早いか、樹皮をつかみ、樹木の大きな根に足をかけるのだった。

あー、やつぱり、登るのか。

こういうとき、なんで飛ばないのかな、こいつ。

器用に樹木を登っていく針妙丸を眺めていると、針妙丸が振り向いてこちらを見やった。

「せーじや、なにしてる。はやく来いってば」

そう捲し立てる針妙丸の表情は、何やら充実感に満ちた爽やかな笑

顔だった。

妖怪や人間の中には自分の筋肉に負荷をかけては喜ぶ輩がいるが、負荷をかけている最中、奴らはちょうどあんな感じの笑みを浮かべる。馬鹿のする表情だ。あれは。

なんで、こういうとき飛ばないのかな、あいつ。

再三再四同じような疑問が過ったが、針妙丸を姫と呼んでいる手前、わたしも同じように木登りせざるを得なかった。

なんで、飛ばないんだろ、こいつ。

わたしはとりわけ丈夫そうな樹皮に、手をかけた。

「ね？思ったより近くでしょ。ここからでも、よく見えるんだから」

針妙丸の言う通り、湖は思ったより近くに在った。というより、目の前だった。背丈の低い針妙丸はともかく、わたしの足なら五分もかからず到着するだろう。

木々に囲まれた広い湖は、月の光に照らされて、深い夜の闇の中に美しく浮かび上がっていた。黒く透き通る水面の上に、青白い小さな光が無数に踊っている。

「日中行った時はなんとも思わなかったけど、夜に見ると綺麗だね。なんだろ、あのキラキラしてる青白いのは」

必死になってやつと木を登り終えたわたしをよそに、針妙丸は樹木の枝に腰をかけ、涼しげな顔で湖を眺めている。

太い枝に腰をかけ、わたしはやつと、大きく一息をつくに至った。

「あれは姫の嫌いな虫ですよ、虫。おそらく蛭でしょうね」

わたしをさしておいてスイスイと木を登っていきやがった針妙丸への報復に、少し意地の悪い返答の仕方をする。

「ふーん。ほたるか。本で読んだのより、ずっと綺麗だな。ねえ、せーじやはどう思う？」

針妙丸は目の前の景色に夢中になっているせいか、いつもより少ない数の言葉を訥々と述べる。

針妙丸に感想を求められたので、わたしは改めてまじまじと湖を眺めた。

「わたしは別に、景色なんて。眺めても、特別なにか、思うことは」

視界に映る湖は、悔しいけれど、綺麗だった。

森に吹く緩い風が、水面の月をゆらゆらと揺らす。

「ねえ、せーじゃ。私ね、思ったんだけどさ」

針妙丸は、湖を眺めながら口を開いた。

「私はね、虫が苦手なんだけど。いま、ほたるは綺麗だなーって、思ったの」

わたしも湖に見惚れながら、針妙丸の声に耳を傾ける。

「でもさ、あの湖には、ほたる以外にも、たくさんのお虫がいると思うんだ。私はさ、多分、そのお虫たちを、綺麗だとは思わないだろうな、って」

青白い小さな光は、よく見るとそれぞれ大きさが異なっていて、他より少しだけ大きな光や、他より少しだけ小さな光があった。その中でも、一際小さな光を中空の端の方に見つけ、わたしはその、一際小さな光をなんとなく眺めていた。

「ほたるのなかにもさ、大きいやつとか、小さいやつがいて、私達の中にはあんまり違わないけど、小さいやつは大きいやつに憧れたり、大きいやつは小さいやつに憧れたり、してるんだろうね。ねえ、せーじやは今、どのあたりをみてるの?」

小さな光を追いながら答えた。

「あの、中空の左端の方ですよ。見えるかな、一際小さいやつがいますね。特別強く光を放ってるわけでもないんですけど、群れから外れて一匹で飛んでるものだから、なんとなく気になって」

針妙丸はこちらをみるともなく答える。

「へえ。寂しくないのかな、そいつ」

「さあ、わかりませんが。でも、勇敢なやつですよ、どんどん、群れから一匹、離れていきます。あれは自分を他と比べること自体、していないのかもしれないね」

「ふーん。自分と周りを比べることをしないなんて、大したやつだなあ。それじゃあきつと、欲しいものもなくてさ、自分さえいけば生きていけるやつなんだろうね」

「案外そうでもないかもしれませんよ。もしかしたらあいつ、みんな

が付いてきてくれると思って飛んでるのかもしれない。そうして振り向くと、誰もいなくて、びつくりしたりして。それか、森の中で意中の相手と待ち合わせているのかも。なんにせよ、後悔しますよ、あとあと」

「あー、ほら。もう森の中に入っただけで、見えなくなっちゃいましたよ。うーん。じゃあ、姫は今の辺りを見てるんですか？」

消えてしまった小さな光の代わりになるような箇所がないかと思いい、針妙丸に尋ねた。

「私はね、一番でつかいやつ」

「というと、どの辺りですか？」

「えっとね、一番上の方かな」

わたしは、針妙丸の言う通りに蛍の群れの上の方、ちょうど月と湖の間あたりを探してみたが、特に際立って大きな光を放つ蛍は見当たらない。

「一番上の方って、どこらへんを……ああ、あれのことですか」

「そう、あれのこと」

針妙丸は月を見ていた。

瞳に月を映した針妙丸の表情は、どこか遠くを見ているようだった。

まあ、月は遠いもんな、あたりまえだけど。

「私はね。小さい頃、蛍と違ってさ、自分と比べる相手がいなかったんだ。でも、人も妖怪もさ、相手にあって自分がないものだったり、自分の手が届かないものを欲しがるものでしょ。私にはそれがなかったんだ。檻の中のものの手を伸ばせば当然届いたし、檻の外にはなんにもないし。他人なんて、私を閉じ込めてる奴らしかいなかった。あんな奴らに憧れる要素なんてちつともなかったね。まあ、三食くれたり、たまに本をくれたりしたことには感謝してるけどさ」

閉じ込めてる奴らか。

あいつらが、針妙丸に三食を与えたのは小槌を振らせるためだろう。

本をくれたのは、輝針城から出たことのない針妙丸に対する嫌がら

せの一種だ。

全員、わたしが殺した。

「だからね、私の手が届かなくて、憧れられるものなんて、窓から見える月くらいしかなかったってわけ。丸くなったり、かけていたりしながらも、雲に隠れてたつてそこにあるのが分かるくらいに、光つて。そんな月を見ててき、なんとなく思ってたんだ。私が大人になったら、きつと、あれに手が届くくらい大きくなるんだ、って」

「でも、段々とき、分かったんだ。自分は小人族で、大人になったって、月には手が届かないって。それからずっと、悔しかったよ。なんで自分は小人なんだろうって。なんで、欲しいものが手に入らないんだろうってさ」

夜空に浮かぶ薄い雲が、少し欠けた月を覆った。

「でもね、最近になって、ようやく気にならなくなってきたんだよね、あはは。ねえ、せーじや、なんでだと思う？」

何も、思い浮かばない。

「さあ。大人になって、諦めでもついたんですか？」

針妙丸は、あはは、と笑った。

「私はまだまだ大人って年じゃないよー！まあ、小人族って大人になってもあんまり変わらないらしいから、他のやつらにはわかんないかもしれないけど。でも全然、私はまだまだ子供なんだよ。とにかくね。諦めたっていうよりさ、ようやく、受け入れられた、っていうのかな。小人族であること、月に手が届かないこと……他にも、いろいろ」

針妙丸はそういつてまた少しだけ笑うと、今度は眉を潜めて俯いた。

緩やかな風の音が、静寂を縁取る。

「あのね、せーじや。私はね」

雲に覆われた月がまた、ゆっくりと顔を出す。青白い光は、針妙丸の顔を少しだけ照らした。

「ううん、やっぱりなんでもないや」

気がつくくと、蛍が減っている。

「いよいよ明日だね、せーじゃ。眠れない、なんて言ってる場合じゃないや！明日に備えて、もうそろそろ眠らなきゃ」

蛍の光が、消灯時間を告げるように、一つまた一つと、消えていく。「明日！私、頑張るからね。せーじゃも応援してよねー！……二人でさ、平等で優しい世界を作るんだもんね」

一つまた一つ、消えていく。

「せーじゃ、私は先に戻るね。じゃあ、おやすみ」

「……ああ、おやすみ。針妙丸」

蛍の光が途絶えた水面を、静かな月明かりだけが照らしていた。

「いやあ皆様方！少しだけ、わたしの話に耳を貸していただきたい。今からするのは、わたしと、そして皆様方ご自身のお話です。まずは自己紹介をさせていただきますでしょうか」

「わたしは鬼人正邪と申します。種族は天邪鬼。えー、こんな種族で生きてきたものですから、それはもう様々な辛酸を舐めてきました。酒席ですから、詳しい話は省きますが。あー、そうですね、一つ、そこまで暗くないもので印象に残っているのがあります」

「わたしはその日どうにも腹が痛みまして、どうにかならないものかと腹を押さえながら妖怪たちの集落のような場所をふらついています。すると、なんの妖怪かまではわかりませんが、角を生やした妖怪の子が腹を押さえたわたしをみつけるなり指を指して云うんです『ああ、天邪鬼が腹を隠して歩いてら！わかりやすい天邪鬼もいたもんだ！腹なぞ隠さなくても、お前ら天邪鬼の腹の色は知れ渡ってるってのに！』なんて。わたしはそれを聞いて、腹痛はさておき。ああ、言われてみるとその通りだなあと、妙に感心してしまいましたね。それから、なんとなく腹に手を添えるのが癖になって、それがどうも落ち着くようになってきたんです」

「今お話したのはほんの一例ですが、わたしはこのように、お前は天邪鬼だから“こう”なのだろう、といった偏見の眼差しを受けてきました。しかしながら、それは、皆様全員にも同じことが言えるでしょう。心当たりはありませんか？恐らく“お前はこうだから、こうなのだろう”そんな風に決め付けられて、思うように主張が、会話が、出来なくなってしまうことがあるでしょう。少なからず、そこにいる妖怪のお二方は身に覚えがあるかと存じます。えっ、盗み聞き？いやいやとんでもない、お二人の声が大きくて、自然に聞こえてきただけのことですよ。えっ、よくも妖怪だとバラしたな？これは失礼しました」

「さあ、人間の皆さんはこのお二方が妖怪だと聞いて騒めき始めましたね。ほうほう、酒がまずくなる？こんなところには恐ろしくていられない？はい。わたしが言いたいのはまさにそれです。あなた方人間は、妖怪の存在を見つけると、逃げ出したり、罵声を浴びせたり、攻撃を始めたります。それは一体なぜでしょう？妖怪が憎いから？恐ろしいから？そうではありません。それは、あなた方が人間だからです」

「人間は、この幻想郷に生まれた以上は被食者という、ヒエラルキーの下層に位置します。ヒエラルキーの頂点には、もちろん妖怪やら神格やらが位置しています。幻想郷に生まれた以上、それを知らずに生きていくのは不可能でしょうね。だからこそ、あなた方人間は、人ならざるものを見つけ次第に逃げ出したり、恐れたり、攻撃を仕掛けたりするのです。ときに、下を向いて歩いていると、わたしの足音に気付いた蟻達が目散に逃げているのを見つけました。それが、ヒエラルキーの下層に位置するものの正常な行動なのです。しかし、わたしはそれが嘆かわしい！踏み潰される蟻の恐怖や憤りを考えると、とてもじゃないがまともではられません」

「なので、わたしは人を食べたことは一度としてありません。えっ？あ、ああ、少し腹が痛みましてね。こほん。しかしながら、わたしとて潔白ではられないのです。人を食わずとも、管理された家畜たちの肉を食べています。道を歩けば、気付かぬうちに蟻も潰して歩いているでしょう。それは悲しいことではありますが、食べられる為だけに生まれる命も、気付かぬままに踏み躪られる虫達も、一人が生きていくための仕方のない尊い犠牲というほかないでしょう」

「物言わぬ彼らについては、それで済ませる他ないのかもかもしれません。ですが、あなた方はそうではない！あなた方は、気付かぬままに踏み潰される蟻ですか？あなた方は、食われるためだけに管理される家畜ですか？もちろん、違います。人間にも妖怪にも、同じように意思があります。ならば、人間と妖怪、どこに差があるのでしょうか。いくら能力に差があるとはいえ……同じ自由意志を持つ……あれ？」

「そういえば、皆様はどうしてわたしが天邪鬼と名乗った時、何事もな

いかのように振舞っていたんです？天邪鬼を知らないなんてこと、ないでしょうに」

「え？そんな小さい子供に飲み比べで負けるような妖怪は怖くない？いやいや、何を仰いますか、そもそもこいつも妖怪みたいなもので……いや、そのまえに、負けてませんから、飲み比べ。ほら、まったくをもって呂律も理路も整然としているじゃありませんか」

「ええ？結局なんの話か、と？……あれえ、ええと、なんでしたっけね。ははは」

「いやあすみません……。どうも今日は楽しくて……。あはは。……いい店ですね、ここは」
……。

革命前夜 5 (了)

暮れ。

計画の実行から一週間が経ち、私は次々とやって来る追っ手から逃げ回る日々を送っていた。

計画は失敗した。

わたしの計画は半ば未遂で幕を閉じたが、結果、わたしは指名手配を受ける身となった。

たった今も、緑の髪をした巫女を撒いたばかりで、わたしは枯れた木の陰に隠れて、乱れた呼吸を整えている。

どいつもこいつも、楽しそうに人を追いかけてやがって。どうやらやつら、誰がわたしを一番に捕らえられるかで賭けているようだ。

今は防戦一方だが、いずれは攻勢に打って出てやる。

そうして、木陰で氣力を回復させていると、ふいに、空から声が響いた。

「おいー！」

もう次の追っ手がきたか。

わたしは即座に木陰から逃げ出した。

「おい、待つんだ！」

背後からする声に脇目も振らず、一目散に駆ける。

「おいせーじや！もうやめにしよう！」

ああ、誰かと思えば。

「これはこれは。誰かと思えば、姫じゃありませんか。こんなところで油を売っている暇があったら、あの紅白の人間に胡麻でも搗ってきたらいかがですか」

計画の主犯であるわたしに利用されていた針妙丸は、一応共犯者であることには相違ないとのことで、わたしが逃げ回っている間、その身は博麗の巫女の預かりになっていた。

その針妙丸が、いまさらわたしに何の用があるというのだろう。

「まだ私を姫だなんて！計画は終わったんだよ。せーじや、お前だっ

てわかっているだろう。お前の願いは、ここでは叶わないよ」

わたしが、何をわかってるといふのだろう。

針妙丸、計画が一度失敗しただけでそんな風に諦められるお前に、わたしの何がわかるというんだろうな。

お前のいうことの何一つ、わたしにはわからないね。

「何を仰いますか姫。計画が終わった？たかだか一つ失敗しただけではありませんか。尤も、小槌の力はもう使えませんが、わたしは至って健全ですよ。心に諦めのあの字も浮かばないほどにはね。見ていてください。あなたの協力を得られずとも、きっとこんな世界はひっくり返してみせますよ」

針妙丸の眉間が歪む。

「どうしてお前はそこまで計画に執着するんだ！」

どうして？何を、今更。

嘘つきめ。

お前だって復讐がしたかったんだ。

お前だって、わたしたちを種族という理由だけで虐げ、無視してきた奴らを。小槌欲しさに集ってくる現金な悪党どもを、殺したかったんだろう。それを今更、どうしてだって？

お前が小槌を振ったらどうなるか、何もかもわかっているながら協力しておいて、何を今更！

「どうしてって、楽しいからに決まっているじゃないですか。わたしはね、それをすると、楽しいんですよ。ははは」

「違う。せーじやはそんな風に思っていない」

針妙丸の声は震えていた。それが怒りによるものなのかどうかは、わたしにはわからない。

「姫、あなたにわたしの何がわかるというんです」

「わかるよ。せーじやは、私と同じだろう？」

そうだな。

「違いますね」

「お前は寂しかったんだ。自分を、天邪鬼だからという理由だけで虐げられて、無視されて、決め付けられて、寂しかったんだ。許せなかつ

たんだ。それでもお前はお前を無視する世界に認められたかった。天邪鬼である自分を肯定して欲しかったんだ」

きつと、そうなんだろうな。

「違う」

「私だつてそうだ！だから、お前が私を解放しにきてくれたとき、血にまみれたお前を見ても何も感じなかった！輝針城から出るとき、私を幽閉していた奴らの亡骸を見て心が踊ったさ！ざまあみろつて！だから、私はお前に協力しようつて決めたんだ。私を小人というだけで私を無視してきた、虐げてきた世界をめちやくちやに壊してやりたかったから！」

ああ、なんだろう。

なんだか腹が痛むなあ。

「でも、お前といた三ヶ月間、楽しかったんだ。初めて見た広い空も、生い茂る木々も、でっかい木のうろも、虫も、賑やかな人里も、酒場でクダを巻く妖怪たちも、二人で川を汚したことも、夜の湖も、全部。楽しかったんだ。お前が私をからかって笑ったり、怒ったり、たまに、嘘かもしれないけど、褒めてくれたり、嘘かもしれないけど、優しくしてくれたり」

チクチクと痛む腹に、わたしは手を添えた。

「楽しかったんだよ。だから、お前と一緒に過ごせるなら、わたしを無視してきたこんな世界も許せるんじゃないかって、思えてきてさ。そんな風に思えるなんて、夢みたいだったよ。ほんとは、計画なんて、その時にはもうどうでもよかったんだ」

なのにお前は、小槌を振ったじゃないか。

「それでも私は、小槌を振った。……不安だったんだ。そうしないと、お前は私を置いてどこかへ消えてしまふんじゃないか、つて」

そんなこと

「それは尤もでしょうねえ。小槌を振らない小人族に好んで付き合う者はいませんよ」

わたしの口は勝手に動く。

わたしはわたしに、不可逆的に復讐を課したがつている。引き返せ

ないところまで、行きたがっている。

ああ、でもそんなことをしたら、また一人になつてしまう。

針妙丸は、わたしの言葉を無視して続ける。

「それでも私はね、私やお前を無視してきた汚い世界が、めちやくちやになるように願つて小槌を振つたんだ。でも、失敗した」

「私はね、やっぱりか。つて思つたよ。汚い世界をめちやくちやに壊したい、なんて願い、叶はずないよなつて。だつて、三ヶ月、お前と一緒に過ごした幻想郷は、涙が出るほど綺麗だったから」

「私はね、わかつたよ。輝針城から出た時のように、自分から一步踏み出せば、幻想郷は私たちを受け入れてくれる、つて。ここが、この綺麗な幻想郷が、私たちの生きていく世界なんだ、つて」

そう語る針妙丸は、わたしの嫌いな表情をしている。

わたしのことを無視してきたやつらと、同じ表情。真つ直ぐで、瞳は希望に満ちていて、わたしのことなんて視界に映してくれないあいづらと、同じ。

ああ、もう既に一人だったのか。わたしは。

お前に、そんな表情をさせた奴が憎い。

殺してやりたいよ。

そいつのせいでわたしはまた

「ねえせーじや、降伏してよ。せーじやが逃げ回つてる間、せーじやのことを許してくれるようにいっぱい謝つたんだ。けど、やっぱり本人にその意思がないとダメだつて言われた。それつて、本人が謝れば許してくれるつてことだろう？今ならきつと、まだ間に合うよ」

ここを越えれば、わたしはもう

「お願い。私はこの綺麗な幻想郷に、お前と一緒にいたいんだよ」

「私も一緒に頭下げるからさ、ね？二人ならきつと楽しくやれるよ」

「だからさ、お願い。お前と一緒にやなきや、つまんないんだよ。お願いだよ、せーじや。降伏、しようよ」

こんなこと言つたら、どうなるかな。

「わぎわぎそんなことを聞かせにきてくれるなんて、光栄ですよ。姫」
針妙丸は一瞬の間逡巡したが、意外なほどにあつさり、口を開い

た。

「……わかったよ。もう、お前のことは諦める」

ははは。

こうなるよな、やっぱり。

「ご理解いただけただけたようですよ、姫。それで、どうする針妙丸。わたしを捕まえるのか？尤も、小槌なしのお前にそれができるとは思えないが」

これでわたしは、ようやく引き返せないところまで。

「それも諦めるよ。悪いけど、お前はここに置いていく。ああ、やっぱり、手に負えないな。私には」

でも、もしもう一度やり直せるなら。

今度は、上手くやるよ。

わたしたちを無視してきた奴らを殺して。

お前にそんな風に変えた奴も殺してさ。

上手くやるから。

その時はどうかまた

「逃してくれるってわけだ。そりやありがたいねえ針妙丸。ただ一つ、わたしがお前に置いて行かれる？違うね。わたしがお前を置いていくんだ。お前の顔なんて、二度と見たくないね。それじゃ、またな」
「……」

黙って俯いたままの針妙丸に背を向け、わたしは歩き始めた。

数歩歩くと、わたしはなんだか視界にチラチラと映る赤い前髪が気になって、それを指先で弄っていた。

すると、ふいに後頭部に強い衝撃が走るのを感じた。その直後、わたしは意識を手放したのだった。

……。

「またな、って、お前は次、いつどこで私と会うつもりだったんだよ」

枯れた木のそば、落ち葉が疎らに敷かれた地面の上、針妙丸が横たわる正邪に寄り添い、少し切なげな笑顔を浮かべている。

「痛かったろう。ごめん、不意打ちなんて卑怯な真似して」

正邪の頭を優しく撫でながら、針妙丸は尚も正邪に語りかける。

「正面からやりあったって、お前に勝てないことなんて分かってたんだもん」

そこは少し冷たい風が吹いていたが、肌寒さを感じるほどではない気温だった。

「だからちよつと嘘ついたんだ。お前を置いて、一人でいけるわけないじゃないか」

空に浮かぶ雲は薄く、今にも消えてしまいそうだ。

「でもお前は、卑怯なことが好きな鬼だろう？ まあ、きつと、お前は正直者だから、許してはくれないんだろうけどさ」

沈みかけの太陽は鈍く橙色に輝いて、少し照れたような優しい笑顔を浮かべる針妙丸と、遊び疲れた子供のように眠る正邪を、煌々と照らし続けた。

三日後、暫しの眠りから目覚めた正邪を待ち受けていたのは、後頭部に刻まれた全治三ヶ月の傷と、包帯。そして、賑やかで緩やかな、更生の日々の始まりだった。

†破滅† (全5話 主演：鬼人正邪、少名針妙丸)
†破滅† 1

世界の破滅というものは、どうやら思いのほか穏やかにやってくるようだ。

彗星接近。幻想郷滅亡の危機。そんな第一報はいつもと変わらぬお昼時に、お茶の間を彩るバラエティ番組の上部に、すっと、文字のみで現れた。それはどうやらテロップというらしい。そんな形で世界滅亡の危機を知ったものだから、私はどうも、ああ、滅ぶのか、世界。なんて、とりとめもなく受け入れてしまった。どれもこれも、河童の、企業努力の賜物というやつだ。

そんなわけで、私は今も、長屋に備え付けの、ちやちな木製のダイニングテーブルの上にスパゲッティなんかを置いて、テレビ画面を眺めている。どうやら赤い館のひとたちが迎撃ミサイルを発明したようで、世界滅亡の危機は免れた、という。

いわく、我々の用意したミサイルは必ずや、あの月に似た彗星を粉碎する、とのことで、根拠としては、運命がそれを保証しているらしい。なんじゃそりゃ。

だいたい、彗星なのに月に似てるというのは、いったいどういうことなのか。私は世界の存亡よりも、そっちのほうが気になった。しかし、テレビは今も赤い館の偉そうなひとを映し続けて、偉そうなひとは自信満々さをひたすらに表明し続ける。なんだかな。スパゲッティを食べ終わっても、結局、彗星のことは知れずじまいだった。

そろそろ食器を片そうかなと思っていると、窓の向こうから、寺子屋帰りであろう子供達の声が響く。長屋は屋の並ぶ閑散とした通りに面しているから、二階とはいえ、そういう声はほぼ毎日耳にした。

そのたびに、私はどうも、通りの静けさが余計に感じられて、部屋の広さに、ふわふわとした曖昧な、静けさに似た感慨を浮かべてしまう。

浮かんだ感慨をかき消すこともなく、私はそのまま、一人分の食器をキッチンまで運ぶ。キッチンの床はビニルだか、樹脂だかで、少し弾力のある素材で、裸足で歩くと、ペタペタと音がなる。一面のくすんだクリーム色と、細やかに、また規則的に散りばめられた薔薇の模様は、どうしたって、私に四半世紀超えの年季を感じさせるのだ。

しかし、私はこのキッチンの床が好きだった。聞けばクツシヨンフロア、なんて呼び方をするらしいが、ともかくとして、私はその、クツシヨンフロアの弾力が好きだった。ともすれば、歩きたびにペタペタとするこの音が、好きなかもしれない。

種族特有の背の低さに、皿を洗うのにも苦勞をする。とはいえ、縮む時はもつと縮むけれど、平常ならば河童たちと同じ程度なものなので、せいぜいすこし大変、といったところだ。洗うお皿だって一人分だから、ほんとうに、そこまでの苦勞はない。まあ、これがもし二人分の後始末に変わったのなら、私も背丈にものをいわせて、私が洗うのは大変だから、これは、お前がやるべきじゃないか、なんて八つ当たりも出来るのだろうけれど。

あいつが居なくなってから、しばらくが過ぎていた。あいつは、なにか、私とそこそこに親密になったところで、初めて私を食事に誘った。そして、そのタイミングで慌てて長屋を飛び出して、そのまま帰らなくなった。

——あー、最近美味しい定食屋が出来たらしいな。今度一緒に……。そこまで言って、あいつはなにかハツとして、口をあわあわせせては、そのまま、ちくしよう、と叫んで飛び出してしまったわけだ。計画の失敗からもう随分経って、平熱の日々を享受してきたというのに、あいつはつくづく、天邪鬼をやめられなかったらしい。

私もそこまで構ってやろうなんて気が起きなかったから、出ていったあいつを探すことなんて一切しない。どうせ放っておいたとしても、あいつはふらふらと、この狭い幻想郷のどこかをふらついているに違いないから、それならそれで、いいと思った。

ちょうど、キッチンの小窓の向こうの空に、青白い尾を引きずって、太陽より鈍く発光する球体がある。あれのどこが、月と似ているというのだろうか。頭はやはりそんなことでいっぱい、赤い館のミサイルとか、世界滅亡の危機とか、そんなのはぜんぜん、考えもしないでいた。

洗い終わったお皿の水を切っていると、ふいに、玄関の戸が勢いよく開いた。私は声もあげずに驚いて、キッチンから直通の玄関を見やる。目は、たぶん、丸かったと思う。

そこには、額に汗をかきながら、息を切らしたあいつが立っていて、よく見ると、涙ぐんでるようにもみえた。泣いているところを見るのは初めてだったから、私はきつと、丸くした目に加えて、眉を潜めたはずだ。けれど、こいつは私の前では泣かないというだけで、いろんなときに泣いていたことを私は知っていた。計画の実行が差し迫った頃なんて、夜毎隠れて泣いていたようだし、計画が失敗したときだって、わんわん泣いていたはずだ。だから、こいつの泣き顔をみたところで、そこまでの衝撃は受けなかった。しかし不可解だったのは、こいつの背負った、唐草模様の風呂敷だった。風呂敷からは、プラスチックめいた、おもちゃのような赤色の三角が飛び出していたのだ。先端の三角よりしたは、またおもちゃのような白色をしていて、それはどうも、先ほどテレビの下部四角形の中に見た、迎撃ミサイルと酷似していた。ちなみに、画面下部の四角形はワイプ、と呼ぶらしい。知ったことか。

濡れたお皿を掴んだまま、言葉を選んでみると、正邪は玄関先に立ちっぱなしのまま、おもむろに口を開いた。

「ひ、ひ、姫。せ、せ、せ、世界が滅んでしまうよ。わ、わたしの、わたしのせいだ！」

その声は焦燥と僅かな歓喜の入り混じった、正邪らしいといえづらいものだった。しかし、その声の震え方と、姫という呼称で、これは重大なことが起きたぞ、と私は悟った。

「とりあえず上がんなよ。スパゲッティを茹でてやろう」

こくこくと頷いては、背負った風呂敷の結び目を両手で掴んだま

ま、正邪は玄関をくぐる。こいつがこうも素直だと、いよいよもって、こいつの背負ったおもちゃ的オブジェクトの信憑性が増してくる。

正邪はそのままキッチンペタペタと鳴らして、不如意に冷蔵庫の中身を認めた。喉でも渴いているのかしらん。

そんな正邪を横目に、私はキッチンからリビングへの敷居に半身を逃して、テレビの様子を確かめた。テレビ画面上部にはなにか「テロップ」が出ていて、どうやら、河童の倉庫で保管していた迎撃ミサイルが盗難された、とかなんとか。しかし、画面に映る赤い館の偉そうなひとは、テロップに気がつくことはない。今なお偉そうに謹製のミサイルの長所を挙げ連ねているので、なんとも間抜けな光景である。

「ぎ、牛乳だ。の、飲んでいいよな」

「おまえは一気に全部飲んじゃうから、ダメ」

正邪はしゅんとして、リビングのダイニングテーブルの一席に腰を落ち着けた。テーブルの上、風呂敷を広げて露わになったのは、どうしたって、例の迎撃ミサイルだった。しかし、どこからどうみたって、おもちゃのようにしか思えない。こんなもので、あの彗星を撃ち落とすことが可能なのだろうか。

「どうするの、これ」

「き、決まってるだろ。このまま、隠して見つからないようにするんだ。は、ははは！ や、やつら泡吹いて探し回るに決まったら、でも、見つからない。そして世界は滅ぶんだ……わたしの、わたしの、ああ！ わたしのせいで！」

荷を解いても肩から重荷は下ろせなかったようだ。どうみたって、こいつはビビってる。けれど、ミサイルを隠匿し続けるだけで、こいつの念願成就が達せられる。そう考えると、私はこのまま世界が滅ぶのも、なんだかやぶさかではない気がした。

「ふうん、そうかい。まあ、いいんじゃないか。おまえがそうしたいならさ」

「そ、そんな。姫、いや、針妙丸。お前、いいのかよ！ 世界が滅ぶんだぞー！」

「いいじゃないか。そもそも、世界をひっくり返すのが、おまえの念願だったはずだろ。こんな平和な世の中じゃ、ちよつとやそつとイタズラしたところで、なにも変わらんない。世界を救う鍵を隠して、星が降って、世界が滅ぶ。私とおまえに、御誂え向きの結末じゃあないか」
「く、くるってる！」

正邪はそう言つて、慌ててミサイルに手を伸ばしたが、そうはさせない。

「だめだぞ。まさかこれを行こうつてののか。そんなの、おまえらしくもなんともない。下克上をしようよ。な。だから、世界が終わる瞬間まで、これは私が持つておいてやろう」

ミサイルを抱えてみると、それなりの重さがあった。なるほどこれは、世界を救う重さに思える。

「ま、まさか！ 返しに行こうだなんて考えていないさ。ただ、お前に持たせておいたら危なっかしいから、わたしが持つておこうと思っただけで！ ま、まあ、どうせ隠しておくんなら、お前が持つてたとしても、わたしが持つてたとしても、どつちにしろ、変わらない。特別にお前がそれを保管することをゆるしてやる。そのかわり、世界の破壊まで絶対に隠し通すこと！」

これはわたしの下克上なんだから、と威勢良くと付け加えて、正邪は腕を組み、そつぽを向いた。ああ、多少の迷いを感じるけれど、やつぱりこいつは、こうでなくちゃ。

それから、私と正邪の、ミサイル隠匿の日々が始まった。とはいえ、世間に私の部屋を怪しむ者なんていないから、それはただ、久しぶりの二人暮らしというだけだ。ミサイル盗難のニュースが流れてから、里はお通夜のような静けさに支配されていたが、彗星直撃三日前ともなると、里は常世の、祭りの国と相成った。人間とは、よくできた生き物である。

そんな中、正邪はやはり悩み続けていて、時折ぼんやりとしては不意に叫んで頭を抱えてみたり、ぼんやりとしたままに、ちくしょう、ちくしょう、なんて嘯き続ける次第だった。どうにも見ていてじれったいので、私はこいつを、連日大繁盛の居酒屋に連れて行ってやることにした。

その居酒屋は、以前私と正邪が出入り禁止になったのを皮切りに、妖怪と思しき者の入店が全面禁止となった店だったが、世界が終わるともなれば、店に人妖入り乱れたとしても、誰も気にする者はなく、店主にしても、それはおなじだったようだ。

酒にめっぽう弱い正邪に飲ませれば、ほんとのところを聞き出せる、そう考えたのだが、そう上手くはいかなかった。結局のところどうなのさ、という私の言葉に、逃げ出したり、反発して、誤魔化すようなことはなかったが、正邪はどうも、なにも聞こえていない様子で、一人でぶつぶつと、なにかを呟き続けた。

まあ、これはこれで。と酒をやっていたら、不意に、ああ！ と声を張り上げ、正邪は店のテーブルを手のひらで思い切り叩き、立ち上がっては、口を切った。

「よく聞け酔っ払いども！ わたしはな、或るチャンスを手にしたんだ！ そしてわたしは、そのチャンスをモノにしてやる！ おいそのの、その狼女！ なにが言いたいのかさっぱりって顔をしているおまえだよ。いいか、よく聞けよ。チャンスっていうのはそう何度も訪れるもんじゃない、それがいつ、最後のチャンスになるかなんて、誰にもわからない。わたしが手に入れたのは、そういう類の、またとな

いやつなんだ！　つまりなにが言いたいかと言えばだな、その、欲しいものがあるならその手で掴み取れ、というか、手にした幸福は絶対に手放すな、というか、ええと……」

ちくしょうと吐き捨てて、正邪はそのまま逃げるように居酒屋を後にした。急に訳のわからないことを叫び出したやつと同じ席にいた私に向かって、きつと、世界の終わりに気が立っているのだから、店主が恐ろしい表情を浮かべて近付いてきた。あのわけのわからない女はあなたのツレか、とか、そんなことを聞いてきた。

正直に答えればおそらく店を追い出されるだろうけれど、終末に嘘をついたところで意味もない。うん、と頷けば、店主はやにわに私を店の外へと放り出した。まさか、世界の終わりに出禁を食らうとは。

そうして、何十時間か経った夜だ。あれから、正邪は長屋に戻らなかった。リビングの隅ではミサイルの赤い先端が、風呂敷から飛び出している。

正邪の戻らない今となつては、ミサイルなんて、もうどうでもよかった。結局のところ、私は正邪がどんな選択をするかが見たかっただけで、世界の存亡なんて、はなからどうだってよかつたのだ。ほんをいえば少しだけ怖いけど、朝起きれば歯は磨くし、お昼にはスパゲッティを食べてお皿を洗うし、夜は洗濯やなんやをするから、なんだか、そこまでの不安は感じられないままでいた。

一人分の布団を敷いてから、眠る前に、暗いリビングのテレビをつけると、接近する彗星の生中継をやっている様子だった。リポーターはどこぞの天狗で、目をぐるぐるさせながら接近する彗星の様子をてんやわんやと実況している。

『この月に似た彗星の落下地点が、こちらとなつております！ ご覧ください、様々な屋台でひしめいて、そこかしこにブルーシートを張って宴会に勤しむ人々を！ ああ、楽しそうですね。ちよつくら突撃取材といきましょうか。その赤、狼、魚のお三方！ 明日の夜、ここに彗星が落下する気分はどうですか？ え。きんぴら、くれるんですか。わー、ありがとうございます！ どれさつそく……あつ！……おいしいですねえ！』

カメラクルーもカメラを投げ捨ててきんぴらに集つたらしく、画面には土と草の根のみが映し出される。みんな、ちよつとおかしいんじゃないか。私は布団に入って、眠ってしまうことにした。

それにしても、あの彗星のどこが月に似ているというのだろう、やはり、わからない。

夜中に目を覚ますと、背中が濡れていたので、私は口を動かしてやることにした。

「なあせーじや。泣くほどいやなんだつたら、返して来いよ。あんなもの」

「……やだね。きつとこれが、最後のチャンスなんだ。こんな簡単に世界に泡吹かせてやれるチャンス、二度と巡ってこない」

「そうかい。それなら、私は止めないよ。私はなんだかんだ言っただけで、正邪の共犯者だからね。……あのときだって、正邪がほんとは何を企んでるか、知ってたんだから」

「……じゃあさ、共犯者だって言うなら、姫。お前あれを、何処かに隠してくれよ。あれが視界に入ると、わたしは、どうにかなっちゃいそうなんだ」

「やだね。実行犯にはなりたかないんだ、私は。ほら、話は終わりだよ、布団から出て行け」

「……別に、いいだろ。最後の日ぐらい」

「おまえは私の布団全部取るから、ダメ」

正邪はちくしょうと呟いて、私の隣に布団を敷いた。

彗星の落下地点に着くと、そこはまさにこの世の終わりだった。ひしめく屋台からはどこもめちやくちやに煙があがり、チンドン屋がしつちやかめつちやかに何やらを鳴らしまくっている。至る所はげろまみれ、死んだように眠る遺体まみれで、焚き火なんかをしている連中もいた。笑い声ばかりが響いて、不思議なことに、泣き声はひとつも聞かなかった。けれど、人混みの中立ち尽くし、空を見上げて、ぶつぶつと弱音を吐いている女ならいた。女は額のあたり、赤い髪を片手でぎゆうと掴んでは、仕事が増えるのはいやだ、仕事が増えるのはいやだ、と念仏のように繰り返している。世界の破滅に仕事の心配をするなんて、おかしな女もいたもんだ。それに、空に向かって念仏を唱え続けることに、何の意味があるというのか。一瞥して、そのまま女の横を通り過ぎた。

そうして、ブルーシートの海を泳いでいると、そのうちに声をかけられる。

「あ、針妙丸じゃない。あんたもこっちにきて、呑みなさいな」

紅白の言葉に従って、ブルーシートを跨ぎ座る。広いブルーシートの上にはもみくちやになった吸血鬼の遺体があり、白黒のひとも、山の巫女も、庭師も、見知らぬ犬も、みな一様に、遺体に酒を強要している。遺体は微かに拒絶の意を示し、ぐったりとしたまま吐き気を堪えるそぶりを見せた。ああ、吸血鬼のゾンビだ。

「月見酒よ、月見酒」

その言葉で、私はようやく夜空を仰いだ。そこには一面の青白い鈍光があつて、目を凝らすと、随分遠くの方に彗星の正体がぼんやりとしていた。しかし私は、その正体を間近でみても、それが月に似ているとは、どうしても思えなかった。

「でも、霊夢。いいの、なにもしなくて」

「いいのよ。紫も寝てるのかなんなのか、何も言つてこないし。それで世界が滅んだとしても、私のせいじゃないわ」

朗らかに笑って、紅白は酒をかつくらった。ほら、あんたも呑みなさい。あんたのせいなんだから、とゾンビに酒を強要する姿は、ほんとうに楽しそうだった。私も酒を少しもらって、ちびちびとそれをやる。夜空とあたりをチラチラと見れば、いろんなことに気がついた。

向こうの方で、鬼たちが和やかに酒をやっていること。あつちでは、生中継で見た三人組が、みな酔いつぶれていること。そつちでは、これまた生中継で見た天狗が、おそらく終わりに備えて、書き終えたであろう原稿を地面に埋めようと、必死になって穴を掘っていること。正邪の姿が見当たらないこと。チンドン屋の中には、そこそ有名なバンドや、楽団が紛れていること。青白い光の向こうに、いつもと変わらぬ星が出ていること。彗星が、さつきから全く動かないこと。

「ねえ霊夢。なんで動かないの、あの彗星。こつちに向かつてるようにはみえるのに」

「さあ。きつと、誰かが頑張ってるんでしょ。知らないけど」

それから、賑やかな時間がしばらく続いた。けど、白黒のひとが発した「あ、動いたぜ」の一声で、あたりは急にざわめいた。そのまま伝播するように、ざわめきがわつと広がって、この世の終わりの宴会場は、これまで以上の狂熱に包まれた。

チンドン屋は楽器をがむしやらに鳴らして、有象無象は手を打って、叫んで、笑って、楽しいままに吐き散らかした。鬼たちはいつそう和やかに呑んでは歌い、生中継で見た三人組はいつそういびきを大きくした。天狗は目を渦巻きにして、穴堀を急ぐ。

「あはは、みて。すつごい綺麗」

隣では、紅白がそんなことを嘯いて、白黒のひとも、山の巫女も、庭師も、見知らぬ犬も、頷いては、お猪口にちびりと口をつける。

しかし、不意に怒声があがった。それは、聞き覚えのある声で、言葉はきつと“ちくしょう”だった。驚いて立ち上がり、辺りを見回すと、少し遠くの方に、正邪の姿を見つけた。正邪の手には野球ボールほどの大きさになった迎撃ミサイルが握られていて、私がそれを確認するが早いか、正邪は駆け出して、声を上げた。

「世界の終わりだつてのに、どいつもこいつも！ ああ、くそお！」

有象無象にぶつかりながら走る正邪は、どうやら彗星の落下地点の真下に、出来るだけ近付きたいらしかった。それに気がついたチンドン屋の誰かが大音声で叫んだ。それは、そのひと、彗星になにかしたんじゃないかな、的憶測だったが、この世の終わりに出来るだけ楽しみたい有象無象は、そういうことなら、と喜んで道を空けた。殊勝というかなんというか、世界の終わりつて、みんなこうなの？

「ちよいとそこの小人。なあ、たしかあれは、あんたの知り合いだろう。あいつが手に持つてるあれは、なんだ。花火か」

不意に、一角の鬼が私に声をかけた。鬼は走る正邪を指差しながら、愉快そうに笑っている。

「さあ。でも多分、花火とか、そういうものだと思うよ。そうじゃなくても、いまから、どうせそうなっちゃうんだ」

「へえ。だってさ、萃香。よかったな、この世の終わりに、花火が見られるぞ」

「よっしゃ。そういうことなら、もつと近付いて見なきゃ損だね」

鬼の二人組は笑い合つて、そのまま正邪を追いかけに行つた。なんで、私と正邪のことを知ってるんだらう。鬼も新聞、読んでるのかな。ざわめきの中、そんなことを、ぼんやりと考えていると、みんながわつと声を上げた。どうやら正邪が何かしたらしいが、人混みが邪魔で、何も見えない。

「ほれ針妙丸、私の肩に乗るといい。いやあ、霊夢がやってるのをみてな、前々から、一度乗つけてみたいと思つてたんだ」

白黒のひとが胡座をかいたまま、私に言つた。

「霊夢の肩に乗つたことなんて、あるかな。あるとしても、異変直後の、縮んでたときだと思ふんだけどな」

白黒のひとがいいから、と急かすので、私は仕方なく、その肩に跨つた。白黒のひとは私を乗せたまま胡座を解いて立ち上がるので、私はどうしたってひっくり返りそうになつてしまい、思わず白黒のひとの顔を掴んだ。

「いて、目はやめろよ」

「そ、そつちが無理な姿勢で立とうとするから……あつ」

開けた視界には正邪を囲む有象無象と、地面に両膝と両肘をつけて、空を睨む正邪の姿があった。

「せーじゃ、投げたみたい！ ああ、手に持ってたやつ！」

「ほんとか。ああ、人が邪魔で私には見えないぜ。お前がみて、教えてくれ」

夜空にミサイルを探すと、すぐに見つけることが出来た。大ききこそ、私が小槌を振ったままだが、ミサイルはミサイルらしく、彗星に直撃せんと火を噴いていた！

「あ、すごい！ほんとに花火みたいだよ。魔理沙、みててね。今に花火があがるから、正邪が投げたやつがさ！」

「だから、私は見えないんだよ。なあ、いい加減手をどけてくれ」

白黒のひとが見えないのは、ほんとうは、私とその目を、手のひらで覆っていたからだ。私に目を覆われて、やおらそわそわし始める白黒のひとをみて、みんな、笑っていたけれど。ほんとは、みんなの目だって覆ってやりたかった。正邪の投げた賽の目を見るのは、私だけがよかった。けれど、仕方ない。誰もが夜空を仰いでミサイルの軌道を追ってるし、たまやとか、かぎやとか、そこらへんのことを叫びだしたくてたまらない人たちは、直撃へのカウントダウンまでしてる。こうなったらぜんぶ、白黒のひとにもちやんと、教えてやることにしよう。

「あとね、もう少しで、彗星にあれがぶつかるとよ！ そしたらきつと、うんと大きい花火が上がるんだ」

「いいから、もう手をどけてくれよ。頼むから、私だってその、花火とやらを自分の目でみたいんだよ」

紅白がいいのよ、そのままにしときなさい、と言うので、私は手をどけてやることをしなかった。白黒のひとはもはや私を振り払おうと体をよじったが、無駄だ。そんなことをしても、私の手のひらがその眼窩に食い込むだけなんだから。

「ほら、魔理沙。しっかりみててよ、もうすぐ、もうすぐあれが彗星に直撃する！ ほら、さん、に、いち……あれっ」

そのときだった。彗星に直撃寸前まで接近したミサイルはぴたりと動きを止めてしまった。瞬間、そこかしこから落胆の声をあがり、宴会場はどよめいた。

「……そんな、おかしいわ。あの迎撃ミサイルは彗星に直撃するまで絶対に動きを止めたりしないはず……。なにか、他の、なんらかの力が干渉しない限り……」

うつ伏せで地面に這いつくばるゾンビのひとが有り難くも私の非を教えてくれた。ミサイルが動きを止めたのはどうも、私のせいじゃなかった。

宙で動きを止めたミサイルは不意に巨大化した。というよりも、小槌の力が切れて、元の姿に戻ってしまったのだ。ミサイルはそのままゆっくりと下を向いて、落下を始める。

宴会場は静まり返った。さつきまであんなに騒いでいたのに、どうしてだろう。やっぱりなんだかんだいって、みんな、世界の終わりは恐ろしいのかもしれない。ああ、私もようやく、なんだか恐ろしくなってきたぞ。

落下するミサイルを尻目に、彗星は地上への接近を続ける。そのうち、あたりに地鳴りのような音が響きだした。しかし、誰も、なにも言葉を発さない。みんなただ呆然と、接近する彗星を見つめるのみでいる。

「あ、ああ！ いやだ、いやだ！ 仕事が増えるのはいやなんだよお！」

瞬間、どこからか声が響いて、彗星の動きが止まった。止まったというよりも、前進しながら後退してるような、そんな感じなのだが、とにかく止まった！

私だって、正邪のせつかくの選択が、中途半端で終わるのは嫌だ！

「せーじやー！」

私が叫ぶと、正邪は這いつくばったまま、片腕を地面に振り下ろした！ すると、周囲がざわめく。ミサイルの落下はグンと止まり、またゆっくりと、上を向き始めている。

「……くしょう……ち……くしょう……ああ！ ちくしょうー！」

あいつはもう一度、握りしめた片手を勢いよく地面へと振り下ろした。すると辺りはいつそうざわめいた。ミサイルはもう完全に上を向いて、彗星へと落下を始める。誰もあいつなぞ見ちゃいないが、宴会場の全員が、きつとそれを理解したに決まってる！

「くそ、くそ！　ちくしょう！　ああ！　畜生！」

正邪は叫びながら何度も何度も地面を叩く。その度に、ミサイルは勢いを増して彗星に急接近するから、みんな、軽薄にも、カウントダウンなぞし始めて、正邪の声は聞こえなくなった。

『さん！　にー！　いち……』

けれど、正邪が口を大きく開いて、血まみれの左手を強く振り上げた瞬間を、私の瞳は、確かに捉えてみせた。ああ、私はどうも、あいつに意地悪をしすぎてしまったかもしれない。

『……ぜろ！』

瞬間、終末の宴会場は眩い光に包まれた。

「魔理沙、下ろして！」

「え。あ、ああ……」

光の中、私は方向だけを頼りに正邪の元へと走る。人混みを抜けて、何度も抜けて、やっと、足元にそれらしい気配を感じた。

「おいせーじゃ。よくやったじゃないか。おい、聞いているのか。おい、おいったら！」

何度呼びかけても、何も、答えない。もしかすると周りの歓声で聞こえていないのかもしれないから、何度も呼びかける。しかし、満ちた光を夜が塗りつぶすまで、返事は帰ってこなかった。

「あ、あ、あんまり揺すんないでくれよ。こちとら大仕事の後で、疲れてるんだ」

「ご、ごめんよ」

それもそのはず、私が呼びかけていたのは先程の、名も知らない赤い髪の女だったのだ。他人の名前で呼びかけられて返事をするものはいない、当然である。

辺りでは、彗星があんまりに綺麗サツパリと消えるものだから、味気なさに落胆の声をあげる者達がいたようだ。しかしそれでもおお

よその割合を占めていたのは笑い声で、チンドン屋だって、再び楽器を鳴らし始めていた。

祝杯を屋台に求める人々が動き出して、私はそれにもみくちやになりながら、正邪を探す。だけど、すぐに見つけられた。和やかな喧騒の中で泣いてるやつなんて、あいつぐらいししくないから。

近づくと、正邪はまるで少女のように泣いていた。ぺたん座りとか、女の子座りとか呼ばれる例の座法で、掌底や手の甲で涙を拭いているものだから、私はおかしくて、つい笑ってしまった。

「おいせーじや。泣くほどいやだったんなら、あんなもの、探さなければよかったじゃないか。せつかく隠してやったのに」

「う、うるさい！ あんな、元の場所から動かさずに、何が隠しただ！

くそお、くそお……」

「あはは！ いやいや、よくやったじゃないか、せーじや。おかげでほら、みんな楽しそうに笑ってる」

「だーもう、うるさいよ！ こちとら、こちとら最後のチャンスだったんだぞ！ この機を逃したら、もう二度と、下剋上なんて！ お前の、お前のせいだ針妙丸、全部お前の！」

「まあまあ。願ったものが物が手に入らなくて傷付くなんて、私たちには慣れっこじゃないか。それに、最後のチャンスなんて、そんな世界の終わりみたいな言い方するなって。世界は救われたんだから、お前のおかげでさ」

「ちくしょう、ああ、ちくしょう！」

正邪はわーっと泣き出すもんだから、私はどうしても面白くて、笑い転げてしまった。そのうちに正邪は走ってどこかへ行こうとするけど、そうはさせない。

「は、離せー今はこれ以上皮肉を言われるのはごめんなんだよ！」

「離すよ、私が、話したらね。……その、おまえは今日、自分の心に従って、やりたくないことをやり遂げたわけだろう？ だから、その、私も話したくなかったことを、ずっと、話したくなかったことを、話してやろうと思っただけ」

それはなんとというか、私にとって恥ずかしい話ではあったから、話

すのにはなかなか勇氣がいるのだけれど、いい機会だし、話してしまおうと、私はそう、思ったわけだ。

「いやだ！聞きたくない！」

しかしこいつはそう言っ、掴んだ手を乱暴に振りほどいては、走って逃げていく。やっぱ、腹立つな、こいつ。

「じゃあいいよバーカ！死んでしまえ、二度と帰ってくるな！死ね！」
死ねは言い過ぎかもしれないが、私は振り返ることもなくバカとかアホとかそんな返事を叫ぶあいつの背中に、思いつく限りの罵声を浴びせ続けた。だけど。

ああ、やっぱいいや。言わなくなつて。

りんご飴でも、買って帰ろう。

†破滅† 5 (了)

滅亡を逃れてからしばらくの間、世界は連日お祭り騒ぎを繰り広げていたが、一ヶ月も経てばすっかり元の落ち着きを取り戻して、誰もが日常へと帰っていた。

私にしたってそれは同じだ。ダイニングテーブルの上にはスパゲッティなんかが置かれて、寺子屋帰りの子供達の声が響き、長屋はテレビの音が混じって、とても静かな午後に揺られている。そういえば、私がスパゲッティと呼んでいるこの麺は、どうやら、ほんとうはパスタというらしい。そして、今食べている料理はナポリタンとか呼ぶらしいが、たぶん、嘘だと思う。スパゲッティはスパゲッティだし、何より、あいつの話が本当なわけがない。

あいつは、やっぱり今も帰らない。

けれど、代わりに今現在、私の視線の先、四角形の画面の中に映っている。なんでも世界を救ったヒーローとして、インタビューなどを受けているようだ。

口先では綺麗なことばかり宣っているが、その手はきつと薄汚れていた。だって両手に、何やらずっと、靄がかかっているから。靄はたしかモザイクといって、映してはいけないものを隠すためのものらしい。

まあ、世界を滅亡の危機に追い込んだ手だ。モザイクをかけるのが、妥当だろう。

『いやあ、どうですか！ 世界を救って、インタビューを受けるためにスタジオに来た気分は！……へえ、へえー。なるほどー！ あっ、すいません、ちよつとその手をやめてもらっていいですかね。それモザイクかけなきゃいけないですよ。なぜか私が編集をやらされるので……え？ むかし溶接の仕事をやったときの後遺症で？ 手がその形から動かない、ですか。へえ、それはまた月に似——』

アホか。何が溶接だ、まっとうに働いたこともないくせに。

しかしまあ、テレビというものはつくづく、一方的なものだ。つければなんとなく寂しさが紛れるけど、どうも、腹が立ったときは電

源を消して、こっちが泣き寝入りするほかない。ああ、そうか、あいつはテレビと似てるんだ。

私はそんなことを考えながら、置き忘れた牛乳を取りにキッチンへと向かう。ああ、いかん。スリッパを履いていかなければ。じやないともっと、腹が立つ。

再び席について、スパゲッティを食べ進める。牛乳だって、ちびちび飲む。

しかし、部屋があんまりに静かだから、私はどうしても、テレビの電源を入れてしまう。

『——きに似たこの世界を救うにあたって、なにか、支えとなった人物等はいらっしゃるんでしょうか。……へえ……へえ……へえ。通ってる定食屋のおっちゃんですか！なるほどお。それでは、カメラに向けて、そのおっちゃんに向けてなにか一言を！……あつ、すみません、その手をカメラの前に突き出すのはやめてもらえませんか。モザイクいっぱいじゃ、流石に使えなくなっちゃいますから——』

はは、定食屋ね。